THE RECONSTRUCTION

改造

階級闘爭號

福田河上博士論戰評

堺利彦
賀川豐彦
高橋誠一郎
中澤臨川
白柳秀湖
室伏高信
荒畑寒村
高畠素之
山口孤劍
野村隈畔

沖野岩三郎
神近市子
佐藤春夫
永井荷風

拾貳月號


BEST MADE
RED HAT
WEAR GUARANTEED
SPAIN
FRANCE
赤帽印
改造地圖ネクタイ（新製品）
光輝と斬新さに富む本品に依って
趣味と實益とを領收せられよ
は早く御注文願ひます
全市至る處の洋品店にあり
東京 大阪
南商店



改造十二月號目次



社會主義思想を指導する三雄篇

新刊

■高畠素之著

マルクス學研究

■總クロース美裝 ■定價金壹圓五拾錢 送料六錢

哲學に於ては懷疑的唯物論者たり、歷史觀に於ては社會一元論者たり、經濟學に於てはマルクス資本論の信奉者たり、實行政策に於ては熱烈なる革命的國家社會主義者たる著者が、世界の社會主義思想史上に於ける其獨特無二の立場よりマルクス學を批評、紹介、攻擊、辯護したる堅實鐵石の如き研究書。

新刊

■高畠素之編

社會問題總覽

■總クロース天金 菊判六百五拾頁 ■定價金四圓 送料八錢

社會政策、社會主義、勞働組合、婦人問題の四篇に亙り、其理論及び實際を親切丁寧に紹介せるもの、讀んで面白く篤學者の好資料たり。

増補 六版

■高畠素之著

社會主義と進化論

■總クロース美裝 ■定價金壹圓貳拾錢 送料六錢

今春以來社會主義出版殷賑の端を開ける名著、新たに卅餘頁を追補す。

發行所 東京赤坂田町三ノ四 振替東京四〇二七番 公文書院

海外植民學校出版圖書

東京市外代々木町三角橋千二百四十番地
電話番町三四二三・振替東京二五三八六

海外植民學校長　崎山比佐衛著

再版　南北兩米

踏破三萬哩

本書の著者は北米南米の各國を旅行し、各國の大統領、大學總長、大實業家等に面接して歸朝し、直ちに海外植民學校を設立したり。本書は其の旅行記にして眞面目なる渡航の手引草とも見るべきもの世間類似の書と同一視せらるゝ勿れ。

定價一圓廿錢（普通製一圓）郵送料八錢

早大教授　文學士　内ケ崎作三郎著

三版

人生の根本問題

世界第一の學生數を有する早稲田大學に於て、第一の人氣を博せるは我が内ケ崎教授なるべし。本書は教授の人生觀、勞働觀男女道德觀、性慾論、宗教論の最も纏りたるものにして、青年の必携の良書なりとせらる。

定價廿五錢　郵送一册四錢（十册二圓）

『勞働及產業』記者　平澤紫魂著

小説と劇

勞働問題

勞働問題の書物も數多きが中に、理論の方面に於ては友愛會長鈴木法學士の「日本の勞働問題」が第一に注目せられ、創作隨筆方面にては平澤氏の本書を第一とす。著者は勞働者の群より身を起したる新進文士なり。

定價一圓卅錢（普通製一圓）郵送料八錢

海外植民學校講師　坂本正雄著

再版　最新

南米移民案内

日本將來の第一の植民地は如何にしても南米であるが、南米に關する著書は信用すべきもの極めて尠し。今ま本校教授の精確なる研究と最近の調査とによりて、しかも廉價に本書は世に提供せられたり。萬人必讀の書なり。

定價五十錢（十册四圓）郵送一册六錢

海外植民學校講師　大島喜一作歌

五版

ラプラタの夕空

南米植民は今や日本の上下を風靡し盡さんとす。アンデスの山、アマゾンの河、ラプラタ河畔の夕映、誰か此處に憧れざらんや。本書は大島教授の作歌にして、一版五千部五版にて二萬余部を既に賣盡せり。至急申込め。

一部五錢（十部卅錢）郵送料四錢

月刊雜誌　＝海外植民學校教授執筆＝

植民

毎月一回一日發行
定價一册税共十二錢
半年分金六十五錢
一年分一圓廿五錢

海外への手引として、親切、正確を信條として數千の讀者の便益を計りつゝあり。毎號スペイン語。渡航問答。海外よりの手紙。外國風景寫眞。移民會社船會社の内幕等の有益なる記事あり。

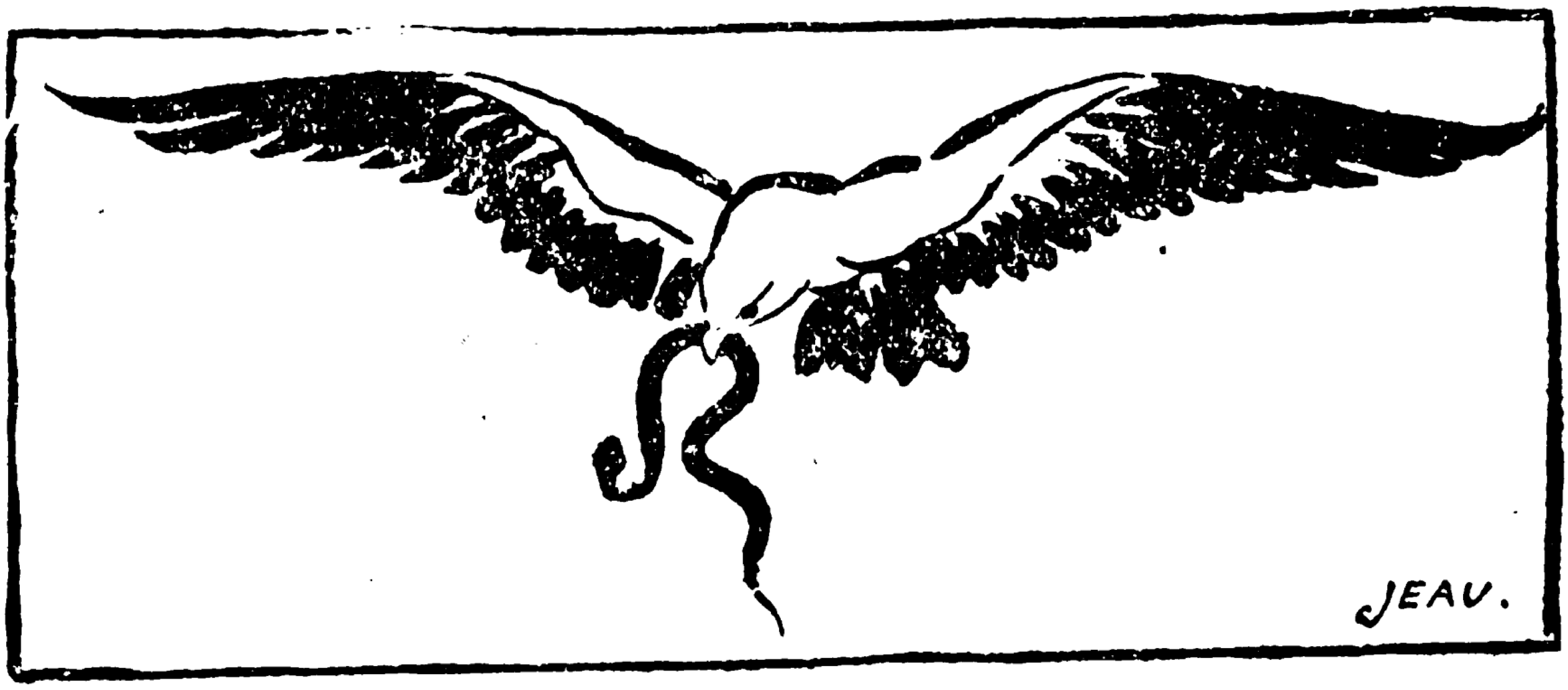
十二月一日より

定休日
十二月七日（第一日曜日）
十二月廿一日（第三日曜日）

歳暮年始御贈答品賣出し

東京

三越呉服店



——((改造十二月號))——

直接行動

國民はいかにして進むべきか、いかなる針路に向へば可なるか、天下此の問題に迷はざるものはない。國民は不完全ながらも、自らの代表者として議員を議會に送つて居る。しかもその議員の取れる行動の、業に時代と何等の理解なきのみか、その思想も現代に取り殘されたるは掩ふべからず。三百九十の頭顱中果して幾人か現代の潮流を解するものぞ。現在の議員、政府にして然りとせば國民は何れに向つて政治を求めたらよいか。

我國民は穩和なる社會、穩和なる政治を愛好し、社會のすべての問題を平和に解決する事を希望してゐる。然るに晩近我國民の傾向はどうである。すべての問題は政治を通して解決さるゝのが、穩當であり、圓滑に運ぶに拘らず、ともすれば直接行動に出てんず形勢を示しつゝある。議會を通しての政治が眞に國民の期待に副はぬ場合、果して我國民はいかなる道を選んで進まなくてはならぬか。この問題は眞に國民としても。國家としても第一の緊急事として研究すべき大事である。惰眠を貪れる我が議會、根本の究明に透徹せざる改造論者が一度も思ひを玆に潜めざるは何たることだ。

政局の衝に當れる原君は總理として司法を兼ねて居る。兼任そのものが既に識者の疑惑を招く、加之、總理としての氣字も經綸もなきのみか、時代の了解さへない筈である。反對黨の加藤君は因循にも貴族院を出てずして、世界の改造を呼號しておるところ甚しく滑稽擅癖の感がある。眞に日本の改造に深き同情を有し、眞に日本の政治を根柢より改革せんと欲する抱負あらば、家督は嗣子に讓つて大に起つべきの時ではないか。而も加藤君は上院に於ても孤獨の地位にあるほどの無勢力、無氣力者である。原君に對する世人の疑惑、加藤君に對する世人の期待がかくの如くであつたら、日本現在の政治家は一刻も早く總勘定をなさねばならぬのだ。

内閣の弊を打破することに政府が干渉の手を緩めぬならば、そこに恐るべき直接行動の第一手は擧げられはせぬか。尤も直接行動そのものが悉く過激、破壞を表徴するものとは思はない。しかしその手が怖かつたら直に普通選擧を斷行するより他に途はない。これが眞に國民を思ひ、國家を愛する爲政家の採るべき道である。これをさへ躊躇逡巡したら日本の將來は大なる不安を以て眺めなくてはならぬ。其の時の責任は我にあらずして原内閣にある。斷じて我等の責任ではない。（一一、一四日）

階級闘爭批判



產業戰爭に於ける無抵抗主義

――階級闘爭說の否定――

賀川豐彥

階級闘爭の事實

私は階級闘爭の事實を否定するものでは無い。マルクスも、シユモラーもこれに就て詳しく書いて居る。然し私はソレルの樣にそれを學說化しても、人間が救はれるもので無いことを、世界に告げねばならぬ。ボルゼヴヰズムと唯物社會主義とサンヂカリズムと私が別れるのは此の點からである。劍で立つものは劍で倒れるのである。エツチ・ヂー・ウエルスが『此度の戰爭は戰爭を絕滅せしむる爲めの戰爭だ』と云ふて、英國の戰爭主義に贊同したことを心地よく思は

ぬ私はどうしても、マルキシズムの階級鬪爭說に贊成することが出來ない。

　階級鬪爭說は二つに別けることが出來る、歷史の說明としての階級鬪爭說と、之からの歷史を鑄換へる爲めの社會政策としての階級鬪爭說の二つである。マルクスには之が一つである。卽ち彼は掠奪

階級爭鬪說の二方面

階級と、被掠奪階級の二つに歷史の進展の凡ての花を持たせて居る。

　階級鬪爭は事實である。然し階級爭鬪史的歷史說は全く誤つた歷史論である。ヘーゲルが、王より民衆へ進化する唯觀念の歷史哲學を說いたものだから、弟子のマルクスは、王、貴族、資本家、無產者と四つの階級を通じての突變的社界事象の進展を說明する爲めに、階級爭鬪史論を借りて來た。然し、之は歷史の全部では無い。ウイリアム。パトン博士が、その『脊推動物の進化』の結論に書いて居る樣に、生存競爭が進化の唯一の要素であるとすれば、『最初の動物は生れ無かつた』といふ事實は、社會組織に關しても云へることで、階級爭鬪は決して、最初の社會を產み得ないことも事實でもあるし、最後の社會を產み得ないことも事實である。卽ち社會性のその本體から云ふても、その本體は相互扶助が本體で有つて、階級爭鬪がその本體では無いのである。日本の社會主義者に思想的根柢が無く帝國主義にはクロパトキンを匂はし、トルストイズムにはダアヴヰニズムから來て居る階級爭鬪說を匂はすのは唯物社會主義の缺陷であるとは云へ不徹底な話である。

　それで最初の社會が成立する要素が相互扶助であることは說いた。どんな社會でも、相互扶助の無い社會の有つた例がない。それでも強いて階級爭鬪のみを以つて、歷史を說明せんとす

史觀としての鬪爭說の不徹底

るならば、世界の最初の人間はアダムとエバでは無くて、酋長と奴隸であると說明しなくてはたら無くなる。

　それのみならず、階級爭鬪史說は社會自意識の進化そのものを物語ることは出來ぬ。卽ち機械の發明、哲學の進化、宗敎、藝術、感覺の內容の進化、言語の歷史等の人間性そのものゝ膨脹と推移に就ては敎へてくれることは實に僅かである。階級爭鬪史說は全人の生活史では無い。ネロの奴隸セネカが羅馬第一の哲人で有つて、ナザレの無產者イエスが世

界宗教の創始者で有ると云ふことは、凡ての文化が技術階級から施與せられるもので有ると說かんとするには餘りに危險な暗礁である。

全人の成長史は、階級爭鬪史で說けるものでは無い。生存競爭說が生命の凡てを說明するもので無い如く、階級爭鬪說のみで唯物的に歴史を說明することは全く無謀な企てである。生命の現象は、生存競爭說の外に、雌雄淘汰說と云ふ部分的目的淘汰（即ち配偶と云ふ目的を撰ぶのであるから）と、メンデリズムと云ふ正系遺傳と、ミューテーション・セオリーと稱する突異說をも借り來らねばならぬのである。つまり人間の內的自覺の發生は、表面生活の階級爭鬪を幾十遍繰り返しても、決して產れて出るものでは無い。即ち「我」の發生は全く物質の分配から起るとマルクスが考へる階級の差別によつたものでは無く、全く精神的成長によるものである。

階級鬪爭に於ける宗教的分子

歴史上の超越的分子

これは古代の階級爭鬪史を見てもよくわかる。古代の階級爭鬪は近代の如く經濟的原因によるものが頗る少ないもので有つた。それは多くは宗教化せられた非經濟的な社會的因襲で有つた。それでこの宗教的階級は近代に於ける科學の進歩によつて初めて破壞し得たもので、それまでは、どうしても之を破壞することが出來なかつた。マルクスは古代歴史をも經濟史的に說明せんとして居るが、それはマルクスの勝手な解釋で、昔の人々は矢張り之を宗教的に取つたので有る。然し之を何故に宗教的に取つたか？それは素朴な感情を持つて居るものはよく理解せられることである。即ち、人間と云ひ、社會と云ふ實在の出現は、之は階級爭鬪など云ふ人間の現象、經濟生活と云ふ表面的原因で出來たものでは無くて、それ以上の超越的勢力が動いたから出來たものであるとは、感覺の鋭いものであれば、直に感づかれることである。人間は物を食ふて生きて居るかも知れぬ。然し人間は人間を作らず、物は物を作らない。人間が物を食ふと云ふのも人間の考へついた仕組ぢや無い。人間の口へ這入つてからも、人間の關係し

ない部分が多くある。ヘプシンと膵汁と、膵臓液の作用は人間は考へもつかぬ部分で有る。それであるから、人間は人間として生きて居るにしても、物を食ふて生きて居る部分は極く僅かで有つて、それを消化して血にして脳髄にし、それを意識に變化さす部分は全く人間が直接關係しない、不思議な法則の世界と潜在力の世界である。それで、手から口へ運ぶまでの運動は古代の人は今日の經濟學者が、唯物史觀を唱へる様な本末を顚倒する様な見方はしなかつた。それは全く神秘な世界で有つた。經濟生活そのもの——手から口へ運べばそれで生きて行けると云ふことが既に神秘で有つて、それも人間が編み出した條件では無く、必要で與へられた條件であるだけそれだけ、深く神秘の奥へつき込んで居つた。それで古代人は唯物史觀を說く前に唯神史觀を說いた。從つて階級爭鬪史も、マルクスの云ふ様な唯物的なものでは無くて、宗教的階級史となつたことは不思議とすべきことでも無い。

神秘の使命と其消滅

機械の能力が文明を今日の様なものに變へるもので有ると知ら無かつたヘーゲルは、矢張り徹底と驚異の子で有つたから、歴史を宗教的階級に近いものに分類した。そしてマルクスによつて、經濟生活の文化が豫覺せられて、今日では唯神史觀を說くものは宗教階級の消滅と共に何處にか消えてしまつた。然し之はその神秘が消えたと云ふのでは無くして、人間の感覺が他の方面にそべて行つたと考ふべきものである。兎に角今日では多く持つと云ふことが、いつの間にか最大の偉人だとせられる様になつて、多く感じると云ふ昔の豫言者や智者の種類が尊重せられなくなつたので、人間は多く持つことの階級戰爭を初めることになつたのである。即ち昔は多く持つことは必しも高等な階級を意味し無くて、宗教的に神秘的傳統的血統の方がより多く尊重せられたもので有るが、今日は科學思想の爲めに、その宗教的神秘的階級を破壞して、多く持つ階級と何にも持たぬ階級に區別してしまつた。

それで、昔は階級の成立は社會成立の要素の神秘化(宗教化)から來たもので有つたが、今日の階級は既に成立した社會の支配力の分化から發生したもので有る。それで社會なるものを愛護し無ければならぬ時代に於ては階級別なるものは宗教的庇護を受け、社會が成立した後はその階級を全く宗教的庇護から離してしまつた。

昔の階級は皆心理的實在で有つたと云ふよりか、魔術者で有つたと云ふ方の說が事實に近いらしい。超自然力を信じた野蠻人は刀には心服し無かつたけれども、魔術には心服したので有つた。之はフォスター博士の說であると記憶して居る。それで、いくら鴻池や三井が多く持つて居ても階級としては武士に劣つた時代が有つた樣に、印度では王族よりか、波羅門族が高き位置に据えられて居た。それで、今日の樣に多く持つことが大きな階級を作るもので有ると云ふことは、感覺の鋭い昔の人には、到底考へも及ば無い事實である。

所有階級勃興の理由

然らば、所有階級が何故に今日の樣に頭を擡げて來たかと云ふに、之には色々な理由がある。第一は人間の感覺の退化である。第二は分化の極端に走つてしまつたことである。人間の感覺の退化を助け

感覺の退化

たものはベルグソンは智識だと云ふて智識を排斥して居るが、私もその本質に於てはベルグソンと違つた思想を持つて居るが、此點に於ては彼と一致する。迷信と宗教戰爭と宗教的階級を科學が破壞してくれたのは善かつたが、その科學は人間性を中心にしたものでは無くて無目的無理想の科學で有つたが故に（今日では大分その人間性を回復して來たが）それはたゞ人間性を破壞するに絕大な威力を逞しくしたゞけで有つて、それは大砲と水雷艇を發明し、ミュールとチェニーを發明したばかりで機械を發明した爲めに反つて、手足を縛られる樣になつたのである。ギロチン博士は佛蘭西革命に數百人を一度に殺す機械を發明した爲に自分がその下に首を置かねばならなくなつたと同じ樣に、機械を發明した人間は機械に吊られて、人間性を無視することになつた。之はたゞに機械に就て云ひ得るばかりでなしに、今日の一般科學と云ふものが、全く平衡を失つた無機物的研究である爲めに、折角人類を解放せんが爲めに準備せられた科學が途中で、橫道にそべて行つてしまつた。それで、今日の科學は資本主義の御奉公の外は何にも務め無いと云ふ有樣となつてしまつた。卽ち人を愛し、戰爭を廢止する科學は消えてしまつて、獨逸の九十三博士の樣に、戰爭の爲めには、科學の

權威も何にもかも捨てゝ了ふと云ふ有様である。この智識の人間性否定が近世に於て所有權社會を跋扈せしむるに効能が有つたのである。

所有本能の狂亂

感覺の退化の第二の原因は智識の破壞性に伴ふた主情意生活の衰退である。生きることが持つことより大事なことであると云ふことは昔の人間にはよくわかつて居たものである。それで、貧乏を花嫁とまで云ふた聖人も有つた程である。然し、近世ではたゞ持つ事が、他人の家庭の乳兒死亡率を高めることを意味して居てもそれは平氣である。彼等は決してそれで反省するものでは無い。持つことの本能が生きることの本能より強くなつて、感覺錯誤を起し、人間を地獄のどん底に投げ込んだのである。それで、中世紀には潔く生くる爲めに、所有權の凡てを否定した教團が起つた位で有つた。昔の人はこんなに感覺が鋭敏で有つた。

つまり、今日では所有本能が著しく變形して來た樣に見えるのである。生物の歴史を見ても色々の本能がその時季、時季で顯著になるもので有つて、下等動物の盛る時などを見ると、今迄に無かつた爭鬪本能が生殖本能の勃興と共に現れてくることを見るのであるが、近世の人類史は所有本能で穢がされて居ると云ふても善い程である。

所有本能の起原

で、私はこの所有本能の起原を生物心理的に研究する必要がある。兒童の所有本能などを見ると、木屑、小石、硝子の片、紅木綿等に對する所有欲を持つて居つて、大人から見ると、こんなものをと考へるが、それは兒童に對してはその當時の氣分に對して殆ど絶對の價値を持つて居るものである。之は特に兒童の玩具に對する所有欲に著しく現れて居る。下等動物も所有欲の有ることは、色々な研究があるからよくわかつて居る、殊にルトノーの『財産の起原』などには數千の材料を集めて、下等動物の所有權の進化を研究して居るから、それによつて所有本能の進化を人類にまで說き及ぼすことが出來る。即ち所有欲本能と云ふものは（1）勞働價値と（2）社會價値と（3）量的價値（需要供給による）の産む財産と云ふ可きものゝ外に、心理的適合價値（Psychological affinity）とも稱す可きものが有つて、それは、マルクスの云ふ樣な勞働價値でも無く、レー（Rae）が云ふ社會價値でも無く、正統學派が云

ふ量的價値でも無く、兒童が小石の或特別なものを愛する樣に、また、ガラスの片の或特殊な自己に一度關係の有つたものを愛する樣に、或物質と時間的に趣味の關係が出來るとそれに所有權を主張すると云ふ樣な妙な心理があるのである。私が子供を風呂に入れる時にいつでも氣につくのは、九歲から十一歲の女の子、男の子の懷中から、いつでも、サイダーの口金や、小石や一寸とした紙片、殆ど私等に想像もつか無いお可笑なものを取り出すことである。

それで、私は考へるので有る。今日人類が所有權を主張するその本能は、サイダーの口金に對する所有欲と同一のもので有つて、土地に對し、株券に對し、衣服に對して、主張するものも、所有本能の進化から云へば、一種の兒戲に類するものであるのである。極端な所有權の主張——人類の運命を忘れて、白濠洲、白人米國を主張して、自我自利を主張する人間も要するに、砂の上に線を引いて地域の所有權を主張して居る兒童と何の選ぶ所があるであらうか？之は今日の資本家に於ても同樣で有る。百萬圓、千萬圓の持主だからと云ふて、人間としての價値が增すわけで無いことは善く知つて居る筈で有る。然し、何故之れを集めたいか？所有本能が非常に人類を橫道に導き去る危險なものであるからである。昔の樣に感覺の鈍い時には、多く持つものは必しも惡いものでは無かつた。然し今日では所有本能が餘りに强いものだから、多く持つものを豪傑だとする樣な眞違つた世の中となり、人間性を放棄してマモンに仕へることゝなつたので有る。

分化の極端性と經濟的安定の意義

然し所有欲を刺激したのはこの外にある。それは分化の極端性である。人類の進化が各方面に進展せねばならぬ爲めに、經濟生活の外に、他の各種の文化生活を營まねばならぬ。それで、經濟生活をその踏臺として、各方面に進むことになつた。それで文化が發達すれば發達する程、經濟生活の安定を保證される必要がある。それで生產の形式はマルクスの云ふ樣に文化の保證をなすものであることが明瞭にわかるのである。然し此處で唯物史觀と私が意見を異にして居る所は、生產の形式は文化の方向によつて支配せられるのみならず、生產そのものゝ形式が、人間の心理的爆發（卽ち發明）に待つことが多いことである。唯物史觀論は、生產の形式

とはたゞ唯物的だと考へるのが非常な誤謬で、『生』產である以上、生物的、心理的能力を度外視しては出來ない仕事である。

唯物史觀は史觀の一斷面

つまり、分化作用が激烈であるだけそれだけ、經濟生活の安定を要求するので、マルクスが考へる樣に、凡ての文化が經濟生活の上に乘つかつて居るかの樣に見えるものであるが、然らば經濟生活に凡てを還元すれば善い樣に見えるが、凡てが經濟生活に還元せられると、經濟價値そのものが無くなるもので有つて、人間が食ふ爲めに生きて居ると云ふので有れば、人間は何にも產れて來る必要は無かつたのである。即ち經濟生活は人間生活の重要分子であるけれども、それが全體では無い。たゞそれから分化して行く所に生產機能の面白味が湧いて來るのである。處が、さて、經濟生活から人間を解放して、自由勝手の方向に行かしめると、今度は生產することを忘れて掠奪することをのみ覺えて分化の袋小路に生息し、ベルグソンが云ふ菌類の樣に他の生物の力によつて、文化を樹立せんとするものが出て來たのである。マルクス學派は今この方面ばかりをその經濟史觀に見て居るのである。即ち今日の資本主義を生產者の上に生息して居る菌類であると云ふことには、私は少しも異存は無いのである。慥かに資本主義文化だけはマルクス流の唯物史觀で解ける。(然しそれが凡ての歷史を說き得ないことは私が繰返し述べて居る通りである。之に就て私はまだ多く論じたいが他の場合に讓る)

即ち分化が文明の一大特質になつた爲めに經濟組織が一層緊要なものとなり、自足經濟の時代に、人間が自ら耕し自ら食ふて、自ら唱ひ、自ら敎へた時代は、そんなに複雜な經濟組織がいらなかつたが、今日では、藝術家と、敎育家と、宗敎家と、哲學者に生活の保證を與へねばならぬ。即ち金を與へねばならぬ。そうし無ければ彼等が食ふて行け無い。そこで、この文明を支持する爲めにどうしても資本主義的經營が必要になつた。即ち文明に投資し、分化に放資する必要が起つたのである。そして放資せられた文化生活者は、放資者の云ふことを聞かねばならぬことになつたのである。之が資本主義文明である。

で、もし、今日の文化が、無機物の資本によつて保證せられる代りに、社會人格の保證によつて、分化に制限を與へ菌類に退化しない範圍内に於て卽ち、生產者を略奪し無い範圍に於て文明が形造出來るならば、どれだけ幸福で有つたかも知れぬ。然し人間の分化作用は忽然やつて來て、社會人格が秩序よく組織立てられる前に、各方面に散つてしまつた。それで仕方が無いものだから、分化せる生活に何等の統一も無く、たゞ資本によつて、多少欲望の滿足が得られるならば、何事に限らず企業することになつたのである。卽ち或個人が色情を販賣して、金を儲けることが出來るならば、その色情販賣でも辭し無いと云ふ妙な文化が來たのである。

分化の爲めの分化

それにもう一つ陷穽が有つた。それは分化の序でに、產業の爲めの產業、生產の爲めの生產、分化の爲めの分化と云ふ樣な癌腫の細胞分裂の樣な形式で、盲目的成長が重ねられて、他の緊要な人間生活の血液までも、この爲めに吸ひ盡して了ふ有樣である。之と云ふのも社會人格が成長し得ない中に智的文明が主情意生活を破壞して了つた結果に外なら無いが、他面に於ては、極端な盲目的自由主義が我等を此處まで導いたのである。所有欲の爲めの所有欲！ 集積の爲めの集積はこんなにして、色々な複雜な心理を通じて近世文明の疾患となつたのである。

文化主義者對生產者の爭鬪

金儲けと文化主義

かうして所有本能のみは一層熾烈となり、自由主義の名の下に、略奪することを覺えた資本主義は金儲けと稱する妙なことを知つた。それは世界に於ける人類の生產總量は交換價値に依つて發生する場合は勞力價値に比較して殆どコンマ以下であるにも係らず、生產し得ざる所有本能を中心とし基礎として集團を作つて居る交換價値に生存する商人、その商人の少し變形した株式屋が、殆ど世界の生產總量から發生する富の七八割までも握つて居ると云ふに到つては、人類の迷ひの深いことに驚かさるを得ないのである。（河上肇博士著『貧乏物語』ローレン

ツ氏『富の分配曲線』參照）
で、この爲めに世界は今や明かに、所有階級と、非所有階級に分裂する様になつたのであるが、それで默つて居ら無いのは、略奪せられつゝある生產者階級である。彼等も初めの程は近世の機械文明が、どの方向に彼等を導きつゝあるかを悟ら無かつたものだから默つて居つたが、この文化が、明かに誤れる方向に彼等を導きつゝあると云ふことを知つたので、今や死力を盡して有產者階級に戰鬪を開始したのである。

唯物文化の保護者

私は拙著『精神運動と社會運動』の中に『階級爭鬪史論』を書いて、その古代よりの歴史的發達に就ては、叙說したから、私は此處でそれを重複することを避けたい。兎も角、階級爭鬪史を研究して見て氣のつくことは、それがいつの時代で有つても、文化を少し複雜にすると必ず、文化階級が、自己の文化を保護する名の下に生產者を略奪して來たことは拒むことの出來ない大きな事實である。それで、昔の生產者は凡て奴隷で有つたのだ、處が機械と智識で解放せらる可き筈の人類が、まだ文化主義者に略奪されることは望ましくないと云ふので、自我の目醒めて來た無產者が『我』の回復の爲めに社會人格、卽ち團結性を持つて、金力によつて彼等を縛つたその鎖を打切らんとして居るのは、最も至當な要求であると考へねばならぬ。

肉體藝術の時代

卽ち今日の階級爭鬪なるものは、所有階級對非所有階級の爭鬪であると共に、昔から傳統の文化主義者對非文化主義者の爭鬪である。處が舊式の文化主義者の間違は、人間性を外にして、いゝ唯物藝術卽ち——繪畫、建築、彫刻、庭園の中に何か藝術の凡てがある様に考へて、藝術の保護とは、畫布や、大理石の保護だと考へて來たことである。私の考では、人間の最大藝術は人間そのものゝ肉體的美の進化である。卽ち顏の進化、肉體の美術化、音樂的進化、舞踏、演劇、小說、劇曲である。然し、それより更に大きな芝居は日常生活そのものゝ全部の藝術化である。卽ち、九十九人が、煤烟下の工場に捨てられて、一人の貴婦人が別莊でピアノを樂しみ得ても、私はそれを文化生活とは云はないのである。私が文化主義者の安價な主張に反對するのは此點である。卽ち、勞働者無產者の解放

を舊き文化主義に改宗せしめることはあまりに恐ろしい墮落である。我等の要求する所は戀愛の如く熾烈な肉體藝術——筋肉美と肉聲美と顏面美と、マラソン競爭と飛行機の肉體主義で有らねばならぬ。ローゴスが肉の形を取つて化身したとヨハネ傳第一章第一節に書いてあるが、文化主義が、生そのものゝ中に文化を發見し得ずして、生を一度通過して畫布と骨董品の中に過去の文化を眺めたものだから、それは常に所有權藝術に終るのである。然し新藝術は所有權藝術より生存藝術、即ち生きた美と生きた藝術に移らねばならぬのである。即ち死んだ衣服の美を捨てゝ、筋肉美を誇る生命藝術に移らねばならぬのである。

で、九十九人の無產者は一人の貴婦人を養ふ爲めの文化主義——貴族藝術主義から解放されて、百人が百人とも同じく、人間美——生きた肉體美を回復する爲めに努力せねばならぬのである。之を私は『人間建築』と云ふて居るが、人間が建築される爲めには、たゞ物質の所有のみを主張して、人の子を工場に閉じ込めて、之に光線と空氣と食物を辛うじて與へて居る樣な虛僞の多い今日の間違つた文明から解放されねばならぬのである。

然し所有階級は嘗て、自らを所有階級として告白したことが無い。彼等は常に文化の支持者だと自任して、無產者の人間建築運動に贊成したことが無い。彼等は恐ろしいフエチシイズム（崇物症）にとりつかれて居るのである。この文化主義と稱する迷妄から醒めて、人間性そのものゝ確立を急ぐことは新しい社會運動の根本目的である。

階級爭鬪は歷史の全部に非ず

「我」の發生と階級

以上私が論じて來た所でも、よくわかる通り、社會に於ける各種の階級の出現は歷史上の事實で有つて、昔は宗教的、心理的、血族的社會階級が有つたものが、それが、近世に於ける智識革命によつて、全く破壞されてしまつたが、智識革命以後に於て社會分化の極端に行つた結果、今度は新しく所有者と非所有者の爭鬪が開始されることになつた。歷史を繙いて見るに、近世資本主義の發生地で有る伊太利のフローレンスでは無產者の

革命は十三世紀に於て既に古代の奴隷戰爭とは違つた全く近世式の所有權に關する階級爭鬪を開始して居る。(Edgcumbe Staley: The Guilds of Florence, P. 44—74) その後獨逸の農民戰爭、佛蘭西革命を經て、一八四八年の無產者階級の出現となり、社會革命の聲が漸く世界的となつた。

分化せざる最初の世界には掠奪も無く階級爭鬪も無かつた、然し分化と分業の爲めに生產者が哀れにも略奪されることになつて以後は、階級爭鬪は悲しき人間歷史の一部分となつた。階級爭鬪は歷史の全部では無い。階級を通じて愛した時代も有つた。然し『我』が生長して、無產者が略奪より目醒めると、階級爭鬪は避くることが出來ない場合が多い。階級爭鬪は事實である。勿論それは『我』の成長を說明するものでは無い。然し『我』が啓かれると、階級はとても人間を所有物や位階で差別的に處分し得るものでは無い。故に階級撤廢の爲めに、階級爭鬪が始まる。

社會革命說の否定と無抵抗主義

然し階級爭鬪の一つのミステリーはそれが階級撤廢を目的とすることである。つまり、階級爭鬪は一つの手段で有つて、永遠の世界では無いのである。殊に階級爭鬪の必要とせられる最後の階段——

ボルセヴヰズムの否定

卽ち物質の量によつて、人間の權利に區別をつける資本主義文化に於ては、その階級別は決して永遠性を持つて居るものでは無い。之は昔の宗敎的、人種的、血統的階級別と違つて、破るにそんなに困難なものでは無い。宗敎的階級は智識革命によつて全く破られた。それで、所有權による階級爭鬪も存外つまらぬ人間性の爆發で消滅することゝ思ふのである。それで私はマルクス流の運命的社會革命說と、それを一層主觀化したサンヂカリズムの階級爭鬪說を勞働運動に必要であると心得るものに反對するのである。前の章に於て私は歷史を說明するのに、階級爭鬪說がその凡てで無いことを說いた。この章に於ては、私は歷史說としてゞは無く、直接行動として意味の無いことを主張するものである。

階級爭鬪が事實であることは私は繰返して述べた。そして、今日の無產者の解放運動にストライキと、サボテーヂ

と、ボイコットとラベルの四種の直接行動が有ることも私は知つて居るし、私は勞働組合の運動として、之れを使用することを許容して居る。然し私はこの四種の上に更に、社會革命の名によつて、血を見なければならぬと考へる社會革命說に絕對に反對するものである。即ちボルセヴヰキが普通やつて居る方法として、村や市へ還入ると直に、この市長と地主と有產者と、祭司と智識階級のものを殺して、無產者の解放を叫ぶ虛僞の社會革命を笑ふものである。人は何人をも殺す權利を持つて居ら無い。又人は何人をも束縛する權利を持つて居ら無い。凡ての人が自由で有る爲めに、無產者の解放が始るものを、無產者の名によつて、有產者——それもたゞ所有せる物品のみの差——を壓制し殺戮するならば、それはあまりに狹量な世界では無いか！　昔は財產犯によつて死刑に處せられた、エリサベス法では乞食しても死刑に處せられたことがある。然し『我』の目醒めた文化では「我」と物品を區別する。そして物品の掠奪者を罰するに「生命」の罰則を持つてしない。然し過激派はどうして間違つたか財產階級の戰爭に生命まで奪ふ可きを敎へるのである私は之をボルセヴヰズムの實行手段の最大矛盾とするのである。

無產者專制の矛盾

更にボルセヴヰズムの矛盾は無產者階級のみの統治の宣言で有る。もしも無產者が有財產者の財產を沒收した時に彼をしも無產者（プロトダリア）と云ひ得るであらうか、私は過激派の憲法を讀んで、それが立派なもので有ると思ふものである。然しそれだけ、無產者階級の財產管理と云ふことに矛盾を感ぜざるを得ないのである。

勞働全酬權の否定

アントン・メンガーに有名な「勞働全酬權」と云ふ定說が有る。それによつて、勞働者はマルクスが云ふ處の勞力價値を全部回收せよと云ふのである。然し實際それが可能なことであらうか？　勞働者にも二種類ある。それは物質生產の勞働者と、生物生產の勞働者である。物質生產の勞働者は容易にその全勞働に對して全酬權を主張し得るであらう。然し生物生產者即ち子を產む母、保育する娘、生命を助ける看護婦、醫師等に對して果して、勞働の全酬を支拂ひ得るであらうか？　そして、母と、娘と、看護婦と、醫師がストライキする權利が有るであらうか？　私の母がストライキするなら私は次の日に死んで居た筈である。母の愛と看護婦の親切は全酬權を要求し

得ない特殊の特權である。そして生產者の自覺が一層高くなればなる程、生產者は、母と看護婦の愛と同樣な責任をその中に自覺して來るのである。即ち、生產者は、有產者階級が所有權を主張した眞似をして腐つた文化の跡を追ふことを許され無いのである。即ち生產者階級の自覺の最高點はその全酬權を要求する代りに、所有權の世界が虛妄の世界であると云ふことを敎へねばならぬのである。今日の文明が、先に述べた誤れる所有本能に迷はされて間違つた方向に行つて居るものを、文化の本流に立つてまだ所有權に謬られて居ら無い勞働者が、その覆轍を踏んでまた報酬の問題にのみ心を使ふと云ふことは許す可らざる失敗である。それで生產者は、生活と、自由と、勞働を與へられさへすれば、それで滿足す可きである。それは母の愛にも似る可き相互扶助の世界、社會連帶の世界である爲めに、分產主義を主張して見たり、私有財產を主張して見る可きもので無くして、私が既に說いた肉體藝術に生きる可きもので有らうと思ふ。その爲めには、私は共產主義の不都合を思ふから、公產主義によつて、組合管理の生產機關を經濟組織に採用すれば善いと思ふのである。そして此場合には最早やストライキもサボテーヂも、組合證票も、ボイコツトも無くなる時代であるが、之れに至る道に於ても凡そ公益の事業には生產者は何事に限らず、私利を捨てゝ爭鬪的行動を避けねばならぬのである。即ち私は如斯論ずる事によつて、社會革命を全く無用なものとして排斥する理由がよくわかつたと思ふ。

直接行動としてのストライキ

然らば、私は直接行動としてのストライキとサボテーヂと、ボイコツトとラベルを階級爭鬪的の手段であると考へぬかと云ふに私は必ずしも之を流血革命的の手段とは考へ無いのである。私は之を社會を敎育する手段だと考へて居る。殊に、ストライキの如きは無產者はストライキをすることによつて餓死することをも賭して居るのである。之が戰爭だと何人が云ひ得るであらうか？ 之は勞働者の自殺運動であるのだ。或は之を動物―蜘蛛などが敵に追はれた時に行ふ擬死にも例へることが出來る。然し勞働者はこの斷食的絕望運動を敢てしてまでも社會を覺醒しなくてはならぬと云ふのは、生產者を離れて有產者階級は何事もなし得ないと云ふことを敎へる爲めである。即ち之はモーセの出埃及（エキソダス）にも例へることが出來る。即ちストライキは流血的社會革命と違つて、受身であ

り、防衛的であり、教育的である。一九一二年佛蘭西のジヤーレスと獨逸のリープクネヒトの二人がモロツコ戰爭の時に巴里と伯林に總同盟罷工を宣言して、一九一二年に起る可き筈で有つたあの大戰を中止せしめたと云ふことなどは、如何にそれが愛國的であり、教育的であるかを思はしめるのである。

産業戰爭に於ける生産者の立場は愛と相互扶助の贖罪的任務を持たされて居る。若、生産者迄が此上今日までの資本家の眞似をして略奪と浪費と爭闘を職業とするならば、地球の表面に生命を見ることが無くなるとを恐れるのである。

ストライキと宗教的斷食

生産者の道は創造と光榮と、愛と相互扶助と社會的秩序にある。今日の自由主義と稱する所有權力世界の亂鬪に人間としての眞の自由と愛と秩序が無いから、人間生活の外に何にも持たない──無産者と云ふけれども、肉體だけは所有して、生産者が、今日の世界に秩序と正義と自由への道を最も平和な手段を持つて教へるのである。それがよく組織されたストライキである、勞働者の宗教的斷食である。

ストライキと社會革命の區別

世界にはストライキを勞働者の爭闘的最大武器──社會革命に導く近道の樣に信じて居る人がある。然しそれは間違で有つて、もしストライキを爭闘の爲めの爭闘として使用し、略奪本能と爭闘本能で爲せられた過去の文明の樣に、たゞ食る爲めに、ストライキをするならば勞働運動は惡化し、勞働者自身の自滅は近いのである。米國に於てもストライキの爲めの損害は年々二億弗三億弗と云ふ損害で有つて、大きな戰爭にも比較す可きものである。もし之が、ストライキの爲めのストライキと云ふので有れば、それは社會の進化の爲めには何の役にも立た無いのである。然し幾十萬の勞働者が斷食してストライキをするのは爭闘の爲めの爭闘では無い。眞正の社會を産まんが爲めの教育的直接行動である。それでももしこのストライキに暴行なり脅迫が加はればそれは人道的行動と云はれ無くなるのである。即ちストライキが生産者の社會改造の用途に立つのは、勞働者が略奪者をそのまゝ目醒さずに奴隷的生活に甘ずることよりか斷することが人道的であるからである。之は「我」に目醒めた勞働者が、社會に教へるたゞ一つの道である。之は爭闘手段では無い。シベリアの馬群が狼に追はれた時に圓陣を作つて、馬頭を外にむけて、

狼を威嚇する様に、ストライキは爭鬪手段を捨てた、新しき時代の生產者が狼を追ふ爲めの防衛的手段である。生產者は凡ての武器を捨てる。彼等は本能的他愛主義者である。彼等は相互扶助の爲めに生き他人の爲めに喜んで生產すると母の如きものである。母が子供に向つて無抵抗である如く、生產者は新時代の爲めに無抵抗である。生產者は如何なる意味に於ても、ミリタリズムに反對する。それでもし生產者が、無抵抗主義の本然的愛に生き得ないならば、世界は遂に神の國を地上に見ることなしに終ら無ければならぬ。

反ミリタリズムの人道運動

勞働者は凡ての刀を捨てる。そしてたゞ斷食して社會改造を待つのである。之をしも無抵抗主義者と云はなければ何人を無抵抗主義者だと云ひ得やうか？　或は云ふであらう『人一里の公役を强いなば二里行け、右の頬を打たさば左の頬をも向けて之に打たせよ』と云ふのが絶對の無抵抗主義だから、資本家の强いる八時間勞働の上に九時間十時間の勞働をするのが勞働階級の無抵抗主義だと云ふ人もあらう。然しそれは問題を取違へて居る。生產者が多く勞働することによつて、他人を墮落さすのを知つて居て——その金が奢と贅澤品になることを知つて居て——其種類の無抵抗をつゞけることは出來ない。一里の公役を强いられた場合二里行くのは全くそれが教育的分子を含んで居るからである。個性を捨てた無抵抗主義は人道的に見てなにもなら無い。生產者は他人の略奪を助けるわけには行か無い。ナザレのイエスは無抵抗を說いても鞭を持つて神殿の商賈人を追ひ出す勇氣を持つて居た。鞭を持つ人で無ければ無抵抗の意味はわから無い。無抵抗主義は其倫理の根柢に於て教育的意義を持つて居る。反抗しては暴力を教える外に何にもないから、暴力が問題解決の最終で無いと云ふとを教へる爲に無抵抗に出るのである。

國家的無抵抗主義

ベルトランド・ラッセルは國家が無抵抗に出た場合を色々と面白く豫想して、之が文明の最後の勝利だと云ふて居るが、（Justice in War Time. P 40—59）國家として組織立てられたものは絶對無抵抗に出てももう今日の文化の程度に於ては昔の様に征服が出來無いのみならず、暴力で征服するものが反つて、精神的の敗北を見るのであると云ふて居る。そして彼はその國家的無抵抗主義の最善の直接行動として國家的ストライキを

豫想して居る。(同書四八頁參照)

ストライキはこんな風に無抵抗主義者が採用す可き最後の手段であるのだ。階級を踏むことは個性の自由で有つたが、これを拒否することによつて、十字架の苦痛を忍ばねばならなかつた樣に、ストライキは勞働者に取つては階級を意味して居る。彼等は新しき世界を産む爲めにこの拒否的手段に出るより外に道が無い。それで彼はその拒否的手段に出ると共に絶食を覺悟するのである。彼等は革命を忌む。劍に依つて立つものは劍にて亡ぶることを彼は知つて居る。それで生產者は凡ての武器と凡ての戰鬪組織を捨てゝ、埃及から逃げ出すのである。彼等の賴む所は雲の柱と火の柱である。彼等がストライキする時に彼等は全く併宗教的氣分で之を迎へるのである。

無抵抗的攻勢

それでストライキの根本原則として、生產者が必ず道義的である可きことと、世界的に團結すべきことである。彼等は革命に換へるにこの無抵抗的攻勢を取るのである。即ちこの產みの苦しみによつて新しき世界を產むか、世界は永遠に所有權世界に止るか、その二つの岐路に世界は立つのである。私はサボテーヂ、ボイコット、ラベルに就ては多く云は無い。私はサボテーヂの道德的缺點を知つて居る。併し私は破壞と怠惰を意味し無い「低廉なる賃銀に對する低級なる勞働」の宣言ならば——そしてこの意味のみに於てならば、サボテーヂは必しも排斥する理由を見出すことが出來ない。然し怠惰にして貪ることを意味するならば、私はそれを非人道的として、次の世界に持ち越し得ざるものとして排斥する。要するにサボテーヂは、勞力商品取引の世界に於ては當然有り得ることであつて、資本主義の文化は朝から晩までサボテーヂをして居るのである。それで、資本家のサボテーヂを排斥する我等は同じ論理を持つて、勞働者のサボテーヂを排斥する。それで、もし是非サボテーヂをせねばならぬならば、寧ろストライキの形を取ることを勞働者に勸めたい。

階級脱破と金力

階級爭鬪の目的は階級を無くすることにある。それで飽くまでも階級的精神を保持して世界を所有者と非所有者の世界に區分することは、階級爭鬪者の究極の目的ではない。殊に今日の階級別は皆

と迸つて、金の問題だけである。即ち今日では金の勢力で殆ど凡ての階級を破壞してしまつた。金權階級は彼に勢力を有つたものは無い。然し其金と云ふものも要する所は、生産者が產んだものである。生産者は、自己の產んだ金で、自己が縛られて階級別をつけられ、階級爭鬪をせねばならぬと聞かされた時に、彼は哄笑を禁じ得ないのである。即ち階級爭鬪と云ふのも自己が生産するから階級爭鬪があるのだとすれば、生産を中止してその階級別をも枯死せしめやらうと考へるのは生産者が想倒する當然の結論である。で、金力階級を排斥するに社會革命とか流血爭鬪とか云ふことは實に愚かなことで有つて、生産者は、所有別階級の出現が、全く彼自らの生産の上に湧いた蛆虫であると云ふことを知るに到つて、過去の宗教階級や、血肉階級を排斥した時の樣な大きな煩悶は持た無いのである。それで、徹底した無產者には今日の無産者と有産者との爭鬪を階級爭鬪と解せずして、一種の生産形式上の誤謬と解するのである。

即ち勞働者は自制する。爭鬪の爲の爭鬪ならば、彼等は凡ての戰爭準備をする筈である。然し今日勞働運動は全く一種の精神運動であるが故に利己を中心とする、無產者專制の時代を豫想して戰爭準備にかゝるとなどは許されない。合衆國の勞働組合のストライキ基金を研究して見ても、それは全く戰鬪的意義が無い程貧弱なものである。組合には一定の規定が有つて、餘りに多額のストライキ基金を積まないと云ふ約束がある。(Geoge Milton Janes: The Control of Strikes in American Trade Unions P. 100—101) 生産者はストライキをすれば世界が困ると云ふことをよく知つて居る。それで生産者は自制する。そしてストライキの不必要な世界を產み出さんが爲にストライキをするのである。

ストライキの進化

それでストライキは段々進化して來た。初めのストライキは賃銀値上げで有つた。然しそのストライキは勞働者を救ふもので無いと云ふことを知つた。資本主義者は賃銀の値上げと同時に物價を騰貴せしむることを彼等は知つた。それで彼等は人道の爲めに——所有欲文化の根柢を人道主義に引戻す爲めにストライキをせねばならぬと云ふことに氣がついて來た。そして今や、勞働者の唯一つの道は絕對の平和と自由と愛と文明の創造明を世界に告示する爲に、凡ての機械と產業を中止す可きを考へるのである。彼等は一度荒野の退く。そして彼等の神

を拜するパロに告げるのである。

止れ而して考へよ

トルストイが露西亞の田舎から教へてくれた『止れ、そして考へよ』(Stop and Think!)と。勞働者の變らざる意志は世界の甦りである。四千年の汚れたる所有欲から離れて、愛と自由に生きることである。それで彼等はその愛と自由の新しき世紀の爲めに斷食するのである。之は人間意志の回轉である。悔改の懺悔である。新しき宗教である。出埃及(エキソダス)である。

階級無視とエキソダス

生産者の文化の外に新しき文化は無い。それで、彼等は劍と流血と脅喝を避忌する。生産者は、今日の社會が階級爭鬪が必要とする樣な世界で無いとよく知つて居る。萬國の勞働者が團結して、古き文明に告別して荒野に出るその日に朽ち果てた貪ること のみしか知ら無かつた資本主義文明が立處に消滅する ことを知つて居る。之をしも階級爭鬪と云ふ には餘り に大人氣ない。現代に於て階級爭鬪は最早や問題にならぬ。自己の作つた階級を自己が破壞するのを階級爭鬪とは云は無い。勞働者が自覺するか否かの問題だけが殘つて居る。偶像破壞者である金力は、遂に自ら偶像になつたが、金力階級を破壞する に暴力はいらぬ。金力を無視すればそれで善いのである。

階級破壞と精神運動

即ち中世紀の宗教階級を智識革命が絶滅させた如くに、新しき金力階級の絶滅も更に新しい智識革命を待つて居る。先の智識革命は物質的智識革命で有つたが、新しき智識革命は精神科學的智識革命であらねばならぬ。それは充分宗教的で充分藝術的である。充分科學的で全人全靈全生の悟得であらねばならぬ。その時に資本主義文化は癌種の手術を受け、金力の支配せざる創造の世界を産むことが出來るのである。生産者の道は平和にある。その道は無抵抗と不義に與みせざる拒否にある。彼等は宗教的斷食の心を以つて文化の回轉を世界に告示する。ストライキは彼等が賴む唯一つの新文明への潛り戸である。然しもし資本主義者にして凡てを悔改めて民衆の前に跪くならばそれも無用なことである、更に一層大きな啓蒙時代を我等は待つて居る。

(十一月四日)

階級鬪爭論

慶大教授　高橋誠一郎

一

「人類社會の歴史は悉く階級鬪爭の歴史であつた」と解釋することも亦た一面の眞理を道破したものである。團と家族若しくは氏族の維持を目的として行はれた單一の職分は次第々々に分離し分岐し、文明の進步に伴れて愈よ益す其の數を增加して行つた。之と共に人類は亦た其の渡世とする職業の異るに從つて互に相ひ分離し、社會上各々一團を形成するに至つて同種の利益、勢力及び行爲に由つて相ひ結合し、而して其の間に同種の思想、感情並びに慣習が發達して來る。斯くて各家族は世々其の業を繼承し相傳するに至るのである。過去に在つては職業の區別は慣習及び法律に由つて認められ、一定の職業に屬する者には私法上公法上の一定の特權が附帶し、爰に職業の分岐は身分的のものと爲り、軈て職業は即ち身分と爲るのである。新婆羅門教時代に其の萠芽を發し、印度教以後に至つて Angira 及び Yama 等の法典に於て愈よ確定的のものと爲つた印度の職業種姓の如きは其の最も極端なる例である。

今日の社會に於ては斯くの如き特權は悉く皆な撤廢せられたとは謂ひながら、身分別は猶ほ其の實を存してゐる。然しながら吾人は各個の從業者の社會的地位、其の國內に於ける勢力、其の經濟的關係に於て保持する權力及び所得に從つて職業的團體を觀察する時は職業的特色は背景の裡に消へて、「階級」なる區別が前景に現れて來るのを見るのである。「階級」とは權力、名望及び地位に從つて離隔せられた社會的團體を言ふのである。而して經濟的事實が社會上愈よ重大となるに至つて、財產資格は社會上、政治上愈々大なる勢力を有することゝ爲つて、今日に於ては階級別の最も有力

なる標準と爲つたのである。

現世に於ける有らゆる幸福の要件であり、生存の保證であり、又た發達の資源である資本は洵に亦た貪婪我慾の對象である。或る者は勤勉と節約との對價を支拂ふことなくして之を取得せんことを欲した。古代の社會に在つては財產權は征服の權利に其の基礎を有してゐた。jure Quiritium に由る古羅馬の所有權の典型は槍に依つて(sub hasta)取得した所有權であつた。彼れ等は暴力に依賴した。彼れ等は盜賊の群れを組織した。彼れ等は勞働者及び商賈を劫掠した。然しながら就中最も重要なる一事は彼れ等が國家と稱する政治組織の支配權を掌握し、依つて以て彼れ等が劫掠をして適法のものたらしむる一種の魔法として其の詩歌と物語とを使用するに於て其の掠奪の方法を見出したことである。彼れ等は國體とか忠君愛國とか言ふやうな巧みな理論を織り上げた。彼等は此の偉大なる政治組織に於ける地位と榮譽と勢威との全部を其の手中に收めた。而して彼等は有らゆる負擔と義務とを他人の上に課した。疑ひもなく曾ては封建の制度は崩壞し盡した社會の斷片を再び糾合する有用なる組織であつた。而も法律家が近世的國王に羅馬法を適用し、而して封建の貴族が朝廷の貴族と變じた時、彼れ等の階級は最早何等の目的にも資することのないものと爲つた(ウイリアム・グラーム・サムサー)、

二

近世に至つて新たなる生命と勇氣とに蘇つた個人は新たなる自己の道を求めんとした。斯くて社會的行爲は愈よ益す個々の活動に恭く不規則なる衝動に委せらるゝに至つた。而して靈界の權威が次第に其の精神的方面に於ける任務を遂行するの力なきに至ると共に、情意と信仰との國土から逸脫して、直接現前の世界に逃れ歸つた個人は往々にして功名心と利得慾との導くが儘に行動した。此の間に著しく富强の程度を增加し來つた中央俗界の權力は新興商工業の要素を把握し、而して其の獎勵に對する一般的熱心を滿足せしむると共に、之を政治的目的に供用し、軍事的成功に必須なる

財源を供給せしめて、自己の强大と威名とに資せしめんことを期すに至つた、國王の領地及び其の特權に基礎を置いた中世的財政の方法は今や絶えず増大し增加し行く國用に充當するが爲めに十分なるを得なくなつた。其の軍事的政治的目的を助成するが爲めには租税の增徴を措いて他に其の手段を見出すことが出來なかつた。洵に「近世の經濟學は國家維持の手段として租税制度を採用したるに始る」ものである。而して租税の增徴は又た必然社會に於ける富の增大を豫定しなければならぬ。卽ち商業と金融との安定と發達とに由る貯蓄卽ち資本形式のみ惟り眞に之を可能ならしむることの出來るものである。斯くて近世的國家は國民的經濟政策を遂行し、有らゆる國家的政治權力を傾注して、全國民の現在及び將來に於ける經濟的利益を擴張せんことを努めた。

斯くて同一條件の下に交易を行ひ得可き範圍は擴大し、生産と消費との關係は次第に相ひ解離した。工業に從事する者は最早範圍狹少なる地方的市場を目的として製作することがなくなつた。而して大規模の生産勃興して、販路著しく擴張すると共に、各個の手工業者は能く一般市場の情況に通ずることが出來なくなつて來る。是が爲めに新しい中間階級が其の間に生じて生産者と市場との間に介在するやうに爲る。而して更に國民的分業が發生して、各人は純然たる營利業者たる商人を目的として勞作し、商人は唯だ單に貨物の販賣を國內若しくは國外に於て掌るを職とするに對し、工業者は一定の報酬に對し、前者に依つて統一せられた經營の一部局を行ふに至るのである。其の間に在つて新大陸に於ける鑛坑の發見は著しく西洋諸國の通貨を增加せしめた。主として物々交易に基礎を置いた舊い封建的經濟時代は新しい貨幣經濟の前に其の道を讓つた。今や流通は更に迅速と爲り、遠隔の交通は更に頻繁と爲り、都市生活及び動産は更に其の重要の程度を增加しつゝあるのである。

近世に於ける最大なる現象は中世的都市よりする中層階級の發達、富の集積並びに從來身分と家柄とに由つて占領せられてゐた地位に對する社會的勢力としての富の侵略であつた。中層階級は封建の階級に對して其の權利を擁護するが爲めに鬪はなければならなかつた。而して彼れ等は三四世紀の間に次第々々に國王及び貴族の專擅なる意志に對して人

格上及び財產上の諸權利を確保す可き施設を創始し確立した。彼れ等は又た自己の階級の高貴と威嚴とを主張し維持するに努力した「マーカンチリズムのプリンス」たるトーマス・マンに從へば、商人は外人との交易に依つて國家の資財を取り扱ふの職に在るものである。而して其の任務を遂行するが爲めには私の利益をして常に公の幸福を隨伴せしむ可き十分なる練達と良心とを必要とするものである。商人は敢て大學者たるを要しないが、少くも其の青年時代に羅典語を學修す可きものである。彼等は各自其の職業の尊重す可き所以を知悉し、克く其の道に勵み、子孫は長く父祖の業を繼いで其の富を增大し以て家名を揚げ、家門の繁榮を致す可きものである。而して彼れは議院政治を以て貴族の驕慢を抑制し、庶民の傷害を救濟し、君主をして不偏の態度を以て、兩者に對せしめ、君民をして和親一致せしむ可き絕好の手段と認めてゐる。彼れが England's Treasure by Forraign Trade 一篇は其の子孫に訓へて商人道の妙諦を傳へ、併せて商人階級に對する他の社會階級の非難に答へ、以て同階級の爲めに萬丈の氣焰を吐いたものである。

マンは猶ほ外國貿易を以て土地の價格を增進せしめ、地代を騰貴せしむ可き唯一の方策と做し、以て商人階級と地主階級との利益の一致を見出さんとしてゐるが、「ホイツグ黨の哲學者」たるジョン・ロックに至ると資本階級の爲めに利子を辯明せんとして、却つて其の本來の言説よりも土地階級の地代を非難するに庶幾い議論を爲してゐる。即ち彼れに從へば借入資本に對して利子を支拂ふは宛も借地人が其の借り受けたる土地に對して地代を支拂ふと同一の理由に因り、同一の思料に基くものである。土地の不平等なる分配が汝の土地に對して借地人を誘ひ、同じく不平等なる貨幣の分配が余の貨幣に對して借手を齎すが故に、恰も汝の土地が借地人の勞働に由りて其の地代の計上する以上の收穫を產出する傾向あると等しく、余が貨幣は借手の勤勉に由つて交易に際し一定の利子を產出する傾向が存るのである。何となれば貸金業者にして其の貨幣を貸し出すことがなかつたならば（彼れ自ら之を使用することとなしと假定し）宛も其の年利潤を齎すこととなきが故に、彼れの受くる利子は宛も他人が勞働の所產たるの觀があるが、而も彼れは自己の土地を他人に貸與する者の如く、他人の勞働の利潤から配分を受くることの大なるものではない。即ち借地人の勤勉なくんば

（前者に於けると等しく所有者自ら之を耕耘することなしと假定し）、彼れの土地は彼れに對し殆ど何等の利潤をも與ふることのない筈であるのに、彼れの受ける地代は普通の利子に比して、其の借地人によつて行はれた勞働の所産中より收受する部分更に大なるものがあると論じてゐる。

ロックの勞働價値説は實に技術及び工業に向はんとする近代人の傾向に對して哲學的基礎を與へたものである。而して又た茲に私有財産擁護論の根據を見出し得るのである。財産權に關する彼れの學説は或ひは之れを以て無政府主義的結論に對する前提たらしむることを得可きものであるが、而も彼れ自身は毫も斯くの如き方法に於て之を適用せんとすることがなかつたのである。彼れは最も善く「法の無き所に自由無き」を知つて居つた。唯だ彼れに取つては人生の十分なる氣力と眞實とに到達せしむるが爲めには國家の限界を劃すること狹少にして、個人に對して自由を殘すこと可及的多大なるを必要とするの觀があつたのである。

三

一千七百八十九年の佛蘭西革命は其の性質に於て純然たる市民的のものであつた。大革命の指導者は彼のマラーに至るまで常に私有財産の制度に對して變らざる敬意を表してゐた。人權宣言の第十七條は明確に財産權が神聖にして侵し難い權利なることを宣揚してゐる。而して有らゆる人間生活に對する尊敬が悉く皆な失はれた謂ゆる恐怖時代に於てさへ、財産權に對する尊敬は獨り依然として殘存して居つた。革命の首領等は多く財産權を尊重したフイジオクラアトの影響を受けてゐたやうに考へられる。革命以前の佛國に於て國民的收入の五分の二を享得した社會階級が之に對する報酬として何物をも寄與しなかつた事實を知るものは、縱し斯くの如き著大なる社會的寄生の事實に由つて、彼れ等學徒の所論に明確なる社會主義的色彩を與へたとしても、何人も之に對して奇異の感を懷く者はないであらう。然しながら彼れ等は全然此の種の思想に對して沒交渉に終つた。彼れ等は嘗て土地所有者の地位の薄弱なる所以を認知しなかつた

のみか、常に最大なる敬意を以て彼れ等に對してゐた。謂ゆる「不生産的」なる語は此の種の階級に對して適用せられずして、却つて手工業者に對して使用せられてゐる。財産は彼等の謂ゆる自然的秩序の基礎たるものである。所有者は生活の支柱たる物資を供給するの任務を委托せられたるものとして一種の僧職的神聖を賦與せられてゐる。彼れ等の手よりして吾人は有らゆる營養の要素を受くるのである。即ちそは創造の事業を永續せしむる間接の方法たる可きことを命ぜられたもので、自由の制度と相ひ並んで、毫も他の法規の援助なくして、完全なる秩序を確保し得可きものと認められたのである。然しながら這般の思想は敢て彼れ等の學徒にのみ特有なるものではなかつた。彼のジャン・ジャク・ルソーの如きも其大百科全書（Grande Encyclopédie）に寄せた「エコノミー・ポリチック」の一項に於て財産上の諸權利は市民の權利中最も神聖なるものであると聲明してゐる。

學説を離れて之を實際の上から觀ても、彼の羅馬教會並びに移住貴族の財産沒收の如きは全く政治的方策から出たもので、決して經濟的の性質を有するものではない。法人所屬財産の沒收は單に假設的人格者の侵入、即ち「死手」の横暴から眞の財産權たる個人所有權を擁護する方策と看做されてゐる。又た封建の諸權利廢止の秋に際しても主權の「借地人的」權利と其の「所有者的」權利とを區別するが爲めに多大なる注意が拂はれてゐる。固より革命の不幸なる歲月の間に幾多の人々は凋落した。或る者は純然たる災厄から、他はアッシニイア紙幣發行の爲めに生じた混亂の爲めに、而して更に他の者は又た地代の沒收に由つて其の資産を失つた。然しながら財産權其の者を尊重するの意志は猶ほ爭ふ可らざるものとして殘つてゐた。

一千七百八十九年の革命主義者の大多數は階級鬪爭に對して殆ど何等の注意をも拂つてゐない。彼れ等は總ての者を市民として同胞として取扱つてゐる。而して總ての者は平等にして一樣である。資本家對勞働者の對抗は未だ充分に顧みられてゐない。彼等は單に階級的區別の撤廢と階級的特權の革除とに由る幻想的な社會改革の希望に俘へられてゐた。

然しながら財産權を承認した階級的區別、階級的特權の廢止は啻に職業に基く身分の區別に代へて、財産的階級を以てするに過ぎなかつた。前者に因る區別が消滅すると共に、後者に基く區別は愈よ著明と爲るのである。而して是が主因を爲したものは、第一に職業選擇の自由、第二に所有權移轉及び分割の自由並びに第三に生産的技術及び經濟的交易組織の技術發達するに伴れて職業變更の可能と爲つたこと是である。斯くの如くして現今の社會には幾分階級を分つ他の標準がないではないが、其の最も有力なるものは財産及び之から流出する所得であつて、爰に有産者及び無産者の對立を見るに至るのである。

凡そ經濟的事實は總て國家と法制との上に其の影響を及すことの大なるものであるが、殊に職業及び財産に基く階級別は最も著しく政權の分配、國家組織及び其の當時に於て勢力ある階級の利益に適應せる私法制度の上に現るゝものである。然るに人類相互の間に於ける有らゆる他の不平等が逐次に平等化せられた後に至つても猶は財産の不平等は依然として存續してゐる。法律は私法上の平等を齎した。選擧權の擴張は次第に政治的平等を與へた。教育の普及は一種の知識的平等を創設せんとするの傾向をさへ示してゐる。然るに財産の不平等のみ獨り殘存し增大しつゝあるのである。曾ては他の更に大なる不平等の影に隱れて居つた此の種の不平等は今や他の倒壞と共に一般人々の眼前に明かとなつた、而して自己の上に有らゆる憤怒の焔を浴びて立ちつゝあるのである。而して政權と私法制度と知識との保砦に擁護せられて立つた資産階級は是等保砦の陷落と共に亦た孤城落日の觀がある。

四

自己の家屋に定住し、自ら市場に赴いて原料を購ひ、自宅に在つて自己の道具を以て之に加工し、自己の店頭に於て顧客に其の製品を販賣しつゝあつた手工業の時代は過去のことと爲つた。手工業者のギルドが工業上の事項に關し獨立支配の權を享得するに至るまでは未だ勞働者と稱す可き特殊階級の存在を見ることがなかつた。當時に於ける職人も

境涯は何人と雖も獨立手工業者たるの地位を獲得せんが爲めに當然經過しなければならぬ階梯であつた。決して之を一個終生の職業と見ることは出來なかつた。各個のギルドも亦獨立手工業者の數を限定し、若しくは此の資格を得るの條件を殊更に困難ならしめて、其の員數を間接に制限せんとするが如きことはなかつた。手工の親方は其の性質尙ほ一個の勞働者たるを失はない。獨立して工業を營まんが爲めには家屋を借り入れ、道具を用意し、原料を購入する等、特殊の資本を必要とすることはあつたが、それさへ當時に於ける手工の狀態から觀て頗る少額のものであつたことは推するに難くない。唯だ一定した顧客の確實なる需要に應じ得可き技術上の鍛錬こそ最も重要なる無形の資本であつたのである。

然しながら斯くの如き關係は一方に於てギルドの獨立次第に集團と爲り、漸次富の程度が高まり、工業支配の權を其の手中に收むるに至り、他方に於ては資本の必要愈よ緊切と爲り、事實上之に投入せらるゝこと益す多きを加ふるに至ると共に終に全く攪亂せられた。即ち工業愈よ發達し、愈よ廣大なる市場を有するに伴れて、益す資本放下の機會を增加して來る。而して其の投入資本の收利力を脅すことなからしめんとするの念は獨占の精神を喚起し、ギルドは工業管理の權を利用し幾多の制規を設け、以て新來の競爭者を阻止するの用に供することゝ爲つた。斯くて工業は漸次一定數の家族から成る團體の手に移り、親方等が只管自己の階級的利益を尊重し、之が伸張に汲々たる間に他方には亦た特殊の見解と利害とを有し終生親方の班に列することの出來ぬ勞働者階級の發生を見ることゝなつた。而して次期の家內工業時代に入つて初めて資本的企業家と勞働者との分界は明確と爲るのである。

家內工業は既に營利の觀念を基礎とした資本的企業の例として見る可きものであるが、更に人力に代ふるに器械力を以てし、資本の用法愈よ營利的と爲り、經濟經營愈よ集約的統一的と爲るに從つて、終に工業制工業を生ずるに至るのである。是に至つて資本的企業家は啻に原料品を備へ、精製品を販賣するのみならず、其の間に於ける全經過を支配し、器械及び工場は共に企業家の掌中に屬し、勞働者の獨立は全く失はれて、唯だ自己の勞働力を商品として之を賣り

渡すに過ぎないものと爲る。斯くて工業は純然たる營利心に從つて指導せられ、企業家及び勞働者の家族經濟から全然區別せられたものと爲るのである。而して企業に對して財產物件を供用し、之に對して財貨の增加（利潤）を收得する者と自己の勞働を貨幣に換へて賣却し約定された勞銀の外、其の收果に對して何物をも所有し得ない勞働者とが社會の兩端に對立する。資產者及び無產者の對立は亦た資本及び勞働の對立と爲つた。

五

一方に於て「階級」は今日最早社會に存在しない、「階級」なる文字は國語の中から削除せられなければならぬものであると主張する者があると共に、他方には又た產業界は生產の資料を所有し、而して之が成果の全部を略取するブルジヨアジーと、自己の勞働力の外、他に何物をも領有することなく、而して之が販賣に依つて生活するプロレタリアとが互に輸贏を競ふ大修羅場である。這般の鬪爭は事實である、證明を必要とする理論でない。常に雇主と勞働者との關係に於て顯然たる事實である。現在社會の經濟組織に固有なる事實であると論ずる者がある。然しながら斯くの如き兩樣の見解は等しく極端に失したものと認めなければならぬ。セリグマンに從へば、吾人が他の機會に於て既に引用したが如く、社會の資本主義化は現代生活の畫一化に依つて象徵せられてゐると言ふ。我れ等は等しく裝ひ、等しく喫し、等しく語り、等しく思ふ。資本を通じて我れ等は世界の市民と化しつゝあるものであると。米國人、英國人乃至佛國人の群集中に在つて勞働者とブルジョアとを區別するは困難である。然しながら我が現代の社會にも階級が猶ほ厳然として存在する最も確實なる象徵は他階級との結婚、羅馬法の謂ゆる結婚權（jus connubii）の行使が中世若しくは古代の社會に於て行はれた以上に彼れ等の間に於て實現せられることの出來ない事實である。mésalliances に因る pseudo-castes はヴアシシユタやマヌの時代に於てさへ多く存したが、現代に於ける資本階級の令孃にして勞働者と結婚せんとする者がないのみならず、貧小なる官吏民吏の女と雖も、亦た之を欲するものがない。吾人は又た交通機關に於て、歡樂

の巷に於て、人爲的に設けられた境界や障壁が資産者と無資産者とを分つて相互に接近せしめない例を多く見るのである。即ち資本と勞働との間に於ける闘爭が現在に於て前景に立ちつゝあることは事實であるが、而も所有する者と所有せざる者とに總ての國民を截然二分し、而して社會に於ける唯一の眞實が掠奪階級と被掠奪階級との對立であると說くのは餘りに輕率なる速斷ではなからうか。

六

現代に於て階級闘爭の哲理を高唱する者は革命的サンヂカリストである。サンヂカリストは階級闘爭の必然性及び可望性に關する其の概念をカール・マルクスより踏襲してゐる。彼れ等はマルクスの教義を其の本原の純正に復歸せしめんことを努めてゐる。斯くて彼等は謂ゆる正統派のマルクス主義者に對して著しく不信の態度を表明してゐる。エンゲルス、老リーブクネツヒト及びカウツキーの徒は先師マルクスの理論及實際的教條の純金に市民階級的思想及時宜主義者的術數の參和物を混ずるものである。新たなる社會制度を樹立するが爲めに議院的行動に信を置くは非マルクス的な市民階級的思想である。彼れ等は力のみ獨り有效なる革命的方法であると主張する、彼れ等に據れば、歐米の社會黨はマルクス主義の信仰を遺棄しつゝあるものである。時代の要求は「マルクスに歸れ」と叫ぶと說くのである。

然しながらサンヂカリズムの理論家は其の祖師マルクスの「資本論」に對して宛も基督教徒が聖書に與へたるに等しき完全無疵を認めんとする者ではない。即ち純然たる消極的若しくは批評的見地よりすれば彼れ等は明かに正統派のカウツキーよりも寧ろベルンスタイン等が新マルクス派の修正主義に共鳴することの多いものである。けれども彼れ等の要求する所は單純なる進化にあらずして、新社會形態の革命的創造である。ベルンスタイン一派の閑却し去つたもの丶中に革命的サンヂカリズムの純正哲學者ジョルジ・ソレルが「マルクスのマルクス主義」と呼ぶ眞正なるマルクス主義がある。そはマルクスによつて傳へられた貴い遺産であるに拘らず、彼れ等修正主義者が其の偶像破壞者流の興奮に於て

全然之を保存することを怠つた所のものである。

そは謂ふまでもなくマルクスの階級闘爭論である。社會主義的理論の上にも、又た人知に對しても共に顯著なる貢獻はマルクスが階級闘爭に關する教旨、資本及び勞働間の絶對不可避なる闘爭に關する其の說明である。縱し彼れが其の價値概念に於て全然誤謬に陷つたとしても、縱し又た彼れが掠奪者の掠奪せらるゝ時機の到來近きを說くに於て僞の預言者であつたとしても、彼れが階級闘爭に關する理論は正しく神來の感悟であつた。そは實に「共產主義宣言」の神髓であつた、而して「資本論」は之が存在と必要とに對する長い論證である、有らゆる歷史は階級闘爭の歷史であつた、彼れに從へば階級闘爭は倫理的思料を適用することの出來ぬ狀態である。そは歷史的發達の一階段である。而して其の通過し去つて他の階段が現れるまでは、產業の布置は有らゆる皮相の變革に拘らず、大體に於て依然として舊態を改めることがないであろう。人は或ひは進化の過程を促進することは出來やうが、進化其の者と抗爭することは出來ぬ。然しながら幸にして資本主義は我れと我が○○に向つて努力しつゝあるものである。増大して止まぬ市民階級の力と富とは之と對立して其の生活上の運命が次第々々に悲慘と爲り行くの傾向ある貧民階級を○○しつゝあるのである。貧民階級は彼れ等の窮迫其の者に由つて自家防衛の組織を○○○○○○ざるに至るのである。斯くて彼れ等は或る程度まで資本主義其の者の創造である彼れ等自身の施設たる勞働組織を發達せしむるに至るのである。其の極、終に是等兩階級の利害は全然隔絶して○○○○が行はれないやうに爲り、外皮は突如として○○し、其の蹶起を喚起した過程其の者に由つて自己の組織を發達せしめた貧民階級が生產の○○○○○○するを得るに至るのである。斯くの如くして階級闘爭、卽ち破裂點まで緊張した資本勞働間の對抗に因つて○○○○○○○○○○、而して○○○○○○は開かれるのである。（エステイ）。

而して現制の○○に向つて不可抗の勢力が作用しつゝあるならば、積極的努力は其の○○○○するものである。マルクスは言ふ「○は進歩の助產婦である」と。而して○○○○○に取つては是こそ眞のマルクス、「共產主義宣言」の

マルクス、一千八百四十八年のマルクスの表白である。洵に「共産主義宣言」の第一版が倫敦に於て印刷器を離れたると同一日を以て二月革命は巴里に勃發し、「有らゆる國々の無産者よ、結合せよ」と云へる近世社會主義の産聲は海峡を隔てたる對岸の雷鳴に打ち消されて殆ど聞くことが出來なかつたに拘らず、サンヂカリストは此の著出版の日を以て○○○○○○を微示するものであると稱してゐる（ラブリオラ）。勞働階級にして其の○○者の軛を脱せんことを期するならば彼れ等は恐怖なく、戰慄なく、○○○熱烈と○○的奮激とを以て其の面を○○○○に向けなければならぬ。彼れ等は偉大なる事業と窮極の成功との母である自己の力に對する信念を此の○○○○○しなければならぬ。○○○は生れ出でなければならぬ、而して無産階級は○○○○○に依つて分娩の苦痛を短縮することが出來る。

革命的サンヂカリストは實に階級闘爭の實在と其の不可避性とを○○○○○○○○、少くとも其の理論に於ては此の世を頽廢より○○○勞働者をして雇主の略取と支配とに○○○○、緊密なる單一體を○○○○○○ものは是である。現在の法制に對して○○○○○○○○を展開せしめつゝあるものは是である。勞働者の自識、意力及び德性を發達せしめ、而して彼れ等に適應せる組織形態を創造しつゝある○○○○ある。略言すれば勞働者の釋放に必要なる有形無形の武器を鑄造し、而して之を其の手に握らしむるものは○○○○である。サンヂカリストの事業は幾分朦朧たる勞働者の階級的感情に○○○○、而して之れを階級的利益及び階級的理想の明確なる○○○○○せしむるに在るのである。而して這般の企圖は惟り勞働者を結んで○○○○○○○○○○○○由つて達し得らるるのである（レヴァイン）。

相互の利害關係が全然相ひ反する此の二大階級間に於ける戰は○○孰れか一方の階級の完全なる○○に由つてのみ惟り終熄す可きものである。資本家階級は貧民階級の絞取者であり、壓迫者である。彼れ等は勞働者を奴使し、抑壓し、而して又た墮落せし

むる顯然たる目的を以て社會を現存の形態に組織した。資本家的組織及び之が制度の〇〇〇〇〇するに因つてのみ、貧民階級は其の釋放を期待し得るのである。資本家的社會の全構造は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇之に代らしむ可きものである。是に至つて彼れ等は最早貧民階級に非ずして、上長の寄生階級によつて搾取劫掠を受くることなく、彼れ等が勞苦の全收果を享有する自ら釋放せる自由にして平等なる勞働者と爲るのである。斯くして有らゆる賃銀勞働者は有らゆる資本家及び資本家階級統治の恩惠に浴しつゝある有らゆる人々の〇〇〇〇〇であると說くのである（スパルゴ）。

七

富の集中的傾向並に資本的生產破滅の避く可らざるを豫言したマルクスの所說は如何なる點まで事實と爲つて現れたか。マルクスは此の學說に關しても亦た他と等しく自ら之を創始したものではない。彼れは前人の所說を採つて之に細心精緻なる硏究を加へ、而して後、最も深甚なる印象を與へ得可き方法を以て之を社會に發表したものである。

初めて新產業制度の下に在つて謂ゆる富の集中的傾向並びに之に隨伴せる勞働者階級貧困增加の理論を構成したものはシスモンヂである。彼れは其の Nouveauxprincipes p'économie politique の第一卷に於て「斯くの如くして富は少數所有者の手に集中するが故に、國內の市場は漸次狹縮せられ、而して工業は次第に其の生產物に對する他の販路を國外市場に求むるの已なきに至つて、爰に更に一層著大なる革命的の變動は可能と爲るのである」と說いてゐる。マルクスの集中說(Konzentrationstheorie)、集積說(Akkumulationstheorie)、困窮說(Verelendung theorie)、搾取說(Ausbeutungstheorie)恐慌說(Krisentheorie)、崩潰說(Zusammenbruchstheorie)等は孰れもシスモンヂに由つて預示せられてゐる。

マルクスは富の集中的傾向を預定し、中產階級は大資本家の爲めに吸收せられ、大資本家は財界の少數貴族に依つて吸收せらるゝに至ることを主張し、斯くして資本制度は自己の重量に堪へずして粉碎せらる可きものであると謂ふ結論

に到達してゐるのであるが、マルクス主義の科學的基礎に對して根本的の修正を必要なりと做すエッアルド・ベルンスタインは斯くの如き學說が事實に徵して全然其の虛妄なることを證明せられたること、並びに社會民主的信仰の誤謬とを暴露し、富の集積は工業的企業の集中と步調を等しくして行はるゝものに非ざることを闡明するに努めた。産業の集中と資産の集積とは事實上全然別個のものである。兩者を同一視するは甚しい思想の混亂と謂はざるを得ない。而して近代に於ける株式組織に依る會社企業發達の社會的影響は資産集積の傾向と著しく相背馳せるの事實を示し、社會主義者が全く之を知悉せざりしことを遺憾としてゐる。

彼れは數字を擧げて資産の集積が産業集中の傾向と全く獨立にして沒交涉なるを論じてゐる。英國に於て最も集中的にして大規模の經營行はるゝ棉毛二業に投入せられた株式資本は非常に多數なる株主の間に分配せられ、而して各株主の持株は比較的少數なるの事實を指摘してゐる。彼れは又た普魯西及び薩遜兩國の所得稅統計から引用した長い數字を以て、中流階級が漸次消滅して貧困窮迫の增加を見るに至るは正に資本制度の避く可らざる結果なりと看做すマルクスの學說が恰も確實なるものに非ざるの證左として擧げてゐる。斯くてベルンスタインは其の所論を概括して曰く、「現代に於ける經濟上の發達は單に相對的のみならず、絕對的にも亦た資産所有者の數を減少せしむるの傾向ありと做すの主張は徹頭徹尾誤謬である。彼れ等の數は絕對的にも相對的にも共に增加するの勢を示してゐる。若し社會民主政治の運動及び其の將來の希望が資産所有者の數の減少に基礎を置いてゐるならば、そは正に有らゆる希望を拋棄しなければならぬことと爲るのである」と。彼れは「絕えず其の數を減じつゝある少數の大資本家に依つて有らゆる餘剩價値は吸收し去らるゝに至る」と做すの思想を以て妄信謬見と觀じてゐる。

近世に於ける生産業の主要なる特徵として認む可きものは勞働の偉大なる生産力增加である。其の結果は亦た消費貨物の總産額にも少なからざる增加を見るに至るのである。而して是等の財貨は如何に處分せらるゝのであるか、換言すれば勞働者は其の取得する勞銀の高に制限せらるゝが故に、彼れ等が自ら消費し得る限度以上に生産した謂ゆる餘剩生

産高は如何に處分せらるゝのであるかと云ふ疑問を提出しなければならぬ。謂ゆる資本的貴族は一般に認められるよりも十倍も廣大なる胃の腑を有し、且つ又た彼れ等が實際上有するよりも十倍の僕婢を使傭し得るかも知れぬ。然しながら事實さうとしても彼れ等の消費額は之を國民經濟上に於ける全生産額と比較する時は殆ど重きを爲すに足らぬものである。大資本的生産の第一の特徴と認む可きものは多數生産であることを忘れてはならぬ。果して然らば此の資本的貴族や其の家內の者どもが消費し盡すことの出來ぬ商品は如何に處分せらるゝのであらう。若し是等の商品が何等かの方法に由つて貧民階級の手に達せないものとしたならば、そは他の階級に依つて吸收せられなければならぬ。資産は次第に一部少數者の手に集積せられて資本家の數愈よ減少すると共に貧民階級の幸福亦た之と同時に增進するか、然らざれば幾多の中流階級が存在してゐなければ、常に增加して止まない生産物の吸收せらる可き途はないのである。事實に徵すれば一部少數者の手中に於ける集積が近代に至つて著しく增大したことは明かである。ジードの言ふやうに億萬長者と稱するものは前代未知の新經濟的動物である。然しながら資産家の數の增加並びに貧民の數の減少も亦た事實である。

勞働者の狀態を以て全然絕望的のものと說いた時代は遠い過去のことである。千八百三十年から千八百五十年に至る頃の急進的社會主義者の著作中には悉く此の種の文字が記載せられてゐる。而して當時の事情は斯くの如き悲觀的な言說を是認す可き正當の理由を有するの觀があつた。斯くてマルクス及エンゲルスは其「共産主義宣言」の中に「勞働者の狀態は産業の進步と共に上進するものに非ずして、却つて不斷の低下を來し、勞働者は貧民と爲り、貧窮は人口及び財富の增加よりも更に急速なる發達を來しつゝある」旨を絕對に宣明し、エンゲルスの「階級闘爭論」を讀む者が勞働者の狀態に最少の改善を見んと期待するは市民的國家の眼には常に空想として映ず可きものであるとの言に接するのである。是に由つて之を觀れば勞働者の地位の絕望的なる一事は實に謂ゆる科學的社會主義の動す可らざる公理であつた。

エンゲルスが其の「賃銀勞働者階級の狀態」に關する描寫の資料を得たのは英國勞働者に取つて最も悲慘な秋であつた一千八百十二年から四十七年に至るの期間であつた。即ち貧民階級が窮迫と罪惡との深淵に陷つた時代であつた。而

して彼れ等に取つては其肉體的及び精神的の墮落を抑止す可き有利なる法制も、有力なる勞働組合の運動も存在しなかつた時代であつた。ポール・ルロア・ボリユー、の謂ゆる「大規模産業組織の混沌時代」であつた。然しながら社會は徐々に此の混沌の狀態を脫して組織的のものと爲りつゝあるのである。勞働階級の狀態は日一日と改善せられつゝあるのである。既にカウツキーも「所有者の數は久しく減少することなく、却つて增加しつゝあるのである」と云ふベルンスタインの邏閊なる主張を引用し、スタツトガルトの會議に於て悲痛なる語氣を以て彼れに說て言ふ、「若し此の事が事實であるならば、吾人が勝利を得るの時は啻に甚だ遠い將來と爲つたのみならず、吾人は全然吾人の目的を貫徹することを得ないであらう。若し果して增加しつゝあるものは「資産家」の數であつて「無資産者」の數でないとしたならば、吾人は常に社會改良の行はるゝ割合と比例して、次第に吾人の目的から遠ざかりつゝあるのである。而して漸次自ら廢滅の域に向ひつゝあるものは資本主義に非ずして社會主義たるの結果と爲るのである」云々と。

斯くて又た資本主義の顚覆近きを豫言したマルクスの見解が其の正鵠を失し、資本主義は生産上に於ける其の地位と支配とを放擲せんとするの徴候を毫も示してゐないのみならず、却つて其勢力は強大と爲りつゝあるを覩たソレルはマルクスの謂ゆる大破裂は彼れの想像するが如く經濟的恐慌の形態に於て來らずして、正に總同盟罷業の狀態に於て現れなければならぬと論ずるものである。有らゆる工業國の勞働組合裡に新産業主義の誕生を促成し得可き革命の力は存在する。彼れ等は戰に對して特殊の能力を持つ。彼れ等は現在の術道に由つて苦惱しつゝある者のみを抱擁する。而して同盟罷業の手段に依つて最も成功の見込十分なる戰場に於て戰を行ふことが出來る。ソレルは此の不斷の鬪爭、即ち其の謂ゆる violence によつて敵の生命財産に危害を加ふるを目的とする暴力の發動を意味するものでない。それは防禦や公衛の破壞や又たは總ての政治的革命に普通なる徴候に就いて言ふのではない。ソレルは又たサボタージを是認しない。サボタージは舊制度に屬するものである。而して毫も勞働者を解放の途に着かしむるの効果なきものである。彼は violence なる語を以て、抗敵心の現實なる表現、而して特に總同盟罷業に適用せんとするのである。無産階級の violence は

市民階級の創造であつた「恐怖時代」を模範とす可きでない。○○○○○○に從へば資產階級は又た飽くまで資本主義的であり、鋭意生產の業務に盡瘁し、徹底的に自利的であり、而して何等慈悲仁愛の父性的衝動に導かれぬことが○○である。米國の富豪はソレルが理想のブルジョアに近いものである。資本主義は其の活力の最も旺盛なる時に於て○○せられなければならぬ。○○は是に由つて成功の最大限を贏得することが出來る。世界の進步其の者は市民階級の刻薄强烈なる主我主義と密接なる關係を有するものである。近代文明の道に伏在する最大なる危險は○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○に墮して、社會的平和の坦道を辿るの虞である。如何なる社會と雖も、其の支配階級と產業界の貴族とが他愛的であり、而して非利己的なれと云ふ誘惑に聽從した時、而して又た彼れ等が等しく勞働者の運命を安穩ならしめ、共同なる利益の紲に資本と勞働とを結合せんと努むるの時、其の社會は○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○に立つものである。安易なる徑路の上に有らゆる進步の○○は橫はる。社會的鬪爭をして休止せしめよ、然らば其の國は自己の○○に向つて其の道を急ぐものである、と說くのである。

八

玆にマクドナルドの謂ふやうに現在社會の根本的事實として階級鬪爭を信ずる者はサンヂカリストの論理に對して自己を防護す可き何等の根據を有してゐない。階級鬪爭を是認するならばサンヂカリズムは之が必至の推論である。然しながら階級其の者の存在は是認しなければならないが、幸にして今日に於ける社會は資本勞働の二者に截然二分せられてゐるものではない。勞働者資本家の外に吾人は猶ほ土地所有者を認めなければならぬ。彼れ等は常に必ずしも資本家と利害の一致を見るものではない。ホイッグ及びトーリー、自由及び、保守兩黨の政爭は英國の歷史に古い所である。自由貿易の主張に際しては工業家は勞働階級に黨して地主に對抗した。工場法の通過に際しては地主は勞働者に與して

工業家と戰つた。彼れ等兩者は今や勞働階級の威嚇に對して暫く親善の關係を維持しつゝあるに過ぎない。等しく資本家と稱せらるゝものゝ內にも謂ゆる能動的資本家、即ち企業者と消極的資本家、即ち利子に衣食する者とが在る、彼れ等兩資本家の關係は宛も債權者對債務者のそれであつて、同一の利害關係を有するものではない。勞働階級は又た常に必ずしも同一の利害を有するものではない。彼れ等の間に更に階級を劃することが出來る。精練勞働者は往々にして不精練勞働者と一致を缺く。其の他、中流階級と稱せられるゝ旗幟頗る不鮮明なる混成階級がある。彼れ等は又た農民と工業家と勞働者とが各々其の利益を主張して暴虐を極むるの時、痛切に自己の間に共通の利害を感ずるものである。而して又た有らゆる階級の分岐を無視し、無差別一樣の利害關係を有する消費者が一般生產者に對して立つのである。階級の存在は事實である。階級の間に鬪爭の發生することも事實である。然しながら戰は常住不斷、資本勞働の二個に由つてのみ戰はれるものではない。社會階級の金字塔の頂點と底邊との間を構成する中間階級は、縱しヴイルフレドオ・パレトーの云ふやうに凹狀の側面を形造つても、決して消滅し去るものではない。

私は爰にレオン・ブルジョアが一千九百〇五年七月の演說を以て此の稿を了る。而して特に之をソレルが Reflexions sur la Violence から引く。「階級鬪爭は事實である。而も殘忍なる事實である。余は問題の解決が得らるるのは此の鬪爭の持續に依るものであることを信じない。余は解決は寧ろ其の制壓に存することを信ずる。人は同一事業に於ける共同者として自己を思料することに導かれなければならぬ」。縱し社會の主要なる職分は明確なる階級に體現せられ、各人は各々誠意を以て自己の任務に從事す可きものであるとしても、總てはプラトーンの理想國に於けるが如く理知の統治下に給付の全體を得るが爲めに相ひ結合すべきものである。而して社會は此の全體的勤務を離れて個人的或ひは階級的なる利己的目的に向つて奔ることを制止するが爲めに其の有らゆる力を傾注しなければならぬ。有らゆる個人の間に於けると等しく有らゆる階級の間に於ても亦た meum et tuum の區別を絕しなければならぬ。

國家社會主義と階級鬪爭

高畠素之

一

社會主義の有らゆる傾向は、大體に於て之を二別することが出來る。一は集產主義（コレクチフィズムス）（國家社會主義）、他は共產主義（コンムニィズムス）である。集產主義と共產主義との區別は、先づ分配制度の理想に於て現はれる。

資本主義撤廢後の分配制度に於て、集產主義は貨幣經濟（ゲルドキルトシャーフト）を主張し、共產主義は自然經濟（ナツールキルトシャーフト）を主張する。集產主義は、何等かの方法に依つて、各個人の收入（アインコンメン）を調節することを主張する。即ち各人が自己の消費の爲に支出する價値量をば、社會の力に依つて正確に量定することを主張する。

之に反して、共產主義の分配制度は、各人の收入を調節せず、一定の價値量としての收入なる概念をも除外して、只だ直接に消費のみを調節し、或は消費さへも全然調節しないのである。隨つて集產主義の分配制度に於ては、何等かの形體の貨幣の助なしに生產物の分配を行ふことは出來ぬ。各人は只自己の所有する價値限度に於てのみ物質を消費することが出來る。消費を行ふには、各人は必ず自己の收入の一部を支拂はなければならぬ。されば此制度のもとに於ては、物資は總て一定の價格を有することを必要とし、價格は總て一定の價値單位に依つて測度されることを必要とする。

之に反して、共產主義の分配制度は、收入に關係なく直接消費のみを調節し、或は消費でさへも調節しないのであるから、分配機關としての貨幣の仲介を必要としない。謂ゆる自然經濟の分配法である。

されば集產主義も共產主義も、共に分配上平等を主張するものであるが、集產主義の平等は收入に關係し、共產主義の平等は直接消費に關係する。尤も集產主義にも共產主義にも、此點に於てそれ〴〵又た二大派別がある。

二

先づ共產主義に就て云ふならば、消費その者の平等を期するものと消費の平等なる自由を期するものとの兩主張がある。前者は年齡男女の限界內に於て、各人に同質同量の物資を分配すべしと說く。卽ち此派の共產主義は、分配の客觀的平等を主張する。之に反して、今一派の共產主義は分配の主觀的平等を主張する。卽ち各人の必要に應じて直接物資を使用すべしと說く。前者の著名なる代表者としては、カベー、バブーフ等を擧げることが出來る。そしてフーリエー、クロポトキン等の無政府的社會主義は後者を代表する。

各人は消費を客觀的に平等ならしめると云ふ主張は、社會主義の最も原始的な形體であつて、個性の尊重と自由の追求とを生命とする現代人の要求に添はない。之に反して、消費の自由を平等ならしむべしと說く無政府的社會主義の主張は、自由・平等・正義の有ゆる理想から見て、我々現代人の要求に最も一致したものと云ふことが出來る。只、此種の分配制度を實現するには、一面に於て社會の生產力が總ての產業部門を通じて、著しく（殆と無限に）發達してゐることを豫想しなければならぬ。生產力の發達が未熟な所に此制度を應用すれば、社會の經濟的秩序は勢ひ混亂狀態に陷ることを免れない。吾人の要求する物資が豐富なる場合には、必要に應じて分配すると云ふことは至に結構である。然し物資に依つては、需要に相當した供給を仰ぐことの出來ぬものがある。斯くの如き物資に對して必要に應じた分配を行ふことは、社會の秩序の維持の上から云つて非常に危險である。

私は資本主義撤廢後の新社會に於て、總ての產業部門にわたり生產力が多かれ少なかれ增大することを豫想するものであるが。然し此點に關して非常に樂觀的であることは出來ぬ。殊に私の信ずる如く、近き將來に於て突變的に舊社會の崩壞、新社會の成立が行はれる場合には、少なくとも此突變後當分は、資本主義の時代よりも生產力が却つて低落することを豫期しなければならぬ。私は之等の豫想に可なり重大な主義を孕ませてゐる。隨つて之等の豫想と兩立し能はさる無政府的社會主義の所論には贊成することが出來ぬ。

三

所が集產主義の貨幣經濟制度は、此點を充分考慮に入れてゐ

る。生產力に制限があるから、隨つて生產された物質にも制限がある。そこで各人の分配を制限しなければならぬのであるが、それには一面に於て、各人の收入としての貨幣額に制限を置くと同時に、又他の一面に於て物資に價格の差等を附することが必要である。需要に對して分量の比較的多い生產物は價格を低廉にし、然らざるものには高い價格を附する。限定された生產力のもとに於て分配の公平を期するには、人間の道德心・愛他心が極度に進むことを豫想しない限り、何うしても此方法に依るの外はなからうと思はれる。

然し斯くの如き集產主義の中にも亦、共產主義の場合と同じく大體に於て二の派別がある。一は各人の貨幣收入を絕對に平等ならしめると同時に、其收入の使用法を各人の自由に任せることを主張し、他は各人の技能に應じて收入に差等を附すべきことを主張する。謂ゆるマルクス派社會主義者は大體に於て前者を代表し、ルイ・ブラン、サン・シモン、ロドベルツス等は後者を代表する。私も亦集產主義の一人として、此點に於てマルクス派の集產主義を信奉するものである。此派の集產主義は、先づ貨幣經濟論に於て、右に述ぶる共產主義の缺點を補ひ、收入平等論に於て人類の平等心を滿足せしめると同時に、又收入の自由使途を主張する點に於て、自由の要求をも滿足せしめる。

四

以上は分配論から見た集產主義と共產主義との區別であるが、此兩主義の區別は又、生產方面に於ても看取される。

一口に云へば、集產主義の生產組織は集中的であり、共產主義のそれは分散的である。集產主義は、原則として一切生產機關(土地を含む)を國家の(或は生產機關の種類に依つては、地方的權力の所管に移すことを主張する。之れに反して、共產主義は中央權力の破壞を主張すると同時に、又一切の生產機關を種々なる自治體(地方的自治體、勞働組合等)の所管に委ねることを主張する。

私は此點に於ても、集產主義を是とし、共產主義を非とする。共產主義的生產方法の最大缺點は生產力の平均を維持することが出來ぬことである。集中的權力なき共產主義の社會に於ては、如何にして各職業或は各地方の間に生ずる、生產力の不平均を救治することが出來るであらうか。一例を擧げるならば、パン燒業の生產力は社會の需要に比して五割方過剩であり、之に反して長靴業の生產力は社會の需要に比して五割方不足を來

たすと云ふやうな場合に、自治本位では一方の有り餘つた生產力を、他の生產力の不足な職業に融通することが出來ぬ。隨つて社會全體から云へば、生產力はそれだけ無駄になる譯で、消費者としての社會は之が爲に非常な迷惑を蒙ることになる。

五

此點に於て、資本主義の現社會は中々うまく行つてゐる。資本主義は、元來、自由主義・個人主義に立脚するもので、個人的活動の自由を尊重し、國家の干涉を排斥する點に於ては、共產主義と頗る共通した趣きがある。所が資本主義は一面斯くの如く、非國家主義・自由主義であると同じく、他の一面に於て營利主義・競爭主義である。之に依つて、資本主義の社會に於ては、生產力の割振りは非常に巧く行はれる。

先きの例で云ふならば、パン燒業の生產力が需要以上に過多なる時には、パン價格はそれだけ下落する。隨つて他の事情に變化なき限り、資本の利潤はそれだけ減少する。之と反對に製帽業に於ては資本の利潤は增大する。そこで社會の資本は一部分、パン燒業を去つて製帽業に流入することになる。斯くして社會の生產力は巧みに其平均を維持する。

隨つて資本主義的生產方法のもとに於ては、國家は生產方面に干涉する必要はない。極端の自由放任主義であつても、生產力の割振りは巧みに運ばれてゆく。資本主義の社會に於ては、國家の職分は生產方面から驅逐されて、狹義の政治に局限されることになる。かくて「お役人の商法」は、產業經營に對する國家(或は政府)の無能の嘲笑語となつた。

然るに社會主義の世の中になると、資本主義的生產の指導力たる營利及び競爭の原理が無くなるのであるから。之に代て何うしても強大なる中央權力が生產事業に干涉しなければならぬ。今まで營利や競爭がしてゐた其同じ仕事を、國家が中央權力が實行しなければならぬ。此意味に於て、社會主義は資本主義に比べてヨリ多く國家的である。從來、狹義の政治的方面に局限されてゐた國家の職分は、進んで產業方面にまで浸潤して來る。つまり國家の權力を以て、一方に有り餘つた生產力を、生產力の不足な他の產業方面に振り向けるのだ。國家の命令に對しては、個々の職業的或は地方的單位は絕對に服從しなければならぬ。苟くも生產の目的が生產それ自體になく、國民全體の消費生活にある以上、國民全體の消費のために國家が強制的に生產の干涉を行ふは已むを得ぬことである。そんな干涉をした

いでも。國家の消費生活が侵害されないと云ふならば、それは無きに越したことはないが、我々の頭はまだそんな結構な狀態を想像することを許さない。

尤も國家(或は政府)の名はなくとも、各職業或は各地方間の國民的中央委員會と云ふやうなものがあつて、それが生産力の割振を管理すれば宜しい譯であるが、其委員會に國家と同じ强大の權力を賦與しなければ、そんなものはあつても何の役にも立たぬ。又それに各職業或は各地方を强制するだけの强い權力を與へるならば、それは卽ち國家である。國家なら男らしく國家と云ふが善い。國家の實質に、國家と違つた名稱を被せることに何れ程の樂しみがあるのだ。俺は泥棒をしないと吹聽しながら詐欺を働いたからとて、何も泥棒以上に善事をしてゐる譯でもあるまい。

六

以上、私は分配及び生産の兩面から集産主義を支持したが、私が集産主義卽ち國家社會主義を主張する理由は、單に之のみではない。私は更に方法論の方面から、集産的社會主義を支持することが出來る。

私は資本主義から社會主義への經過を徐々の進化と見ずに、

れに乘じて、火事泥式の無責任漢が雜出することも豫期しなければならぬ。他方に大小新制度の整理がなか〳〵困難である上に、反動的勢力の擡頭を絶えず强壓的に抑止する必要も生じて來る。

私が無政府主義やサンヂカリズムに反對する理由の一は、之等社會主義思想とレボリユーショナリズムとの間に理論上の一致點を見出すことが困難であるからである。社會が何十年何百年かの間に徐々に次第に進化して行つて、生産力が非常に增進し、個人の道德心が神の如く發達した曉には

又恐らくそれは最も萬人の要求に適
したものであるかも知れぬ。
權力の確立なしに如何にして新秩序
を維持することが出來るであらうか。

七

私の國家社會主義の理論的根據は、大體に於て以上の如きも
のである。然らば私は、此の國家社會主義的理想の實現に對し
て如何なる手段を採るか。曰く階級鬪爭である。露骨に非妥協
。ブルジョーアに對するプロレタリーリヤ
の

私の見る所に依れば、國家社會主義實現のための鬪爭は先づ
第一に政治的でなければならぬ。
更に具體的に云ふなら
ば、日本國民
の意思を代
表する政府の成立を主眼とするものでなくてはならぬ。其目的
の爲に、私は先づ普通選擧獲得のための
運動（アヂテーシヨン）を急務と信ずる。

私は次に經濟的方面に於て、消費者としてのプロレタリーリヤ
の大衆運動を主張する。勞働組合は有り難くない。勞働組合の
缺點はプロレタリーリヤを一括的に網羅することの出來ぬ點にあ
る。生産者としての組織的運動は、何うしても職業（トレード）に縛られる
傾きがある。そして結局の獲物は『地位の改善』が關の山である。
此意味に於て縱斷も横斷も大した違ひはない。單なる地位の改
善なら溫情主義で結構だ。私は階級鬪爭主義の立場から慈善事
業と社會政策とを五十歩百歩と見ると同じ意味に於て、溫情主
義と組合主義とを五十歩百歩に見てゐる。

・私は電車運轉手のストライキよりも、電車賃
の値上に對して勃發する市民
。小作人組合は出來ても出來ないで
も宜しいが、米價昂騰に對する國民的デモンストレーションの
大變な相違である。勞働組合は
ヨンを造らぬ。外國の例を引いて云へば、ロシヤの革命は勞働
組合と
の直進を妨げる原動力
の一は勞働組合の『實力』であると云はれてゐる
本場と稱せられる。フランスは『革命』ロシヤを腐敗す

ることに最も徹底的である。

勞働組合が如何に發達しても、資本主義のもとに於て組合に包括されるプロレターリヤの數は知れたものである。イギリスの如く、勞働組合の馬鹿々々しく發達した國に在つても、組合加盟者の數は五百萬に達しないと云ふではないか。それが一齊に起つて總罷工をやつたからとて、資本主義は決して倒れないプロレターリヤは國民の大多數であると云ふ以上、プロレターリヤの運動は國民の大多數を網羅するものでなくてはならぬ。

謂ゆる議會政策の社會民主黨の本領が、投票の掻き集めと社會政策的立法の制定とに盡きる如く、職業本位の勞働組合の本領は基金の掻き集めと地位の改善とに盡きる。私は議會政策の社會民主主義に反對であると同じ意味に於て、職業本位の組合運動に反對するものである。地位の改善や勞働施設の制定は、資本家と政府とに一任して置け。

時間の短縮や、賃銀の引上は向ふでして呉れる。組合運動五十
年努力の結果は、
一日の効果にも及ばない。
更に考ふるに、勞働組合は勞働者の『地位の改善』を以て
使命を擁滑するものである上に、其地位の改善も實は大した改善を意味せぬ場合が多い。時間を短縮し賃銀を引上ぐれば、資本家は(他の制肘力なき限り)同時にまた生産物の價格を引上げることが出來る。かくて消費者としてのプロレターリヤの生活地位は(少なくとも或時期の間は)『改善』されない前に比べて何程も改善されたことにならぬ。

加ふるに、プロレターリヤの中には、謂ゆる勞働者でないものも含まれてゐる。此種のプロレターリヤに至つては、勞働組合の『實力』のお陰で、地位を改善されない上に物價はます〳〵騰貴すると云ふ二重の痛苦を忍ばなければならぬ。而も此間にあつて單り無痛の快樂を樂んでゐる者は資本家である。

されば勞働組合の努力を、斯くの如く無益有害に了らしめない爲には、一面に於て絶えず消費本位の大衆運動を激發(アヂテート)する必要がある。

附言。私の態度は今春國家社會主義を唱道し始めた時分とは幾分變つてゐる。根本理論は動かないが、實行手段に於ては大分變つた。今後も尙ほ變はるかも知れぬ。それからも一つ。私
は
プロレターリヤが普
通選擧に依つて議會に活動することを重要視するものである
運動の導因
及び表現たる意味に於て議會的活動を主張するものである。

日本階級鬪爭史論

＝封建時代と資本時代との比較研究＝

白柳秀湖

「一」現金勘定の大熔爐

社會はその何れの時代に於いても大體に於いて征服者と被征服者、卽ち多數人民の勞働の結果によりて支へられる少數の特權者と少數支配者の特權を支へんが爲に孜々營々として働く多數人民との二つの階級に分たれる。けれども、現に行はれる資本主義の經濟組織が、社會をブールジョアとプロールタリアンとの二階級に分つ如く、しかく簡單に、明瞭に、社會を二つの階級に區別したことは、是までの歷史に例がなかつた。私は先頃『中央公論』の『日本社會運動史論』に於いて、資本主義の特色は、身分も、血統も、職業も一切を『貧乏』といふ赤裸々なる『現金勘定』の大熔爐に投込んでドロ〳〵に煮碎いて了ふ。さうして最も簡單に明瞭に社會を利害相反する二つの階級に分ける。之は封建時代には見られなかつた現象であるといふことを述べた。お世辭かも知れぬが、私はアノ一篇に對して二三未見の特志家から過分の讚辭を頂戴した。同時に二三の議論好きな靑年から反駁的の質問を受けた。併し右の一點だけは私の獨創でも何でもなく、實はマルクスの說を反覆吟味して得たものであつて、私は此機會に今一度詳しく右の點に對する私の考へを述べて見度いと思ふ。

封建時代に於いても、社會を少數の掠奪する階級と、多數の掠奪される階級との二つに分けることが出來ぬといふのではない。社會は大體に於いて二つの階級に分れる。けれども、此區分は資本主義の時代ほどにハッキリとして居ない。現に歐洲の歷史に於いても一概に地主といふ中に國王もあり、諸侯もあり、僧侶もあつて其利害は必ずしも一致せず、それ〴〵サーフを私有して掠奪者と被掠奪者との階級をなして居たが、國王、諸侯、僧侶此三者がランド・ロードとしての利益に於いて一致するといふことは容易のことでなかつた。中世都市の市民がサーフの

階級から起つて自治權を許されたのは、全く國王、諸侯、僧侶三者の爭鬪に乘じて、一歩又一歩之を獲得したのである。是より先都市の發達と共に商工業者の間にはギルドといふのが生れギルドの一員たる商工業者と、渡り職人(Jaurney-man)との間にはヤハリ一種の掠奪、被掠奪の關係が生じた。ギルドの中にはいろ〳〵な條件を持出して諸侯を援けるものもあつたらうし、又、寺院に味方するものもあつたらうし、其關係は極めて複雜で一國全社會を簡單に二つの階級に分けて說明するといふことが困難であつた。之は古代史に於いても同樣である。希臘の自由民と奴隷、羅馬の貴族と平民は大體に於いて社會を掠奪階級と被掠奪階級とに分つ二つの階級であつたが、仔細に吟味すると、貴族の下にナイトといふものがあつて平民の上に位し、平民の中に良賤の別があつて、奴隷は平民と全然別格に取扱はれたなど其關係は頗る複雜であつた。

處が、近世資本主義は之等の微妙な、詩的な、迂餘曲折に富んだ社會上の秩序と習慣とをあげて露骨な、散文的な、赤裸々にして無慈悲、殘忍なる現金勘定の爐中に投込んでしまつた、身分もなければ血統もない、職業もなければ名譽もない、唯あるものは資本の力のみである。一たび此力に離れたものは、貴族の子も、平民の子も、武士の子も、百姓の子も、儒者も、坊主も、醫者も、教育家も皆同一樣に取扱はれて了ふ。誰彼の差別なく「貧乏」といふ大釜の中に投込まれて、ドロドロに煮碎かれた上に、賃銀勞働者といふペーパーを貼布されて了ふのである。一口に階級鬪爭と云つても、封建時代の階級鬪爭と、現代の階級鬪爭との間には此點に大なる相違がある。之は必ずしも私の考へではない。マルクスも立派に云つて居ることであるが、唯、私は私の趣味の上から特に此點を注意して見たといふだけであつた。

「二」學者、醫師、坊主の難有味

殊に私が平生面白く思つて居ることは、封建時代の習慣として、或る種の職業に限り社會上特殊の地位が與へられて居たのにそれを近世の資本主義が無慈悲に掠奪して了つたといふことである。封建時代の支配階級は、學者とか、醫者とか、坊主とかいふもの(西洋では此中に法律家といふものが加はる)に對して特殊の地位と名譽とを與へて居た。別に大した分配(掠奪の)を與へたといふ譯ではない。學者も、醫者も、坊主も概して貧乏な方であつた。けれども封建時代の支配階級は其處を巧みに

ボカして、彼等に十分の滿足を與へ、彼等をシッカリと自己階級の味方に引つけて居た。封建時代には、學者にも、醫者にも、坊主にも立派な社會上の地位と名譽とが與へられて、所謂士民と、凡下と同列に取扱はれなかつた、その實質は貧乏で、無力で、志も卑しく、特權階級者若しくは富者の幇間として生活する位のものであつたが、表面は兎も角も一代の師表であり、一世の救濟者であり、高節を持して清貧を樂む超凡脫俗の士といふことになつて居た。處が資本主義は之等の職業の背後に光つて居た封建的の色彩を赤裸々に洗落して了つた。實際社會の事情に疎い思想界の人は除り知るまいが、日本の醫者の團體は、曾て封建時代の支配者によつて自家の職業に限り特に許されて來た社會上の地位と名譽とを永久に保持せんとして無益に煩悶焦慮した。大正七年六月十日、大日本醫師會が實費診療所に對して加へた反對意見書の中に、「醫師の國家的地位」と題する一節があつて、醫師は國家から特に優越なる待遇を受けて然るべきであるといふことが主張してある。曰く、

　醫師は國家生存機關の一にして、其司命の天職は必ずしも、單に醫師對患者の私的關係にのみ止まらず、更に進んで國民保健の發達を圖るの公的關係に立つものなり。國家の醫師を待つや重からざるを得ず。醫師の國家に報ゆるや大ならざるを得ざるは論として當に然るべし」

と、之に對して診療所の理事長、鈴木梅四郎氏が、

　醫師が「國民の生命を保護し、公衆の健康を增進するの責務を有する」が故に、國家生存機關の一なりとせんか、勞働者は國富の產出に一日も缺くべからざる勞力を提供する點に於いて、教育者は國家の將來を双肩に擔うて起つべき小國民の知德を啓發すべき責務を有する點に於いて、何れも醫師に讓らざる主要の國家生存機關の一たり。然り、斯くの如く數へ來る時は、單に勞働者と云はず、教育者と云はず、學者も、宗教家も、新聞記者も、資本家も、百姓も、商人も何れ劣らざる重要の國家生存機關たり。更に切言すれば國民ありての醫師か、醫師ありての國民か。(中略)國家にして若し國民の衞生保健上、醫師を放ちて一般生存競爭の渦中に陷溺せしむることの危險と不利益とを看取せば、斷然醫を統一して官營とすれば足れり。何を苦しんで一方に彼等の放恣なる營利行爲を認め、一方に法律上社會上の特權を與へて之を特待優遇するの要あらんや。

と應酬した一節は、少からず社會の同感を喚起し、『東京朝日』

の杉村廣太郎氏は、例の鐵箒欄に於いて、直に之に贊成の意を表されたほどであつた。

處が醫師諸君にして今一歩進んで此問題を歴史的、經濟的方面から觀察されたならば、聰明なる諸君には必ずや更に深刻にして、重大なる社會問題に逢著されたことであらうと思ふ。諸君が診療所に反對するのは飛んでもないお門違ひである。診療所は諸君の經濟生活が地上に投げた影である。諸君自らの生み落したわすれ形見である。諸君の生活を脅かし、諸君の傳統を破壞し、諸君が曾て有したる社會上の特殊の地位と名譽とを無殘に奪ひ去つたものは現に行はるる資本主義の經濟組織であるマルクスの『共產黨宣言』に次の一節がある。

資本家階級は從來特殊の名譽と尊敬とを享受したりし或る職業の難有味を消滅せしめた。例へば醫師、法律家、僧侶、科學者の如きは、何れも彼等の雇用せる賃銀勞働者と化し去つた。

洵にマルクスのいふ如く、封建時代に於ける階級鬪爭は斯くの如く複雜で、其假裝と覆面との下にかくれた兩者の關係を知ることは容易でなかつたが、資本主義の下に於ける階級の關係は刻々簡單、明瞭となつて劃然二つの相對峙する勢力に分れつつある。たまく其關係の複雜であつて、兩者の中、何れに屬してよいか分らぬやうなのは必ず封建の遺風遺習であり、仔細に之を觀察すると遠からずして兩者の孰れかに、其所屬を決すべく準備中のものであるといふことを發見するに相違ない。

〔三〕 階級と血族との關係

其處で私は斯ういふことを主張し度い。資本主義の經濟組織から生ずる階級戰爭には、血族の關係はない。一切が現金勘定で解決され、貴族も平民も、良民も賤民も、引くるめて有產者と無產者、資本家と勞働者との二階級に分れるのであるが、封建時代の階級戰爭には血族の關係があつた。同一血族の間に於ける甲と乙との勢力爭ひで、乙が一敗地に塗れた場合、甲が乙の一族を搜索して根こそぎ滅ぼして了ふといふことはあつたが、甲の警察眼をのがれた乙の一族は地方に土著しても農奴にはならなかつた。生活上、或は樵人となり、農夫となつて世を忍んでも、時機が來て甲の權力が弛廢するに至れば、乙の一族、郎等は所在に蜂起して天下に檄し、現政府に不平滿々たる諸大名を驅り集めて所謂『旗擧げ』をしたものである。之を社會上の階級戰爭と見ることが出來るかといふに何人も躊躇する。例へば

源平の爭ひ、本補地頭に對する新補地頭の爭ひ（南北朝の戰）をも一種の階級鬪爭と見做すか、否か。若し彼をしも階級鬪爭といふならば、政友會と憲政會との爭ひも階級鬪爭である。三井と三菱との確執も階級鬪爭である。

其處で封建時代に限り、何處迄を階級鬪爭と見、何處迄を同一血族間に於ける新舊勢力の爭ひと見るか、其境界をきめて置く必要がある。モットやかましく云へば階級戰爭といふものゝ定義を下して置く必要がある。私は此頃痛切に之を感じて來た。

處が、西洋の學者の中には階級鬪爭（以下すべて封建時代を意味す）と、同一血族間の政爭とに、嚴密な區別を立てた人は餘りないやうである。換言すれば階級鬪爭に一定の概念を與へ、定義を下した人はないやうである。政治上の壓制者と被壓制者、社會上の掠奪者と被掠奪者、此兩者の間に於ける鬪爭が卽ち階級鬪爭であるといふやうにザッと見て來たやうである。之は無理もないことである。私の見る所によれば、大陸の歷史には殆ど之を區別する必要がないやうである。何故となれば、私の知れる限りに於いて大陸の歷史、殊に西洋に於いては、階級の相違が直に血族の相違を意味するやうになつて居る。私は西洋の歷史をかやうに見て居る。

有史以前、血族的小部落が、家畜と奴隸とを携へて盛に遊牧を行つた時代、其目的地が已に他の血族的小部落によつて占據されて居た場合には、多く戰爭によつて問題を解決した。之を日本の歷史について云へば高天原と出雲との間に行はれた外交談判の如きがその一異例である。出雲國はもと高天原と血族を同じくし、祭神（日本の場合は祖先）を同じくし、言語風俗を一にしたものであるから、高天原の方では初めから外交談判によつて事を解決しようとした。處が出雲の方には、血族の異る少彥名命といふ共力者の遺した勢力もあつたらうし、且は素盞嗚命以來慘澹たる苦心の結果として開發された國土に對する執着もあつて、一度や二度の使節では容易にカタが付かなかつた。其處で高天原に於いてもいよ／＼戰爭の決心を固め、武御雷、經津主の兩將に統制ある軍隊を附し、伊那佐の小濱（神門郡）から出雲國に入つて手詰めの談判をさせた。此時にも出雲には主戰論者と、講和論者とがあつて國論は必ずしも一致しなかつた、大國主神の御子、建御名方神といふのが主戰派の頭目で、小さい衝突はあつたが大體に於いて大國主神が天孫と同じ待遇を受くべきを條件として讓國の誓約が成立した。之が若し、血族、祭神を異にするもので、其文化の程度が出雲ほどに進んだ國が他

にあつたならば、高天原民種はモツト大きい、國を擧げての戰爭に相過しなければならなかつたのである。此場合敵の抵抗力が強ければ強いほど、換言すれば、敵の文明が我に近ければ近いほど、戰爭の結果として成立する社會制度、政治組織が複雜なものとなつたに相違ない。之と反對に敵の抵抗力、即ち文明の程度が低ければ低いほど戰爭の後に來る新しき社會制度、政治組織も簡單で、その最も極端なものに至つては、優越な部落が、新しき奴隸を加へて、新しき小一の地を得たといふに止まる

「四」　奴隸制度の種々なる形式

斯くして初めは單一の血族から成立した共產的の小部落も、移住するに從つて種々の血族を其部落の中に包容することとなり、社會組織が漸次複雜に赴いたものと思はれる。戰爭が伍角の力で鬪はれ、殆ど引分けに近い形で講和が成立した場合には、貴族の中に新しい分子の加はるやうなこともあらうし、大なる政治上の權利を有する人民が出來ることもあらうし、同じく被壓制者被掠奪者と云つても、良賤の別があるといふ風に極めて複雜な階級制度が成立する、さうして此階級制度が複雜であれば複雜であるほど、國民の政治思想は進む譯である。

希臘の文明も、羅馬の文明も、實にかゝる複雜なる社會制度を有する多くの國家が境を接して、激烈なる存立競爭を鬪つた處に生れたものである。殊に羅馬の法律、制度はその著しいもので、共和制のよつて來る所は、七丘の血族がそれ〴〵其王を異にし、祭神を別にし、多少の相異ある言語、風俗を持して最も激烈なる存立競爭を鬪つたことにある。されば羅馬は共和制であつても、帝制であつても、統治權の大本は『德』即ち『力』であり、其力を行ふには國家成立の最初の約束、即ち法律、制度に準據するを必要とした。若し治者が此法律、制度を無視して擅に其力を行はんとすれば、之を不利益とする社會上の階級、即ち或る血族は立つて其不法を鳴らし、最初の約束に立かへつて治者の反省を求めることが出來た。又、文明進步の結果として社會上の或る階級が、其の約束、即ち舊き法律、制度に甘んぜず、更に其生活の改善を欲するに至らば、彼等は身ら起つて治者及び治者の階級に對し、その改正を要求することとなる。吾々は之を『社會運動』若しくは『階級鬪爭』と呼ぶ。

希臘の自由民と奴隸、羅馬の貴族と平民など西洋の古代史に於ては、社會上の階級が直に血族の相異を意味し、其系統を引く中世の歷史に於ても、社會上の階級は多く血族の相異に由來

して居るので、社會運動といひ、階級闘爭といへば、說明を要せずして征服された血族の、征服した血族に對する生活改善の要求であると理解され、別に煩はしい定義の必要はないのである。

處が日本の歴史となると少しく事情が異ふ。前にも述べた通り、日本の奴隷にはいろ〳〵な血が混じて居る。同じく奴婢といふ中に、高天原時代から率ゐて居たものがあり、征服した先住民種(之も一種ではない)があり、熊襲があり、三韓の民があるなど、其內容は種々雜多であるけれども、支配階級たる大小の氏には、他の血族の血が交つて居ない。記錄以前の事は知らず、記錄あつて以來、日本民族は此國土に於いて、齒牙にかけるほどの有力な民族に遭遇して居ない。出雲國は有力であつたけれども、血族、祭神を同じくした關係から平和に事が解決し、熊襲は異れる血族中で最も手應へのある國であつたけれども、其文明の程度に於いて所詮日本民種の敵でなかつたことは「熊襲は膂の空國なり、伐つに足らず」とあるに見ても知られる。斯樣な次第で奴隷の方にはいろ〳〵な血が交つて居るけれども、支配階級、即ち氏族の方には西洋の歴史に見るやうに他の血族の血が交つて居ない。單一血族の中に於ける身分の相違が、直に社會の秩序となつて國家が編制されて居る。奴隷に必ずしも反抗の血がないとは云へぬ。けれども奴隷が其所有者の束縛を脫し、教化を破つて生活改善の欲望に目覺めるには、社會組織が今少し複雜であるを要する。奴隷と支配者との距離が大きく、其間の中間階級が複雜であればあるほど奴隷の虐待は甚しくなる。良民は賤民と混同されることを恐れて、支配者が必要とする以上に其區別を立て、有らゆる方法を盡して之を凌虐侮辱する。我國に於ける特殊部落の如き、之に對して最も辛辣苛酷な凌虐を加へるものは所謂平民の中でも最も彼等に近いものである。或は彼等の中から出て、巧に其素性を韜晦したものである。羅馬人が聞くだに恐ろしい方法を以て奴隷を虐待したのは、恐らく社會組織が複雜であつて、中間階級の多かつた爲で、其虐待酷使の極端に走つた所に、奴隷の反抗が起つたものであらう。其處へ行くと奴隷と其主人との關係が水入らずであつた日本の關係は別である。

〔五〕 溫情主義による奴隷解放

尤も日本にも奴隷(家部)と主人との中間階級に良民(部曲)の階級があつた。けれども、此部曲と呼んだ階級と氏族との間に血統上の關係の絕えて居たことは事實で、私はヤハリ之も奴族

の一種であつたと見るのが至當であらうと思ふ。即ち家部は純粹の奴隷、部曲も奴隷であるけれど之は一種の技術勞働者で、家部よりも優待されて居たといふだけで、國家編制の上に何等の地位をも權利をも與へられて居なかつたことは兩者ともに一である。(部曲のことは熱心に研究中であるが、それが大小の各氏族に私有された因縁については未だ纏つた考へを持つて居らぬ。先輩の御教示を乞ふ)

右の如き事情により、日本の奴隷は早くから主人の温情主義に包容され、外國の歴史に於いて見るやうな甚しい凌虐を受けなかつた爲に、團結して主人に反抗するといふやうな機會に遭遇しなかつた。殊に注意すべきは、大化新制以後、皇室が大氏族の實力を殺ぐ御政策として、數々奴隷の解放を御奬勵になり、奴隷と良民との區別を打破すべき種々の法令を發布された爲に、奴隷が濟し崩しに解放されて良民と渾融して了つたことである。其處で奴隷は益々其因襲的の生活に甘んずることゝなり。政治上の權利を要求したり、社會上の地位を改善したりする欲望に目覺めるの機會を失つた。かくして日本の奴隷は濟し崩しに解放されたけれども、此解放は必ずしも彼等の地位の高上と進歩とを意味するものでなかつた。

奴隷が兵士として戰場に用ゐられたのは必ずしも中古以降のことではない。上古の歴史にも奴隷の軍隊が奮戰して善く敵を拒いだといふやうな事實は稀らしくない。物部氏が河内の澁河に亡んだ時も、一族、奴隷が最も勇敢に防戰して容易に屈せず流石聰明叡智の厩戸皇子も大に攻めあぐんだとある。奴隷の中には隨分勇猛にして戰功の著しいのもあつたらうが。それとて奴隷から家の子に取立てられるといふことはなかつた。奴隷を郎等と稱し、戰功によつて家の子の列に取立てるやうになつたのは、源平二氏の頃からである。之は大化以降、朝廷の制令によつて漸次良賤の差別が消滅しつゝありし處へ、作戰が大規模になつて兵士の多きを競ふやうになつた結果であらう。

更に進んで近古に至り、鐵砲の傳來と共に戰術、戰法に大革命が起るに及んでは、軍の主力が英雄豪傑の格鬪力から、武士若しくは足輕の團體的訓練に遷り、中古以前に僅存した血族的秩序は漸くにして崩壞し。門地門閥は唯形の上のことで、實際は百姓でも、町人でも實力さへあれば何處までも出世が出來るといふことになつた。豐臣秀吉を始めとして、福島正則、小西行長など戰國時代の英雄には其素性の卑しいものが甚だ多い。これ實に日本文明の一大進歩であつて、我國民今日の發展は、實に此近古の社會的大革命の中に萌芽したと云つてよい。

かくて我國の奴隷制度は先づ中古から崩れ初め、近古に至り、門地、門閥の權威が實際に消滅するに及び、百姓、町人の階級から幾多の英傑が現はれて、驚くべき統御の才能を發揮した

のであるが、之を以て日本に歴たる階級鬪爭の事實あり、社會運動の記録ありと見るは甚しき早計ではあるまいか。上古のことは別として紫式部や、淸少納言や、平政子や、丹後局や、日野富子や、春日局があつたからと云つて、日本に女權運動があつたといふことの誤りは何人も之を認めながら、日本の奴隷が早くから所有者の溫情によつて良民の列に加へられ、近古の社會的大變革に乘じて當人の才智力量により支配階級の列にも加へられるやうになつたといふことを以て、日本に階級鬪爭の歴史あり。社會運動の事實ありと見るの誤りを認めぬ人のあるのは何故であらうか。

「六」 階級的自覺なき反抗

日本に階級鬪爭に因みある歴史上の事實として大に研究すべきものが三つある。即ち、

（イ） 平安朝時代に於ける山賊横行の事實。

（ロ） 中古史より、近古史に亘る海賊及び八幡船の事蹟。
中古史より近世史に亙る商業及都市發達の事實、

（ハ） 近古史より近世史に亙る百姓一揆の事實。

が之である。私は目下之等の歴史を整理中であるから、詳しい事實に就いては、他日之を世に問ふこととなるであらうが、私は之等の歴史の何處にも征服され、壓制され、掠奪された階級の自覺した運動を見出し得ぬ。苟も階級鬪爭とか社會運動とかいふ以上は、征服され、壓制され、掠奪された階級に政治上の自覺が必要である。處が幸か、不幸か、日本の歴史には人民の階級的自覺から發した運動がないやうに思はれる。

戰國以後、門閥思想の崩壞と共に、幾多の新人物が百姓、町人の階級から現はれて支配階級に入り、中には其政權を掌握したものさへある。けれども之は支配階級と被支配階級と其所をかへたのではなく、被支配階級の或るものが、支配者に代つて其權利を繼承したといふだけで、其支配の對象は依然としてもとの被支配階級、即ち彼の父祖の配屬した階級にあつた。更に、此時代から百姓の一揆徒黨して支配者に反抗した事實を發するに、其行動に多少の統制あり、秩序あるものは。多く淪落して民間に潛伏しつゝありし支配階級の或るものに指導され、統率されて居るのを見る。其然らざるものは一時に蜂起して落武者の衣を剝ぎ首を獲るのを目的とするか、若しくは節制なき掠奪によつて眼前の飢餓を滿さんとするかで、運動などいふ性質のものでなかつた。

長享の門徒一揆は、百姓が領主の惡政を鳴らして之を滅ぼしたもので、注意すべき事實には相違ないが、其背後に本願寺といふ大勢力があり、之を指揮、統率するものが専門の武人であつて見れば單純な百姓一揆として見ることは出來まい。之は歐洲の中世史に見る寺院と諸侯との爭ひと見るが至當であらう。

永祿の門徒一揆は中央の政局に大關係があり、三遠の境に蜂起して織田氏の同盟國たる德川氏を惱ましたものの如き、其首領は主として今川氏の遺臣であつた。之を要するに諸國の百姓一揆門徒一揆の如き、門地、門閥を中心とする社會の秩序が綏解した時代の現象として研究するには十分に興味のある事實であるが、之を百姓が、百姓によつて、百姓の爲にした運動と見るには餘りに武士的色彩が濃厚である。

(右に擧げた三項の研究は、其一項の梗概を記すだけでも、此論文ほどの紙數を要するので、機會を見て何處かの雜誌で一項づゝ發表して見度いと思つて居る)。

「七」 國家の熱と脈搏

其處で問題は元に立ちかへり、日本には是まで何故嚴重な意味でいふ階級鬪爭がなく、同一血族の間に於ける新舊勢力の爭ひを以て一貫して來たかといふに之は支配階級が單一の血族から成り、奴隷との間に主從水入らずの溫情主義があつたからである。即ち溫情主義といふものは、人民私有の關係に於いてのみ生ずるものであり、領主の側から云へば非常に利益であるが、人民の側から云へば必ずしも利益でない。飢えず、凍えざるを程度とし、優遇されず、虐待せられざる限りに於いて、支配者の爲に孜々營々として働かせられる形を云つたものである。明治維新はかゝる境遇から全國の人民を解放し、其公私兩面の生活を通じて國家に對す權利、義務を一にしたるものであつて、今頃溫情主義などいふ文字の使用されるのは、事其事が已に奇怪千萬である、況んや之が資本家の口より唱道せられるに至つては、僭越も沙汰の限りである。

けれども日本に階級鬪爭のなかつたといふのは封建時代に就てのみ云つたことである。今後は日本にも必ずそれが起る。其起る理由は本論の劈頭に於いて述べた如く、現代經濟組織の必然の結果であつて、日本が世界各國と並んで今日の產業制度、經濟組織を採用しつゝある以上之は止むを得ぬことである。

世には階級鬪爭を以て國家の進步發展と相容れぬ亡國の前兆として憂ふる一部の守舊家がある。國家が有機體であるならば、其身體を組織する個々の細胞が個々に生きて活潑に働くことは健康の表徵である。細胞個々が活潑に働いて相衝突する所に熱があり、脈搏があり、新陳代謝がある。世界の歷史は「此戰爭の終局する所に、社會組織の〇〇〇新建設をなしつゝ今日に及んだ。」永久の戰爭が敵味方双方の死滅である如く、永久の平和も亦敵味方双方の廢殘である。吾々は不斷の戰を望まぬ如く永久の平和を望んではならぬ。(大正八年十一月九日、大阪に旅立つ日)

階級闘争と勞働組合の形式變化

荒畑勝三

一

階級間の闘争の慘烈なるは、國際間の戰爭の慘烈なるに比して、決して劣るものでは無いかも知れぬ、けれ共、國際間に經濟的自由競爭の行はれて居る限り、產業上に於ける國家の霸權を樹立せんとする努力の結果、勢ひ國際戰爭の起らざるべからざるが如く、利害を異にせる資本勞働の階級的對立にして存する限り、階級闘争の痛苦より脫出する能はざるは、實に現代社會の運命で無ければならぬ、實に階級闘争は、現代の社會生活の基礎條件たる、資本家的產業制度の必然的結果であつて、資本家制度から產業發達の利益幸福のみを享受して、階級闘争の慘害痛苦は之れを除かんとしても、それは到底出來ない相談たるを免がれない。何となれば資本勞働の階級闘争は、資本家制度の發達の道程に於て、因果律的に現はるゝ必然の結果に外ならぬからである。

近世の意味に於ける階級闘争、卽ち資本勞働の社會的對峙と、その利害の衝突とは、家內手工業に取つて代れる、近世の資本家的產業制度の確立に、伴隨して起れる現象であり、且つその著しき特色を作せるものである。機械の發明と採用、及び之れに伴隨せる、家內手工業に代れる工場制度の樹立、卽ち所謂『產業革命こそは、實に近世資本家制度の生母であつたと共に、また階級闘争の繼母だつたのである。アーノルド・トインビイは十八世紀の後半及び十九世紀の前半に、英國に起つた經濟制度の大變化を稱して、『產業革命（インダストリヤル・レボリューション）』と名けたが、此の變化の顯著なる表現は、工場を中心とせる產業の位置、人口の工場地集中等であつて、之れは又、都市の發達、製造物資の產額增加等を伴つて居た。

何故に產業革命が、歐洲大陸よりも寧ろ英國に早く起つたか、

その理由は種々雜多であらうが、第一に、英國は比較的剰餘資本が豐富であつた。英國では資本の蓄積に對して、他の如何なる歐洲諸國よりも、より大なる機會と保償とが與へられ、その政治上又は宗教上の狀態は、獨逸や佛蘭西よりも良好であつたし、經濟制度も獨、佛より障碍が少なかつた。而して英蘭銀行（一六九四年）、及び他の銀行の設立は、決定的の刺戟を與へたものであつた。十八世紀後半に在つては、英國は戰爭の爲に富の發達を阻害されたが、然しその損失は、手近の競爭者たる佛蘭西程に酷くなかつたので、一八〇〇年に先だつこと遠く、剰餘資本は既に資本家的農業の發達に資せられて居た。第二に、英國は比較的勞働者が豐富であつた。加ふるに、十七世紀及び十八世紀には、和蘭や佛蘭西から優秀な技術工にして、宗教上の迫害の爲に英國に亡命せる者が多かつたので、その移民職工の知識と熟練とは、英國の産業的發達に資する所が多かつた。第三に、英國の製品を需要する市場が、特に一七六〇年以後、非常に擴張增加して來た。第四に、同業組合が比較的早く崩壞して、商人製造家によれる家内手工業の統轄權が擴大され、從つて工場制度に到る遷移を容易ならしめた。既に十七世紀及び十八世紀に於て、特に英蘭南部の羊毛工業の如きは、概むね商人製造家の統轄に歸し、彼等は原料及び屢々道具をも所有し、自分達の家内で働らして居る各種の勞働者に、仕事を出して居たのである。故に此の狀態から工場制度に移るのは、只だ一歩を要するに過ぎなかつたのである。而して最後に、英國では機械的發明が比較的早く、且つ迅速であつた。歐洲大陸の學者が、光や、電氣や、化學的反應の研究に沒頭して居る間に、英國の科學者は、既に用ひ得らるゝ知識の實用に熱中して居たのであつて、たとへば、ワットは熱の膨脹力を利用して、蒸汽機關を發明したが、然しこの思想は、マアルブルグ（普魯西）の一科學者に創まつたのである。

二

この産業革命の結果として、社會が最初に目擊せる現象は、雇主と被傭者との截然たる分離區劃であつた。家内手工業制度に在ては、勞働者は小さくとも尚且つ獨立の生産者たるを失はず、彼等は實にその勞力のみならず、其の製品をも賣り、また屢々生産に使用する道具を所有して居た。然るに、工場制度の下に在ては、雇主は實に原料を供給せるのみたらず、また實に製造等の行はるゝ建物と、使用する機械とを所有せるに引替へ、

被傭者は單に賃銀の爲に働らく、終生賃銀勞働者の境遇に墮して了つたのである。勿論、産業革命に先だつこと約半世紀、工場制度の未だ樹立されざる時代、若くは機械に依て改造されざる産業に在ても、終生賃銀勞働者の階級は存在して居た。たとへば既に十七世紀の末葉、又は十八世紀の初葉に於て、倫敦（ロンドン）の留針（ピン）製造工團體や、手袋製造工等は、その生活標準の低落を國會に訴へて居る。然も彼等の間には、未だ資本勞働の隔絶と云ふが如き形式が完成されて居ず、彼等はその勞力のみならず、また實にその製品をも賣つて居たのである。故に彼等が唯一の力賴みとして居た所は、中世紀の手工同業組合（クラフト・ギルド）が採つて居た政策の如く、商業の獨占、若くはその商品の値段に對する法律上の保護であつた。卽ち斯の如き産業に在ては、勞働者と雇主との時折の紛爭は、異なれる社會階級間の鬪爭と云ふよりも、寧ろ內輪喧嘩に似て居たのであつて、當時の産業社會は猶未だ、資本家と賃銀勞働者との間に水平に分たれずして、職業職業に依て垂直に分たれて居たと云ふべきである。

　故に、産業革命以前にも、熟練職工の生活標準の低落、終生賃銀勞働者階級の創造は、有ゆる種類の職業に起つて居た所であるが、然し之れに最後の止めを刺して、資本と勞働との截然たる階級的分裂を樹立したるものは、實に機械の採用に依て家內手工業に取つて代れる、工場制度の建設であつた。而して之れが結果は、婦人少年勞働の開始、賃銀の低落、工場內に於ける道德性及び健康狀態の頽敗等、夥しき惡影響を齎らしたとは云へ、また從來、勞働者を分離孤立させて居た家內手工業に比して、彼等を接觸集合せしめ、その利益の擁護增進の爲に團結すべき機會を、勞働者に提供したと云ふ好影響をも有して居たのである。實に産業革命以前の、熟練工の排他的、獨占的な職工組合をば、全勞働階級の相互扶助、一致團結の觀念をその著しき特長とせる近世の勞働組合運動に代へた所以のものは、此の資本勞働の社會的分裂、勞働者が生産機關からの隔離に在るのであつて、イングラム博士の言を藉りて云へば、『進歩せる形式に於ける近世の全勞働團體は、自然に且つ不斷に自から發達せる根本的事實卽ち資本家と勞働者との職分の明白な分離、換言すれば、産業上の作業指導と、その細目の實行との明白な分離に基づけるものである。』

　佛蘭西は、歐洲大陸で産業革命──卽ち工場制度の樹立、機械の採用、手工業の廢止等──の起つた最初の土地であつた。英國の産業革命の影響は、海峽を超えて佛國にも達して居たの

で、一七八五年當時、旣に佛國に最初の紡績工場が作られ、そして帝政時代の間、紡績機械や織物機械の利用を奬勵して居たのは事實であるが、然し大部分の織物工業は、一八二五年以前に在ては、全然家内手工業であつた。故に一八三四年には、佛國全土には僅か五千臺の織物機械があつたのみであるが、其後の發達は頗ぶる迅速で、一八四六年には其の數實に三萬一千臺を算ふるに至つた、獨逸の産業革命は、一八七一年の獨逸帝國建設以前に起つたが、その主因は、永い不和時代に於ける國家の繁榮と富の增加、英國からの機械の輸入、及びシレシア、サクソニイ、其他の製造業地方へ、英國工場の職工長や職工の入つて來た事などである。就中、最も重要な動因となつたものは、關稅の撤廢と鐵道の發達との結果、市場地域の擴張に依て可能とされた資本家的生産形式の勃興であつた。斯の如く、たとへば英國では紡績業に起つた産業革命の形式、卽ち蒸汽動力の應用が、佛國には先づ鑛業及び金屬業に起り、そして織物業には極めて徐々に行はれたと云ふやうな差はあるが、然しその原則と方法とは、如何なる國に在ても同一の徑路を取つて進んで來たのである。

三

産業革命の根本的結果は、資本と勞働との隔離分裂であり、兩者間に於ける劇烈な利害衝突の發達、と云ふよりは、寧ろその强調であつた。中世紀に在ても、又は近世の初期に於ても、所謂勞働問題、勞働紛爭は、決して絕無と云ふ譯では無かつたが、然し十八世紀以前に在つて、明白に社會的及び經濟的勢力として、それ自身を感ぜしめたる勞働紛爭は、都市的と云ふよりも寧ろ地方的であり、産業的と云ふよりも寧ろ農業的と云ふべき性質であつた、彼の佛蘭西では一三五八年の農民一揆（ジャクレー）となり、英國では一三八一年の社會的叛亂を惹起し、そして獨逸では一五二四年の百姓戰爭に導ひいたものは、田園地方の勞働者の騷擾不穩だつたのである。

手工製造業が槪むね、工場制度に取つて代らるゝ迄は、雇主と被傭者とは、製造工業に在ては一緒に働らいて居るか、若くは密接に接觸して居たので、相互の間に了解と好意とを促進せしめる事が出來たのみならず、被傭者が經濟的に獨立の位置を得るの希望は、決して大それた野心でも無ければ、また其の機會にも乏しくはなかつたのである。然るに工場制度の確立と共

に、此の個人的關係は全く崩壞し、資本家は多くの勞働者を傭ひ入るゝ結果、よしんばそうしたいと思つてからが、その被傭者を個人的に知り彼等の思想と希望とを了解する事は困難となり、そして最後に全く不可能となつて了つた。それと同時に、被傭者は經濟的に獨立するの機會と希望とを全く奪はれて、終生賃銀勞働者の境遇に失墜し、資本と勞働との關係は社會的階級として分裂對峙するに至り、賃銀及び時間に關する交渉は、團體的、非人格的となり了したのである。

更に又、勞働者はその雇主と直接に接觸せざるに至つたと共に、工場及び都市に於て、彼等自身の間に既往よりも一層密接なる關係を結ぶに至つた。此の事情形勢の變化は、二つの重要な影響を有して居たのであつて、それは第一に、勞働者の間に階級的意識の發達を促がし、そして第二には、自己を保護する爲の勞働者の團結を容易ならしめた。安い賃銀、永い勞働時間、高い物價、其他の不利益な境遇條件の爲に促進せしめられたる工場職工は、早く既に十九世紀の初期に在て、彼等が特に不滿足だと思惟せる產業狀態の改善をば、一致團結的行動に依て强制若くは促進せんと努むるに至つた。玆に於てか、勞働と資本との階級的爭鬪は、正に起らざるべからずして起つたのである。

資本に對する勞働の階級鬪爭は、生活標準の低落に對する抗爭、社會的境遇の向上、勞働條件の改善等、一般のツレエド・ユニオニストの方法から、生產者の自治聯合團體によれる資本家制度の廢止の如き、革命的センヂカリストの主張までを含んで居る。然しながら、其の目的の保守的なると急進的なるとを問はず、その方法の過激なると穩和なるとを論ぜず、階級鬪爭の戰場に於て、最も有效なる武器は勞働組合である。而して世界を通じて、勞働組合運動の大勢傾向は、その形式に於ては職業別によれる職工組合主義（ツレエド・ユニオニズム）から、產業單位の產業的組合主義（インダストリアル・ユニオニズム）へ、その方法に於ては勞働條件の改善を以て究極の目的とせる勞資協調の平和論から、產業管理權の獲得、資本家主義と賃銀制度との撤廢を目的とせる戰爭論へ、駸々乎として進みつゝあるのである。勞働組合そのものゝ勃興發達を促進せしめたる動因が、工場制度の樹立に在つた如く、勞働組合運動の大勢傾向をして、斯の如き進路を取らしめたものも、また實に近世資本家的產業の發達の自然的結果に外ならぬのであつて、資本家制度はその發達の道程に於て、資本勞働の階級鬪爭に依て自ら崩壞しつゝある傍ら、その舊き殼の裡に新しき社會制度の要素萌芽を創造

すべき、必然的運命を荷つて居るのである。

四

英國は勞働組合運動の祖國と稱せられ、また其の性質の穩和保守的なるを以て名高かつたが、然も今や、ヘンリイ・トオマス氏等の如き、比較的古老の保守的なる勞働黨首領すらも、鐵道、鑛山、及び內地沿岸輸送機關の國有、勞働時間の短縮、賃銀の增加、及び彼等に依て維持せらるゝ工業の、利益分配を要求して居る。實に英國の勞働組合運動の傾向は、單なる勞働條件から一步を轉じて、今や產業管理權の獲得に向ひつゝあると云ふ事が出來る。

抑々、一七九九年及び一八〇〇年の勞働者團結禁止法の、一八二五年に撤廢せらるゝや、英國の職工組合運動は初めて其の正式な歷史時代に入つたのであつて。其の一八四五年に至るの間は、正に法律上の勞働組合公認に對する努力時代と云ふ事が出來る。一八四五年から一八八〇年に至るの間は、職工組合の全國的聯合團體、常設勞働評議會の設立を見、且勞働者の團結に對する、殘存せる法律上の拘束が廢せられた、極めて重要な時代であつた。然しながら十九世紀に在ては、一八三〇年代のチヤアチスト運動、及び一八四〇年のオーエン派運動等の如き、前者はその實際運動に於て直接行動を慫慂し、後者はその目的に於て全國の產業を經營管理すべき、生產者團體の總同盟を建設せんとする、革命的な風潮を見たとは云へ、その光彩には富んで居たが、然し短命だつた彗星の如き災亡は、英國全土の勞働組合運動を、依然として保守的な性質と、孤立的な狀態とに殘して置いた。

十九世紀の幕の將に下らんとせる一八九九年には、一般職工組合同盟の創立を見たが、これは例年職工組合大會とその國會委員會との活動に取つて代り、且つ特に、團結せる勞働をして雇主及び雇主團體とに對する、產業的戰爭に際して有利なる位置に立たしめんとする企てに外ならなかつた。一八九八年から一九〇九年までの間、英國の職工組合は合同の結果として、一千二百八十七團體より一千百五十三團體に減じ、然も同一時期の間に、その組合員の數は、百六十八萬八千五百三十一人から、二百三十四萬七千四百六十一人に增加した、之れ近代產業の特長たる、資本の集中と事業の合併とを向ふに廻しては、從來の如き孤立分裂せる職工組合を以てしては、到底有力に拮抗する能はざる事が明瞭となれる結果、勞働階級を驅つて、協同一致

の行動の必要を自覺させたが爲に外ならぬ。

然しながら、二十世紀の新舞臺の幕開きと共に、英國の勞働組合運動に深甚なる變化を齎らしたものは、實に一般組合員間に於ける革命的精神の勃興と、産業單位の産業的組合組織（インダストリアル・ユニオン）を以て、職業別によれる職工組合（クレエド・ユニオン）の形式に取つて代らしめんとする新運動の出現とであつた。カウツキイに從へば、一九〇〇年から同八年に至る英國の物價は、百分の六の騰貴を示したが、賃銀は却つて激減を來したのであつて。此の事實は、同一〇年の勞働階級の不穩に關聯する所少くなかつた。急激な同盟罷工の數々は、鐵道に、鑛山に、工場に勃發し、翌年に至るも尙ほ熄まなかつた。而して其の特長は、是れ等の同盟罷工が常に一般組合員の發意にかゝり、首領連は却つて之に反對せる事である。同盟罷工の結果、各職工組合は相互の關係聯絡を、一層密接ならしむるの必要を感じ、從來無視されて居た不熟練職工の如きも、初めて戰鬪的團體として組織さるゝに至つた。一九一〇年の職工組合大會は、ベン・チレットの動議に依て、『現在の部分的職工組合は、資本家制度と戰つて勞働階級を解放するに足りぬ。故に現在の職工組合は、悉くその從事せる産業の下に聯合し、此の聯合せる組合が選出せる一中央執行委員を置き、同盟罷工若くは工場締出の起つた場合は、直ちに勞働階級をして、一致協同の運動に出でしめなければならぬ』と云ふ決議を、大多數を以て通過し、

五

此の深甚なる勞働組合政策の變化に與かつて力ある者は、勞働運動に於ける暴風雨裡の海燕とも云ふべきトム・マンであつた。一九〇一年、彼が英國を去つて濠洲に赴いた時は、尙ほ部分的職工組合と議會政策との信者であつたが、その再び英國アンチポードに上陸した時は、彼は古き獨立勞働黨から離れ、社會民主々義の理論を拋ち、滿身産業的組合主義（インダストリアル・ユニオニズム）と、直接行動との熱情に燃えて居た。彼は佛蘭西の勞働總同盟（コンフエデラチオン・ゼネラル・ドラワイユ）の方法に倣ひ、新たに勞働組合をば作らず、只だ從來の職工組合をして、不熟練工及び未だ團結せざる勞働者をも加へしめ、且つ單に職業別に從つて團結するのみでなく、更に各職業を含める産業的大團體に、聯合同盟せしめんとした。たとへば、彼はダブリンの波止場人足の如き、未だ一職業の團結せるもの無き時すら、新に勞働組合を作らんとはせず、既に存在せる全國運輸業勞働同盟の裡に、新しい組合としてゞはなく、然し暫し

い有機體として是れ等の勞働者を團結せしめた。

マンは其の著、『産業的センヂカリスト』に主張して曰く、『現在の職工組合は、勞働者を解放するに無力である。其の致命的弱點は、主として英國内一千有餘の職工組合の分業的な性質、及び勞働階級の間に協同一致の精神の、全然缺如せるに基づくものである。……勞働組合運動は革命的ならざるべからず。而して其の手段としては、斷じて資本家と長期の契約に出づること勿れ。』また曰く、『經濟上の自由は、議會政策を以てしては、到底實現されぬ。故に予は、直接産業的團體を以て勞働者が竟に資本家制度を覆へし、彼等自身の産業的及び社會的運命の、眞支配者となる唯一手段なりと主張する者である。……議會は壞敗しつゝある資本家制度の一部で、決して勞働者に産業と、勞働者が是れ等の産業で作つた富とを、支配するの機會を與ふるものでは無い。』

トム・マンの熾烈熱誠なる傳道の外に、英國の職工組合運動を、内部から震撼しつゝあつた新しい革命的要素が存して居た。一九〇九年三月、ラスキン大學から分離して、中央勞働大學の創立を見たのは、英國の勞働組合運動に投ぜられたる、革新の一大炬火であつた。此の中央勞働大學は、勞働組合員に向つて、經濟的及び社會的進化、並びに近代社會の上に種々なる働因勢力を作せる科學上の知識を與へ、以て彼等をして他日、社會に於ける新しい、且つ眞の支配者たらしむる諸問題を、一層有効に解釋會得せしんめとするに在る。ラスキン大學から中央勞働大學へ、その維持扶助を轉じたる最初の大勞働組合の一は、鐵道從業員聯合組合であつて、後には同組合と南威斯（サウス・ウエールス）の坑夫組合とが、その主なる維持者となつて居た。

今日、英國に於ける多くの勞働組合中、鐵道從業員と炭坑々夫とが、その態度に於て最も勇敢であり、その主張に於て最も急進的なる事を想起する時、この事實は極めて有意味となつて現はるゝのである。一九一一年の鐵道總同盟罷工に際して、之の最も戰鬪的な地方に於ける主な煽動者や、チエスタアフヰールド・ミツドランド等の諸地方に於ける同盟罷工の主張者等は何れも中央勞働大學の出身者であつた。また當時、中央勞働大學に産業史と經濟學とを講じて居た講師は、八年前までバアリイ鐵道會社の制動手（ブレーキマン）であつた。

ハル市のチイ・ダブリユウ・ブラウンは、其の二年間の大學教育を終つて歸るや、北東（ノース・イースタン）鐵道會社との三回の紛議に勞働者の代表主任として働らき、總同盟罷工の際には煽動者の急先

鋒となり、またハル勞働評議會、鐵道從業員聯合組合、及び地方勞働黨の役員となつた。そして保守的な、舊派の首領の代表者とも云ふべきボンテイプールのイー・チャアルスに對抗して、鐵道從業員聯合組合の編制長候補に選出された。坑夫の間に在ても、此の新精神に感染浸潤せる數名の外、往時の首領は無視せられ、或は排斥されて、青年が位置を占めつゝある。而して一九一一年の大英坑夫同盟執行委員の選擧に際しては、アブラハム・プレース、及びリチヤアド等、舊派職工組合主義者は、中央勞働大學出身の青年革命家、ペアカア・ヴェルノン・ハアツホーン、、及びスタントン等の爲に取られて了つた。

六

既にして、トム・マン等が傳道は漸やく實を結び、一九一一年一月、「職工組合を聯合せしめ、建築業を一團體に聯合せしむる爲の豫備委員會」が成立し、今日では、塗料工協會、合同大工及指物職協會、石工組合、一般大工組合、合同一般勞働組合、全國鉛管工聯合會、電氣工組合、煉瓦積工協會等の代表者を包括して居る。同年九月、煉瓦積工協會の最高評議員會は、同協會内に一切の建築業勞働者を包括團結せしむる爲め、聯合委員を設くる事に決定した。

翌一二年四月、倫敦エセツクス館で開かれた會議には、二十萬の組合員を有せる十九勞働團體の代表者が出席し、煉瓦積工協會の代表者に依て提出されたる、(一)種々なる産業間に於ける現在の職工組合を聯合せしむべき事、(二)之れが實現を圖る爲め、列席の各團體の代表者一名づゝより成る委員を任命すべき事、等の動議を通過した。同年十一月、倫敦及び附近の革命的サンヂカリストは、トム・マンを會長として會議を開いた列席者九十七名は、四十七組合、勞働評議會、及び聯合組織の目的で作られた豫備委員會、すべてゞ五十六勞働團體を代表し、中に十二人の婦人も交つて居た。

同會議が通過したる決議の第一は、産業的に職工組合を聯合せしむる事、第二は勞働評議會を以て、勞働組合運動の中心となし、且つ政黨或は宗派と全然無關係なる、賃銀勞働者の勞働組合運動を作る爲に用ひらるべき事、而して第三は戰爭反對等であつた。同月中旬、合同委員同盟は英國全土の各職工組合に宣言書を送つて、上述の運動の急務を切言したが、その宣言には、「現在の一千七百の職工組合を、産業的組合に合同せしめ、以て一産業には只だ一組合のみを作らしむる事」、斯の如く組織

せしむるの目的は、『第一、全國的及び國際的に勞働時間を短縮し、賃銀を增し、且つ條件の改善を期する爲に一致的行動を取る事。及び第二、同社會の利益の爲に生産を經營管理し、斯くして勞働者に、その勞働の全結果を與へしむるの能力ある團體を作るに在る事』等が述べられて居た。翌一三年二月、英國鐵道勞働者の主な三組合、即ち鐵道從業員聯合協會、聯合信號手及轉轍手組合、及び一般鐵道勞働者組合の合同成立し、組合員二十萬を有する全國鐵道從業員組合、こゝに初めて組織された。産業的組合主義(インダストリアル・ユニオニズム)は今や世界を通じてそうであるが如く、英國に於ても亦、勞働組合運動の大勢となりつゝある。而して其の傾向を最もよく現はせるものは、即ち實に職工組合合同の趨勢であつて、一九一四年末に於ける職工組合の數は一千百二十三に減じたが、この組合員の數は一九一四年末に於て三百九十五萬九千八百六十三に增した。今日、勞働組合の勢力は、五大職業の占むる所であつて、それは(一)鑛業(金屬及び石炭)、(二)金屬機械等及び造船業、(三)紡績業、(四)築建業、(五)鐵道、船渠、及び其他の運輸業であるが、此の五大職業は、職工組合員總數の四分の三以上を包括して居る。而して又、一九一五年の末には、大英坑夫同盟、全國鐵道從業員組合、及び全國運輸勞働者同盟の三角同盟成立し、一九一三年以來英國産業界の宿望だつた所謂『罷業同盟』は、遂に實現せらるゝに至つた。

抑々、英國の勞働階級をして、痛切に組合合同の緊急を感ぜしめたる近因は、實にダブリン港勞働者二萬人の總同盟罷工の慘憺たる敗衄であつた。ダブンリの總同盟罷工は、愛蘭運搬夫同盟の首領ラアキンの指導にかかり、一九一三年八月から翌一四年二月に亘つて繼續し、その地方的總同盟罷工の性質と、事作の悽慘を極めたるとを以て知られて居る。不幸にして此の罷工は勞働者の全敗に歸したが、然し勞働階級はまた之に依て、若し勞働團體間の聯絡にして更に完全し、他地方又は全國の勞働組合が擧つて之を援助したならば、二萬の罷工者を支持すること極めて容易なりしと共に、資本家は他地方から罷工破りを輸入するの不可能なるを以て、必ず成功したに違ひなかつたと感じた。されば一九一三年以來、鐵工及び汽鑵工組合は合同して、二十五萬の組合員を有する鐵道汽鑵工同盟を組織し、更に又、急進的態度と革命的主張とを以て有名なる、大英坑夫同盟、全國鐵道從業員組合、及び全國運輸勞働者同盟の、組合員總數百五十萬を算する三角同盟の成立を見るに至つたのである。

七

豈啻に英國のみならんや、佛蘭西の勞働總同盟(コンフエデラチオン・ゼネラル・ド・トワブ)は、既に一九〇六年のアミアン大會に於て、産業的組合主義(インダストリアル・ユニオニズム)を採用するの決議を通過し、また米國勞働同盟(アメリカン・フエデレーション・オブ・レボア)(A、F、L)を本城とせる職工組合主義(クレエド・ユニオニズム)の勢力、牢乎として拔くべからざるを惟はしめた米國にも、勞働組合の形式變化の必要は、今や痛切に感ぜられ、且つ漸やく大勢たらんとしつゝある。而して特に注意すべき傾向は、舊式保守的なる職工組合が、尙且つ進化の能力ある事を示せるの事實であつて、傾向は畢竟單に傾向たるに過ぎざるにもせよ、また以て米國勞働組合運動の歸趨をトするに足るのである。

一九一二年、A、F、Lは職業統轄權の爲に起る各組合間の紛爭を協定する爲に、地方並びに全國職業評議會(クレエド・カウンシル)(又は職業部門(デパアトメント))を組織したが、是れは建築、金屬、鑛業、及び鐵道の四部門に別れて居る。此の職業部門は、同盟の會員に依て一般に、職業自治制を固執せる同盟が、産業的組合案(インダストリアル・ユニオン)に對して讓歩せる代用物と視られて居るので、其の機能と職分とは頗ぶる重要にして、且つ興味あるものである。以上の內鑛業部門に屬せる最も重要な二全國組合、卽ち西部鑛夫同盟と、米國聯合坑夫同盟とは、既に産業的組合の形式を取つて居るのであるから、此の部門の建設は、A、F、L內の産業的組合運動として特に重要と云ふ程では無い。然しその傾向に於て、最も重要な意義を示せるものは、實に金屬業部門の運動である。

金屬業組合內の運動には、最も注意すべき三傾向が現はれて居るのであつて、團體交渉に關する職業間の自治制反對、職工組合の大合同、及び一産業に包括さるゝ數職工組合間の同性的行動卽ち之れである。以上の三運動は、一九一三年の金屬業部門大會に列席せる、全國の代表者が提出した決議案に示されて居る所であつて、其の決議は『資本家階級不斷の侵凌に對し、種々なる金屬業組合員の利益を保護する上に、現在の職業的團體の組織の、無力不完全なるを悟り、………………玆に一切の金屬業組合を堅固なる一團體に聯合せしむる』に在つた。

ボストンの金屬業評議會も亦、地方職業評議會に更に大なる權力を與へ、一組合の同盟罷工に對しては、他の有ゆる組合をして之を援助せしむべき、新規則の制定を要求せる決議案を提出した。馬具金工組合も決議案を提出して、一職工組合の組合員が同盟罷工をした際には、他の組合の組合員で罷工者と同じ工場

に働らいて居る一切の勞働者は、其の罷工中、該工場に出動せざるべき事を主張した。更にネワアクの金屬業評議會が、大會に提出せる決議案は、金屬業部門の組織改革を提案せるもので、或る一組合が罷工し、若くは或る一組合に工場締出を行へる工場に於ては、一切の關係組合は悉く罷工すべき事を始め、各職工組合間の關係を、一層堅固密接ならしむべき要求であつた。

大會が最後に通過せる決議中には職業統轄權の紛爭の爲に同盟罷工を起す事を許さず如何なる組合も部門の許諾を經ずして、關係組合が罷工中なる工場と契約をなす事を得ざる等の規定を含んで居る。如斯は、職工組合間の一致的行動に一歩を進めたものとして、特殊なる意義を有するものである。

八

勞働組合の形式變化は、産業の發達に照應して、勞働者がその階級闘爭を最も有効に遂行せんとする必要より起れるものである。蓋し、産業未だ發達せざる時代に在ては、職業別によれる職工組合と雖も、尚よく其の目的に副ふ事を得たものであらうが、資本の集中と、生産行程の單純化とが、その甚しき特色を作せる現代の産業制度の下に在ては、勞働組合も亦、資本が制したる線に沿ふて進むに非されば、到底有効な威力を發揮する能はざるが爲である。故に、之れを縦にしては、職業組合が地方的より全國的に、更に職業單位から産業單位に、之れを横にしては、一定の地方に於ける各職業の評議會から、全國一切の職業團體の總同盟に進むのは、一方に於て必ずそれに照應せる資本の集中、事業の合同、及び資本家團體の發達が見らるゝのである。

資本勞働の階級闘爭は、啻に勞働組合の形式の上のみならず、また實に其の性質目的の上に、一大變化を齎らさゞれば止まない。英國の勞働階級の要求主張が、重要産業の國有、及びその管理權の樹立に進みつゝある時、今や米國の勞働階級も亦、その性質に於て甚しく急進的、戰闘的となりつゝあるは、爭ふべからざる所である。最近、ピッツバアグ三十四萬の鐵工大罷工に續いて、紐育埠頭人夫に同市二十萬の職工を加へたる大罷工等、大小七十件の同盟罷工を見たが、然もA、F、Lの裁可を經て起したものは、僅かに八件に過ぎない、故に此の全米大罷工は、ゴムパアスの威令名聲、漸やく地に墜ちつゝある一徴候とも云ふべく、而して此の大罷工運動の指導者は、ウイリアム・フオスタアと呼ぶセンチカリストなる事を想はゞ。米國産業界の

歸趨傾向、敢て揣摩するに難くない。

フォスタアは彼の世界産業勞働者同盟（I、M、M、）の如く、舊式保守的なる職工組合から獨立分離して、別に革命的な勞働組合を作る事に反對して居る。彼は論じて曰く、『I、M、M、が舊式保守的な組合には、進化の能力が無い、從つて根絶しなければならぬと云ふ理由で、全然新しい、且つ革命的な勞働運動を建設せんとする方法は間違ひである。かう云ふ議論は、I、M、Mが明らかに失敗し、そして舊式の組合が進化の能力ある事を明白に示して居る米國ばかりでは無く、世界の如何なる國に於ても、到底承認さるゝ筈が無い。舊式保守的な組合を無視して、新しい革命的な運動を作らんとする、同じやうな企ての行はれた歐洲諸國――獨逸、英吉利（I、M、M）、及び瑞典に於けるが如く――では、何れも失敗に歸して、センヂカリスト運動は極めて微弱である。然るに、舊組合を革命化せんとする努力の行はれた歐洲諸國――佛蘭西、英吉利（センヂカリスト結社）、西班牙、伊太利、葡萄牙に於けるが如く――では、何れも成功して居るし、センヂカリスト運動は盛大である。

此の二方法の比較効力は、最近に英國の勞働運動が、顯著明白に立證して居る所である。數年間、I、N、Nは舊式の職工組合運動とは別に、新しい革命的運動を建設する爲に努めたが、遂に成功しなかつた。然るに二三年前（一九一三年から云つて）、トム・マンを先鋒とせる若干のセンヂカリストは、舊組合の間に革命思想を宣傳し始めた。英國に於ける最近數次の大同盟罷工、及びセンヂカリズムの迅速なる發達は、後者の方法の有效を雄辯に證明せるものである。』

フォスタアの此の主張は、一九一二年の末にトム・マン等の合同委員同盟が、英國全土の職工組合に回送せる宣言書中、『吾人は職工組合を合同せしめんと欲するのみ、之を亡ぼさんと欲する者には非ざる也』と云へると、正に其の揆を一にせりと云ふべきである。而してフォスタアは、以上の立脚地よりして北米革命的勞働組合主義結社を組織し、全米の勞働運動にセンヂカリズムの教育を施すに努めて居たが、今やその永き努力は漸やく酬はれんとし、而して彼が所謂『舊式保守的なる既成組合の進化の能力』は、嵐の天空を貫ぬける白虹の如く、全米の勞働不安を際立たしめて居る特長である。

九

階級鬪爭の數は種々である。この形式もまた雜多である。然

しながら、その之れを創造し、且つ之れを發達せしめたものは、實に資本家制度の出現と、その發達とである。即ち階級鬪爭は經濟進化の行程そのものから、因果的關係を以て生れたる必然の結果である。

産業制度の發達は、勞働階級をして、資本家階級の侵略を防禦阻止し、且つ自己の利益を助長增進する上に、最も有効なる手段方法を決定する所の自覺を生ぜしめる。此の自覺は、勞働者の階級的相互扶助の觀念及び一致協同的行動の發達を促がすものであつて、勞働組合の形式變化、即ちその合同聯合の大勢は、實に此の大思想の反映に外ならざるものである。

斯くして、勞働階級をその大傘下に翕合せる此の戰鬪機關は、資本家階級に對する日常爭鬪の經驗と必要とからして。團體の經營管理に對する知識と、技倆と、責任感と。道德性とを發達させて往く。彼等は更に、社會組織の各單位として、自ら産業を經營管理すべき必要と、資格と、力とを自覺して來る。現代社會の舊き殼の裡に、明日の社會の新しき萌芽は、斯くして培はれ、育くまれて往く。

而して最後に、此の機運が爛熟の域に達し盡した時、資本家的産業制度は内部の新しき勢力の爲に、自然の崩壞を遂げるであらう。現存の制度を悉く破壞し盡したる廢墟の上に、更に全然新しき制度を樹つるのでは無くして、舊制度の崩壞と同時に、既に新しき社會制度が創られて居るのを見るであらう。即ち現在の戰鬪機關たる勞働組合は、新しき經濟社會に於ける生産單位として、新しき有機體を構成する細胞として、舊き資本家制度に取つて代つて居るであらう。勞働組合運動に重大なる意義の存するは、單にその戰鬪機關としてのみの價値に在るのでは無くして、實に現在の社會制度の舊き殼の裡に、將來社會の構成分子たり、萌芽たり、細胞たるの位置を確立しつゝあるが爲である。

河上・福田兩博士論戰批評

福田時代から河上時代

堺利彦

一

私は先づ明かに云ふ。福田博士の時代が過ぎて河上博士の時代が來た。大正八年の前半は福田時代の全盛期で、河上時代の醞釀期だつた。そして其の後半は河上時代の興隆期で福田時代の衰亡期だ。

福田、河上の二君が社會問題の評論家として代表的の二大學者である事は云ふまでもない。私が屢々二君に對して無遠慮な批評を試みたのは、實にそれが爲である。今私が此の合評の擔任者の一人に推擧された事は、私として甚だ光榮であり、且つ甚だ好都合である。私は此の機會を利用して、改めて茲に私の二君に對する態度を明かにする。

二

福田君は日本に於けるマルクス研究の率先者として、先づ私の目に映じた。勿論、紳士閥の經濟學者として直ちに全部マルクスに贊成しない事は分りきつてゐた。然し彼が最も進步した（從つて最も我々に近い）經濟學者である事は確かだと思つてゐた。彼は十數年も前に私を慶應義塾に引張りだして講演をさせて吳れた事もあつた。其後も彼は絕えず私等の主張や運動に注意を拂ひ、時としては少からぬ同情を寄せて吳れた事もあつた。其後私は少くとも彼を以て私等の同情者（即ち社會主義の同情者）だと信じてゐた。

然し近來になつて、福田君の書く文章の中に大ぶん時に落ち

かねる點が目について來た。そこで私は幾度も彼を批評して其の矛盾や不徹底を指摘した。けれども、それと同時に私は猶ほ彼に對する尊敬と信頼とを失ふ者ではなかつた。

二三年來、私は初めて福田君と少し心易く交際した、其の結果は一層の尊敬と信頼とを增して來た。殊に彼れの野次性の發揮、江戸兒かたぎの氣焔が非常に面白く見えた。私は一個の快男兒を以て彼に許した。そこで彼れの議論に對する私の判斷が又頗る違つて來た。彼れの議論には矛盾がある、不徹底がある。然し彼れの本心は別にある。彼れの議論を其の文字の表面だけから批評するのは氣の毒だ。私は暫くソウ思つて彼れの文章を讀んでゐた。すると、存外徹底した、存外一貫した、進歩的態度及び戰鬪的態度がある樣に考へられた。

所が、或る事件からして私は福田君と交りを絕つた。其の事件は私交上の事ではない。主義に關し、運動に關し、學問に關する事件だ。其の事件の內容については、先達て大庭柯公君が『日本及日本人』に書いたから、讀んだ人も少くないだらう。其の事件の經過は福田君に對する私の判斷を一變させた。彼は江戸兒として頗る愉快な所のある人物に相違ない。時として謂ゆる俠骨を發揮する人物に相違ない。然し彼には堅實性が足りない、持續性が足りない。周圍の事情の爲には輕々として容易に其心を變ずる人だ。謂ゆる氣の變る人だ、アテにならない人だ。そして其の氣の變つた時、其の心の變じた際には、隨分出鱈目な彌縫、好い加減な糊塗をやりかねない人だ。要するに彼は江戸兒の長所と弱點とを誠に善く兼ね備へた人だ斯樣に判斷して見ると、彼れの議論の矛盾と不徹底とは當然であつて、それ以外には何等の信念も覺悟もない事が分る。私は白狀する。私の此の文中には、福田君との絕交から生じた反感が露出してるだらう。交り絕えて惡聲を出ださないのは君子の事だが、其の君子氣取をやつてゐては、批評の要點を逸して了ふことになりそうだから、以上一通り全體に申し述べた。

そこで要するに、福田君の議論には胡麻化しが多い。景氣の好い所はあるが、堅實な所が少い。調子に乘つて存外あぶない藝當もやつて見るが、同時に又ひどい手づまも使つてゐる。場あたりは可なり名人だが、大事は十分に取つてある。社會主義の同情者若しくは利用者たる事は、今後も矢張り變らないだらうが、其の正面の主張者及び信奉者にならない事は確からしい。若し後者になる場合があるとすれば、それば社會主義が餘ほど優勢になつた時だらう。彼は今マルクス全集の反譯事業計畫者

である。そして階級鬪爭否認論者である。

三

河上君も亦た最初から同情ある社會主義評論家として私の記憶に上つた。然し彼れのセンチメンタルな、寧ろ聊か狂的な宗教道徳的態度が、私の甚だ感服し得ざる所であつた。先づ無我苑事件が私の目に最も多く彼れの重味を減じさせた。唯物史觀についても、セリグマン一流の折衷的見方（若しくば二元論的立場）が甚だ賴もしくなく感じられた。『貧乏物語』が大評判になつてから、私は又特別な注意を彼に向けたが、一面では其のマジメな心持に感心しつゝ、矢張り他の一面では、其の不徹底な所に飽き足らなかつた。然し『社會問題管見』の中の或る文章や、『外科醫の獨語』を讀んだ時には、いよ〳〵之は本場だと大いに嬉しく思つた。

其中に『社會問題研究』が出た。私は明かに河上君の大いなる進歩を認めた。殊に其の眞劍な態度に感服せざるを得なかつた。然しまだどうも例の宗教道徳的臭味に不滿を感ずる點が少なくなかつた。其點について私は可なり無遠慮な批評を加へた。『拔きがたき人道主義の病』などゝいふ隨分無禮な事を申した。然し私はモウ大體に於いて彼を一個の同志と信じてゐた。河上君には福田君のような面白味はないらしいが、それだけに又、確かな所がある。アテになる所があるらしい。私はまだ河上君に會つた事がない。然し最近になつて、人傳に稍や多く彼れの心事を聞く機會を得た。又實際問題に對する彼れの態度を見、或は聞くの機會を得た。そして私の判斷が大ぶん變つて來た。今では私はモウ彼れの宗教道徳的態度を論ずる必要がないと思つてゐる。我々の重んずる所は實際的効果である、實際的行動である。實際問題に對する態度に於いて略ぼ一致する事が出來れば、それで澤山だ。其他を問ふ必要はない。

私は曾て河上君の事を『石川型の社會主義者』と云つた。石川三四郎君は我黨の古い同志で、殊に私とは深い私交がある。石川君はクリスチアンで、其宗教道徳的態度に於いて、私とは大ぶんソリの合はない點がある。從つて實際運動の上にも折々調和の出來ない場合もあつたが、今ではそれも問題になるまいと考へてゐる。彼は今フランスにゐるが、來年は歸つて來そうである。私は再び彼と共に働き得る事を樂しんでゐる。彼は又河上君と多少の交りがある。私は他日、彼と共に河上君と交り得る事を信じてゐる。然し河上君は大學教授である。若し彼が其の

地位を擲たねばならぬ時があるとすれば、それも又面白いと思ふが、然し今のところ、成るべく長くあの地位に止まらせたいと思つてゐる。

四

扨、こゝで『社會問題研究』第九冊所載『福田博士の社會民主々義論を評す』の批評に入る。然し右に述べた私の二君に對する態度からして、此の批評はもう殆んど必要がない。私の團扇は河上君の方に擧がつてゐるに極つてる。

河上君の文章は誠に物柔らかだが、あれで中々底意地のわるい皮肉な所がある。五月に公けにされた福田君の文章に對して、十一月になつて初めて返し矢をした所にも、河上君の用心深さが見える。半年もかゝつて、緩々材料を取揃へて、抜きさしのならぬ所で取つて押へてゐる。福田君は一言もない筈だ。

福田君は社會民主々義に對抗すべしと云つた。それを撲滅すべしとは云はなかつた。然るに河上君は、福田君が撲滅すべしと云つたと云つた。其點については、河上君はあやまつてゐる。そして『併し何故博士が對抗と撲滅との間に斯く重大なる差異を認めらるゝや』と突きこんだ。然しそれだけなら福田君に答辨の仕様は幾らもあるだらう。所が河上君は、更に福田君の『社會主義學説打破の必要』といふ論文を探しだして來た。そこで、對抗と打破とは必要だが撲滅はいけないと云ふ理由は何處にあるかと切りこんだ。福田君も此の答辯には餘ほどお困りだらう。

然し河上君は其點を強いて追究せず、『撲滅、打破、對抗の區別論は姑く舍き』と輕く皮肉に片づけ、そして福田君が社會民主々義を『極力非なりとする』理由の吟味に取りかゝつた。

其の吟味は結局、階級鬪爭説の是非論になつてゐる。福田君は非論で河上君は是論だ。非は非で是は是だ。私は今この點を詳論する事を避けるが、要するに福田君は、階級鬪爭ばかり社會民主々義であつて、それだから社會民主々義は本統の眞正のデモクラシーでなく、從つて宜しくないものだと云ひ、河上君は、『外科醫が手術に依つて若干の健康を犧牲と爲しながら、而かも之に依つて本來の健康を恢復せんとすると、恰も同じ趣旨』だとして、『階級鬪爭の絶無なる社會を實現せんが爲』の階級鬪爭を必要としてゐる。勝敗の批評よりも、私は只だ河上君の態度がいよ〳〵之で明白になつた事を喜ぶ者でらる。

河上君のおとなしい激語を少し擧げて見る。『何事に就ても最

新の流行に後れて居る寡聞の私は、只今初めて斯樣な（社會民主々義と云ふのは實行上の唯だ一つの方法だといふ）事が世界一般に認められて居ると聞いて、實は少なからず當惑して居る所である。思ふに、博士が此の如きことを公言して憚らぬのは。吾々を餘程馬鹿にして居られるのか、さもなくば、之を聞いて驚く吾々が事實極めて馬鹿であるのか、その何れかでなければならない。』（之に對して若し福田君が、『君が事實極めて馬鹿なのだ』と云つたら嘸ぞ面白いだらう。）『吾等の如き後進淺學の徒は、其（福田君の議論の）其意味を捕捉するが爲め頗る迷はされた譯なので、實は甚だあはれなる次第である。』（『吾等の如き』を『多數讀者の如き』と改めたら、一層『あはれなる次第』になるだらう。）

福田君は從來あまり河上君をやりつけ過ぎてゐた。『賃傭勞働と資本』の原本眞本問題などでは殊にひどかつた。河上君は始終それに對しておとなしく下た手から出てゐた。然し今度はとう／＼手袋を脫ぎすてたのだ。

五

只一つ、此の福田君の文章について、私が河上君に云つて見たい事がある。

河上君は、『社會民主々義が其目的を實現する爲の方法として階級鬪爭を主張するに對し、』福田君が『其方法を以て危險なりとして排斥』する事を說いた後、『併し全く其目的と切り離して只其手段のみ是非せんとせらるゝ博士の此態度は、吾等の猝に感服すること能はざるものである。何故といふに、如何なる手段も其目的と切り離して之を是非することは、多くの場合全く無意義の議論になるからである』と云つてゐる。又彼は福田君が『窮極に達する手段方法其ものも亦た常に必ず本當のデモクラシーに據らなければならない』と主張するのに對して、『只かくては、本當のデモクラシーが實現された後でなければ、本當のデモクラシーを實現すべき手段方法として博士の承認を經べきものは無くなるやうであるが、其はどうしたものであらうぞ』と云つてゐる。

之について私は『社會問題研究』第一冊にある河上君の言葉を思ひだした。河上君そこに曰く『余は社會問題の根本的解決といふ事を最後の標準として、一切の社會政策を批評すると同時に、更に人間の道德的完成といふ事を最後の最後の標準として、社會問題の根本的解決の爲め實行手段を是非するであら

う。』『如何に病氣を根治することが急務だとは云へ、肉を救ふが爲に靈を亡してはならぬ。』『余は目的の爲に手段を選ばんとする者である。手段の末の末に至るまで、人生の根本目的に照らして、出來得る限り潔癖的に之を取捨せんとする者である。』

私は河上君の此文を讀んで、丁度、福田君が『窮極に達する手段方法其ものも亦た常に必ず本當のデモクラシーに據らなければならない』と云ふのと、おなじような感じがする。從つて社會問題の根本的解決といふ目的から切り離して、其の實行手段だけを別の標準（即ち人間の道德的完成といふ標準）から是非するのは、多くの場合全く無意義の議論になる、と云つて見たい樣な氣がする。又人間の道德的完成が實現された後でなければ、人間の道德的完成を實現すべき手段方法として河上博士の承認を經べきものは無くなるやうであるが、それはどうしたものであらうぞ、とも云つて見たい樣な氣がする。

然し私は、福田君に對する河上君の批評に滿足してゐる。既に其の批評が出た以上、第九冊から第一冊の昔に逆登つて論ずる必要はないと思つてゐる。

六

之を要するに、我國の思想界に於いて、福田博士の時代が過ぎて河上博士の時代が來た。大正八年の前半は福田時代の全盛期で、河上時代の醞釀期だつた。そして其の後半は河上時代の興隆期で福田時代の衰亡期だ。

新刊紹介

■財産奉還論（遠藤無水著）國家社會主義者としての著者が私有財産制度の缺陷不合理を闡明し財産は宜しく國家に奉還すべし皇室其中心たるべしと云ふ議論―曾て新聞紙上に傳へられた氏の立場を明白に解明したものである社會問題の一方面として最も重要なる部分に屬する研究題目である志ある人の必讀を渴む（定價貳圓五十錢牛込神樂坂文泉堂）

■民本主義者（藤井眞澄著）社會文學の創作家として錚々たる著者の問題劇である新しい生命は新しい姿を以て現れる今までに一つもなかつた形はまるつきり違つた考から生れるとは著者の言てある讀了して其感益々深きを覺へる（定價一圓十錢神田錦町進榮堂）

眞正の社會民主主義

室伏高信

一

法學博士河上肇氏の『社會問題研究』は久しく『通俗社會主義講演』の域を脱することはできなかつた。しかもその社會主義とはたゞマルクス主義であつてどこまでも唯物史觀に執着してゐるところは聊か時勢後れの感なきを見ないのであるが、學界の一方の大家としての河上博士が、その思想はたとへ多少時勢後れの批難は免れないにせよ、臆病にして卑屈な學者の間にあつて社會問題に對するその態度を明らかにしあくまでマルクス主義の宣傳事業――『社會問題研究』の事業を繼續されてゆく態度は深き敬意をもつて遇せられなくてはならない。その『社會問題研究』の第九册（大正八年十月發行）に載せられた『福田博士の社會民主主義論を評す』の一篇は、こうした河上博士の立場から見て少からずわれ等の興味をそゝつた。特にこの論爭の相手方が現代に於ける學界一方の重鎭としての法學博士福田德三氏であることにおいて一層の興味を以て迎へられなくては止まないものであつた。しかしさうした論爭上の興味よりも、私にとつてもつと價値ある點は、『眞正の社會民主主義』の性質を明らかにすることが、現代の社會改造期において、恐らく何ごとにも讓らざるほどの重要性をもつてゐると信ぜられる點である。福田博士の說正しきか。河上博士の說正しきか。この問題については私自身少からざる關係をもつてゐる。それは福田博士對河上博士の問題であるとともに、また福田博士對室伏高信の問題でもある。さうして法學博士吉野作造氏もまたこの問題の關係者の一人である。そこで先づこの論爭點の性質を明らかにするために、問題の經過を一應述べて置く必要を感ずる。

二

問題の起り、――福田博士が社會民主主義について、後に問題と

される意見を發表したのは今年一月の『中央公論』誌上においてゞある。『即ち資本的侵略主義に對抗、眞正のデモクラシーを發揚』といふ一文がこれである。福田博士はこの論文のうちでデモクラシーを分類して資本主義的政治的民主主義 Capitalistic political democracy と社會民主主義 Social democracy の二つとなし。さうして次のように述べてゐる。

『所で新に起つて獨逸を仆したソーシャル・デモクラシーにしても、或は又從來 英米のキャピタリスチック・デモクラシーにしても。我輩は之を pseudodemocracy (假面的民主主義)と呼ぶに躊躇しない。何故なればソーシャル・デモクラシーは即ちプロレタリア階級のみをもつて demos と認め、全人民を demos としないのであるから、本當のデモクラシーとは云はれない。即ち彼等自らソーシャルといふ形容詞を付けてゐる。(中央公論一月號百十三頁參照)

即ち福田博士は一方に英米派のデモクラシーが資本的デモクラシーであり(或は海賊主義とも云ふ)從つて眞正のデモクラシーでないとなしてゐるとともに他方においてソーシャルデモクラシーもまた全體の人民を『デモス』となさないものであつてたゞ第四階級のみを人民となしてゐるのであるからそれは『假面的デモクラシー』であつて『眞正のデモクラシー』ではないといふのである。問題はこの一語から出發する。私はこれに對して既に今年の二月に批評を加へてゐる。『第三階級民主主義とソーシャルデモクラシー』といふ一文がこれである。(拙著『社會主義と民主主義』に再錄)私はこの論文のうちにおいて福田博士の社會民主主義が單に『福田製』の社會民主主義で『眞正の社會民主主義』でないことを指摘したところが本年三月二十五日發行の『黎明講演集』を一讀すると法學博士吉野作造氏がこの問題に觸れてゐる。吉野博士もソーシャル・デモクラシーの反對者であるの點においては福田博士と全然その態度を一つにして居られる。さうしてソーシャル・デモクラシーをもつて『勞働者の利己的立場』であるとなしてゐる。即ち次のように述べてゐる。『勞働者の利己的立場に味方するといふ意味でないので共點に於て、ソーシャル・デモクラシーにも反對する。此點亦私は福田博士と全然同一の立場にあります』(黎明講演集第二輯百八十九頁參照)言葉は極めて明瞭である。日本におけるデモクラシーの開山のごとくに思はれてゐる吉野博士は明らかにソーシャル・デモクラシーの反對者である。さうして、ソーシャル・デモクラシーをもつて『勞働者の利己的立場』であると論斷して

ゐるのである。さうして更に次のやうに述べる。

『最近の事であるが……室伏高信君は此點に就て福田博士に詰問して居る。……氏の福田博士を攻擊せんとする主意は所謂ソーシャル・デモクラシーと云ふ名をさういふ意味に取つて貰つては困るといふのであるらしい。『第三階級よりソーシャル・デモクラシーへ』といふ表題の論文であります。第三階級とはブルジョアジーのことであります。……而して第三階級のデモクラシーからソーシャル・デモクラシーへと云ふのは要するに貴族階級乃至資本階級の政治に反對すると云ふのであります。(室伏曰く、貴族階級のデモクラシーとは初めて聽く言葉である)名は違ひますが、其意味に於きましては、室伏君のソーシャル・デモクラツーも私のデモクラシーも又福田博士の「本當のデモクラシー」も同じものである。……

……(黎明講演集第二輯百八十九頁——百九十頁參照)

これによつて明らかであるとほり、吉野博士もまたソーシャル・デモクラシーについては福田博士と全然その立場を一つにしてゐる——ともにこれをもつて眞正のデモクラシーではなくしてたゞ勞働階級だけでデモスとする『勞働階級の利己の立場』であるに過ぎないとなしてゐるのである。ところが福田博士は以上の吉野博士の裏書きに滿足することができないで更に次の黎明會講演會の席上において此の問題について長廣舌を振つてゐる。『如何に改造するか』といふ講演がこれである。それによると福田博士は私の批評に應へて社會民主主義について次のように述べてゐる。

『何故うそのデモクラシー(社會民主主義を指す)であるかと申せば是は總ての人民のクラシーではない、其デモクラシーは一部の階級を指すに外ならぬ。恰かも英吉利、亞米利加で今日までやつてゐる所の政治上のデモクラシーといふのは金持のクラシーであつて全人民のデモクラシーでなく、ソーシャル・デモクラシーは貧民政治、第四階級のクラシイである。故にうそのデモクラシーであると同じである。即ち吾々は今右を見ても左を見てもうそのデモクラシー斗であつて本當のデモクラシーと云ふものは、吾々が向後新たに見出し新に建設しなければならぬものである。斯う私が申したのである。之に對して室伏君が福田が獨逸の社會民主主義は全人民のクラシーでないと云つたのは明に事實の誤謬であると云ふことを或雜誌に書かれました。それは私も慥に讀みました。併しそれに對して私は何等の駁論もない。何故しないか

と云ふと、地球は太陽の周圍を廻るものであるのに、太陽が地球の周圍を廻ると云ふものに對してそれが誤謬であると云ふ說明を小學校の生徒に向つてなら爲すべきでありますが、室伏君の樣な卓越な識者に向つて申上げることは如何にも愚の至りであると存ずるからであります。……そこで私は室伏君に御答しない。平素室伏君の御議論には深く敬服して居りますが、此點に於ては除外例を求めるの外はないのであります。（黎明講演集第三輯二百六十六—七頁參照）

『故に室伏君が何と言はれようが、吉野博士が如何に熱心に裏書きせられようとも（室伏曰く、吉野博士が裏書きしたのでなく、却つて福田博士と一致してゐることは前述の通りである）、……室伏發行、吉野裏書、福田宛の此手形は甚だ御氣の毒乍ら不渡處分をする外はありません』（仝上二百七十頁參照）

以上の拔萃によつて明らかであるごとく、福田博士は依然として社會民主々義をもつて全體の人民のクラシイでなくしてたゞ第四階級が天下を取ること、從つて第四階級だけのクラシーであるといつてゐるのである。さうしてこれを證據立てるために共產黨宣言の結末の一句『萬國の勞働者よ結合せよ——』（proletarier aller Länder, vereinigt euch!）と獨逸社會民主黨の宣言の一部とを引用し、且つロシアのボルシエヴヰキをもつて社會民主々義を實行しつゝあるものであるとなし、ロシアの『穩和派であつても、過激派を等しく第四階級が社會を支配する事を名けてソーシャル、デモクラシーであると云つて居るのです。言ひ換へればプロレタリアン・デモクラシー proletarian-Democracy である。唯だプロレタリアンと云ふ言が長くもあり語呂も惡い又餘り人口に膾炙して居ない。今日では餘り人口に膾炙して居ない語は迚も一般運動に伴はない。そこでソーシャル・デモクラシーと云ふ一般に知れ過ぎて居る字を借りて來たのである』と論じてゐる（黎明講演集第三輯二百七十一—二頁參照）それによつて社會民主々義に對する福田博士の立場は明瞭である。卽ち一、社會民主々義は第四階級だけのクラシーである、二、その證據は共產黨宣言と獨逸社會民主黨の宣言並にロシアの過激派及び穩和派の行動である。しかし福田博士の社會民主々義論は、その『如何に改造するか』の論文のうちにおいては更に一步を進めてゐる。それが單に『第四階級だけのクラシー』であるのみではなく、福田博士に從へば、社會民主々義は單に手段——博士の言葉通りにいへば、それは單なる『梯子段』であるに過ぎ

ない。即ち博士は次のように述べてゐる。

『固より社會主義の目的とする所は社會民主々義其ものではない。私は社會民主々義と云ふのは實行上の唯一つの方法である。社會黨の本旨其ものではない。目的を達する所の一つの手段であると屢々申して居ります。之に對して日本の社會主義者の或方(慥か山川均さんだつたと思ひますが)は社會民主々義が方法と云ふことは初めて福田から聞くと云ふようなことを書いて居られます。成程日本では初めてかも知れないが世界では初めてゞない所か、一般に認められて居る所であります。……このこと(社會主義)の出來上つた時は社會民主々義は最早や無いのである。社會民主々義は二階に登る梯子段のようなもので、二階へ登るために踏段には必要であるから之に依るのであるが、二階に登つてしまへば梯子段はもうなくても宜しいのである。(降りる時は別問題です)此梯子段が社會民主主義であつて……一つの手段である、(黎明講演集第三輯二百七十三—四頁參照)

福田博士の社會民主主義は以上の二點に歸着する。一、社會民主々義は單に第四階級だけのクラシーである二、それは社會民主主義への『梯子段』である。

河上博士が『福田博士の社會民主々義論を評す』るのもこの二點についてゞある。そこで私はこの二點について意見を述べなくてはならぬ。

三

社會民主々義 Social Democracy, Sozial-Demokratie といふ言葉は、私の承知してゐる範圍においては、ブロンテーア James Bronterre Orien によつて初めて使用されたものである。ブロンテーアはチヤーチスト運動の有力なる指導者の一人であつた。彼れがこの言葉を用ゐたのはチヤーチスト運動が最高潮に達してゐる時代、一八三九年のことである。これより先きデモクラシーといふ言葉は英國において屢々用ゐられて居り、特にチヤーチスト運動においてデモクラシーといふ言葉が多く用ゐられてゐる。London Democrats だとか Democratic Association だとかいふ言葉が切りに使はれたのはこの時代の政治運動の特質であつた。ブロンテーア(本名はオブライエンであるが多くブロンテーアとして知られてゐる。(Gammage, History of the chartist Movement 參照)もまたこの時代の急進的デモクラットの一人であつた。彼れの

立場は、彼れがチャーチスト指導者の一人であるといふことの事實によつても知られるとほり、所有階級の政權獨占に對する反對者である。一八三二年の選擧法改正が『貧困』に對して『財產』を結合したのであるに對し、チャーチスト運動はこの所有階級の政治的覇權に反對して立つたものである。それはウヰリアム・スロツソンのいつてゐるとほり英國における勞働階級の最初の階級的運動である。（Preston William Slosson, The Decline of the Chartist Movement 參照）勞働階級のためにデモクラシーの分配を要求したのである。從つて彼等の要求は一、所有階級の政治的社會的覇權に反對すること二、勞働階級に對して政治的參與の權利を認めることにおいて最も重要な特質をもつてゐる。彼等の要求は有名なる六ケ條に分類されてゐるにしても、それの根本をなすものは以上の二點であつて、これを他の言葉に要約すれば普通選擧の要求である。普通選擧を通じてのデモクラシーの公平なる分配の要求がチャーチストの運動であつたのである。この運動の精神が、それの有力なる指導者の一人としてのブロンテーアによつて一つの言葉に要約された時に社會民主主義 Social Democracy といふ言葉の發見となるに至つたのである。ブロンテーアは『各人のために並に凡てのために社會的平等』を要求したのである。これが彼れのデモクラシー論の根柢である。さうしてこの各人並に萬人のための社會的平等をうるがためには、人民は先づ『政治的平等』を獲得しなくてはならない。彼れはかう主張してゐたのである（Frank F. Rossenblatt, The Chartist Movement, p. 114）即ち彼れのソーシャル・デモクラシーとは各人または萬人のための社會的平等の要求である、從つてそれは單に勞働階級のためにその勞働階級の覇權を要求するものではなくして、凡ての人民、凡てのデモスのための、凡ての人民、凡てのデモスによつての、デモクラシーを主張したのである。彼れが單に勞働階級のためにのみ政治的權力を獨占することを要求することなくして、凡ての人民のために、普通選擧を要求したことについて見ても、ブロンテーアによつてのソーシャル・デモクラシーが『凡ての人民』のデモクラシーであつたことは明白である。かくして先づ世界における最初の社會民主主義の發見者としてのジエームス・ブロンテーア・オブライエンの社會民主主義についての說明と立場とは福田博士の說に全然裏切つてゐることを知るのである。

四

英國のチャーチスト運動を獨逸に學んだものとしてはフエルチナンド・ラサーレを擧ぐべきである。ラサーレはマルクスからよりはチャーチストからより多く學ぶところがあつた。ラサーレの普通選擧論がチャーチスト運動からの輸入であつたがごとく、彼れの社會民主主義論もまたチャーチスト運動から輸入したものであるといふことができる。彼れはデモクラシーの熱心なる主張者である。『デモクラシーとともにのみ正義は存在するまたデモクラシーにおいてのみ力が發見せられる。……何となればデモクラシーのみ常に正義に執着し、また未だ嘗つて力との妥協によつて彼れ自らを低下せしめてゐないから』ラサーレはこう述べてゐる。彼れはデモクラシーにおいて社會主義を發見せんとするものでありまた社會主義においてデモクラシーを發見せんとするのである。即ちソーシャル・デモクラシーの主張者である。いふまでもなくラサーレは自由主義の諸政黨に對して熱心に反對を試みた。しかし彼れが自由主義の諸政黨に反對したことは、決して『眞正のデモクラシー』に反對するがためではなくたゞ所有階級の覇權に反對したといふまでのことである。この點は彼れの『プログラム』によつて明白である。勿論彼れはライプチヒの勞働團に與へた手簡のうちで『勞働階級とは何んぞや？それは凡てゞある』といつたこともないことはない。しかしそれは單なる語調、語勢の問題である、彼れの政治的要求は『普通選擧』の要求をもつて根本とする。即ち全人民によつての政治的權力の分配を要求したのである。即ち獨逸においての社會民主主義 Sozial-Demokratie の發見者としてのラサーレもまた英國におけるソーシャル・デモクラシーの發見者としてのプロンテーアと同じく社會民主主義をもつて單なる『勞働階級だけのクラシー』であると解してはゐなかつたことを知るのである。この點においてラサーレもまた福田博士の社會民主主義論の裏書者ではなく、福田博士の裏書き者としての吉野博士の謂ふところの『勞働階級の利己心』の主張者でもない。

五

ラサーレの死後において、ラサーレの門下によつて、獨逸に『社會民主主義』Sozial-Demokratie といふ一雜誌が發行せられた。マルクスもエンゲルスもリープクネヒトもその寄稿家であつた。それから後一八六九年ベーベルとリープクネヒトによつて社會民主主義の一政黨がアイゼナツハにおいて組織せられた。その政黨の目的とするところは『自由國』Freier Volksstaat

の要求である。如何にして『自由國』を實現するか。政治的自由がなくてはならぬ。彼れはこうした立場をとつた。それゆえに、この政黨の第一の要求は直接、普通、平等選擧の主張であつた。この點においてラサーレの『一般獨逸勞働者協會』とその立場を同じくしてゐるのを見る。さうしてラサーレ派とリープクネヒトーベーベル派とが一八七五年にゴータにおいて合併した時に、こゝに獨逸社會主義勞働黨が、成立したのであるがその宣言と綱領とを一讀するに、これまた決して勞働者だけのデモクラシーを要求してゐるのではなくして、その着目するところは社會の全體でありその『人民』とするところは全體の人民である。即ち次のように述べられてゐる。

『……勞働の全生產は社會に屬する。即ちそれは同等の權利によつて凡ての人間に屬する。……』

『勞働者の解放は勞働の機械が社會の共同財產への變更を要求する。また協同によつての勞働の統制、一般的幸福及び公平なる分配の見地よりする生產物の適用とを要求する。』

『この原理から出發して獨逸社會主義勞働黨は……凡ての政治的及び社會的不平等を訂正することを要求する』

かくのごとくにしてゴータの宣言において求めるところは『政治的及び社會的不平等』を正して『一般的幸福と公平なる分配』とを要求してゐるものであることが明白である。さうしてこの目的に達するために、『國家及び自治團體の選擧において、二十歲以上の凡ての市民のために、普通平等直接選擧』を要求してゐるのである。從つてゴータの宣言に現れたる社會民主主義は吉野博士の解說のごとく『勞働者の利己心の要求でもなく、また福田博士の解說のごとく、勞働者だけをもつてデモスとなしてゐる『假面的デモクラシー』でもないことを知るのである。

以上の點即ちチャチスト運動からゴータ宣言までの經過は、社會民主主義の性質を論ずる如何なる學者も閑却するとのできぬ點であり、この點を閑却しての社會民主主義論は、それだけにて既に價値の半ばを失つてゐるものである といふことができる。福田博士はこの點を閑却し吉野博士は全然その根據を示すに至つてゐない。福田博士の反對者としての河上博士もまたこの點には少しも接觸するに至つてゐない。その平常において、左程の必要もない考證に重きを置くことを習慣とし且つ誇りとする學者の諸君が、社會民主主義を論ずることに甚だ熱心にして而かも未だ一人のそれ等の點に論及することのないのは、私には寧ろ不可思議に感ぜられる。

六

福田博士がその博士獨特の社會民主々義論を立證するために引用した證據の第一のものはエルフルトの綱領である。エルフルト綱領については既に河上博士がその一部（博士は全文と稱してゐるが全文ではなくその直接要求の部分は一切拔きにしてゐる）を引用してゐるからこゝにそれを繰返す必要がないが、先づ福田博士がその獨特の社會民主々義論の根據となした最も重要な點を見るに、左の一節である。

『資本家的掠奪に對する勞働階級の爭鬪は、必然的に一つの政治的爭鬪になる。蓋し勞働者階級は政治的權力なくしては彼等の經濟的爭鬪を爲すこと能はず、又彼等の經濟的團結を發展せしむること能はざるものである。彼等にして政治的權力を所有するに至らざる限り。生産手段を社會の共有に移すことは、彼等の到底爲し能はざる所である。』

『勞働者階級のこの爭鬪をば、一個の意識的統一的のものと爲し、之に向つて其自然的必然の目的を指し示すこと——是れ我が社會民主黨の職分である』（河上博士の譯文による）

右は河上博士の譯文である。それには誤謬を含んである。（私は誤譯の方では何人にも讓らない方であるから他人のことは云々する資格がないが、こゝに必要な點であるから正して置く）卽ち河上博士の譯文によると『蓋し勞働者階級は政治的權力なくしては云々』とあるが原文には Politische Rechte とあつて Politischen Macht となつてはゐない卽ち『政治的權利なくしては』云々となつてゐることを注意して置く必要がある。そこで獨逸社會民主黨は一方に政治的權力をうることの必要であるとなしてゐるのであるが、この場合においての政治的權力なるものが政治上の覇權の意味でなくして政治的權利 Politische Rechts によつて議會に多數を占め、これによつて政權を掌握しようとするのであるから、その獲得せんとする政治的權力とはデモクラシーの原則に從つての權力、卽ち多數者のうへに結合せんとするのであつて政治上の覇權または執政權の要求ではないのである。從つてこの點を根據として社會民主々義が單に勞働者だけのクラシーを組織せんとするものである。と論ずることは甚だしき不道理なことである特に福田博士の引用してゐる證據（エルフルト綱領のうちにさへ、その謂ふところの解放 Befreiung が決して單に勞働階級だけの解放ではなくして全人類、gesamten Menschengeschlechts の解放を意味して

ゐるものであることが明らかにされてゐるのである。從つて福田博士がその引用したるエルフルトの綱領によつて博士特有の社會民主主義を證據立てようとするとは益々不道理となるわけである。否な、それは却つて福田博士の說に全然裏切つてゐるものであるその點は次の一節によつていよ〳〵明白である。

『それ故に獨逸の社會民主黨は新階級的特權及び例外的權利のために戰ふのではなくして、階級的支配並に階級それ自身をも廢滅し、又性的及び門地の區別なしに凡ての人の平等の權利及び義務のために戰ふのである。これ等の見地から出發して、それは現今の社會において、單に賃銀勞働者の絞取及び壓迫に對して爭ふのみではなく、更に一つの階級、一つの政黨一つの性、（室伏曰く河上博士の譯文にはこの性といふ言葉が見えない）又は一つの人種に對して行はれてゐるものたるを問はず。凡ての種類の絞取及び壓迫と爭ふのである』

この一節は社會民主黨の立場を論ずに當つて致命的に必要なことである。その致命的に必要な一節は、何故か福田博士によつて特に省略せられてゐるのである（この點は河上博士も指摘されてゐる。私もまた今年六月號の『批評』において指摘してゐる。）しかし福田博士の社會民主主義論に都合の惡るい部分が如何に福田博士によつて省略せられてゐるにしても、獨逸社會民主黨が省略してゐない限り、それは福田式社會民主主義解說に對して致命傷を與へることを差控へることはならないのである。

七

エルフルト綱領の解釋において、私は幸に河上博士とその意見を同じくするの光榮を擔つた。しかし私は河上博士の贊成だけに滿足することができるにしても、福田博士の滿足をうるために、更に權威ある解說を引用しなくてはならぬカール・カウツキーの解說がこれである。カウツキーはその『階級鬪爭』（エルフルト綱領）のうちで勞働者の政治的權力の獲得及び政治的權利の問題に言及して次のように述べてゐる。『……近世勞働運動の最初の武器は前代からの遺物卽ちストライキ及びボイコットであつた』

『しかしこれ等の方法は近代の勞働階級にとつては不適當である。……それの爭鬪は益々政治的性質をもたなくてはならない。凡ての階級鬪爭は政治的鬪爭である。

『經濟的爭鬪は政治的權利を要求する。政治的爭鬪は經濟的爭

鬪の單なる特種形體であるに過ぎない』

『大資本家は直接に支配者及び立法者を動かすことができる。しかし勞働者はたゞ議會的活動を通じてのみさうすることができる』(Karl Kautsky, The class Struggle——Erfurt Program, pp. 184—6)

エルフルト綱領の最も權威ある解説者としてのカウツキーに從へば、以上の拔萃によつて明らかであるとほり、獨逸社會民主黨が政治的權利または政治的權力を要求してゐることは、純然たる經濟的手段に反對しての意味であり、卽ち議會政治の方法によつて、デモクラシーの原則においての、政權の獲得を意味してゐるものであることに過ぎないことが分明するのである。從つてそれが勞働階級のための政治的獨權の要求でないことを知るのである。それのみではなく、カウツキーはこの政治上の權力を獲得するといふことの意味が決して單に勞働階級だけの利益を意味するものではなくして、『全體の社會的發展の利益のためである』ことを繰返して述べてゐる。(同上百五十九頁)從つて社會民主黨のエルフルト綱領は、カウツキーの解説に從へば社會全體の利益を目的として、政治的手段——ポリチカル・デモクラシーに訴へんとするものであるまた從つて福田博士の解説とは全然正反對のものである。否、カウツキーに從へば、この點は殆んど說明の必要のないほどに明白な問題である。とされてゐるのである。カウツキーの他の著物(Parliamentarismus und Demokratie) のうちで述べてゐるところは一層明白である彼れは次のように述べてゐる。

『けれども勞働階級は凡ての狀態のもとにおける民主々義的組織を要求するものでなくてはならぬ。…それは社會階級のうちの最低のものである。それは凡ての人が政治上の權利を得たる場合でなくては政治上の權利をうることはできない。他の階級は何れもある種の事情のもとに特權階級となることができるが勞働階級は特權階級となることはできない。それゆえに階級的自覺ある勞働階級のうへに立つ社會民主々義はブルジョア民主々義よりも遙に多く民主々義的努力を誠實に支持するものである。』

カウツキーのこの說明は、一切の疑問を一掃するほどの明白さでなくてはならない。かくしてエルフルト綱領は益々福田博士に裏切りさうしてその擁護人の吉野博士をもともに裏切る。

私は次に獨逸社會民主黨（社會民主黨と稱するようになつたのは一八九〇年からである）の最初の運動の大立物であり、さうしてまた學者であるとされてゐるヴヰルヘルム・リーブクネヒトの解說を引用するの煩を敢てする。リーブクネヒトは次のように述べてゐる。

『社會民主主義が目的とし且つそれが贏ちうべき政治上の權力はその敵が如何になすにせよ、その目的に、勞働階級の覇權の樹立をもつてはゐないたゞ所有階級の覇權の廢止を目的とするのみである。丁度勞働階級が遂行する階級鬪爭と同じく、たゞ勞働階級に對する所有階級の階級鬪爭を排する自己防衛においての反對爭鬪である。さうして勞働階級の勝利によつてのこの爭鬪の終局は、あらゆる形においての階級鬪爭の廢止であらう』

(W. Liebknecht, No Compromise, No Political Frading ((kerr edition)) p. 30)

即ち新階級的特權の樹立を目的とするのではなくしてその廢滅、一切の特權の廢滅を目的とするといふのである。

（九）

かくして福田博士がその獨特の社會民主主義論の尤も有力な根柢とされてゐる獨逸の社會民主黨の立場は、福田博士の解說とは正反對である。一九一二年の社會民主黨の選擧宣言もまた全然福田博士の解說に裏切つて。「全人民の協同責任」の主義を高調してゐるのではないか。

（十）

福田博士がその獨特の社會民主主義を證據立つるための第二の證據物件は「共產黨宣言」の最後の一句、萬國の勞働者よ團結せよといふ有名な一句である。即ち共產黨宣言はたゞ勞働者のみの團結を主張したがために、さうして全人民の團結を主張してゐないがために、それは單に勞働者だけのデモクラシーであるとするのが福田博士の論理の運用である。如何にも『共產黨宣言』は『萬國の勞働者』といつて『萬國の全人民』とはいつてゐない。それは丁度英米流のデモクラシー、福田博士の所謂資本的デモクラシーが「萬國の所有階級よ結合せよ」とはいはないで、却つてこれ等の所有階級のデモクラシーが、常に『人民のため』または『人民によつて』といふ言葉を使つてゐるのとは反對である。だから福田博士の論理を借用していへば、資本的デモ

クラシーは却つて眞正のデモクラシー、全人民のデモクラシーとなるものでなくてはならない。問題はしかく簡單である。『太陽が地球の周圍を廻るといふ說に對して反對の說明をするの必要のないほどに』明白な問題である。

『共產黨宣言』は何故に萬國の勞働者といひ、さうして萬國の人民といはないか。『勞働階級の解放はたゞ勞働階級それ自身によつてのみ行はれうるものであるからである』――かうした說明は社會主義のあらゆるリテラチユーアのうちに現はれてゐる。即ち勞働階級の解放のためである。勞働階級の解放とは、前述のカウツキーの言葉の通り、『最後の階級の解放』である。從つて全人民の解放のためには、勞働階級が解放せられるものでなくてはならない。その解放のために、壓迫されたる、絞取されつつある階級が結合するより外には、到達すべき道が考へえられるものでない。從て勞働階級の解放、さうして全人民の解放には當然に勞働階級の團結が必要である。――勞働階級の團結を主張する人々はかう主張してゐるのである。從つてそれはリープクネヒトの指摘してゐるとほり所有階級によつての階級鬪爭を拒絕するためのものであるに過ぎない。また從つて萬國の勞働者よ、結合せよ！といふ『共產黨宣言』の一句は、福田博士の社會民主々義論を證據立つべき何等の根據となるものではないのである。却つて『共產黨宣言』に於いて福田博士の說明に明白に反對してゐる文句を指摘することが容易である。『共產黨宣言』には次のような一節がある。

『力によつて古るき生產條件を一掃しそれからそれ（勞働階級）はこれ等の條件に從つて、階級反目の存在に對する條件を一掃し、さうして一般に階級をも一掃して、かくしてそれ自身の階級としての優越をも廢止するであらう』

『階級と階級反目とをもてる古るき所有階級の代りに、われ等は、各人の自由なる發展が、凡てのものゝ自由なる發展の條件たる、一つの協同をもつに至るであらう』

これによつて見れば、『共產黨宣言』の窮極の目的とするところが、新階級の樹立でなくして、『凡てのものゝ自由なる發展』のための、『一つの協同』の要求であることが明白となるのである。（共產黨宣言第二章末尾參照）從つてこれまた福田博士にもその裏書人としての吉野博士にも反對の結論が導き出されなくてはならぬわけである。

（十一）

以上の點までは、私は『共產黨宣言』の解釋において、河上博士とその立場を一つにすることができた。しかし『共產黨宣言』は、實は河上博士の『片付けて』ゐるように、そんなに簡單に考へられべきものではなくして、それには種々の疑問を導くに足るべき多くの論點をもつてゐる。卽ち次のような數句がある。

『無產者が先づ第一に政治的優越をえなくてはならない以上、それ自身を國民中の指導的階級に引上げなくてはならぬ』

『われ等は以上において、勞働階級によつての革命においての第一步が、無產者を支配階級の地位に引上げることにあるのを知つた。』

『無產者はその政治的優越を、次第に凡ての資本を所有階級からもぎ取り、凡ての生產機關を國家卽ち支配階級として組織されたる無產者の手に集中するために使用するであらう。』

これによつて見ると、『共產黨宣言』においては、勞働階級を支配階級として組織することを要求してゐるのであつて、その『共產黨宣言』においての社會主義は勞働階級の政治的覇權を要求してゐるともいふことができる。この點は素より單なる手段であるにしても、それが政治的覇權を要求してゐることだけは疑の餘地がない。從つて『共產黨宣言』は河上博士の解說のようにしかく簡單に考へることはできないものである。この『共產黨宣言』の立場は後に屢々問題となつたことでもあり、且つロシアのボルシェヴヰキ黨がこの『共產黨宣言』の立場を襲うて自らマルクス主義と稱してゐるのであるから、もつと進んで考へることが必要であると思はれる。卽ち『共產黨宣言』は福田博士の解說のごとくに、それが福田說を證據立つるために、『太陽が地球の周圍を廻るのでなくして地球が太陽の周圍を廻るのだといふのと等しく』明白な材料でないとゝもに、また河上博士の解說のごとくに、『公平に考へて』しかく簡單に河上說を裏書きしてゐるものであるといふこともできない。

（十二）

『共產黨宣言』には種々の不明瞭なアンギユアスな點があり、また矛盾した點がある。例へば『無產者を支配階級に引上げなくてはならない』といつてゐるところもあるし、或はまた『事情の强制によつて、ブルジョアジイとの爭ひの間に、それ自身を支配階級となすことを餘儀なくされるにしても』といつてゐるところもあるし、何れが『共產黨宣言』の眞實の立場であるかを知るに苦るしむ場合が存在してゐる從つて『共產黨宣言』を

社會主義の經典のごとくに看做すことはあまりに『共產黨宣言』を買被りたるものである。しかし『共產黨宣言』の價値は何れにせよ、そのうちに無產者を支配階級に引上げることの主張が鮮やかに書かれてゐることは疑のない事實であり、從つて『共產黨宣言』が社會民主々義の性質を決定すべき最高の權威であるとすれば、福田博士の解說に一應の道理を認めなくてはならないこととなる。特にこの『共產黨宣言』の立場は一八七一年のパリ・コムミユーンにおいて採用せられ、一九〇三年にはロシアボルシエヴヰキによつて採用せられた。ロシアボルシエヴヰキは明らかに勞働階級だけのデモクラシー（福田博士の用語例に則る）を實現せんとし、或は實現しつゝあるそれはボルシエヴヰキの憲法を一讀すれば明瞭である。彼れに從へば『人民』とはたゞ勞働階級（ボルシエヴヰキ憲法第六十四條參照）だけのことである。たゞ勞働階級だけが公民である。エドワード、ロッスの興味深き一書（Ross, Russia in Upheaval）によれば、ボルシエヴヰキはロシア內の住民を『人民』と所有階級（ロシア語で bourgeois といふ）との二つに分類する。即ちボルシエヴヰキ・レヂームにおいては『人民』とは單に勞働階級の事であり、さうして所有階級の人間は『人民』ではない。福田博士の用語例に從へば、ボルツエヴヰキ・レヂームにおいては、全人民を『デモス』とするのでなくしてたゞ勞働者だけを『デモス』とするものである。從つてボルシエヴヰキ・レヂームが若し社會民主主義を代表すべき權威であるとなすことと福田博士の御說のとほりであるとすれば、社會民主主義は正に『全人民のクラシー』ではなくして假面的デモクラシーである。われ等は『極力これを排斥して眞正のデモクラシー』を發見しなくてはならないこととなる。

（十三）

私はこゝに『共產黨宣言』についてもボルシエヴヰキについても評論することを許されてはゐない。しかしこゝに一言しなくてはならないことは、『共產黨宣言』においての勞働階級を支配階級に引上げるとするの立場が、その作者としてのマルクスによつてもエンゲルスによつても後に否認されてゐる。といふことである。『共產黨宣言』がマルクス主義の經典としての地位をもつてゐたとすれば、少くともそれはパリ・コムミユーン以前のことであり、その以後においては、『共產黨宣言』の價値をあまりに重要視することは、少くともその作者としてのマルクス、エンゲルスの眞意ではない。共主義は正統マルクス主義の宣言とし

ての獨逸の社會民主黨のエルフルト綱領においても採用されてゐない。修正社會主義においては素より採用されてゐない。それゆえに『共産黨宣言』を引用して社會民主主義の性質を決定しようとすることは根柢において誤謬である。次にボルシエヴヰキについて見るに、福田博士はボルシエヴヰキが社會民主主義の最も純粋のものであるとなしてゐるのである。（黎明講演集第三輯二百七十一頁參照）如何にもボルシエヴヰキはロシアにおける社會民主黨のうちに生れたものである。その目的は社會主義の實現にある。その目的は無政府主義でもなく、サンヂカリズムでもない。レイニンの著書（Lenin, Soviet at work）に從へばボルシエヴヰキもまたデモクラシーの原則、社會民主主義の原則と兩立するものである。しかしボルシエヴヰキ主義がデモクラシーの原則に一致するといふことと何が社會民主主義であるかの問題とは別問題である。ボルシエヴヰキの支配は、今日の社會民主主義の正系の立場においては、明らかに否認されてゐるものであり、從てこれをもつて社會民主主義の一派であるといふことはできるにしても、社會民主主義の代表的のものとなすことは非常な誤謬であるといはなくてはならない。それは寧ろ社會民主主義と稱するよりはボルシエヴヰキ・デモクラシー或は『特種の社會民主主義』と稱すべきものである。レーニン自身もまたこれを社會民主主義とはいはずして勞兵會民主主義といつてゐる。（ボルシエヴヰキは今日では社會民主黨ではない。』このボルシエヴヰキ——縱令社會民主主義の一形體であるにしても——の主義を楯として社會民主主義とはかくのごときものであると説明することは決して冷靜なる學者的態度ではない。

（十四）

冷靜に社會民主主義とは何んぞやの問題を考へるためには、ある特種の現象に注意するよりも、その社會民主主義の發生の由來存在の理由、さうしてそれを支持するものの正系について觀察することが必要である。先づ社會民主主義の正系について見よ。この點において國際社會黨の態度が最も有力な材料であることは論ずるまでもないことである。ところで國際社會黨は如何なる態度をとつてゐるか。それは先づ議會主義をとる。第二國際社會黨は議會主義をもつて一貫してゐる。ロシアのボルシエヴヰキとは正反對であり、方法としても目的としても、『全人民のクラシー』を要求してゐるのである。そこで無政

府主義とサンヂカリズムに反對してきた、ぜ、インタナショナルは今年更にボルシエヴヰキに反對の態度を示してゐるのであるから。これまた福田博士の解説には反對の證據である。次に國際社會黨に參加してゐる各國の社會民主主義黨の一、二について見るに、アメリカの例は河上博士が紹介してゐるから私は省略する。先づ英國の正統派社會主義團としての『社會民主主義聯合』について見るに、左のごとく宣言してゐる。(一九〇六年)

『勞働階級は自由を獲得する最後の階級であるが故に、それの解放は人種民族性宗教または性の區別なき全人類の解放を意味するものである』(但し『社會民主主義聯合』はその後數個の團體に分裂してゐるがハインドマン一派はこの宣言の主義を維持する)

次に白耳義勞働黨の綱領には左のごとく宣言してある。

『改造は單に勞働階級のためではなくして全人類のためである』

其他の例は省略するとして全く別方面の用語例に就て見る。

(十五)

社會民主主義といふ言葉は、これを遡つて考察すると福田博士も例證せず河上博士も問題としなかつたところに、更に特種の意味において使用されてゐることを知る。バクーニンの用語例がこれである。バクーニンは一八六八年九月二十五日に『社會民主主義者國際同盟』L'alliance Internationale de la Démocratie, Socialiste を組織した。即ち社會民主主義又は社會民主主義者といふ言葉を使用してゐるのである。これについて見るに、バクーニン、レクルス、レー等の一派の無政府主義者は、神を廢し、國家を廢し、多數者の支配をすら排斥してゐるのであるが、しかしこれ等のことは決して勞働階級の獨裁政治の要求のためではない。バクーニン一派においても、社會民主主義は、『諸階級の政治的經濟的、社會的平等』を要求してゐるのであるからこれまた福田博士の獨特の社會民主主義論(但しレーニンは福田博士の贊成者であるといへるであらう)の裏書人とはなつてゐないのである。

(十六)

そこで順序は前後したかも知れないが、何故に社會民主主義が存在するかの根本問題に立入る必要がある。このことは私は既に小著『社會主義と民主主義』中の最後の一章に於て、並に

『デモクラシー講話』のうちに可成り詳細に述べてゐるからこゝに繰返したくはない。只こゝに要領だけを述べると、それは先づ第三階級民主主義に對して起つたものである。卽ちフランス革命によつて代表せられてきた政治的第三階級民主主義は、民主主義を標榜しながら、實際に於て第三階級の、第三階級によつての、第三階級の爲の民主主義となつた。否、その思想そのものが既に第三階級的である。第四階級は民主主義の名のもとに迫害せられ、絞取せられたばかりであつた。そこで第三階級の民主主義は眞實の民主主義ではない。それが眞實の民主主義であるがためには、第四階級にもディケとアイドウスとを一樣に且つ平等に分ち與へなくてはならぬ。卽ち第四階級を解放しなくてはならぬ。さうしてこの第四階級は解放せらるべき最後の階級であるがゆえに、これが解放は人類の解放である。――かくのごとくにして社會民主主義なるものが起つたのである。然らば何故に社會民主主義と稱するかといふに、政治的行動は民主主義の必要條件であるにしても、産業上においての自由がなくては、民主主義は名ばかりとなるがゆえに、民主主義が眞正の民主主義があるがためには産業上の民主主義と結合しなくてはならない。卽ち單なる政治上だけの自由、法律においての自由だけでなくして、人間生活の重要なる方面を規律すべき經濟上においても自由であることが必要であり、これによつてのみ第四階級が解放される。こゝにおいてか眞正の民主主義は、産業民主主義を伴ふものであり、政治的民主主義と産業民主主義なるものが結合せられて社會民主主義が發生する。――私は先づかように解說する從つて社會民主主義とはたゞ最後の被壓迫者として勞働階級を解放することによつて社會全體を解放し社會の全體にデモクラシーの原則を實現せんとするものであつて決して勞働階級の獨裁政治を要求してゐるものではない。レーニンにしても獨裁政治は社會民主主義への手段であるに過ぎないと解してゐるのである。故にいふ『眞正の社會民主主義』は單に勞働階級だけのクラシーを期待するものではないと。

（十七）

福田博士は一面においてまた社會民主主義は單に手段、『二階へ登るための手段』であるとなしてゐるのであるからこの點についても意見を述べて置く必要があると思ふが、この點は直接私自身と關係してゐない點であるから、それに、あまり長くなるから差控える。十一月十三日）

社會民主々義是非

──福田河上兩博士の論評を評す──

中澤臨川

先日『改造』の記者が來られて、福田河上兩博士のソシアル、デモクラシイに關する論爭に就て、わたくしにも何か感想を書けといふことである。わたくしは無精乍らまだ兩氏の文章共に讀んでゐなかつたので、そこで早速『黎明講演集』と『社會問題研究』とをそろへて買つて比較研究したのであるが、正直に白狀すると二つ乍らに餘り實の入つたものでなかつた。共に表面的の議論で、範疇（カテゴリー）に囚はれてゐる點に於て、講壇學者の通弊を曝露してゐる。今更ソシアル、デモクラシイの定義を訓詁的に解釋するなどは無用の詮義立てである。われ等の聞きたいのはこの主義の活きた精神である。名稱は同じであつても時勢の變遷に伴つてその内容も亦變遷する。墮落もあれば進化もある。例へば亞米利加のモンロオ主義にしても立憲政友會の綱是にしても、その折々に内容は變つて行く。で、我等が兩博士から聞きたいのは辭句の詮義立てでなくして、今後のソシアル。デモクラシイはどういふ道をとればよいかといふ事である。

福田氏に從へば、社會民主々義は明かにプロレタリアの階級――勞働者階級――第四階級が天下を取るを以て其任務としてゐるのである。それ故にそのデモクラシイは嘘のデモクラシイである。なぜなら、是は凡ての人民のクラシイでなくて、一部分の階級のクラシイであるから。恰も英吉利や亞米利加で今日やつてゐるところの政治上のデモクラシイが金持のクラシイであつて、全人民のデモクラシイでない如く、ソシアル、デモクラシイも一部階級のクラシイであると。之に對して河上氏は、ソシアル・デモクラシイの目的が決して一部の第四階級の利益のみを目的とするものでないことを立證して、福田氏の誤謬を

正さうとするのである。

福田氏がソシアル・デモクラシイは一部階級のクラシイであると言はれる根據は、主としてマルクスの『共産黨宣言』の最後の一句『萬國の勞働者よ團結せよ』といふのにある。氏は曰ふ。『總ての國の第四階級に汝等結合せよと書いてあります。何の爲めに第四階級のみに結合せよといふのか、總ての國の民よ結合せよと言ふのではない。總ての國の第四階級よ結合せよ、第四階級よ他の階級に對して階級鬪爭を開始すべく結合せよ、と言ふのであります。これ位明かなる證明はない』と。然るに之に對して河上氏の言ふところは、かくマルクスが階級鬪爭をすゝめてゐるのは『最も手近かなる目的』に過ぎないので、その後にはより大なる目的がある。階級鬪爭は後の大目的を實現する爲めの手段に外ならぬ。われ等の究極目的は『共産黨宣言』にあるとほり『各人の自由なる發展が總ての者の自由なる發展の條件たる如き一個の協和社會』即ち萬人平等の無階級の社會である。かるが故に社會民主々義は決して第四階級の利益ばかりを計るものでないと。

かやうに兩氏の說を對照してみると、雙方共に相當の理由がある。福田氏は手段としてのソシアル・デモクラシイが階級鬪爭を力說する部分のみを重大視し、剩さへソシアル・デモクラシイ其物を『實行上の唯だ一の方法』に過ぎぬと見てゐるのであるから、從て階級鬪爭といふ手段が惡るいと考へ、『此途中の經過が長く續くときは、此危險の爲めに人類が大損失を蒙ることを、私は恐れるのであります』と言ふて居る。之に反し河上氏は目的としてのソシアル・デモクラシイを主として見てゐるところから、この主義の本旨は決して一部階級の利益を計るのでなくして、却て階級的政治そのもの〻全廢、總ての男女をば解放する爲めの運動と解してゐるのである。兩氏の論爭の分岐點はこゝにある。

わたくしが兩氏共に範疇(カテゴリー)と辭句の末節とに捉はれてゐると言つたのはここである。この主義を判別するに當つて、我等の忘れてならないことは、その主義を奉ずる者の眞精神を讀むことと、その主義が時勢につれての進化の跡を尋ねることとである。マルクスの主義にしてが正統マルクス派と修正マルクス派との間では、名は同じくソシアル・デモクラシイでも、その信念氣分

に多大の相違がある。また正統マルクス派にしても時勢の推移に伴つてマルクス自身とは違つた解釋を有する者が多い。更にまた同一の社會民主々義でもその『民主々義』の文字に重きを置く程度に於て、獨逸のそれと亞米利加のそれとでは餘程違つてゐる（リープクネヒトとスパルゴとを比較してみるがよい）。

社會民主々義とは何ぞといへば、社會主義（共產主義）を政治的民主々義の方法によつて實現しようとする主義である。されば無階級で萬人平等の共產社會がこの主義の究極目的であり、それに達するまでの手段として、政治的デモクラシイの方法により、順次に第四階級の勢力を增加して、遂には今日の支配階級又は資本家階級を無くしようといふのである。で、社會主義的社會を前途の目的とすることに於ては、河上福田兩氏ともに同一の意見であるらしい。唯だその手段に關して、河上氏が一種の階級鬪爭の必要を認めるのは、正當すぎるほど正當な議論である。福田氏は『總ての國民よ結合せよ』とか『究極に達する手段方法其ものも亦常に必ず本當のデモクラシイに據らなければならない』とかいつてゐるが、甚だ曖昧の議論である。これで見ると氏は消極的な平和論者（パシフィスト）であると推定するほかはなからう。それにしても利害感情を極端に異にして居る現代社會の諸階級の間の調和が、何等かの形の鬪爭によらずしてどうして實現できるかに就て、氏の説を聞くことの能きないのは、河上氏と與に私の遺憾とするところである。殊に同氏が社會民主々義は唯だ實行上の一手段であるなどと言つてゐるのは、甚だ受取りがたい議論である。

社會民主々義は目的と手段とを包含した一個の主義である。で、その手段としての階級鬪爭がよいか惡いかといふことが、福田河上兩氏の説の岐れ目である。全然階級鬪爭その物が惡るいとすると、それはトルストイやクエーカー宗の無抵抗主義となるが、福田氏の所謂『本當のデモクラシイ』はそれほどまでの意味ではなからう。氏の眞意は、他を排して第四階級の利益のみを目的とする鬪爭が惡るいといふのであらう。氏の説明が徹底してゐないために、それを河上氏は文字通りに解釋して、氏が何でも階級鬪爭を排斥するやうにとつたのである。そこで福田氏と雖も社會に於ける或種の鬪爭の必要をば認めるものと推定した上で私の批評をば進めて見よう。凡そ社會主義がその

目的を達するに就て二つの手段方法が說かれてゐる。その第一は所謂直接行動に依らうとするもので、第二は政治的民主々義の戰によらうとするものである。併しかやうな區別は私の嫌ふところの外面的範疇である。わたくしは寧ろその精神から之を分て、資本家階級に對する憎惡が主たる感情をなしてゐる人達の採らうとする手段と。正義自由の觀念を主とする人達が採らうとする手段との二つに觀るのである。階級鬪爭を力說し直接行動を推奬するところのサンヂカリズムでも、之を奉ずる人が博大な心を持つた人であれば、その人の行動は比較的無邪氣である。然るに穩健なデモクラシーを手段とする人であつても、その人の主感情が相手に對する憎惡であるならば、その結果は危險である。マルクスが當時の支配階級に對してどれだけ烈しい憎惡を懷いてゐたかといふこと、彼の學說の奥にはその憎惡が隱れた動機として燃えてゐたといふこと、從て彼の社會主義がとかく危險に流れ勝ちであるといふことを私は他の場所で注意したことがある。彼の說を奉ずる從來の社會民主々義が、その表面上の宣言はとにかく、之に隨伴する感情が資本家に對する憎惡であつたのはその爲めである。かやうな主義は、その理想とするところは設し『各人の自由なる發展が總ての者の自由なる發展の條件たる如き協和社會』であつても、よほど注意しないと危險である。憎惡によつて相對立する一階級が他階級を征服した場合に、その結果するところは壓制である。今日の資本家階級の壓制に代ゆるに、第四階級の壓制を以てするといふことは好ましからざることである。福田氏の恐れるところはこゝであつて、この意味から言へば同氏の說は無理からぬことである。事實に於て露西亞の過激派が獨逸の社會民主々義の分派であり、また現代獨逸の獨立社會民主黨やスパルタカス團が之に近いものであることを思ふことにより、我等の杞憂は誤つてゐないのである。然し正當な社會民主々義の目的が萬人の共存主義であり、その手段は政治上の民主々義であつてみれば、それが順路によつて行動する場合は、最も危險のない社會主義といふことが能きるので、この意味から言へば河上氏の所說も正しい。要するに主義は一のカテゴリイであつて、その型を盛る「人」——感情——によつて、それが善いか惡いか、危險であるか安全であるかゞ分れるのだ。わたくしが福田河上兩氏共に範疇に囚はれ過ぎてゐると言つたのはそこである。

社會主義がまだその初期に屬し、當分は實現されさうもない

一の理想として說かれる場合は、例へばマルクスやバクーニンの時代に之を說く場合には、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。然るに今日の時代の如く、その理想が既に孤獨の思想家の理想に止らずして、一の可能な主義として實行の第一歩を踏出した場合には、之が手段も亦相當の變更を要するのである。鬪爭を必要とする前に鬪爭を說くのはよい。既に鬪爭が始まつた今日はなるべく之をして悲慘な血路から免れしめる工風が必要であらう。今日はクラス・ソリダリチーを奬勵する代りにソシアル・ソリダリチーを奬勵することが急務である。若し福田氏の眞意がそこにあるならば、それには我等も大賛成である。

咬豆茶話

△山縣問題で、內閣は必ず潰滅すると、此問題に大きに思はせ振りを、含ませるものが多いが、何にせよ、憲政會はこの問題を提げて議會に一騒ぎするつもりだそうな。

△それかあらぬか、本問題に在海外の某々氏が關係ありとか、某政黨が關係ありとか、隨分不可思議の巷說が俱樂部あたりを賑はせてゐる。シーメンスの二の舞なき樣にお用心〳〵。

△熊本縣からの一投書に曰く、國權黨の努力も漸く衰亡の徵を呈して來たが、今回の選擧干涉て、又候、國權黨の反撥心を惹起し、安達謙の努力回復の日が來た。アマリ干涉が露骨だけに、却つて贔負の引き倒しに了つたと。隨分酷かつたと見える。

△和製ルーズ歸朝以來、白哲、長島、秋山それに伊東巳代、水野等までが一團となつて、後繼內閣の引受方に熱中してゐるとの話だが、原がソウ易々と白髮首を引渡すか、それに西園寺はどうしても、牧野に家督を讓るつもりだし、平田は第一、加藤第二牧野の胸算でゐるから、オイソレとうまく新平に廻つて來るかは疑問ダテ。上院あたりでは、新平の歡に對する新熱柿主義を冷評してゐる。

經濟時評



財界年末近くの用意

——警戒の鐵條綱張らる——

近藤泥牛

一　取引銀行に用心

木枯の音に時雨を聞く季節となつた、小夜ふけては空ゆく雁の聲も夜寒むを惹く心地する、爐火に親しむ日も漸く近づいた、やがては哀れ多き歳暮と云ふ感念も起る、人心に何となく警戒の緊張を餘儀なくせしむるものだ。かゝる際に最も神經の過敏なのは、例年お決まりのやうに銀行の警戒である。金融緊縮を表面の言ひ草として資金の回收に取掛る、此頃貸出利率が著しく昂騰したてはないか、例年の事だと云つて油斷をすると大變な失敗を演ずるものだ、之が商工業にとりては一番の大切なる關所である。

金融の大勢は都鄙を通じて次第〳〵に緊縮の傾向を示してるのは銀行家の言ふ通りだ、多少銀行家が其仲間を作つたとも云はれる、大阪では貸出日歩が二錢二厘から二錢三厘となつた、株券で貸出を頼みに行つても十二月の聲がかゝつては、平生低身平頭ニコ〳〵顔で寧ろ貸出を勸誘して呉れてる便利調法なる貸出係も、一寸首を傾けて一應は支配人に相談に行く、其態度はなか〳〵用心堅固である、そして一流株券で六掛半から七掛け、若しそれが背みものであつたら六掛を漸々伸出らしく逼迫理由を説明して貸出して呉れる、當座貸越日歩も一齊に一厘方の引上げで二錢二三厘、中には二錢四厘を附してまだ勿體ぶつた口上のつくのも「ヘイよろしうおます」と一つ二つお辭儀をせねばならぬ、此大勢は無論年末迄持續し、尙一層緊縮の度を強するものと見ねばならぬ。

さらばどこ迄の引締を示すべきか、それは貸出に何等の協定を有しないで、預金だけは協定制限を附してると云ふ勝手氣儘な大阪の銀行家の事であり、それ〳〵顧客の都合次第で違ふのだから一概に決定的の事は無論云ふことは出來ないが、今日の處では預金利率引上げと云ふ問題が

若し年内に起るとしたら、此預金協定と關聯して貸出に一層の引しめを見るものと肯定しなくてはならぬ、借り方には豫めそれ丈けの用心が大切である。

二　黄金洪水到來の夢

然るに世間には以上の年末金融傾向を全然否認した意見のあることを申さねばならぬ、それは十二月十五日に英債一億圓が償還されることに決定してる、そこで政府はよし倫敦から我國へ現金償還をやらぬにしても、必ずや兌換券を増發して償還に充つるであらう。それは公債打切りを聲明した政府が、公債を發行して英債の所有者に乘換せしむると云ふ二枚舌は、何んぼでも使へないからだ、それにモウ一つの大なる理由は昨今公債を募らうとしたら少くとも七朱の利子を附せねば應募者はあるまい、若し七朱利の國庫債券でも發行したら、それが直ちに低利公債や諸株券に影響して來て經濟界の平調を破壞するから、輿論の攻撃を免れぬ。そんな馬鹿なことをする筈はない然らば低利公債はどうか、英債所有者が、年末資金の忙しい時に、そんな低利の公債と乘換は御免蒙むりませう、現金償還を願ひますと出られたらどうする、銀行なら政府から抑えつけも出來やうがそれが個人であつたら抑壓して命令を奉ぜしむることは不可能だ、だから低利な公債なら、應募者がないから政府と抑えられた銀行とて脊負ひ込むことゝなり、何等償還の目的を達し得ないのである。だから公債發行は一寸むづかしい、何うしても之は兌換償還となる。そうすれば兌換の膨脹で市場に資金が横溢する、金融界の形勢が急轉直下的に逆轉して緩和となり、貸出利率も低くめられ、資金回收も手を緩め、商工業家は思ふ存分に銀行に無理がきくことゝなる。

とコウいふ理窟をつけた豫斷が行はれ、大に年末を樂觀し、手形の振出を無造作にするといふ不謹愼な人もあるやうだ。成程之は如何にも一理も二理もあることとで、或は爾うなるかも知れない、財界の事特に金融界の事は、殆ど豫測の出來ない位に變化の激しいものであるから、樂觀論者の所見がうまく當らぬとも限らぬ、けれども政府としては兌換増發を行ひ公債に少しも手をつけぬと云ふことは其結果の恐ろしいので斷行し得ぬではあるまいか、即ち兌換増發は市場を大に賑かにし、投機熱は一層煽られ、企業熱も年末恐るゝに足らずと大に勃興し、たゞさへ怪しげなる新會社の簇生する際に、層倍濫興の弊を増して經濟界を紊亂すること一通りならざるべく、特に中産階級は兌換券増發の爲に物價の暴騰を今日以上に甚しからしむるの故に政府の政策に深甚なる怨聲を放ち、大藏大臣直轄の大藏省の官吏と雖も、或は上官に叛逆的態度を示さんとも限らぬ。それに勞働者は勞働者で。物價の更に今一段暴騰するに於ては之を機とし、又もや同盟罷業、怠業の氣勢を揚げて賃銀割増の運動を猛然として遠慮なく開始するであらう。如斯は政治季節に入らんとして政府の戒心最も周到なる折柄政府の忍び得ることではなからう、此故に兌換券増發で英債償還をするものとはどうしても受取れぬ、倘し萬一にもそういふ手段を採るとすれば、同時に若干の臨時國庫債券を強行して兌

換券の膨脹を巧みに防止しやうとするのであらうか、だから金融狀勢が逆轉して年末金利低落金融逼の如くならざるはなしなどと云ふ金融上の見當をつけて。少しも引締めをしなかつたなら、萬一之に反して私の中すやうに、金融大に緊縮の度を増し英債一億の償還何等市場に資金を散布せしめないと云ふ場合に、非常なる手違ひを生じ、不渡を出すか支拂停止をするか、商工業として最も恥辱とすべき顛末に陷らねばならぬ。危道を履むは最も恐ろしい、萬一外れても履み込まぬやうに足元を用心するに如かぬ、年末に際し商業家よりも工業家の用心注意が足りないので、銀行家はわけても工業家の無頓着ぶりに警戒する傾向のあることは、益々閑却することの出來ないこと。兎角年末は十分に用心棒を張つて敵の乘ずる所とならぬやうせばならぬのである。

三　銀行側も大に用心

之を反對に銀行側から云へば、手形一枚にも深甚なる注意を要する、總じて年末期限の手形には馴合ひ融通も交つてゐる。商品受渡に苦情付きも、年末には多くなる、取引が圓滿に行はれぬとなると、倉荷證券に對する信用も相應に警戒を要する。年末は金の忙しいのに更に事故發生も忙しくなる、それが銀行の階級が低ければ低い丈華客が選擇されてない悪影響が及んで來るのであるから、一流より二流、二流より三流と銀行の階級が下る程に年末の顧客に對する警戒は、殆ど平生の大切なる華客としての待遇をすることの出來かねる位なので、之は銀行と云ふ用心深い、明けても暮れても人を泥棒扱ひにして少しも油斷の出來ない商賣の性質上、亦已むを得ざる仕儀であらう。

四　商工業家お互の疑惑

商工業と云ふものは何んぼ手堅くして居ても。何分相手次第のものたから隨分危險なものだ、信用調査は相應に行屆いてる、興信所の秘密調査にも目を睜つてるが、大商店大會社大銀行の仕拂停止が突如として起ることがある、有名な日糖事件でも、名古屋の富豪小栗富次郎の整理でも、百三十銀行北濱銀行の臨時休業でも悉く然うであつた、若し相手が大會社大商店大銀行大富豪だと云つて油斷をして、それが卒然として仕拂停止をした場合、其筋の振出手形を抱いて居た者は、場合によりて其たゞ一枚の手形の爲に、悲慘なる運命に陷らねばならぬ椿事を起すのであるから、手形と云ふものは仕拂期日の到來する迄は極めて不確實且つ不安心なものである、金融界は十月の末頃から十二分に警戒線を張り猫の子一匹だも網の目をのがさぬ用心をしてるから、商工業者もそれに相當して隨分辛い苛酷だ苦痛だとは思ひ乍ら、それを忍んで手仕舞すべきものは手仕舞し、年末決濟資金にも確實なる見當をつけて、ブマを履まぬやう手加減はされてるであらうが、似た者夫婦とやら、泡沫會社は泡沫會社怪しげな商工業者は怪しげな商工業者との取引關係の密接なるものあり、どちらが倒れても別段經濟界にタイした累を及ばさずとしても、こういふことの爲に小商工業者、店員、勞役者等直接關係ある弱者に年末に

さし迫つて迷惑を及ぼすやうなことありては、歳末年初を悲惨なる憂苦に過ごさねばならぬ。是等は單に商工業者ソレ自身の破產と云ふ小問題でなく、直ちに是れ一種の閑却すべからざる社會問題化するのである。即ち資本主又は傭主の不始末沒落は中產階級者勞働者に累を齎らしむるもので、爲に言ひ知れぬ悲劇が起るものとせば、私共は商工業者の年末近くの警戒用心と云ふことに、特に彼等の三省を促し置かねばならぬ次第である。

五　ボロイ商賣屋は警戒すべし

平生銀行に特殊の關係を有する輩は兎角手形を濫發する、取引銀行の後援が深甚だと云ふことは、一面其人其店其會社との取引上大に手形に警戒をしなくてはならぬものだ、例に引用しては些かお氣の毒だが致方がない、彼の山本唯三郎君の如く、世間では臺銀と密接なる關係があると云はれてる、之は山本氏の信用偉大なりとも云へるが、半面では一種の危險を意味するものだ、その證據には臺灣銀行は近來山本氏に對して嚴重なる取立をなし、年末は相當に決濟をして呉れと迫つてると噂されてる。銀行から平生過分の後援をして貰つてるのは、或場合は信用の偉大を矜りとすべきだが、こうなると前に云ふ通り危險の伴ふものだと判るでせう、其こへおまけに松昌洋行の唯一の立看板である開平炭の委託販賣權が手數料制度に變更されたとしたらどうでせう、銀行からは責めつけられる、商賣の根元は覆へされる、元來手數料制度が堅いのである、其手數料も普通堅實なる貿易商は二分から五分といふ口錢で地味な仕事をしてるやうだ。ボロイ商賣をしてる者に限りて危險だ、年末此らふ手合は特に警戒すべきものだ。之は山本が危うい と云ふ意味では決してない。山本氏及び其關係商店の信用程度は財界の定評通りで、私等の此論議とは別問題だ、たゞ山本氏と同樣に比較的ボロイ商賣をなし、且つ特殊關係ある銀行の後援を有する人には年末金融上の警戒の必要なことを說くのが目的である。

山本氏ばかりを引合にしては甚だ相すまぬ、ツイ此間勳三等の瑞寶章を鄕里水戶の高等學校敷地買收其他の費用として百萬圓寄附の御褒美として下賜された船成金の內田信也君も、貴族院議員で納まり返つてる同じ船成金の勝田銀次郎君でも、船價低落の際たゞ一時ではあつたが銀行は隨分警戒したものだ。內田や勝田の振出手形を所持して毎日毎夜ビクビクし、仕拂期日の到來して銀行へ驅け付け無雜に受取れたのでヤレ〳〵と安堵の胸を撫で下ろした人もある。之は內田勝田ばかりではない當時の船成金は船價激落の際、一人も殘らず遣う云ふ風に警戒され、信用はゼロであつたものだ、幸にして何等の破綻もなく難關を經過し得たりと雖も、由來ボロイ儲けをしてる商工業家には必ず一面危險の伴ふてるものである、今日一流手形として銀行の貸出係はロク〳〵手形の調べもしない程に信用偉大なる紡績手形でも、いつかは二三流手形に落ち充分なる警戒を附せられる時代が來るであらう、それはボロイ儲けは決して永續するものでないからである、ボロイ儲け屋には年末警戒をする

と云ふのは當然の事で警戒されるのを心外と思ふのは誤つてるのだ。

紺絲布商人は戰後迄も好景氣で其財力は何れも何倍何十倍してると稱せられてる。併し其筋の糺彈の手が此方面へ延びて大商店の計算書提出は氣の毒なものだ一朝檢擧の手がまいるとしても支配人とか主任とかゞ責任を負ふやうになつてるが、或は店主も責任を免れ得ない。財力はあり危險はなくとも、迂つ云ふ商店の手形を抱いて年末大節季の金融に苑をしてる手合は、隨分心配なことであらう、之等も私の所論を確かむる生きたる事實である。

六　年末契約品引渡遲延の苦情付

モウ一つ是非云はねばならぬのは、年末に契約商品の引渡期日遲延もの爲に商取引上の苦情付となり。爲に年內期日の手形を受取れぬことがある、若し還う云ふことが發生したら營業者の狼狽は一通りでない、僅かの手違の爲に破產の運命に陷らねばならぬのである、大阪ではどうやら此年末にはそれがあるらしい。其大なる原因は大阪工業界に夜間動力供給を中止したからでもゝ、商賣人へ對して工業家は商品引渡の期日を契約してる、其商賣人は工業家から引渡を受けて更に之を他に期日迄に納入する契約をしてる、其契約高には期日を違へたら損害賠償がついてる然るに大阪電燈會社の夜間動力の供給がないとなると製造工業家は必ず仕上期日に手違ひを生ずるそれが順々に影響し、甲から乙、乙から丙、丙から丁といふ風に悉く契約商品の引渡期日の遲延を致し、商取引上の大紛紜を來すことであらう、それはそうとして此に恐るべきはそれが爲に受渡に苦情がつき、年內に受取るべき金が受取れぬとなると、此に不幸にも不渡手形が澤山に現はれねばならぬ、大きい店が一つドカンとやられると、其處から振出された手形の所持者は悉く累を蒙むる、資力のない者は捲添へを喰つて同しく不渡を出し、商賣人としての取引が全然停止されて了ふ。夜間の動力供給休止？之が若し氣の早い騒取に起つたらどうであらう。その騒ぎ方は非常なものならん。銀行家が目を皿大にして警戒を一層嚴重にしだしたのも、時節柄無理からぬことである。

年內警戒の網は四方八方に張り詰められた、此の網の目は容易に潜りぬけることは出來ない、人氣は年迫りて危險騒動もすれば人を嚙まんとする、船を覆へすは巫峽の水ばかりでない、車を摧くは大行の路と限らぬ、百甲突の智も金融界の恐ろしい見張は突破できない、歷々たる白拗の解旋排近けりの落つかぬ爲特に痛切である。——十一月七日

資本金に喰ひ込める
——大阪電燈會社の缺損
…老獪橫暴極まる重役を排斥せよ…

其資本金は當節柄から云へば僅に二千百六十萬圓拂込濟、決して日本の最大會社とは云へぬが、事業の獨占であり堅實であり成績優秀配當一

割二分の永年持續で積立金も多いと云ふ大阪電燈株式會社は、大阪一の優良會社として其の社長の實業社交界の地位は一等上席を占めたものだ、それが今は過し昔の夢となつて社運日に月に窮まり。其財政整理は尾羽打枯した貧乏華族の臺所のやうな慘めな狀態を世間に暴露し、今期無配當を厚言されてる位である。

社債が五千萬圓もある、借入金が一千一百萬圓もある、それに業績はと見れば火力發電用石炭代八十萬圓之に對する電燈料金收入六十萬圓、郊外電車の電力收入二十七萬圓合計八十七萬圓、此の內から機械の償却も營業費も借入金の利子も支拂はねばならぬ、かゝる狀態に逼迫してた會社が前期に依然一割二分の配當をなし、當時の社長田所美治氏はうまい事づくめの營業成績を發表したものだ、田所氏は專務の千頭茂壽氏と俱に會社の最大有力株主にして且つ重役なる島徳藏氏と衝突して退任したが、斯る會社の內狀を知らずして社長席に就て嘸ぞや驚いたとであらう、大阪一の優良會社が之れであるから會社と云ふ奴は內狀を探つたら悉、之以上の弱點があるものと見當をつけても差支なからうやうにも思はれる、田所社長が良心に背いた營業報告をして世間を欺いたのは文部次官と云ふ前職に對しても愧るであらうが、田所より以前の社長永田仁助氏專務の坂野鐵次郎氏等も、齊しく世間を欺いて居た責は免れまい。

大電には人物は決して乏しくない、新進有爲の士が營業部にも技術部にも居るが、之等の人達の力を伸はす餘地のない程に會社は重役專制主義であつた、當局者の經營其宜しきを得ざることは社中の若い腕利は知つても知らぬ振で改革の時期到來を待つのみであつた、その改革の日がとう〳〵來たのである、若い人達の大に働くべき時代が來た以上、會社が如何に改善せらるべきか蓋し刮目して見るべしである。

元來會社が今日斯る悲運に到達せねばならぬのは會社ばかしの罪ではない、遞信當局が少量發電機据付は國家經濟上不利益だと云つて大量發電機据付を奬勵し、出來る丈け發生場所を集中する政策を採らしめた、之が爲に大電も當局の主義政策に則つて大量發電機を据付け各郊外電鐵への送電を引受けたのである、之がそも〳〵失敗の原因で、大量發電機の成績不良、それに石炭は益暴騰する、其責任は悉く大電が背負はねばならぬこととなつた、若し少量發電機主義を採つて居て、各郊外電鐵それ〳〵据付けて自家用發電としてたなら石炭暴騰より來る損失も各社で分擔するから、大電が今日郊外電鐵送電の爲に月々四五十萬圓も損失すると云ふ不幸に陷らぬのであつた、而して其當局者の一人として後に大電專務となつた大阪遞信局長坂野鐵次郎氏の不明の責は免れぬ、詰り坂野氏は官に在りて斯る誤れる政策を採り。後民間にトり大電專務として世間を欺いて營業の益々良好なると假裝してた二重の無責任を遁れることは出來ぬ。

發電機不完全の爲に大阪電燈は終に夜間の動力停止を斷行した、巳むを得ぬこと乍ら大阪工業界の打擊は年末最も忙しい際非常なる脅威を感じつゝあるのである、而も田所千頭兩氏去りし後島徳と寺甚の勢力を代表する代擬社長宮崎敬介氏も大株外務理事、日本水力副社長其他忙しい仕事を持つ傍既倒回瀾を到底駄目なりとし目下專任社長專務物色中と云ふ風で、かゝる際大會社に腰を落付る社長專務なしに其日を空過すると云ふのは各重役の無責任も亦甚しいと云はねばならぬ。惟ふに大電の大缺陷は無論重役其人を得ざるにあるが、人材鐵の如く集れるに拘はらず彼等を適度に配置し優遇して一生懸命に働かすの途を講じないといふのが一番の缺點である(會社職員中怠業の開祖は大電なりし程に社員を優遇せざりしなり)技術顧問も先づ其人を得、技師、各課それ〳〵長敏腕家を得ながらかゝる狀態に陷らしめし重役の責任は、株主としても將た猶

占の性質を帶びた公益事業たる點から大阪市民としても鼓を鳴らして、徹底的に彼等我利々々重役を詰責せねばならぬ。

日本水力電氣會社の前途

島徳、宮敬、山條等の計劃せる

……彼等の惡辣なる遣口を驗せよ……

近頃大阪に日本水力日本電力の二大水力會社が起つた、孰れも五千萬圓の大會社で、日本電力は中橋系、日本水力は野田遞相の庇護を受けてると稱せられてる、日本電力は創立總會も濟まぬから次に讓ることゝし、玆には日本水力を批評しやう。

日水に就ては「ダイヤモンド」其他に隨分手嚴しく評論されたが、其内容には不思議な點が少なからぬことは爭はれぬ事實だが、それは咎立てをしないとして、さて大阪現物團と云ふ老猾な手合と秘密内約を結んで公募の記錄を破り、世間の空景氣を呼起したが、其れには振替募集法なる奇抜千萬なる方法を用ひたのである。其方法は申込證據金無くとも信用手形又は對人信用で申込むので其證據金は現物團で一時申込者に貸金となし現物團は之に對して日歩を徴するのであつた、這う云ふ手段は惡辣なる相場師仲間では無類の便法なりとして大に歡迎されたかも知れないが苟も水力電氣と云ふ堅氣中の堅氣の商賣をするのに斯る方法を採つて株を煽らねばならぬ必要は何處にもないのである、且つ斯る手段を以てして三千七百倍の申込を誇るなど、具眼者から見れば日水と云ふ新設會社の遣口の不健全なることが、略ぼ想察せらるゝのであつた。

日水の發起人は現物團とグルになつて狡猾なる手段を以て株を煽り、兩者の懷勘定を有利ならしめた、いづれ發起人中にはモウ資本家に株を賣付けて利金だけを喰つたのもあらう、之等は泡沫會社發起人の遣る事で、堂々たる國家的公益的事業たる大電氣水力會社の創立には斷じて行ふべからざる商手段である。而も悲しいかな、該會社の發起人の頭株に島徳藏、宮崎敬介、山本條太郎などゝ云ふ天下札付きのしろものでも居る。之等財界に於ける危險人物によりて企てられたる日水は將來どうなるのであらう、眞面目なる資本家は斯る手合の計劃する事業に賛同投資するに恥辱としないであらうか、山本條太郎と云へば最早定評のある男だ、宮崎敬介もそうだ、此兩名を關東關西に配置して采配を揮ふ島徳藏は株屋の出身で金以外何ものをも考へぬ男である、かゝる手合のする事業に關與し又は使用せらるゝ人達の精神状態を解剖して見たい位である、噂によれば遞信省の勅任技師中澤某といふ男も島の手下となる内約成立したと云ふことである、恐らく野田遞相は日水幹部の爲人を知らぬのであらう、或は之を知つても彼等の事業監督上の才を愛して、暫らく彼等に庇護を與へつゝあるのであらうか？

島一派の惡辣非紳士的行動は日本電力が五萬株を公募に附した際内一萬株は現物團の緣故ある先へ分配したが殘部四萬株は反對會社の采配を振る島徳が、何人かの名義で買占め、普通の申込者には一株も渡らなかつたと云ふことだ、公募當日午前九時滿株締切りとは、如何にも世間を喰つた所業ではないか、たゞし島徳一派や大阪株式現物團や大日本證券株式會社などの北濱育ちの連中には斯ることは不徳とも不信とも思つて居なく、大々成功とほくそ笑んで居るかも知れぬ、イヤ實際日水及び日水系の面々は斯る徒輩の集團であるのだ、して見れば日本水力といふ山本條太郎を社長に宮崎敬介を副社長にして後ろに島徳の陰の手が伸びてる會社の前途果して如何、疑問！疑問！

自由の要求と民衆の勝利

野村隈畔

一

『凡ての人間は生れながらにして自由平等である。』この古典的なそして藝術的な表現は、現代の吾々から見ていかに空想的な非現實的なものであるとしても、眞に吾々が吾々の內面性のうちに眞面目に歸へるとき、それは人類最初の詩的表現として肯定しなければならない。

そして吾々が現在惱みつゝある凡らゆる文化問題、特に吾々の生活に最も强烈に突進的に肉薄してゐる勞働問題の解決は、先づこの詩的表現の眞理を肯定してからかゝらねばならぬ。若しこの空想的眞理を否定せんか、それは到底勞働問題の如き重要問題を徹底的に解決し得ないのみならず、凡ての文化問題を未解決のまゝに無意識のまゝに、放任するであらう、放任は同時に自由の否定である。

或る人は言ふであらう、人間は生れながらにして何處に自由があり、平等があるか、そして又吾々の現實生活のいづこに自由があり平等があるか。若し人がかゝる空想をもつて生活の流れに突進したならば、直に幻滅悲哀に遭遇するのみならず。吾々の生活乃至文化は悉く破滅に陷いるであらう。從つて吾々は現代維持をもつて生活しなければならぬと。

けれども余は反問する、謂はゆる現狀維持といふ結論はいかにして引出し得るかと。生活における現狀維持は放任主義であり、自由の否定主義である。吾々は自由を肯定して何故に幻滅に遭遇するであらう、何故に生活乃至文化の壞滅を招ぐであらう。吾々の生活乃至文化は畢竟して自由の表現ではないか。

尤もこの詩的表現を誤解してはならぬ。人類は初め自由平等で生れて來たが今はそれを失つたとか、或は今は全くそれを失つてゐるが、遠き將來において獲得するかも知れないとか、と考へてはならぬ。自由平等は決して人間が過去の黄金時代に有つてゐたものでも、又遠き將來のユートピアにおいて獲得する

ものでもない。それは吾々が現在有つてゐるものである。否吾々は現在において何時でも自由平等であるのだ。

そしてかゝる詩的表現は決して古への詩人や宗教家のみの空想ではない、吾々は現在において切に自由平等を憧憬してゐるのみでなく、又吾々の敬愛する、そして最も深い思想に徹底した現代の哲學者すら、尚この表現の眞理を裏付けてゐることを忘れてはならぬ。

余の識つてゐる或る若かき哲學者は嘗つてかう云つた。『赤子の出生は偉大なる範疇である』と。この思想は『人間は生れながらにして自由平等である』といふことを、最も赤裸々に露骨にそして一層積極的に表現したものである。生理學者や産科醫師はこの表現を聞いて、定めて噴飯するであらう。そして人間は發狂しつゝあるといふであらう。けれどもそこに否定すべからざる、偉大なる永遠の眞理がある。吾々から見ると、生理學者や産科醫こそ正に發狂してゐるのである。

又佛國の最も深遠なる思索家ベルグソンも、かう言つてゐる、『吾々は現に自由である、併しそは定義することは出來ない、何故なれば吾々の言葉は自由を顯現すること出來ないからである』と。

彼れがこの思想を表現するために、いかに徹底的に考へ抜いたか、いかに多くの理論と學説とを渉獵したかは、今こゝに贅言するを要しない。併し彼れの深遠にして且つ複雜なる思想の結論が、單にこの『吾々は自由である』といふ一句にあるとすれば、吾々は思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。

吾々は自由であり、平等である。それは過去にあつたのでも、將來に來るものでもなく、現在においてゞある。從つて吾々は『凡ての人間は生れながらにして自由平等である』といふ表現を、何等の疑惑もなしに、そして何等の條件もなしに承認することが出來るであらう。

吾々はこの眞理を徹底的に承認して初めて文化問題を解決すべきである。何故なれば、自由平等の眞理は今や民衆一般の要求するところであるから。從つてこの眞理から眞劍に勇猛に出發しなければ、何等の解決をもなし得ないであらう。殊に勞働問題において然りである。

勞働問題の解決には同盟罷工も必要であらう。賃銀の倍額請求も必要であらう、普通選擧權の獲得も必要であらう。更に勞働組合の設置も必要であらう。又米國まで猫も杓子も行つて視察する必要もあるであらう。是等の必要であることは今更説

明するまでもない。併しもつともつと必要なものがある、若しこれを忘れたら以上の必要は凡て無意味に終つて了ふ。然らばそれは何だ、言ふまでもなく自由平等の徹底的實現である。

若し自由平等が徹底的に實現されむか、そして凡ての個人、凡ての民衆、凡ての人類が生れながらの自由平等を獲得せんか、そこに何の爲めの同盟罷工であらうか、何の爲めに賃銀の增率請求をするであらうか、普通選擧權に何の價値と効果とが有らうか、そして又何の爲めに組合とか團體とか煩はしいものを造る必要があらう。それらは畢竟、吾々の自由平等を沮礙するものではないか。

けれども余はそれらを全然無意味とするものではない。又文化問題特に勞働問題の解決を不必要とするものでもない。否余はその日その日の生活の苦しい壓迫から、生活の凡らゆる方面における自由の剝奪に對する憤慨から、出來る限りの手段を取ることは必要だと思ふ。併し余は特に吾々に迫つて來た勞働問題の徹底的解決を欲するがために、そしてその徹底的解決の美しい結果に憧がるゝが故に、その根本的立場を提供しようとするのである。

そして余は思ふ、吾々が生活の凡らゆる方面における自由平等を獲得することによつて、初めて吾々の勞働問題が徹底的に解決され、そしてそこに眞の文化即ち自發的な獨自の文化の創造や建設が可能なのである。そして自由平等の獲得といふことは、現代における民衆一般の熱烈な普遍的な要求である。たとへ自由平等そのものは問題だとしても、この普遍的な要求を否定するものは恐らくあるまいと信ずる。

二

しかし民衆一般が要求する自由平等とは果して何であるか、それは物資生活の大なる餘裕であるか。資本家や官僚政治家と共に酒を呑み、共に色を談じ、共に同乘して同等の歡樂を極むることであるか。或は勞働組合の根柢を固ふして、永遠に彼等と對抗して行くことであるか。若しくは更に彼等の上に立つて彼等を支配して行くことであるか。

若し凡ての人間が生れながらにして自由平等であるならば、彼等民衆一般は何故にそれを故らに要求する必要があるか。若しその自由を失つたとするならば、それはいかにして失つたのであるか。若しその自由を再び獲得し得るとするならば、それはいかにして摑み得るか。

更に吾々が自由平等を要求するのは、經濟生活や政治生活においてのみであるか、或は道德において敎育においてその必要はないか、或は更に宗敎において藝術において、若しくは科學や傳說においてその必要はなきか、尙一步進んで吾々の信仰において、行動において、躍進においてその必要はないか。

要するに自由とは何であるか、そはいかにして、いかなる方面に獲得すべきものであるか、といふことが吾々の最初のそして最終の根本問題である。この根本問題を明かにして初めて、それを水火の如く渴望してゐる民衆が、果して獲得に勝利を得るや否やが明瞭になつて來ると思ふ。

ところがベルグソンも言つてゐるやうに、自由は定義することが出來ない。それを吾々の言葉の上に具象的に表現することは出來ない。いかに卓越した畫家と雖も、自由の色彩、濃淡、陰影、光暗等を如實に描寫し得ないであらう。いかに徹底した宗敎家と雖も、自由はこゝにあり彼處にありと示すことは出來ないであらう。それは無理もない、人類のうちで一番深く考へ拔いた哲學者すら、遂に定義することと出來ないと斷言してゐるのである。けれども自由は決して無いのではない、吾々は無いものを痛切に要求してゐるのではない。それは確實に在るのである、その存在の確實は吾々自己の存在の確實よりも强固である、何故なれば吾々は自由のあることによつて、初めて自己のあることを意識するからである。併し吾々はその確かにある自由について、明かに話すこと出來ないのである。若し話し得るとすれば、そは『吾々がこゝに存在する如く自由も存在する』と言ひ得る位に過ぎない。

併し自由の裏面から消極的にいふならば、そは幾らでも說明が出來る。尤も決定論的說明は却つて自由の本性を不明瞭にするのであるが、それでも或る程度まで說明してゐるのである。若し決定論的說明に陷いることを注意するならば、吾々は自由の何ものであるか、いかに吾々の本性に接近してゐるものであるかを理解し得ると思ふ。そこで余はこゝに思ひ切つて平凡な、常識的な、そして心理的な立場から、自由の何ものであるかを明かにしようと思ふ。(實は余は是迄殆んど飽きるほど、厭になるほど自由について饒舌つてゐる。余の小著『自我批判の哲學』は、自由の內面的說明であると言つてもよい。余の近頃書いたもので自由に關係してゐないものは、一つもない。だから讀者は定めて厭氣がさしてゐるだらう。併し余は徹底するまでそして自分で心行くまで、自由について饒舌るつもりでゐ

る。余は自由を讃美して死にたい。」

三

吾々は身體をもつてゐる、これは誰も疑ふものはないだらう。併し身體を有つてゐるといふことは、既に誤つてゐる。吾々が身體を所有してゐるのでも、又身體が吾々に所有さるゝのでもない。吾々と身體とは一つである、卽ち身體は吾れであり吾れは身體である。身體は全一的なものである。

ところが吾々は身體を有つてゐるといふ。恐らく身體を有つてゐなかつた人は、人間の存在して以來決して無い筈であるのに、そして吾々が存在しないと信ずる幽靈でさへ、何等かの身體をもつて現はれてゐるのに、吾々は特に力を入れて身體を有つてゐるといふ。そして誰もそれを盜まうとか取らうとかしないのに、特に『これは俺の身體である』といふ。かくして全一的な身體は二つに分割されて、『俺れ』と所有さるゝ『身體』となつた。併しこの二つは未だ曾つて全然離れた例しはない。

然るにこの分割された身體は又二つに分割された、それは卽ち精神と肉體とである。或は靈と肉とも言はれてゐる。そして『俺れ』が『身體』を所有してそれを支配してゐるやうに、精神が肉體を所有してそれを支配してをると信じられてゐる。そして又肉體は當然精神に支配さるべきもの、服從すべきものと考へてゐる。ところが生理學者に言はせると、身體は全然同一の細胞と組織とから出來てゐて、精神と肉體との區別はどこにもない。たゞ一つの生命が活動してゐるのみである。

身體が精神と肉體とに分割されると、こゝにその關係を表現する觀念が生じた。卽ち道德觀念もしくは人格觀念である。そして精神が完全に肉體を支配し、肉體が從順に精神に服するのが道德的である。そこに吾々の人格があると考へられる。この思想が吾々の生活を指導して、種々の習慣や傳說や形式を構成する。けれども精神は何故に肉體を支配すべきであるか、肉體は何故に精神に服從すべきであるかは不明である。

この思想は更に種々の思想や理論を發展する。唯心論や唯物論の哲學や、經驗論や唯理論の認識論などは、この分割思想から生じたものと思はれる。この思想がだん／＼發展すると、その間に種々の葛藤や軋轢が生ずる。一方に精神もしくは靈の絕對權を認めるものがあると、他方には肉もしくは肉躰の絕對權を主張するものがある。前者は宗教的で道德的である（普通の意味で）が、後者は反逆的（普通の意味で）である。更に精神と

肉躰、靈と肉との一致もしくは一如を主張するものがある。メレヂユコオスキの靈肉一如說は、その代表たるものである。肉の絕對權を主張する反逆思想の魁なるものはニイチエである。彼れはかう言つてゐる、

『吾れは肉躰と精神とである、さう子供は言ふ。併し人は何うして子供のやうに言はないだらう。

けれども覺醒した賢明なものは言ふ、肉躰は吾れの全部であり、その外に何者でもない。精神は單に肉躰の或るものに對する言葉である。

肉躰（der Leib は肉躰といふよりも「生」と言つた方が適當のやうに思ふ）は一つの大なる理性である、一個の意義を有つた複數である、戰爭と平和である、家畜と牧人である。肉躰の道具は又その小さい理性である。兄弟よ汝が靈と名くるところのものは、大なる理性の道具であり玩具である』（also sprach Zarathustra）。

分割はこれのみではない、更に重要なる分割は精神の內部に起つた。そしてこの分割は人の習慣と結び付いて、複雜多樣なる發展を遂げた。そこに無數の絡み合ひと反目と、鬪爭と、悲哀とが生じた。吾々の生活は今やその無數の分割と無數の軋轢との間に、殆んど消滅せんとしてゐる。

それは征服欲と服從欲、支配欲と歸命欲、命令欲と遵奉欲との分離である。ニイチエが『權力意志』といつたのは、卽ちこの征服欲もしくは支配欲である。征服及び服從の觀念は既に精神と肉躰との分離において現はれて居るが、併し精神卽ち意識內の分割はもつと密接な、もつと複雜な、そしてもつと强固なものである。哲學者はこれを理性と感性とに分類した、理性は支配欲で感性は服從欲である。この二性は前の分割と結びついて、理性は精神に屬し感性は肉躰に屬するものと考へた。

併し吾々の直接の意識內には、いづこにも理性と感性との區別はなく、支配欲と服從との鬪爭はない。意識は吾々の身體と同じく全一的獨自的のもので、その中にたゞ一の生命が自己の創造欲を擅にしてゐるのみである。勿論意識は極めて複雜なものであるから、その中に種々の性質的な異性的な要素を包含してゐる。けれどもそれは絕對に分割すべからざるものである。

ところがこの意識の分割は驚くべき發展を遂げたそは殆んど人間の思索し瞻睨する能はざるほどの神秘をもつて發展した。人間はその偉大なる發展と神秘なる創造とを誇りとして讃美した。そして彼れも自己の有した唯一つの生命を奪はれて了つた

のを忘れて、その燦然たる分割を喜んだ。

然り！支配欲と服從欲との分割は實に現代文化の根柢である。それは吾々の政治を造り、國家を造り、道德を造つた。それは吾々の哲學を造り、宗教を造り藝術を造り、更に科學と器械とを造つた。それは吾々の觀念を造り、習慣を造り、傳說を造り、歷史を造つた。それは吾々の思索を造り、方法を造り、比較形式を造つた。そしてその造られたものゝ上に、悉く自巳の捺印即ち支配欲と服從欲との相對性を刻み付けた。

そこで吾々の生活乃至文化は、いつのまにか相對性の支配するところとなつた。アンチノミーの暗鬪場裡となつた。吾々のみがそれを培育し愛養し、それによつて自己の純なる自由なる生命を發展さして行くべき生活乃至文化は、全く吾々の知らざる二人の凶悍によつて占領され、さへなまれてゐるのである。そして相對性の捺印は深く生活の根柢に喰ひ込んで、容易に取除くことが出來なくなつた。

吾々の政治は支配階級と服從階級とに分れ、經濟は資本階級と無産階級とに分れてゐることは、現に何人も知つてゐる。そしてそれは最も硬化した最も執拗なる相對性の表現である。併しこれのみではない、道德においては善と惡、哲學においては眞と僞、藝術においては美と醜、宗教においては神と人、科學においては合理性と不合理性との對立となつた。是等は皆その根本である支配欲と服從欲との抽象的代名詞である。即ち對立の前者たる美や眞や善や神は、支配欲もしくは絕對命令の表現であり、そして後者の醜や僞や惡や人は服從欲もしくは絕對歸依の表現である。若し是等の對立を悉く徹去せば、吾々の文化は根柢から顚覆するかの如き觀を呈してゐる。

文化の各方面における對立は、更に發展して集團的對立を釀成した。即ち哲學や宗教や藝術や歷史が結合して、科學や道德や政治や經濟や自然等に對抗しようとしてゐる。從つて前者は大體において支配欲を代表し、後者は大體において服從欲を表現するものと看做される。然るに複雜なる文化においては、服從欲を代表する政治や經濟や道德は却つて支配欲の權化たる資本家や權力家に味方し、支配欲を表現する哲學や宗教や藝術は之れに反して服從欲の權化たる勞働者や一般民衆に加勢しようといふ奇現象を呈してゐる。かくして相對性の絡み合ひもちれ合ひは、ます／＼複雜にます／＼奇妙になつて行く。

之れと同時に文化における奇妙なる對立を一層神秘にし、一層幻惑するために、人間意識の最も深い部分即ち信念とか信仰

とかいふ部分まで、徹底的に對立化しようとする一般の運動がある。勿論この運動は一方に謂はゆる學問の發達を助成するものであるが、他方には文化の對立をその極致に導いて吾々人間を破滅に陷し入れようとしてゐる。そして主としてこの運動に當つたものは宗教と哲學とである。

今哲學の造り出した二三の對立概念を擧げて見れば、規範と自然、自由と必然、當然と存在、價値と事實、その外之れに似寄つた對概念は澤山あるが、以上はその重なるものである。そして是等の對概念は今や全く徹底的に分離して、永遠に結合し融合することの出來ないものとなつてゐる。その間には永遠に超ゆることの出來ない廣大なる溝渠がある、人間は早晩この暗黒なる溝渠に落ちて、そして疲れ切つて溺死すべき運命である。

こゝに面白き一つの偶話がある。それは斯うである、むかし精神界に一人の女神があつた、その女神は『自由』と呼ばれてゐた。彼女は非常に若々しく美しくて、そして純潔であつた。ところが突然他國に飛び出して旅行を初めた。彼女は旅行中墮落して子を孕んだ、それは『必然』の子であつた。彼女は姙娠の苦痛に責められて故鄉を懷ひ出した。けれども遂にその故鄉に歸へり得ないで悶死したといふことである。

この偶話は單に精神界に自然界、自由と必然との對立を彩つたものであるが、併しこゝに深い意義が潜められてゐないだらうか。現代における吾々民衆の運命を嘲けつてゐるやうな、淋しい物凄いそして避くることの出來ない何者かゞ、漂つてゐないだらうか。支配と服從との對立欲の發展もこゝまで來ると、實に巧妙を極めたものであつて、殆んど識別し得なくなつてゐる。そして吾々の習慣はます／＼その識別を不可能にして行くのである。

四、

以上の單純な心理的觀察によつて解かるやうに、現代の文化は徹頭徹尾、分割の文化、對立の文化である。從つてそは永遠に反目の文化、闘爭の文化、そして遂に溺死すべき文化である。この對立と分割とを取除けば、根柢から瓦壞すべき文化である。そこで問題が起こる、文化における凡ての分割と對立とは果して意義ありや。果して根本的のものなりや否や。

この問題に對しては吾々は自證的に確信的に、斷然次のやうに答へることが出來る。曰く文化における凡ての對立と分割と

は全く無意義であるのみならず、それは吾々の生命を根本的に枯渇せしむるものであるから、徹底的に取除かねばならないと。

この解答は、吾々が今まで漠然と考へて來た自由の何であるか、そはいかにして又いかなる方面に獲得すべきものであるか、といふ問題の大半を解決して居るものと思ふ。從つて目下問題にしてゐる勞働問題の文化史的意義をも、基礎づけてゐるものと考へてよい。

人或は反對するであらう。人類が多年の間かゝつて造つて來た、文化の基礎とも骨組みともいふべき凡ての對立を取除いて何うするか。現代の美しい文化を根本的に破壞して何うするか。善惡の觀念を取除き、虛僞と眞實とを抹殺したならば、人間の倫理道德は何うなる。眞理に對する憧憬と價値に對する要求とを否定したならば、吾々の偉大なる哲學は何うなる。圓滿聖淨の神とそれに對する歸依信頼の感情を沒却したならば、吾々の壯嚴なる宗教生活は何うなる。更に因果律の如き相對觀念を無視したならば、科學の研究と文明の發達はいかにして成し得らるゝであらうか。

吾々の現實生活を見ても解かるではないか。天と地と對立し、晝と夜と對立し、陰と陽と對立し、男と女と對立し、親と子と對立し、君と臣と對立して、自然界も人事界も圓滿に調和してゐるではないか。眞の調和は對立があつて初めて可能である。從つて吾々の經濟界においても、資本と勞働とを完全なる對立があつて初めて產業が發達し、又政治界においては支配階級と被支配階級との分が定つて、初めて國家の發達と人民の安寧とを增進し得るではないか。

孔子も言つてゐるやうに、君は君たり臣は臣たり、父は父たり子は子たりで、上下の分が明かに定まつて而して後國治まるのである。上はよく下を愛し下はよく上の命に從ふところに、人間生活の美點がある。つまり現代における勞資協調といふことも、眞意はそこにある。このことをよく腑に落して考へなければならないと。

この反駁は隨分徹底したものである、そして稍々辛辣で老猾なところがある。特にその最後に時代問題を道德的に結んだ手際は、人をして服從せしめずんば止まない。けれども吾々は何時迄も瞞着されて居るものではない。吾々は何時までも舊觀念によつて囚はれてゐるものでない。そして吾々は最早や分割的對立の文化を、何時までも謳歌してゐられなくなつてゐる。吾々は既に文化における凡らゆる對立と分割とがいかにして生じ

て來たか、その結果は畢竟何らなるかを徹底的に考へた以上、最早いかなる反駁をもつて來ても、それに捲き込まるゝものではない。余は余の立場を誤解さるゝことを避くる爲めに、反對者に對して左の反問を提出しておから、曰く文化における凡ての對立は何者が造り出したものであるか。

統一的全一的であつた身體が、「俺れ」と「身體」「精神」と「肉體」とに分割されてそこに何事が起つたか、それは言ふまでもなく身體それ身體の生命の消失である。又統一的持續的であつた意識が支配欲と服從欲、それに隨つて種々の對立概念に分割されて、そこに何事が起つたか、それは言ふまでもなく意識それ自身の自由の消失である。全體的綜合的であるべき文化が價値と事實、神と人、支配階級と服從階級とに分割されてそこに何事が起つたか、それは言ふまでもなく文化それ自身の獨自性の消失である。

ところがこの生命といひ、自由といひ、獨自性といひ、吾々の生活における根本意義であり、第一義諦である。何故なれば之れなくしては、生活における何等の創造も發展も乃至は價値も生じ得ないからである。從つて凡ての對立はそれ自身の意義を維持することも出來ないからである。然るに分割的對立の上にのみ立つてゐる文化は、既にその根本生命を失つてゐること明かであるから、たとへそれはいかなるものであつても、吾々はその意義及び價値を承認することは出來ない。

そこで吾々の要求對象が何であるか明かである。それは言ふまでもなく自由であるが、この自由は決して必然に對立した獨立のものでなく、又凡ての分割的對立の上に考へられた關係的のものでなく、却つて凡ての分割と對立とを超越した統一的全一的のものである。即ち身體においてもその對立を超越し、意識においてもその對立を克服し、文化においてもその對立を徹去した境地、最後には身體と意識と文化との三者を全一的に融合した境地、そこが眞の自由である。現代民衆の一般に熱望してゐる。眞の自由平等といふことは、かゝる境地に達してのみ獲得し得べきである。

從つて吾々はいづこに自由平等を獲得すべきかといふことも明白である。それは單に政治や經濟の範圍においてのみ獲得すべきものではない。教育においても、道德においても、法律においても、宗教においても、哲學においても、藝術においても、乃至總じて文化の全局に渡つて獲得しなければならぬ。前にも言つたやうに、時代の文化の徹頭徹尾、分割と對立との上に形式

的に生氣なく組み立てられたものであるから、これを根本から改造して全く獨自の文化を創造しなければならない。即ち政治においては支配階級と服從階級とを撤廢し、經濟においては資本家階級と勞働階級とを撤廢し、社會においては貴族階級と平民階級とを撤廢し、敎育においては官學と私學との區別を撤廢して、從來の凡らゆる階級思想乃至對立思想を根絕し、道德においては善と惡との對立を超越し、哲學においては經驗と概念、價値と存在との對立を超越し、宗敎においては神と人、聖淨と罪惡、尊嚴と歸依との迷信的對立を超越し、藝術においては美と醜、象徵と表象、趣味と功利との對立を超越して、從來の文化を根本的に改造しなければならぬ。即ち益々民衆が必死となつて從來の文化と全然違つた新しい文化、統一的全一的持續的創造的な文化、習慣や傳說によつて與へられた文化でなくて、必然的内面要求によつて自發的に表現する文化を建設しなければならぬ。獨自的文化の創造は即ち吾々の自由平等を獲得する所以であり、吾々の自由平等はたゞ獨自的自發的文化の創造によつてのみ實現せられる。こゝに吾々は深遠なる自覺と徹底的な勇猛な覺悟とを要する。そして亦こゝに吾々は、勞働問題と自由要求との内部關係、及び文化創造との外部關係と理解すべきである。この理解があつて初めて吾々は勞働問題を徹底的に解決し、同時に民衆一般に眞の自由平等を與へて、その純一な生命を培養し發展せしむべき文化を創造し得べきである。

五

自由は初め純一な全的な生命の流れの中にあつた、持續的な渾一的な創造の中にあつた、飛躍的な突進的な行動の中にあつた。そこに未だ何等の分割も對立も概念もなかつた。そこには凡ての人間は悉く自由で平等であつた。そして凡てのものはヴイタルに接觸することによつて、悉く價値を有つてゐた。

ところが人間は自己の習慣に欺かれて分割と細工とを初めた、彼れは全一なものを分割し、持續したものを切り離し、流れてゐるものを堰き止めたりした。それは彼れに一種の美感と多少の興味とを齎らした。從つて彼れは自己の努力に對して、滿足と誇りとを感じないわけに行かなかつた。かくして人間はます／＼習慣の誘惑に陷つた。

然るに運命といふか必然といふか、習慣と分割とは切つても離れないやうな親密な關係を有つて來た。そしてこの二つは互に相助け合つて、ます／＼複雜にます／＼緊密に對立構成をつ

とけて行つた。習慣に誘惑されてそれに從つてゐる人間は、二者の關係と發展とを何うすることも出來なかつた。そして習慣と分割とは人間の歡心を買はんが爲めに、出來る丈けの便宜と幸福とを提供した。人間はその提供を甘受して歡樂に耽つてゐる間に、自己の生命であつた自由の世界を全く占領されて了つたのである。

人間が覺醒した時は既に遲かつた。丁度人が睡眠中に火事だといふ叫びを聞きて驚いて起き上がつた時には既に火の手が家の檐下を周つて出ることが出來ないと同じく、人間がその歡樂に飽きて目を醒した時には、既に彼れの自由は全く分割の爲めに切り細ざかれて、手も足も出ないと言つた有樣である。生活や文化の孰れの隅を見渡しても、既に悉く分割と對立の爲めに深く掘り返されて、靑々した自由の草地は一歩も見當らない。彼れは哀れにも全くその自由の生命を褫奪されて、無一物となつてゐる。彼れはたゞ辛ふじて體驗や象徵の世界において、自己の自由を眺めてゐるに過ぎない。

それのみではない、人間は今や自己の自由を奪れた上に、分割と對立との重荷を負はされて窒息するほど喘ぎ呻めいてゐる。人間は果して何の罪ありてか、かくも自己の自由を奪はれかくも殘酷な重荷に苦まねばならないか。彼れは初め純一な無垢な自由の子であつた。彼れは創造と飛躍とを唯一の喜びとした生命の子であつた。彼れは何者にも支配されない、何者にも束縛されない、そして何者にも脅威されない『唯我獨尊』の子であつた。然るに今は何だ、この見苦しい藻掻き方は何だ。人間の痩せた憔へてゐる體を見よ！　初めは絕對の權威と尊嚴とを有つた、そして今は一片の器械にも一個の金塊にも値ひしないこの體を見よ！　ああ眼をそむけるな、その憔へてゐる灰色の肉體を見よ！　その體の上の重荷を凝視せよ！　そしてその幽かな呻めきを聞け！

あゝ哀れな人間よ、汝の柔かな小さい背には、いかに多くの重荷があることよ。經濟の重荷の上に政治の重荷があり、社會の重荷の上に道德の重荷があり、宗敎の重荷の上に更に哲學の重荷がある。そして汝の目は潰れ、汝の足は挫けてゐる。汝はその重荷を負ふていづこに往かんとするか、汝はその重荷を負ふていつまで堪え忍ばんとするか。汝はかの習慣の物凄い笑ひを見ぬか、汝はかの分割の惡むべき哄笑を聞かないか。呪はれたる人間よ！永遠の運命に瀕せる人間よ！

人間は今や苦しみのどん底に落ちてゐる。彼れは凡らゆる侮

辱と、凡らゆる重荷と、凡らゆる剝奪とに苦んで、そのどん底から覺醒し初めた。彼れは一旦奪はれた自己の自由平等を再び獲得すべく、猛然として奮ひ起つた。今や人間の自由平等に對する熱望、憧憬、愛慾、實に水火よりも甚だしいものがある。彼れ等は絕叫してゐる、『吾々に絕對の自由平等を與へよ！否らずんば死を與へよ、若し汝の目汝の自由を奪はゞそれを抉き取つて棄てよ、そは汝の自由を失ふよりは福なればなり。若し汝の手汝の自由を奪はゞそれを切り棄てよ、そは汝の自由を失ふよりは樂なればなり。自由は汝の生命である、若し生命を失はば何をもつて之れを償ふや』と。

かくして凡ての人間、凡ての民衆は自由平等を絕叫し初めた。彼等は從來の生活における凡ての分割と對立とを根柢から瓦壞せんとし初めた。先づ初めに經濟における對立を破壞し、次に政治における對立を撤廢し次に社會上道德上における凡ての對立を取除き、最後には哲學や宗教の對立まで根本的に超越せんとし初めた。彼等は幸ひにも『凡ての人間は生れながらにして自由平等である』といふ、永遠の實在的記憶を忘却しなかつた。そして彼れ等は自己の自由平等を體驗において感得し、象徵において實現した。彼等は自由のために自己の眼や手足まで切り棄んとしてゐる、文化の根本改造の如きは茶飯事である。

そして今や吾々の勞働問題は、世界改造の序幕として、文化創造の第一着手として、支配欲と服從欲との最も露骨に、最も不合理に、最も頑强に硬化し峙立した自由の障礙物、即ち經濟と政治とに向つて猛烈に突進して來たことは實に痛快である壯絕であると言はねばならぬ。こゝに勞働問題の永遠に亡びない意義と使命とがある。

然らば勞働問題は徹底的に解決せらるゝか、民衆一般はその要求する眞の自由平等を獲得し得らるゝか、一旦奪はれた自由の獲得において、民衆は果して永遠の勝利を得るであらうか。波斯の詩人エララデーンは美しく答へるであらう。

『或人が戀人を訪ねてその門を叩いた。
「誰だ」といふ聲が中から聞えた、
彼れは「俺れだ」と答へた。すると聲は言つた、
「この家は私とお前とを入れることは出來ない」。
門は開かれない。彼れは悲みながら荒野に行き
一年の間孤獨のうちに斷食して祈つた。
彼れは再び戾つて門を叩いた、
「誰だ」といふ、彼れは「お前だ」と答へた、
喜ばしい門は彼のために開かれた』。

「俺れ」と「お前」「吾れ」と「汝」、「神」と「人」、「貴族」と「平民」「官僚」と「野臣」、「資本家」と「無產者」、「善」と「惡」、「價値」と「存在」、乃至凡ての分割、支配欲と服從欲との硬化し化石した凡ての對立を悉く撤去することによつて、そして純粹な持續的な創造的な全一に飛躍することによつて、民衆は永遠の勝利を獲るであらう。そして民衆自身の自由平等に復へるであらう。

クロンウエル論

彼亦紳士閥の傀儡のみ

山口孤劍

近世科學の光明

中世期の末から全歐洲を通じて商業主義の勃興は、內亂の流血に疲れた國民をして此の爭鬪界を脫却して、更らに眼を自然に注ぎ、自然界の征服に依り、其の新らしき要求を滿足せんとした。而して自然界の征服に鋭意せんとする知識の慾求が、數學、天文、醫學、建築の諸學の研究となり。希臘古文學の研究となり、長き冬に鎖されたる彼等の胸に知識の春を迎へたが、而も彼等の人間歷史の科學的研究と、人生事實の批評的考察を缺ぎたる爲め、半可通の誤謬に陷るの結果となつた。

併し彼の魔術的に自然を觀察する『オツカルチシズム』の如きは、古文書研究の結果、當然生れ來つたものであるが、而も混沌なる中世時代の知識に、科學的組織力を恩惠して、近世文明を光被する。科學の光明は之れより生れた。

高利貸の嚴禁、商賣の制限

知識界の一變斯くの如き時此の間に處する基督教が、復た昔日の態度を維持する能はざるや勿論の事であつた。

教會を以て地上の天國とし、商賣の種類を制限し、高利貸を禁ずるが如きは、當時に勃興したる商業主義と調和するものではなかつた。之等の商業の自由を妨害する信條は新らしき時代の人心を動かすに足らなかつた。此の時中世を支配してゐた基督教の共同的精神が稀薄となり、基督教の個人主義が復活するのは當然の順序であつた。

此の商業主義流行の時代に於て、時代の人心を迎合し、時代の人心を調和せんとして基督教の應用はプロテスタントとゼスイト加特力の二つの形式を以て現はれた、前者がマルチン・ルーテルに依る、後者がイグナチアス・ロヨラを先導者としたこ

とは云ふ迄もないことである。

チユートン人種は種々の形式に依つてプロラスタントに歸依したが彼等の熱心はゼスイト加特力を奉じたるラテン人種を凌駕するものがあつた。而して其の宗教的成蹟もラテン人種に超へてゐた、ラテン人種にもプロラスタントを奉じたものもある。ユグノー教や、カルビン教の如きは之れであるが、前者は加特力の迫害に苦められ、後者はゼネバの如き此の教の本山を有する地方にして、尙ほ其の信徒の數加特力の上を出づることは出來なかつた。

而も北歐一帶チユートン人種を包容する地方は、彼等の宗教的熱情が、蘇蘭に於て、英蘭に於て、和蘭に於て、猛烈なる闘爭して其の凱歌を揚げてゐた。而して其の凱歌を揚げると共に新教的色彩を鮮明にしたか、スカンヂナビア、北日耳曼は未だ其の色彩は微弱であつて、英國の强烈なるに若かなかつた。英國の清教徒主義は歐洲に於て殆んど其の比を見ざる程峻嚴苛酷なるものであつた。

基督教と重商主義の調和

ゼスイト加特力はイグナチアス・ロヨラに依りて先導され、中世時代を支配した加特力の面目を一新したものであるが、中世時代の加特力は單純素朴なる心を以て神に對し、敎會的團體を組織して、其の日常生活は此の團體生活より一步も踏み出づることは出來なかつた。此の時プロテスタントの生れたのは、基督教の個人主義的色彩を濃厚にしたものであつて、中世加特力に對する一大示威の運動であつた。

而してゼスイト加特力は中世加特力の形式を保留して、而も亦プロテスタントと血脈を通じてゐた。されば中世加特力の團體生活に個人を沒却する非個人的の信條に厭惡せる學者も之れを喜び、宗教改革後の國家敎育を彼等の手に歸せしめた。

彼等は宣敎師を野蠻未開の國に送つて異敎徒に基督の福音を宣傳した。其の傳道事業の組織的に、其の傳道的精神の大膽勇猛なる、中世的美點に加ふるに近世的長所を以てした。彼等は文身多毛の蠻人をも神の子として、同胞として、慈眼温腸を以て接したのは、血もない、淚もない、海賊のやうな當時の商業主義と異にして、蠻人を懷柔するに充分であつた。而して蠻人を懷柔するに充分である程、間接に當時の商業主義を發展し、助長することを得たのであつた。

殊に當時の時代精神たる商業主義に調和せしむる爲め、中世

加特力と異にして、プロテスタントと同じく高利貸を禁せず、商業の種類を制限せず自由寛大の精神を以て當時の商人に對したので、彼等は期せずして大なる歡迎を得たのであつた。

清教徒舊約を崇拜す

時代の變遷に依る宗教的變化斯くの如きものある時、此の宗教を背景とする政治に見んか。チャーレス出世は、フェジナンド及びイサベラに依りて企てられた西班牙の統一を成就した。而して同一手段を以て日耳曼に毒手を伸ばさんとしてゐる時、プロシヤ、プレスウヰツク、バベリア、ブランデンブルグ、ヘッセ、カツセル、ウルデンブルグの領主や貴族は、各々封建制度より中央集權の利なるを知つて官僚的國家の建設に歩みを進めた。

チャーレス五世の好敵手たるフランシス一世は、剛毅敏活なる手腕を以て佛蘭西王國の基礎を固め、ルヰ十一世は其の遺業を繼承した。英國に於てはチュードル家が『國王神權』の保護に依り國民を支配するに至つたが、其の唯一の武器たる『國王神權說』は中世の『法門政治』が爲政者的義務を强制したとは大に內容を異にして、專制的に、威壓的に、治者、被治者の關係は頗る峻嚴なるものとなつた。英國清教徒が新約よりも寧ろ舊約を崇拜するの心理は實に這間の消息を示すものだ。

斯くて中世の社會組織は崩解し、舊きは廢し新らしきは興り、國王に依つて貴族とさるゝ者、國王の左右に侍して其の歡を買ふ者、國王の爲めに其の土地を支配する者は人民の上に立つて、人民は國王の爲めに『限界の着いた財產』『步行する動產』となり、彼は『人民に對して統治的責任を神に負へり』といふことを感ずるには頗る遲鈍なるものとなつた。

官僚政治と百姓一揆

一五二五年に爆發したる獨逸の百姓一揆、即ちアナバプテストの運動の如きは、當時國王の奢侈に耽りて、商人より金錢を借りて拂ふ能はず、爲めに苛斂誅求甚しく、殊に國王の債權者なる高利貸の冷酷を憤ふるより、人民の憤激之れに發したものであつて、よし其の運動は破れたが、農民の反抗運動は全歐洲に蔓延した。

此等の百姓一揆に於て、歐洲の貴族等は、農民の反亂鎭壓を名として小貴族ともいふべき騎士を語らひ、其の同盟的協力に依りて農民を一蹴し去らんとした。此時ウルリーク・フォンフ

ツチンや、フランツ・フオン　シツキンゲン等が騎士の同盟を以て農民に加擔し、如何に貴族を蹂かしたか、男子の血を湧かすべき傳奇的英雄譚は此の間に作られたものであつた。

佛蘭西の宗教一揆たるユグノーも、其の名を宗教に托すと雖も、權力階級に反抗すべき立派な階級戰爭であつた。英國はヘンリー二世よりエリサベス朝にかけて、官僚政治の結果より來る財政的窮乏は、勢ひ農民を酷虐して國土爲めに騒擾し、ノースフオルクケツトが率ゐたる一團の如きは、其の勢ひ當るべからざるものがあつた。又一三八一年、農民は暴動して倫敦を襲ひ王ジヨン・オブ・カウントの宮殿を破壞し、カンターベリーの僧正を殺害したこともあつたが、之等は常に權力階級の銃劍に虐殺の運命を負はなければならなかつた。

十六世紀の過半に至りて、封建時代を支配した精神は亡びたが、封建時代の形式は殘存して、此の遺物的形式に潑溂たる生命を與へたのは、實に新らしく誕生した官僚主義であつた。

浮浪漢を絞刑にす

十七世紀に入つて、中央集權政治と官僚制度は確立した。佛蘭西の如きは當時のビスマークともいふべきリセリユーは、此の國の番頭として、國王を擁いで權力階級の利益を圖つた。英國は宰相バーレーの官僚政治の基礎を固むるに汲々として、エリサベス女王に至るや、チユートン家は官僚制度の根元として、權力階級の利益を擁護するに日も足らず、而して此の傾向はゼームス一世に至つて、愈々鮮明になつて來た。

十六世紀より十七世紀にかけて、歐洲に於ける經濟的、宗教的困難は、更らに國民の負擔を重くするばかりであつた。よし商工階級の勃興に依る商業は繁昌しても、自由勞働者（渡り職人）は自由の美名があるばかりで、彼等は奴隷のやうな苦役に甘んぜねばならなかつた。

英國に於ては農奴の田園を捨てゝ都會に走ると、田園は荒廢するばかりであつて、國内多數の浮浪漢を生じて、ヘンリー八世と、エドワード六世は、此の浮浪漢取締りに嚴重なる法律を發布して、數千人の浮浪漢を絞刑にした程であつた。

併しエリサベス朝に於ては、之等の社會的病弊を救ふことは出來なかつた、殊に貧民の爲め職業と食物に給しつゝありし宗教的事業を禁止してから却つて國内に悲慘と罪惡を增加した。此に於てか一六〇一年貧民法を發布して社會の病患を救はんとしたが、此の貧民法は從前より施行したりし貧民法に比して稍

々仁慈なるものであつて、多少の効果はあつたらしい。而も此の世期よりして所謂博愛家、慈善家と稱せらるゝものが、貧民救助に專心したのは、いかに當時の爲政家に依りて製造された貧民法が國內の悲慘を救ふべく其の用を爲さゞりしかを反證するものではないか。

十七世紀の中頃より全國に涉る都市の勃興と、農業の刺戟と改善は、資本家そして其の營利の具たる勞働者の境遇に多少の注意を拂はしむるに至つた。

新教的商工階級の利益

歐洲大陸は英國と其の國狀を異にして、其の國民の生活の悲慘は到底同日の談ではなかなつた。佛蘭西、洪牙利、日耳曼に於て農奴制は未だ全く消滅したものではなかつた。彼等は中世時代よりも市場の競爭に煩悶する地主に依りて、多くの重荷を課せられた。日耳曼ではギルドの職人が多少の勢力を有してゐたが、英人の如く土地を離れて漂泊するものもなく、其の土地を定位した程其れ程生活に鞭たれ、殊に長き激しき宗教戰爭に禍されて、其の生活は『破壞』あるばかりであつた。

當時、和蘭及びネザーランドの新教を奉ずるものは、舊教徒たる西班牙に反逆した。其の時此の反徒に與したるエグモント、ホーン等の貴族は、新教の形式に依る民主々義を唱道したものであるが、畢竟チユートン民族のラテン人種に對する反感の此處に至つたものであつて、其の民主々義は素町人、土百姓の民主々義といふよりも寧ろ貴族の民主々義であつた、紳士閥の民主々義であつた。

民主々義の敵たるアルヴ公は商品に付き十斤、一收入に付き百分の一の苛税を課したが、民主々義のチヤンピオンたるオランイエ公ウイリレムは其徒に捕船免狀を與へて、公海を劫略させた。思ふに兩貴族は、前者は西班牙に、後者は英國に依りて和蘭の利權を爭はんとしたものであつて、羊毛に、絹に、敷物に、製皮に、製糖に、硝子製造に、航海に、新銳の意氣を以て勃興したる商工階級の利益を新教の名を以て擁護したる貴族が、偶々民主々義の名を購ひ得たるに過ぎなかつた。

日耳曼の三十年戰爭は、新舊兩教の相對峙せる兩派が、抗爭久しき間に於て、墺太利の勢力は此の國に侵入し、戰禍に毒せられたる國民は益々兵戈の慘に泣き、中央集權の確立と共に、人民の不幸は更らに其の程度を加へた。

佛蘭西に於ける宗教戰爭は日耳曼よりも寧ろ政治的にして、

其の慘虐は言語に絶し有史以來の大悲劇たるセントバルトルメの虐殺は、人面を掩はしむるに餘りあつた。ユグノーの徒は此の虐殺に一大打撃を蒙つたが、而も其の指導者たるナバールのアンリをして國王の位に即かしめた。併しそれは彼の人物と材幹が王位を擬せしめたものであつて、ユグノー派勝利の結果ではなかつた、即ちユグノー派は佛蘭西に於て其の勢力を養ふべき便宜の地にゐなかつた。

淸教徒の中堅たる商人

英國に於ける宗教的鬪爭は其の後に來つた。而して其の勝利の淸教徒の上に在つたことは玆に云ふ必要はない。チユードル家のメリー王を迎へて熱狂したる加特力教徒が、其の後繼者に至つて反亂し、英國亦加特力教の信者少なからざるものあつたが、ゼームス一世に至つて、加特力教は殆んど消滅した。而して淸教徒の勢力は勃興し、淸教徒の中堅たる商工階級の勢力は增加した。當時政府に依りて發行せられたる遊獵の一書がいかに國民の輿論を沸騰したか、英國の貴族は中世の風を換して鳥を狩り獸を獵して其の娛樂に耽つたか、都市や、地方に勢力を有する商工階級は、之等の鳥獸に對する殘虐なる行爲は、其の喜ぶべき處ではなかつた。されば、彼等は聲を同うして貴族の殘虐なる娛樂を攻擊したが、已に彼等は貴族の趣味に干涉する程、其れ程勢力は伸びてゐた。

中世に於ける英國の產業は受働的であつた、消極的であつた之れに對しクライブデー博士は述べて

> 中世紀の終に至る迄、英國貿易の大部分は受働的にして、其の商權は外國商人の手に在つた。當時の英國主義は其の商權の內外何れにあるを問はず、只、產業の發達を見るのを喜んだ。さればハンザ同盟の商人も、ヴェニスの商人も共に世界の各國より英國需要の物品を持ち來り、英國よりは羊毛、柔皮、錫、鉛等を持ち去つた。當時『マーチヤント、オブ、ゼ、ステープル』と稱する外國の一組合ありて、英國原料品輸出の獨占權を有してゐた

といつてゐるが、實に其の通りで、英國は羊毛、農產物、錫鉛等を輸出する代りに、佛國よりは酒、フランダーよりは天鵞絨、麻布、羅紗、其他の織物、バルチツク地方よりは材木、獸皮、琥珀、魚類伊太利地方よりは絹布、玻璃、織物類、東洋物產を以てするも、其れはハンザ同盟が、ヴェニスの商船に依りて其の運命を支配された。

而も英國の貿易獨立の日は來つた、ヴェニスの商船が英國海岸を逐はれたのは一五三二年で、一五九七年ハンザ同盟は倫敦に失脚し、殊にネーザーランドの西班牙の攻擊に逢つて大敗したのと、英國の西班牙と海上に爭つて其の專權を打破してから、英國の産業は發達し、英國資本家の大を作つた。

産業保護政策の成功

見よ、スチユードル家の産業保護政策を、例へば貿易組合を作るに於ても、組合員は悉く英人にして外人を交へず、其の輸出要品を織物とし、一定の場所に限らずして、世界各地に新市場の開拓を試みしめ、南は西班牙、葡萄牙、北はスカンヂナビヤの諸國に其の販路を擴張せしめ、一商人は奴隸賣買に依り利益を國王と折半した程であつた。

英國産業の發達は航海業の進歩に其の原動力を與へられた。而して航海業はチユードル家の末葉より旺んになつた。尤も中世時代は北海航海はハンザ同盟に支配されて、英國は小くなつてゐたのである。併しエリサベス朝の時代より新奇を好み大膽を愛する、英國の海運業者、紳士的冒險家、商人等はアメリカ發見に刺戟されて、西方に黄金國あり、一攫萬金の奇利は西方の天地に收むべしと、船を艤して新大陸に航海し、四方環海の英國は海上に富の寵兒たらんとした。彼等が當時海上の覇王たりし、西班牙を一擊して、其の大勢力を奪ひしは亦此の精神に支配されてからのとであつた。而して英人特有の快活、寛大の國民性が、貪慾、卑吝に化し去りしも亦此の時代精神に培はれたが爲めであつた。

黄金大名、舊貴族を壓す

西大陸に、萬骨を枯らして財富を得たる黄金大名は、新時代の勢力家として、舊時代の貴族と、宗教的に、政治的に、社會的に爭はざるべからざる方向に進んでゐた。

此の時佛蘭西には封建制度崩壞に伴ふ鬪爭は、マザリン及びフロンドの二黨に依りて代表された。國王ルヰ十四世は君主政治の基礎を固める爲め、大貴族、小貴族を強制して、其の朝臣となし、宰相コベルトは稅を高くし、租を重くし、王國の土産を作るに汲々とし、一方商工業の發達に銳意した。コベルトは貴族の收入には其の手を觸るゝを避けてゐたが、貴族は只宮廷の舞踏場裏に歡樂するの外、何等の自由を有する能はず、僅かに人民の餓死に依りて自ら肥ゆる運命に滿足した。

翻つて英國を一瞥せよ、國王チヤーレス一世はチユードル家に依りて根を植えし帝王神權政治の完成に向つて其の勢力を拂つてゐた。此の時已に舊き封建制度は頽廢して、國王と貴族との關係は昔日の如きものではなかつた。よし時に貴族の反抗兒ありて國王に抗爭するも、何時しか國王に懷柔され國王の利益と目的に使用さるゝ朝臣となつて了う。たゞ此の時別に紳士閥の新興貴族――黃金大名は商業的利益の增加に依り、富は勢力を作り、勢力は野心を挑發し、獨り社會的經濟的の自由のみならず、政治的自由を要望し國家を自家に依りて支配せんとする。此の新銳の氣當るべからさる紳士閥に加擔するものは地方の豪農である、田舍の紳士である、而して英國革命の指導者たるクロンウエルは其の代表者であらねばならぬ。

議會黨勝利の原因

其の革命の導火線たるバツキングハムシアイアのジヨン、ハムプデンが國王の遣態を痛論して法院に訴へたる、沿海地方より船舶若くは金錢を徵收し、或は船稅を全國に課せんとするが如きは、明かに黃金大名たる紳士閥の利權を國王が侵害するものである。階級的利害は明かに乖離した。此に於て黃金大名は武器を執て蹶起した。

斯くて英國革命は紳士閥の勝利に歸した、エドワード二世を處罰したる例に倣つて、國王と結びたる規約を破り、竊かに將務官を派して租稅及ぶ献金を徵收したるチヤーレス一世を處した程の殘虐なる勝利は紳士閥の勢力に依りて成就した。

今議會黨の君主黨を敗りたる原因を檢し來れ、議會黨が倫敦の如き富裕なる市を中心として、王室の財產を私することを得たるのみならず、ニユーカツスル以外の諸港の關稅を所得とすることを得たるが如きは、之等の諸市に扶殖せられたる紳士閥の勢力が恩惠したのではないか。又クロンウエルがプロテクターに擧げられて、航海條例を發布して、英國海權の擴張を圖る程、其れ程英國の海軍と一脈の氣を通じてゐた紳士閥は、海軍大將と自家に懷柔して、海軍の全力を擧げて議會黨に捧げしめたことが、實に議會黨の勝利ではなかつたか。

重商主義と奴隸賣買

革命の成就に依る紳士閥の勝利は、舊約的神政政治を共和主義に混淆した、新らしい政治組織を以てクロンウエルを迎へて其の主宰者に推戴した。

クロンウエルは職に就て全國を十二區に分割し、十二人の將軍を派して之れを治め、別に五萬の兵士を各地に駐在せしめ、地方の安寧――紳士閥の平和を保護し、各種の競技演劇若くは飲酒店を禁止し軍國主義的政治を以て、軍隊の給養に多大の租税を拂はざるべからざる苦痛を國民に忍ばしめた、而して紳士閥の營業事業に優渥の保護を與ふる航海條例を發布して。曰く、

英國船以外の船舶に沿海の漁業運輸を禁止すること

英國船以外の船舶に英本國と殖民地との間に於ける運輸を禁止すること

歐州大陸と英國との運輸は、英國船若くは其の物品を製造する國の船舶に依らねばならぬ

外國商人が貨物を英國に輸入するには、其の貨物は英國商人が支拂ふべき二倍の海關税を支拂ふこと

英國殖民地より外國に輸入するものは、一度び英國を經由せねばならぬ

斯くの如きは彼が重商主義的政策を遺憾なく發揮したものであつて、而も亦航海業に依りて巨利を得んとする紳士閥を恩惠したものではないか。而して一面には紳士閥の利益に反する言論を鎭壓し、反徒の名に冠する勞働者に奴隷とし、印度に賣つた。されば眞に共和政治の純粹を保たんとしてクロンウエルに反抗せるハツチンソン大佐は迫害された。當時名を宗教の分派に假つて政府に反抗せる百姓一揆も、其の內容を檢し來れば、十六世紀の前半に於て歐洲に蔓延した『レーデンのジョン』に依りて點火されたアナバプテストの運動と同じやうなものであつた。

一六五五年二月、過激共和黨の首領ワイルドマン少佐は『殺君クロンウエル討伐宣言書』を起草中マルボロオ附近に於て捕へられて以來、百姓一揆は鎭壓したが、而もクロンウエルを以て紳士閥の味方、大地主の親友、田舍豪族の爪牙たるは、明かに國民の眼に映じてゐた。

紳士閥の利益の增進

之れを要するに英國革命は、城壁とし、黃金を武器とする紳士閥の權利を侵害し利益を防遏せんとする王と貴族に向つて、武裝したる、紳士閥が致命的打擊を與へたもので『商業の獨占』個人的利益の獲得――同一階級の保護――は其の目的であらねばならぬ。されば此の目的を達せん爲めに、之れを宗教的に粉

飾し、之れを共和政治に美裝せしめたものが、即ち英國革命である、彼等が産業の自由を獲得する爲め、一切の制限と障礙を抑除するには『淸敎徒』『共和主義』の名を借用するのが、頗る便利な手段であつた。

されば見よ、エリサベスの保護政策はクロンウエルの航海條例に依りて其の眼鼻が付けられた。彼は諸種の經濟に關する會議を開き、宗敎的には相戰ひ、階級的には相和する政敵(？)をも委員として指名した。彼が英國海軍を强大にし、和蘭を威嚇し、西班牙を痛擊し佛蘭西と握手したのは、商業的帝國主義に依る紳士閥を大ならしめんが爲めであつた。フレエク、モンテエグの兩將軍をして西班牙艦隊を擊破せしめ、純銀を積んだる三十八臺の荷馬車をしてポウツマスより倫敦に送り、英國通貨に鑄造したのは、いかに彼を圍繞する紳士閥を喜ばせたことであらう。彼は自己の階級の利益を擁護せんが爲めには、宗敎的に政治的に敵視する羅馬敎徒や、王黨の騎士團と握手せねばならぬ事情をさへ議會に於て說明した。

彼逝いて六年、一六六八年英國政府は內國農業を奬勵せんが爲めに——地主の利益を保護せんが爲めに、穀物の輸入を禁止し、其の價格甚しく騰貴して、國民の生活難を增加せるにも拘はらず、尙ほ一クオーターに付き五志の奬勵を附與して、輸出を扶助したことは、必竟クロンウラルの志を濟したものであつて、英國革命の目的が紳士閥の利益の增進に在つたことを知ることが出來ると思ふ（本文はウヰリアム・モリス及びイー　ベルフオート　パツクス兩氏の研究に負ふ處多し）

新刊紹介

■**火の鳥**　與謝野晶子の近詠五百餘首を集めて中澤弘光畫伯が美しい裝釘を凝らし插畫を描いてゐる、女史の和歌は近來益々眞實味を發揮して來て、何れも其感動の火焰が昂騰した刹那に和歌として彫刻されたやうな感がある（定價一圓六十錢、麴町平河町　金尾文淵堂）

■**社會の裏**　前田蓮山氏獨特の觀察を基礎として評論を試みたるもの通談首肯に値するものなり、通快を叫ばしむるものあり例令ば貴族院の大部分は人間ではなく財産と家柄とが席を連ねてゐるのだ、そして財産が口を利く、家柄が物をいふ、それが人間の脣だから不思議だ……と（定價一圓四十錢、神田中猿樂町　アルス社）



戀に身を亡した桑原子爵

澤田撫松

從四位子爵桑原孝長が、情婦を銃殺したと言ふことは、階級制度の弊害を最も遺憾なく暴露したものとして注目すべき事件である。私は自分の郷里に起つた出來事として興味を引いたばかりでなく、人類の向上發展を阻害する階級制度の打破を叫ぶに有力なる材料なることを信じて、この事件の裏面に潜むで居る秘密を調べて見た、その結果がこの一編となつたのである。

一

障子を開けると、京の街が眼の下にあつた、中京あたりは霞に煙つて、はつきりしないけれど、南禪寺から疏水一帶、東山の往來は、道行く人まで鮮かに見えた。蹴上の溫泉、玉泉樓の三階で、窓から下を眺めて居た孝長は、長い時間待たされて、未だに相手の女が來ないので待ちくたびれたか、柱に脊中を當てゝ、居睡りをしやうとしたが眠られなかつた。却つて過ぎ去つた事柄がまざ／＼と胸に浮んで、それからそれへと、過去の追憶に耽けるのであつた。かうした追憶を繰返へす時、毎も一番に記憶を呼び起すのは、岡山の中學に居た時の初戀であつた。大分縣大分中學の杵築分校から岡山中學へ轉校した當座は寄宿舍生活をして居たが、寄宿舍では氣儘なことが出來ないので、素人下宿を搜して居ると、學校の横町に二階を貸す家があつたから早速其所の二階を借りた。この家では子爵の當主と聞いて、まるで福の神でも天降つた樣に思つて悅んで居たので、孝長を大切にすることが常識をはづれて居た。それは其の家ばかりではなかつた。隣家でも又大騷ぎをして居た。こんど岩井の二階へ下宿した書生さんは華族だと言つて、さうした身分の高い人

を下宿さして居る岩井の家を羨んで居た。孝長の環境がかう言ふ風であつたから、華族と言ふものが普通の人間よりも一段高い所に位する、優等人種であるかの樣に思つて、自分の欲するものは、何でも得られるものときめて居た。實際或程度まではそれが實現されて居たのであつた。身分が高いから誰でもが尊敬する、金があるから物質上の慾望が總て遂しられる。人生の悦樂と言ふものが恐く現在に於て得られるのであるから、向上心は全然なかつた。將來を樂しみにして努力しやうとか勉強しやうとか言ふことは、孝長にとつて無意味であつた。現在の境遇が人間の欲望を何でも滿足さしてくれるので、面白くもない書物を讀むだり、面倒くさい講義を聽いたりすることがいやになつた。接近する者が皆若樣々々と自分を尊敬してくれるので、自分は勉强せずとも、學校を卒業せずとも、生れながらにして傑い人物であると思つて居た。

唯さへ自尊心の強い孝長は、周圍からちやほやされるので、愈々自尊心を增長さして、學校の教師の言ふことなどは耳に入らなかつた。それも中學の二年三年頃は我儘氣儘をするだけで濟むで居たが。中學の卒業まぎわになると、異性に對する興味を覺えて來たので、孝長の慾望に新しいものが出來た。その時、手近に危險な對象があつた。それは岩井の家に速野と言ふ美しい娘が居たのであつた。家中の者が子爵の若樣と下へも置かぬ樣にもてなして居るのであるから、速野もそれにかぶれて孝長を大切にして、身の廻り一切のことを自分の手でした。青春の男女が斯うした境地に居て無事ですもう筈がない。孝長が外から歸へつて來た着物を脫ぐと、それを疊むのが速野の役目であつた。その白い手を握ることの出來ない孝長でなかつた。二人は甘い初戀の醉心地で居る中に、速野の肉體に異狀が起つた、人目につかぬ中は二人も心配しなかつたが、一日でそれと分る樣になつては、何とかせねばならぬと言ふ責任を感ぜずには居られなかつた。速野の兩親は、孝長と速野との關係が唯事でないことは知つて居たが、どちらに轉んでも相手は子爵の若樣だと言ふ氣があつたから、見て見ぬ振りをして居たのであつた。けれども、斯うして姙娠と言ふ事實が現れて見ると、默つて居る譯にも行かなくなつて、娘の始末を孝長に迫ると、初戀のことでもあるし、それに世間知らずのおぼつちやんだから、一も二もなく自分の女房にすると言つてすまして居た。速野の兩親もさうなること丶信じて居たから、娘の出世を悦ぶばかりでなく、華族と縁組の出來る光榮を誇つて居た。その年の暮に速野

は男の子を産み落した。兩親はほく／＼悦んで居た。自分の孫が子爵家の後繼になるかと思ふと、娘の手柄を賞めずには居られなかつた。學業を放擲して居た孝長も、子爵と言ふ階級の御蔭で落第もせずに卒業した。錦を着て古郷へ歸へる孝長は、速野の兩親の切なる願ひを容れて、速野と嬰兒を伴れて京都へ歸へつた。孝長は簡短な問題だと思ふて居た速野との結婚は、桑原家一家一門を引繰返へす程の騷ぎとなつて、身分賤しき平民の娘は子爵家の嫁にする譯に行かぬと言ふ、親族會の決議を楯に取つて、親戚の者が無理無體に速野を孝長から引きはなした。生れた我が子を子爵家へ取られて、傷けられた身と心とを抱いて岡山へ歸へつた速野は、氣抜けの樣になつて、半生を涙の中におくる身となつた。

二

孝長も、速野と別れた當座は、一室に閉籠つて、家の者には口もきかなかつた。氣でも違つたんでないかと心配する者もあつたが、何にしても早く女房を持たさねばならぬと、一門の者が躍起となつた。女房選みの標準は身分と家柄と財産とで、相手の人物なぞは殆ど問題にして居なかつた。初戀に破れた孝長は女房問題なぞにてんで耳を傾けなかつたが、親戚が寄つてかゝつて、何事も御家の爲めと言ふ口實で、否應なしに女房を持たした。まるで機械的に結婚した孝長は、周圍の者が目出度い々々々々と悦んで居るのが何のことだか、その意味か分らなかつた。夢中で結婚した孝長は、今まで我儘を通して來たゞけ、自己の意志が蹂躙されたのを憤ると同時に、親戚や同族が偉大な權力を持つて居ることに驚かずには居られなかつた。孝長が今日まで歩むで來た道は、總て命令權の實行ばかりであつて、服從を強要された經驗を持たなかつた。それが今、地位顚倒して、何事も親戚同族の命令に服從せねばならぬことになつたのであるから、反抗心がむら／＼と起つて、それを押へることが自分の力では不可能であつた。斯うした事情の下に夫人を迎へた桑原家は、決して幸福なものでなかつた。親戚同族から祝福された孝長は、生れて初めて、人世の悲哀を痛切に感じた。何事も今までは思ひのまゝになると思つて居た孝長が、世間と言ふものゝ前には屈伏せねばならぬことを知ると、言ひ知れぬ苦痛と憤怒とが胸の中に躍つた。そして外には忘れ難い女があり、内には愛のない妻があつて、その間に子爵と言ふ體面に束縛されて居る自分を見出すと、總てのものを破壞し去つて、何の束縛

も躬肘も受けない、自由の天地に身を置くことの幸福を思はずには居られなかつた。斯うした家族に於ける夫婦が、圓滿な同棲を續けて行かれる筈がない。不幸なる新夫人靜和子は、女の子一人を子爵家に殘して、破鏡の歎を見るのやむなきに至つた、その頃から孝長の行ひに常軌を逸することが屢々あつた。それを見た親戚同族は、夫人が居なくなつて家庭が淋しいから孝長の素行が修らないのだらう、早く後妻を持たさねばならぬと、躍起となつて運動した結果、田村とし子と言ふ婦人を迎へ入れたが、入籍の手續をすることの出來ない事情があつたから、內緣の妻と言ふことになつて居た。しかし心の荒び果てた孝長は幾人妻をかへても眞面目な人間になることが出來なかつた。家庭に於て自らの意思が抑へつけられて居る鬱憤を外へ漏して、放縱な生活を續けて居た。その頃寺小町と云はれて居た評判の娘があつた、それは子爵家から程遠からぬ下立賣の靜德寺の住職の娘で、照子と言ふ綺麗な女であつた。女に接近することを職業の樣にして居る孝長は斯うした美しい對象に眼をつけずに居る筈がない。隣家で顏馴染でもあるし、子爵と言ふ女を引つける武器もあつたので、孝長は餘り多くの勞力なしに照子に近づくことが出來た、昔なら土下座をせねばならぬ殿上人が、寺の娘風情にかれこれ言つてくださるのは冥加に餘つたことだと、住職が言つて居る位であるから、照子は孝長に接近したことを手柄の樣にして居た。孝長と照子とは、周圍も世間も眼中に置かない我儘な振舞をして居た。初の間は人も見て見ぬふりをして居たが、二人の行が餘りに傍若無人なので、周圍の者が默つて居ることが出來なくなつた。子爵家と靜德寺との間に悶着が起つて、孝長は照子と手を切らねばならぬことになつた。照子に夢中になつて居た孝長は照子と別れることが出來なかつたので、照子を伴れて姿を匿した。子爵家では八方へ人を出して搜さした、何事にも常軌を逸した孝長のことであるから、どんな間違を起さぬとも限らぬと言ふので、血眼になつて搜して居たが、どうしても居所が知れなかつた。孝長の今までの振舞から押すと、照子を伴れて情死でもしたのではないかと、親戚同族は胸を痛めて居た。すると播州須磨で孝長を見たと言ふ者があつたから、早速人をやつて須磨から舞子の方を搜すと、孝長は源氏物語の源氏の君を氣取つて、波淋き須磨の浦で、照子と二人靜かに暮して居た。それを無理に伴れて歸へると、親戚や同族がなかへ入つて、面倒な交渉を重ねた上、照子の手を切つて了つた。照子から引離され孝長は、暫らく半病人の樣になつて

居たが、一ケ月もたつと、當もなく又女を漁りに歩いた。それは大正七年の夏であつた。骨も肉も溶ける様な、晝間の暑さも、夕日が沈むと、打ち水の庭から、涼しい風を吹いて來て、京の街の黄昏に、袂涼しげな女の行交ふ姿が、毎より美しく見えた、如意嶽の大文字を始めとして、北山の左大文字、水尾山の鳥居、松の崎の妙法、西加茂の船なぞが、京の山々に點火されて、八月の盆を賑はした。其の日は十六日であつた。孝長は白地の浴衣に黒絽の羽織を着て、パナマの帽子を目深に冠つて、夕暮の街を當どもなく歩いた。武者小路の室町まで來ると、綺麗に着飾つた若い女が、四五人、床几に腰をかけて往來を眺めて居た。その前を通つた孝長は、後振り向いて女の方を見ると、女は立ちあがつて、恥し相に後を向いた。その中で一際目に立つて美しい女があつた。孝長の方を一寸見て、直ぐ角の家へ入つた。その女の態度が何となく艶かしく見えたので、孝長は後戻りして女の入つた家を見ると、家號を八千代と言ふ蕎麥屋であつた、四邊が段々暗くなつて來ると、家々の屋根の上で、山々の火の文字を喝采する聲が響いた。蕎麥屋の屋根を眺めると、火の見櫓の上に、派手な浴衣を着た女の姿が、月を浴びて鮮に見えた、その翌日であつた。孝長は八千代の二階へあがつて、蕎麥で酒を飲むで居たが、蕎麥ばかりでは酒が飲めないと言つて、隣家の料理屋から料理を取寄せさして居た。その後は毎日の様に八千代の二階に酒を飲むで居る孝長を見た。初の中は女中が酌をして居たが、孝長が八千代の馴染になるとお增が酌をする様になつた。お增は大文字の夜、孝長の眼に止まつた女であつた。

『私、此所の娘、亭主なんかおへん』

美しい丸顔に靨を見せたところは、十九か二十の娘に見えて、夫を持つた二十四の女とは見えなかつた。お增は八千代の主人花谷捨吉の娘で、お店の番頭や大學生等に騒がれて居た評判娘であつたから、娘に所望する先は幾等もあつたが、一人娘の相續人であつたので、娘の出世になる縁談も皆斷り、親戚から捨三と言ふ養子を貰ふて、お增に娶したのであつた。お增は斯うして夫のある身ではあつたが、客商賣のことでもあるし、相手が從四位子爵と言ふ肩書を持つた身分の高い人であつたから、女中任せにもして置かれまいと、我から進んで孝長の酌をしたのであつた。年齢は三十六、身分は華族。そして女に優しい孝長の酌に出たお增は、孝長の話に引きつけられて、夜の更けまで孝長の酒の相手をして、眼の縁を赤くすることが續いた。

三

お増と自分とが、八千代の二階で初めて口を利いた時のことを、胸の中に繰返へして居ると、其の懐かしい姿が俥から降りるのを見たので、孝長は窓から下を覗いた。お増は車夫に賃金を拂ふと温泉の坂道を登つて來た。女中に案内されて三階へあがつて來ると、金紗縮緬のコートを絹づれの音と共に其所へ脱いで、孝長の傍へ、膝を投げる様に坐つた。

『隨分お待ちやしたやらう、もつと早う來るのどしたけれど、例のやかまし屋がぐづ〳〵言ひ出したもんどすよつて、こんなに遅うなつて、すまんこと』

お増は孝長の膝に自分の膝が接する程傍近く寄つたが、孝長が默つて返辭をしないので

「お怒りやしたのどすか、」

首を斜めに男の顔を覗き込んだ。わざと苦い顔して横を向いて居た孝長も、お増の肉體が接近して、強烈な化粧品の薫が臭覺を刺戟すると、顔面神經の弛むのを止めることが出來なかつた。それを見てとつたお増は孝長の肩のあたりを軽く突くと、仰山な驚き方をして、倒れかゝるふりをして見せた。そこへ女中が酒と肴を運んで來たので、二人の間に盃が頻繁に取交はされた。蜜の様な甘い言葉が囁かれて居た。知恩院で撞く夕暮れの鐘が東山一帶に響き亘つて、四邊が暗くなつて來た頃、二人は蹴上げの山を下りて、朧に霞む春の夜の月に、櫻の花瓣を浴びながら、疏水の傍を歩いた。孝長とお増とが斯うして作れだつて遊び歩くことが度かさなると、八千代の家庭が段々荒さんで來た。夫の捨三は養子の身であるから、大抵のことは我慢をして何にも言はなかつたが、お増の態度が餘りに不謹愼であるので、たまには夫として小言の一言も言ふと、

『何どすいな、家の商賣は水家業やおへんか、私がお客さんを大事にするのが何で悪いのや、畳が新しくなつたり、襖を張替へたりしたのは誰の御蔭やとお思ひやす、皆んな桑原さんの御蔭やおへんか、家のためになるお客はんや思ふて、私が大事にして居ると、それを何やかんやお言ひやすのなら、もう私知りまへん、勝手におしやす』

と捨て鉢なことを言つて、夫に喰つてかゝるのであつた。お増と孝長との接近を唯事でないと思つて居た捨三も、これぞと言ふ證據を押へた譯でなく、相手は身分の高い華族と言ふのと、毎月尠なからぬ仕拂をする大切なお客様であるのとで、事を荒

立てる譯に行かないので、強い者には卷かれて居るより外に道がなかつた。眼のあたり自分の妻の不謹愼な素振りを見ながら、それを何とも言ふことの出來ない養子の身分を悲しむで、捨三は毎日默々として蕎麥や饂飩を打つて居た。お増は夫の斯うした態度を氣の毒とも思はないで、面と向つてやかましいことを言はないのをよいことにして、孝長の傍にばかりついて居た、孝長は毎日の樣に八千代へ來て、二階の八疊の室を自分の部屋の樣にして居た。縮緬の座布團や紫檀の机や丸桐の火鉢やらが、皆孝長のものになつて居た。此座敷を孝長とお増の我儘をする天地にして居た。目にあまる行ひが度々捨三の眼に止まつたので、流石の捨三も我慢がしきれなくなつて、とう／＼孝長と衝突した。それは今年の八月上旬であつた。その時は孝長の手元が不如意になつて、これまでの樣に八千代の店を潤すだけの金力がなくなつて居た。金が自由になる間は、御無理御尤で通つて居たが、黄金の魔力がなくなると子爵も唯の人間にしか通用しなくつて、八千代の二階で御前樣風を吹かすことが出來なくなつた。今までは何事も家業の爲めと眼をつぶつて居た捨三も、家の爲めにならないお客に、自分の女房を自由にさして置く譯に行かないから、孝長とお増との交通を許さなかつた。もうその時分は孝長の方でも八千代へ來なくなつたし、お増の方から出かけて行く樣子もなかつたから、二人の關係はなくなつたものと、漸くのことで捨三も安心することが出來た。

四

八月十二日の晩、お増は脚氣の灸を据ゑると言つて出たきり、十時になつても十一時になつても歸へつて來なかつた。よもやと思つて居た捨三も、十二時を過ぎてお増の歸つて來ないのを見て、さてはと感附いた。翌朝になつてとう／＼お増は歸つて來なかつたから、桑原家の樣子を探つて見ると、孝長も昨夜から歸つて來ないと言ふことであつたから、二人はてつきり身を匿したものに違ひないと言ふことの結論に到着したが、さてこれを警察へ屆けるかと言ふことには捨三も一寸躊躇した。お増は家つきの娘であるし、孝長は痩せても枯れても華族である上に、今日まで尠なからぬ金を遣はして、隨分恩惠を蒙つて居るのであるから、如何に二人が憎いからと言ふて、表沙汰にする譯にも行かない義理合になつて居た、そんな風であつたから、騷ぎ立てゝ二人の行方を搜さずに打ち捨てゝ置いた、孝長とお増とは大阪から紀州の和歌山へ出て、和歌浦で遊んで

居たが、一ヶ月程で持ち出した金が殘り尠なになつたから、和歌山と岸和田との間の、淡の輪海岸の宿屋に泊つて、二人の身の處置を考へて居たが、今更京都へ歸る譯にも行かず、さらばと言つて、旅先で金が無くなつてはどうすることも出來ないから、孝長も思案にくれて居た。

『どうおしやすつもりどす、お金がもうおへんやおへんか、手紙で取り寄せられないのどすか』

お増は孝長に金の都合をすることを迫つたが、此時はもう孝長に金の融通が出來なかつた。お増は子爵と言ふ肩書を持つて居る孝長には、無盡藏に金のあるものと思つて居たのが、どうしても金の都合がつかぬと言ふみじめな孝長を眺めて驚いた。子爵と言ふ肩書と、金に不自由をしない孝長には、離れずについて居たかつたけれど、宿屋の仕拂にも困つて、吐息をついて居る孝長を見ると、家を棄て、夫を棄てゝ紀州三界まで伴れられて來たことが、ばか〱しくなつて、孝長の傍に居るのがつまらなくなつた。

『歸へりまへう、京へ歸りまへう、お金もなしにこんな所に居てもしよがおへん、早う歸りまへう』

お増は旅の空で金の無くなつたことが心細くなつて、意地も張りも言つて居られなかつた。家を棄て夫に背いて出て來たのであるから、今更頭を下げて夫の所へ歸へることを、お増も好みはしなかつたけれども、斯うして路銀が切れて旅の空に居る不安を考へると、何と言はれても夫の傍へ歸へる方が安全だと思つて、京都へ歸へることを主張したのであつた。けれども孝長は歸らうと言はなかつた、斯うして家を出た以上は、金が無くなつたからと言つて、おめ〱歸へれるものでないと言つて、どうしても歸へるとは言はなかつた。お増は孝長を說いて京都へ歸へる樣にしやうとしたが、何と言つても孝長が承知をせぬので、

『あんたはんが歸へるのがおいやどしたら、私だけでも歸へります』

と捨て鉢なことを言つたりした。宿屋の二階で、二人は毎日歸へる歸へらぬで諍ひばかりして居た。淡の輪へ來てから十日目の晩であつた。お増は海岸へ散歩に行くと言つたきり歸へつて來なかつた。一日たつも二日たつても歸へつて來なかつた。てつきり京都へ歸へつたと感附いた孝長は、お増の薄情を怨まずには居られなかつた。お増に逃げられて見ると、こんな片田舍にじつとして居られるもんでなかつたから、孝長は直ぐに京都

へ歸へりたかつたが、持つて居た金を皆つかひ果してしまつた今となつては。宿屋の仕拂さへ出來なかつた 仕方がないので、荷物を宿屋へ置いたまゝ、散歩に行く樣な顏をして宿屋を出ると、紀州街道を歩いて、汽車にも電車にも乘らずに京都へ歸へつて來た。けれども京都の町へは入る勇氣がなかつた孝長が獵に出る時、毎も案内に雇ふ山本三平と言ふ獵師が、淀川緣に住むで居ることを思ひ出して、其所へ辿り着いた。三平に譯を話して、一時身を匿して居たが、何時までもさうしては居られないし、今一度お增に逢つて心底を聞いて見たい氣がするが、何にしても先だつものは金であるから、金の工面を三平に相談すると、

『そんなことなら、御前、何にも御心配なさるにも及びますまい。岡村を呼んで話をすれば、直ぐにも都合がつきましやう』

三平はこともなげに言つてのけた。岡村と言ふのは高利貸で、子爵の名を當に高い利息で金を貸して居た男であつた。孝長は岡村の利息が餘りに高いので、岡村のことは考へても居なかつたが、今の場合利息の高い安いを言つて居る時でないから、早速岡村を呼寄せる樣に三平に賴むだ。その翌日岡村がやつて來たが、孝長の顏を見ると、

『とんだ事になりましたなあ』

自分も困つたと言ふ顏して歎息した。傍から孝長が金の話を持ちかけると、まあ〳〵と押へて、

『御前は未だ何にも御承知ないのですか』

ちろ〳〵孝長の顏を眺めて居る岡村の態度が、唯事でないと見て取つた三平は、

『御前の御屋敷に何か變つたことでもあつたのか』

心配さうに尋ねた、

『お前さんも知らなかつたのか、やれ〳〵』

岡村は一寸首を傾けて、

『しかし、これは今言つてよいことかね』

何事か重大な秘密がある樣な顏をした。孝長も岡村の態度が氣になるので、

『何かあつたのか、言つてくれ』

今は金を借りる用事も忘れて、岡村の方へ膝を向けると、

『明日、御屋敷で、御前の禮遇停止に就いて御同族の相談會があると言ふことを、今朝聞いて、實は驚いて居るのです』

孝長の顏を眺めて、岡村は冷かに語つた。

『ナニ、華族の禮遇を停止する、なぜ禮遇を停止するのだ、俺

は何時融通を停止される樣なことした。借金をしたり、女をこしらへたりすることが悪いのか、そんなことは誰でもすることじやないか、俺ばかりがじして居るのじやない』

孝長はまるで狂者の樣に叫むで居た。それは十月十四日の朝であつた。

三

明日禮遇停止の相談會があると言ふことを聞いては、じつとして居る譯に行かなかつた。誰が何と言つても本邸へ乘込むで、言ふだけのことは言はねばならぬと、孝長は猛りたつたが、禮遇停止と聞いて岡村が金を貸してくれないので、尠なからず元氣が拔けた。失神した樣になつた孝長は淀から京へ歸へつて來た。けれども直ぐ自分の屋敷へ歸へる氣になれなかつた。懇意にして居る東堀川通中立賣上る木村と言ふ悉皆屋へ寄つて、我が家の樣子を聞いた。其所でも明日禮遇停止の相談會のあることを知らしてくれた。そして蒲鉾で酒を出してくれた。其の家を夜の九時過ぎに出た孝長は、何所を當ともなく歩いた。女には逃げられる、華族の禮遇は停止される、金の融通は全く絶えもう進むにも退くにも法のつかなくなつた我が身を顧みて思お涙ぐんだ。木村の家で飲むだ二合の酒も醒めて、秋の夜風が身にしむと、空には月が澄むで居た。

何所をどう歩いて來たのか、武者小路室町の角の、お增の家の前に立つて居た。お增は淡の輪で孝長を置きさりにして逃げ出したが、自分の家へ歸へる譯にも行かなかつたので、大阪の天王寺の知邊の家を使つて、夫に詫を入れて貰ふと、養子の捨三はきついことも言はなかつたから、八千代へ歸へつて來ることになつた。丁度その晩、お增は親戚の家へ遊びに行つて居て、十時過ぎに歸へつて來ると、自分の家の傍に孝長が立つて居るのを、月の光で見た。

『まあ』

と言つたまゝ、あとの句が出なかつた。

『おまいに逢ひに來た、是非一言いつて置きたいことがあるから、一寸とそこまで來てくれ』

孝長はお增の手をとつて促した。淡の輪であゝした不人情なことをして來たので、孝長にすまぬと思つて居た矢先に、窶れはてた孝長に斯う言はれて見ると、それを拒むことが出來なかつた。二人は肩を並べて歩いた。京の街の上[illegible]は大抵表を閉

めて居た。丸太町の橋を渡ると、鴨川の水音がして、圓山一帶が墨繪の樣に浮いて見えた。孝長は歩きながらお增に話をしかけるけれど、お增は

『すまんこと』

と只あやまるばかりで、何にも言はかつた。流水に沿ふて幾つもの橋を縫ふて歩いた。月は空に愈々澄んだ。大極殿の前から武德殿の横まで來ると、孝長は立ち止まつた。

『先からあれ程言つて居るのにおまへは分らんのか、今となつて怨みは言はん、只おまいの心持が聞きたいのだ、眞實の心持を言つて貰ひたいのだ。今まで言つて居たことは嘘か、今日まで仕向けて居たことは皆僞りなのか、おまいは俺と言ふものを愛して居たのでなく、只金の爲め、位の爲めに媚を賣つて居たのか、それを言つて貰へばよいのだ』

孝長は興奮しきつて居た。

『そんなことはおへん』

お增はそれを否定して居たけれど、言葉にも熱がなく、態度にも眞率を缺いて居た。

『若しおまいが、眞實俺を愛して居るのなら、これから逃げてくれ。俺と一緒に逃げてくれ、俺は華族の禮遇を停止されてこの京都に居たくない、おまいを伴れて何所でもかまはぬ、氣の向いた所へ行きたい。俺は總ての物を失ふた。然し、おまいだけでも得たならば、世界の何所かで生きて居られる。さあ、返辭をしてくれ、俺について來るか、俺と一緒に逃げてくれるか』

孝長ほ畳みかけてお增に迫つた。お增は默々として返辭をしない。

『返辭がないのは不承知か』

孝長の血相は變つた。

『不承知なら斯うする』

右の手を懷中へ入れたと思ふと、キラリと月に光つた掌中の物體から恐しい音が響いた。

『アレー』

お增は悲鳴をあげて逃げた。孝長はその後を追ふた。武德殿の横を西へ走つて材木屋の前まで駈けたお增は其所へ倒れた。石に躓いたのであつた。銃丸がそれて傷を負ふて居なかつたから、直ぐ立ちあがつたが、其の時、孝長は十歩の後にあつた。お增は積むであつた木を小盾に取つて、

『助けてください』

と。白い兩手を合して見せたが、孝長の目には入らなかつた。第二發目の銃聲が響くと。白い肉體は材木の後に倒れた。

文藝漫語

○

永井荷風さんは、軍人と囚人馬車とが大嫌ひださうです。先に大久保の宏大な邸宅を畳んで、築地本願寺傍の横町に小さな粋な宅を買つたと傳へられた時に、世の中では、

之れは多分荷風さんの粋な藝風から來た下町住居の憧れの結果だらうと傳へたものでしたが、段々聞いて見ると、勿論左うした考へもないではなかつたでせうが、轉居の所以の九分迄は、大久保は軍人の住宅が多く、朝晩カツ／＼と響く軍馬の蹄音や、戸山の原に練兵に行く近衛兵の行軍の響き—官僚、軍閥の響きに得耐へなかつた事、

そして市ケ谷監獄へ通ふ囚人馬車を見るのが熱々嫌ひでたまらなかつたので、築地へ轉居する決心をされたのださうです。然し築地の御宅も健康に好くないと醫師の注意もあり旁々、近々軍閥官僚の音のしない郊外に邸宅を買つて移りたいとの御希望ださうです。

○

宇野浩二さんが急に流行ツ兒になつた樣に世の中では取沙汰して居ますが、最近發表した『新右衛門の改名』にせよ『苦の世界』にせよ皆今年の春頃にチヤンと書いて居たものださうです。そして夫れを書いた頃は『藏の中』で認められて居たとは云ふものゝまだ商買本位の雜誌屋さんからは頗る虐待の氣味で、却々發表の機會を與へてくれなかつたものださうです。夫れが爲め約半年も編輯者の筐底深く藏せられて居たのが、一度世上に現はれると、忽ちアツと世の中を驚かせて了つたと云ふ次第です。

此頃では原稿輻輳で毎月二百枚以上書き飛ばして居ますが、何註文に應じ切れない位、何でも新年號だけでも、五百枚を十一月中に書くのださうです。

○

宇野浩二さんの作品は『小面の憎い程人を食つて居る其癖當人はオホヽヽと澄してどんなもんだいと云つた風だ』とは、月評子の一致した評語らしい樣です。然し人を食つて居ると云はれる其宇野さんが『何うも大泉黒石と云ふ人は、實に人を喰つて居ますねえ』と歎息して居るさうです。して見ると何方が多く人を食つて居るのか鳥渡見當が付きませんが、或人が『宇野君は人を喰ひ大泉君は大道で屁をひつて居るのです』と云いました。ハテ何ふ云ふ意味でせう？

○

前號に久米正雄さんと、カフエーライオンの給仕女との噂がありましたが、あれは全然誤聞でした、御氣の毒な事をしました。謹んで取消します。

○

十一月の雜誌に『龍介の天上』と云ふ童話が出ました。其主人公は芥川龍之介さんださうです。何でも數年前、芥川さんが、同じ筆法で廣津和郎さんを遣ツつけたことがあるさうで、人食いの宇野さんが承知が出來ず、友人の爲めに一番仇討と出た次第ださうです。『此原作者オラン國のラメー・デタ氏は――』なぞと尤もらしい但書をしてありますが、『居らぬ國』の『出鱈目氏』なぞは、隨分人を食つてるぢやありませんか。

新刊紹介

■**社會主義批判**（室伏高信著）本書は社會主義について日本に於ける唯一つの纏まつた書物である。國家社會主義、修正社會主義ギルド社會主義、無政府主義、ボルシエウヰキ社會主義、勞働組合主義、サンヂカリズムの七章から成り、何れも詳細にその歷史的及文化的性質、目的、方法及び價値を紹介し且つ批評したものである。社會改造の根本精神を知るうへにも、またその諸主義についての批判力を養ふうへからも且つ學術的に研究するうへからも、今日提供されたる最高の著書である（定價貳圓四拾錢京橋銀座三丁目廿七批評社發行）

■**社會主義者の社會觀**（山川均著）論界の雄者として勁烈なる筆鋒鋭く人を刺す著者の文集である、文集と云へど一貫せる氏の論據は煌として隨所に閃きを見せて居る社會問題に志ある士の必ず研究座右に供すべきものである（定價壹圓六十錢牛込神樂坂叢文閣）

■**民本主義の産業**（大日本文明協會）英國哲學エドワードカアペンターの Towards Industrial Freedom を譯したもので發行者は今日の所謂改造が物質主義偏重で精神方面が顧みられない傾向のあるのを遺憾として本書を刊行するに至つたのであると（函入布裝三五判四一八頁一圓八十錢牛込山水道町文明書院）

■**資本論大綱**（山川均著）資本論が雨後の筍の如くに生れる然し數千頁に亘る全譯は到底普通の研究者に讀破するとは困難であらう本書は資本論の壓搾である、原文の儘、マルクス自身の用語に一點の修飾をも加へずに譯出してある最も簡易に最も正確に資本論全部を知るとが出來る絶好の著書である（定價二圓芝三田一丁目三田書房）

■**勞働問題研究**（松崎蒹著）日本の社會組織を主として研究し社會問題解決の方途を講ぜんとするのが刻下の急務である本書は其最高參考書として一讀すべきものである（定價二圓神田神保町同文館）

■**新舊一新**（仲小路廉著）前農相としての氏が在職以來の論集である「國際聯盟は弱者の聲なり」と喝破したは一個の見識である感想亦大に讀むべきもの多い灯下必要の好著である（定價一圓五拾錢麴町三丁目日本書院）

■**日本の勞働問題**（鈴木文治著）本書は著者が『勞働及産業』其他の雜誌に登載したる勞働問題に對する意見を蒐錄したるものにして先づ勞働問題の根本觀念より資本家及勞働者の自覺、並に民衆運動としての勞働組合其他に就き詳述し最後に勞働問題の解決策に就き私見を陳べたるもの也（定價一圓六十錢、府下代々木一二　〇海外植民地學校出版部）

■**現代生活と婦人**（山川菊榮著）過去數年間に草した論文集である婦人論客としての氏の立場は他の何人よりも明確であり且曖昧な點がない其論ずる所も一直線に云はんと欲する所を論破して居る明晰なる理智の結晶であり婦人問題の資料としても亦絶好なるものである（定價壹圓六十錢、牛込神樂坂叢文閣）

■**性の研究**（澤田順次郎著）此問題に就ては唯一の研究者たる著者が廣汎なる智識の結晶として著れたもの男女の性慾生活より性的衝突に至る迄微細に說明し男女の生殖作用迄細論して居る（定價三圓廿錢神田佐藤出版部）

■**颱風**（萬道寺齊著）悪夢外數篇を輯錄したもので作者の藝術的價値は充分に味ふとが出來る最近メキメキと鰻上りの新作家の多い中に氏が獨り卓然として其立場を失はぬ所に眞價が現はれて來る（定價一圓八十錢麴町飯田町天祐社）

■**女の立場から**（山川菊枝女史著）山川菊榮女史の第一文集『現代生活と婦人』の姉妹文集とも見るべく、女史の所謂肩の凝らぬ批評或は感想を集錄す、一讀して女史の主張若しくは態度が如何なる場合にも一貫せるは多とすべく、特に讀者諸君の座右に一本を備へられんとを推薦す。（定價壹圓五十錢芝區三田一丁目三田書房）

■**晶子歌話**　與附野晶子著）歌に關する最近の談話を集めたもの、曩の『歌の作りやう』の續編と見るを得べく、女史の歌を作る態度と女史等の歌の解釋の仕方を述べてある、そして自らの歌は總て象徵的であるとを明かにしてゐる、此道をたしなむもの丶是非一讀を要するもの（定價一圓五十錢麴町飯田町天祐社）

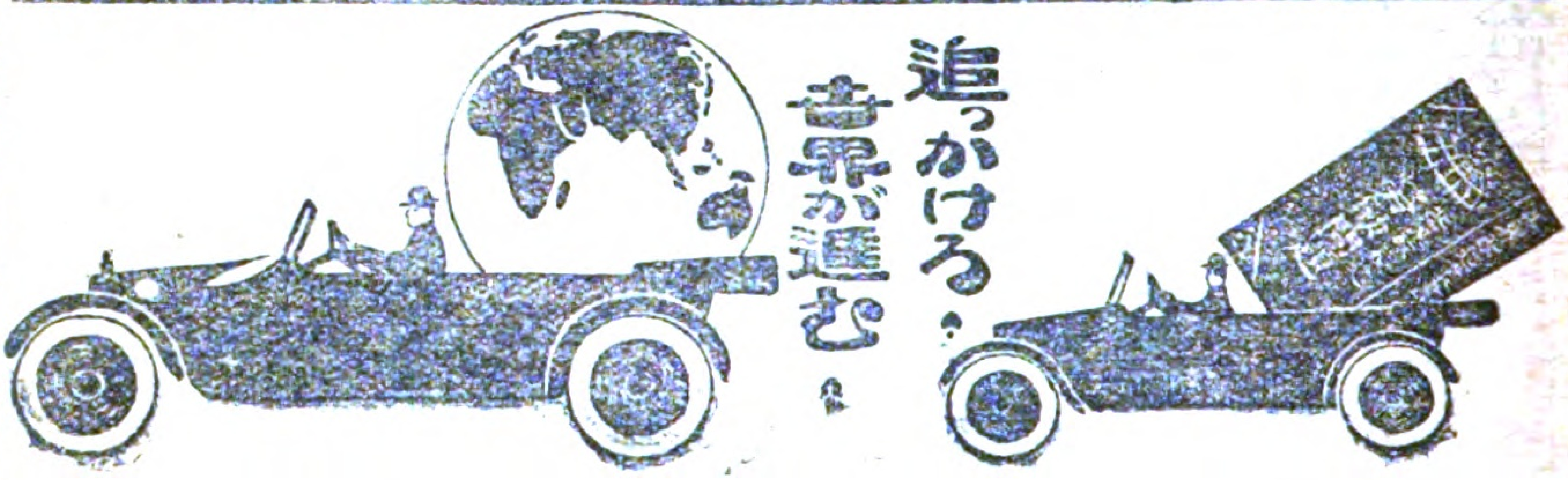
新年號豫告

創作（百餘枚）
おせい（百卌枚）
浮世學校（百枚）
創作
創作
創作
札所めぐり（八十枚以上）
創作
小説
題未定（百枚）
論文（百枚）

幸田露伴
岩野泡鳴
宇野浩二
廣津和郎
上司小劍
江口渙
北原白秋
谷崎潤一郎
近松秋江
杉村楚人冠
武者小路實篤

電車シーリーズ

世界改造叢書



既刊書

- 人種問題　大隈侯爵述
- 戰後の經濟問題　平沼博士述
- 教育の改造　中島半次郎述
- 勞働問題　北澤新次郎述
- デモクラシー　高橋清吾述

三五判 各壹冊 正價金四拾錢 郵税各二錢

以下續々出版す

印刷中

- 異民族の統治　江木翼述
- 婦人問題　宮田脩述
- 國際聯盟　内ヶ崎作三郎述
- 普通選擧　關和知述
- ボリシエビキー　片上伸述

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三 早稻田大學出版部

(賣捌) 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野 (其他)

資本金壹千萬圓
積立金五百參拾萬圓

支店　東京　神戸

出張所　横濱　名古屋　金澤　九州

倫敦總代理店　セドウヰック、コリンス商會
Sedgwick. Collins & Co., Ltd.

大阪海上火災保險株式會社

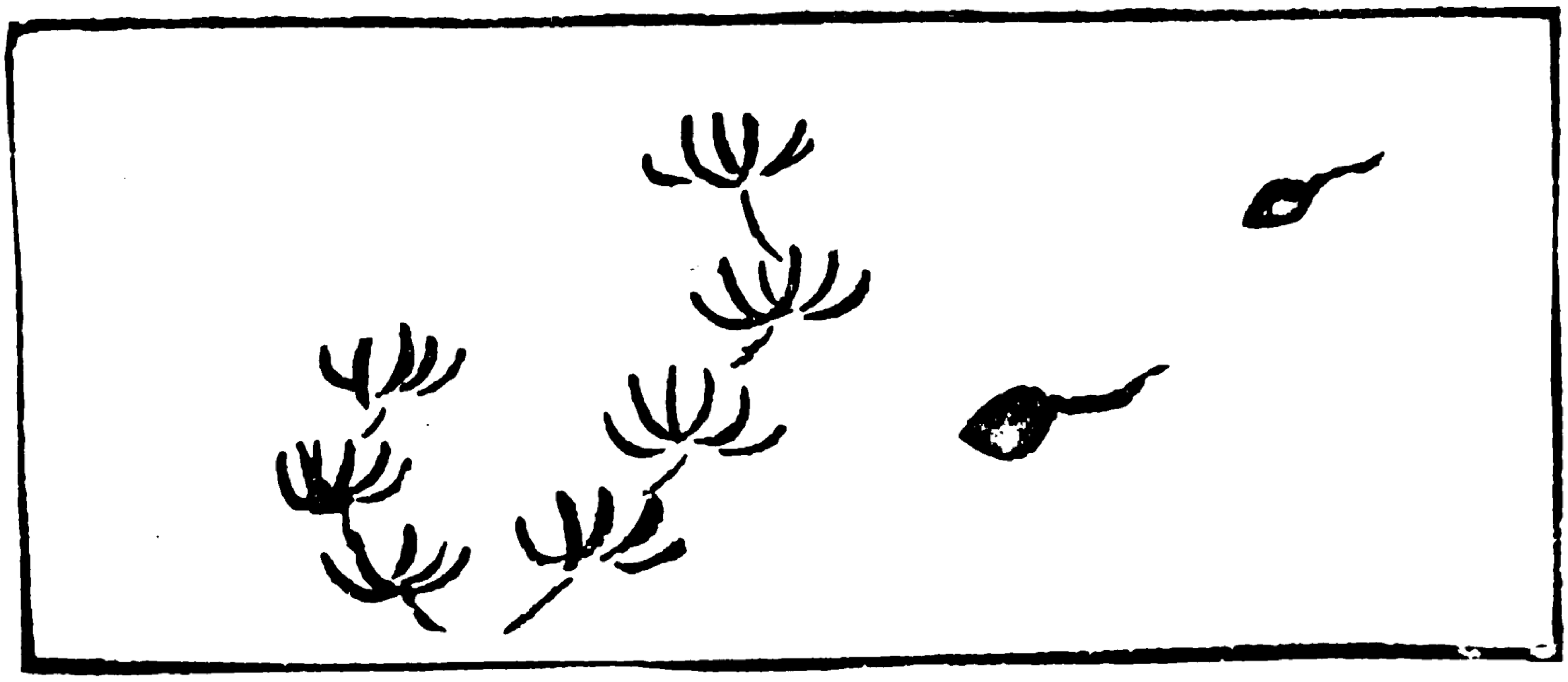
本店　大阪市西區川口町十番地

電話西　長一一〇五　長一一〇六　長一一〇七　長一一〇八　一一〇九　一一一〇　二九〇四　三一一八

營業種目

海上保險
火災保險
運送保險

取締役社長　範多龍太郎
專務取締役　多羅尾源三郎
監査役　喜多又藏
監査役　木村清
取締役支配人　淺井義睭
監査役　井上敏夫
監査役　中山說太郎
監査役　南鄉三郎



花火

永井荷風

午飯の箸を取らうとした時ぽんと何處かで花火の音がした。梅雨も漸く明けぢかい曇つた日である。涼しい風が絶えず窓の簾を動してゐる。見れば狹い路次裏の家々には軒並に國旗が出してあつた。國旗のないのはわが家の格子戸ばかりである。私は始めて今日は東京市の歐洲戰爭講和記念祭の當日であることを思出した。

午飯をすますと私は昨日から張りかけた押入の襖を張つてしまはうと、手拭で斜に片袖を結び上げて刷毛を取つた。

去年の暮押詰つて、然も雪のちらほら降り出した日であつた。この路次裏の家に引越した其の時から、壁土のざら／＼落ちる押入が紙になつてならなかつたが、いつか其の儘半年たつてしまつたのだ。

過る年まだ家には母もすこやかに妻もあつた頃、廣い二階の緣側で穩かな小春の日を浴びながら藏書の裏打をした事があつた。それから何時ともなく私は用のない退屈な折々糊仕事をするやうになつた。年をとると段々妙な癖が出る。

私は日頃手習した紙片やいつ書き捨てたとも知れぬ草稿のきれはし、又友達の文反古なぞを、一枚々々何が書いてあるかと熱心に讀み返しながら押入の壁を張つて行つた。花火はつゞいて上る。

然し路次の内は不思議なほど靜である。表通に何か事があれば忽ちあつちこつちの格子戸の明く音と共に駈け出す下駄の音のするのに、今日に限つて子供の騒ぐ聲もせず近所の女房の話聲も聞えない。路次のつき當りにある鍍金屋の鑢の響もせぬ。みんな日比谷か上野へでも出掛けたにちがひない。花火の音につれて耳をすますとかすかに人の叫ぶ聲も聞える。私は壁に張つた舊稿を讀みながら、ふと自分の身の上がいかに世間から掛離れてゐるかを感じた。われながら可笑しい。又悲しいやうな淋しいやうな氣もする。何故といふに自分は牢固な意志があつて殊更世間から掛離れやうと思つた譯でもない。いつとなく知らず〱斯ういふ孤獨の身になつてしまつたからである。世間と自分との間には今何一つ直接の連絡もない。

涼しい風は絶えず汚れた簾を動してゐる。曇つた空は簾越しに一際夢見るが如くどんよりとしてゐる。花火の響はだん〱景氣よくなつた。私は學校や工場が休みになつて、町の角々に杉の葉を結びつけた緑門が立ち、表通の商店に紅白の幔幕が引かれ、國旗と提灯がかゝげられ、新聞の第一面に讀みにくい漢文調の祝詞が載せられ、人がぞろ〱日比谷か上野へ出掛ける。どうかすると藝者が行列する。夜になると提灯行列がある。そして子供や婆さんが踏殺される：……さう云ふ祭日のさまを思ひ浮べた。これは明治の新時代が西洋から模倣して新に作り出した現象の一である。東京市民が無邪氣に江戸時代から傳承して來た氏神の祭禮や佛寺の開帳とは全く外形内容を異にしたものである。氏神の祭禮には町内の若い者がたらふく酒に喰醉ひ小僧や奉公人が強飯の馳走にありつく。新しい形式の祭には屢政治的策略が潜んでゐる。

私は子供の時から見覺えてゐる新しい祭日の事を思返すともなく思返した。

明治二十三年の二月に憲法發布の祝賀祭があつた。おそらく此れが私の記憶する社會的祭日の最初のものであらう。數へて見ると私の十二の時である。私は小石川の家にゐたが寒いので何處へも外へは出なかつた。然し提灯行列といふものゝ始りは此の祭日からである事を私は知つてゐる。又國民が國家に對して「萬歳」と呼ぶ言葉を覺えたのも確か此の時か

ら始つたやうに記憶してゐる。何故といふに、その頃私の父親は帝國大學に勤めて居られたが、その日の夕方草鞋ばきで赤い襷を洋服の肩に結び赤い提灯を持つて出て行かれ夜晩く歸つて來られた。父は其の時今夜は大學の書生を大勢引連れ二重橋へ練り出して萬歳を三呼した話をされた。萬歳と云ふのは英語の何とやらいふ語を取つたもので、學者や書生が行列して何かするのは西洋にはよくある事だと遠い國の話をされた。然し私には何となく可笑しいやうな氣がしてよく其の意味がわからなかつた。

尤も其の日の朝私は高臺の崖の上に立つてゐる小石川の家の縁側から、いろ〳〵な旗や幟が塀外の往來を通つて行くのを見た。そして旗や幟にかいてある文字によつて、私は其頃見馴れた富士講や大山參と其の日の行列とは全く性質のちがつたものである事だけは、どうやら分つてゐたらしい。

大津の町で露西亞の皇太子が巡査に斬られた。この騷には一國を擧げて朝野共に震駭したのは事實らしい。子供ながら私は何とも知れぬ恐怖を感じた事を記憶してゐる。その頃加藤清正がまだ朝鮮に生きてゐるとか。西鄕隆盛が北海道にかくれてゐて日本を助けに來るとかいふ噂があつた。しかも斯くの如き流言蜚語が何とも知れず空恐しく矢張私等子供の心を動かした。今から回想すると其の頃の東京は、黑船の噂をした江戸時代と同じやうに、ひつそりとして薄暗く、路行く人の雪駄の音靜に犬の聲さびしく、西風の樹を動かす音ばかりがしてゐたやうな氣がする。

祭と騷動とは世間のがや〳〵する事に於いて似通つてゐる。

十六の年の夏大川端の水練場に通つてゐた。或日の夕方河の中から私は號外賣が河岸通をば大聲に呼びながら駆けて行くのを見た。これが日清戰爭の開始であつた。翌年小田原の大西病院といふに轉地療養してゐた時馬關條約が成立つた、然し首都を離れた病院の內部にはかの遼東還附に對する悲憤の聲も更に反響を傳へなかつた。私は唯藥局の書生

が或朝大きな聲で新聞の社説を朗讀してゐるのを聞いたばかりである。私は其の頃から博文館が出版し出した帝國文庫をば第一卷の太閤記から引續いて熱心に讀み耽つてゐた。夏は梅の實熟し冬は蜜柑の色づく此の小田原の古驛は私には一生の中最も平和幸福なる記憶を殘すばかりである。

明治三十一年に奠都三十年祭が上野に開かれた。櫻のさいてゐた事を覺えてゐるので四月初めにちがひない。式場外の廣小路で人が大勢踏み殺されたといふ噂があつた。

明治三十七年日露の開戰を知つたのは米國タコマにゐた時である。私は號外を手にした時無論非常に感激した。然しそれは甚幸福なる感激であつた。私は元寇の時のやうに外敵が故郷の野を荒し同胞を屠りに來るものとは思はなかつた。萬々一非常に不幸な場合になつたとしても近世文明の精神と世界國際の關係とは獨り一國をして斯くの如き悲境に立至らしめる事はあるまいと云ふやうな氣がした。基督教の信仰と羅馬以降の法律の精神とにはまだ〳〵信憑するに足るべき力があるもの丶やうに思ひなしてゐたのだ。いかに戰爭だとて人と生れたからには此の度獨逸人が白耳義に於てなしたやうな罪惡を敢てし得るものではないと思つてゐたのだ。つまり私は號外を見て感激したけれど、然し直に父母の身の上を憂ふる程切迫した感情を抱かなかつたのである。ましてや報道は悉く勝利である。戰捷の餘榮は私の身を長く安らかに異郷の天地に遊ばしてくれたので、私は三十九年の眞夏東京の市民がいかにして市内の警察署と基督教の教會を燒いたか、又巡査がいかにして市民を斬つたかをも全く知らずに年を過してしまつた。

明治四十四年慶應義塾に通勤する頃、私はその道すがら折々四谷の通で囚人馬車が五六臺も引續いて日比谷の裁判所の方へ走つて行くのを見た。私はこれまで見聞した世上の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭な心持のした事は

なかつた。私は文學者たる以上この思想問題について默してゐてはならない。小說家ゾラはドレフュー事件について正義を叫んだ爲め國外に亡命したではないか。然し私は世の文學者と共に何にも言はなかつた。私は何となく良心の苦痛に堪へられぬやうな氣がした。私は自ら文學者たる事について甚しき羞恥を感じた。以來私は自分の藝術の品位を江戸作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した。その頃から私は煙草入をさげ浮世繪を集め三味線をひきはじめた。私は江戸末代の戲作者や浮世繪師が浦賀へ黑船が來やうが櫻田御門で大老が暗殺されやうがそんな事は下民の與り知つた事ではない――否とやかく申すのは却て畏多い事だと、すまして春本や春畫をかいてゐた其の瞬間の胸中をば呆れるよりは寧ろ尊敬しやうと思立つたのである。

かくて大正二年三月の或日、私は山城河岸の路次にゐた或女の家で三味線を稽古してゐた。（路次の內ながらさゝやかな潜門があり、小庭があり、手水鉢のほとりには思ひがけない椿の古木があつて四十雀や藪鶯が來る。建込んだ市中の路次裏には折々思ひがけない處に人知れぬ靜な隱宅と稻荷の祠がある。）その時俄に路次の內が騷しくなつた。溝板の上を驅け拔ける人の足音につゞいて巡査の佩劍の音も聞えた。それが爲めか中央新聞社の印刷機械の響も一しきり打消されたやうに聞えなくなつた。私は潜門をあけてそつと首を出して見た。牛乳配達夫のやうな足袋跣足にメリヤスの襯衣を着て手拭で鉢卷をした男が四五人堀端の方へと路次をかけ拔けて行つた。其の後から近所の出前持が斜向の家の勝手口で國民新聞燒打の噂を傳へてゐた。私は背伸をして見た。然し烟も見えぬので內へ入ると其の儘ごろりと晝寢をしてしまつた。置炬燵が誠に具合よく暖かであつたからである。夕飯をすまして夜も八時過、あまり寒くならぬ中家へ歸らうと數寄屋橋へ出た時は巡査派出所の燃えてゐるのを見た。電車は無い。彌次馬で銀座通は年の市よりも賑かである。辻々の交番が盛に燃えてゐる最中である。道路の眞中には石油の鑵が投出されてあつた。日比谷へ來ると巡査が黑塀を建てたやうに往來を遮つてゐる。暴徒が今しがた警視廳へ石を投げたとか云ふ事であ

る。私は松田本郷町の方へ道を轉じた。三十八年の騷ぎの時巡査に斬られたものが澤山あつたといふ話を思出したからである。虎の門外でやつと車を見付けて乘つた。眞暗な霞ケ關から永田町へ出やうとすると各省の大臣官舍を警護する軍隊でこゝも亦往來止めである。三宅坂へ戾つて麹町の大通りへ廻り牛込のはづれの家へついたのは夜半過であつた。

世の中はその後靜かであつた。

大正四年になつて十一月も半頃と覺えてゐる。都下の新聞紙は東京各地の藝者が卽位式祝賀祭の當日思ひ〳〵の假裝をして二重橋へ練出し萬歲を三呼する由を傳へてゐた。かゝる國家的並に社會的祭日に際して小學校の生徒が必ず二重橋へ行列するやうになつたのも思へば私等が既に中學校へ進んでから後の事である。區役所が命令して路次の裏店にも國旗を揭げさせるやうにしたのも亦二十年を出でまい。此の官僚的指導の成功は遂に紅粉賣色の婦女をも驅つて白日大道を練り行かすに至つた。現代社會の趨勢は唯只不可思議と云ふの外はない。この日藝者の行列はこれを見んが爲めに集り來る彌次馬に押返され警護の巡査仕事師も役に立たず遂に滅茶々々になつた。その夜私は其の場に臨んだ人からいろ〳〵な話を聞いた。最初群集の見物は靜に道の兩側に立つて藝者の行列の來るのを待つてゐたが、一刻々々集り來る人出に段々前の方に押出され、軈て行列の進んで來た頃には、群集は路の兩側から押され〳〵て一度にどつと行列の藝者に肉迫した。行列と見物人とが滅茶々々に入り亂れるや、日頃藝者の榮華を羨む民衆の義憤は亦野蠻なる劣情と混じてこゝに奇怪醜劣なる暴行が白日雜沓の中に遠慮なく行はれた。藝者は悲鳴をあげて帝國劇場其の他附近の會社に生命から〳〵逃げ込んだのを群集は狼のやうに追掛け押寄せて建物の戶を壞し窓に石を投げた。其の日遂に行衞不明になつたものや凌辱の結果發狂失心したものもあつたとやら。然し藝者組合は仲間から義捐金を徵集し堅くこれを秘密にしたとか云ふ話であつた。

昔のお祭には博徒の喧嘩がある。現代の祭には女が踏殺される。

大正七年八月半、節は立秋を過ぎて四五日たつた。年中炎暑の最も烈しい時である。井上啞々君と共同發行してゐた雜誌花月の編輯を終り同君の歸りを送りながら神樂坂まで涼みに出た。肴町で電車を下ると大通はいつものやうに涼の人出で賑つてゐたが夜店の商人は何やら狼狽へた樣子で今並べたばかりの店をしまひかけてゐる。夕立が來さうだといふのでもない。心付けば巡査が頻に往つたり來たりしてゐる。横町へ曲つて見ると軒を並べた藝者家は悉く戸をしめ灯を消しひつそりと鳴を靜めてゐる。再び表通へ出てビーヤホールに休むと書生風の男が銀座の商店や新橋邊の藝者家の打壞された話をしてゐた。

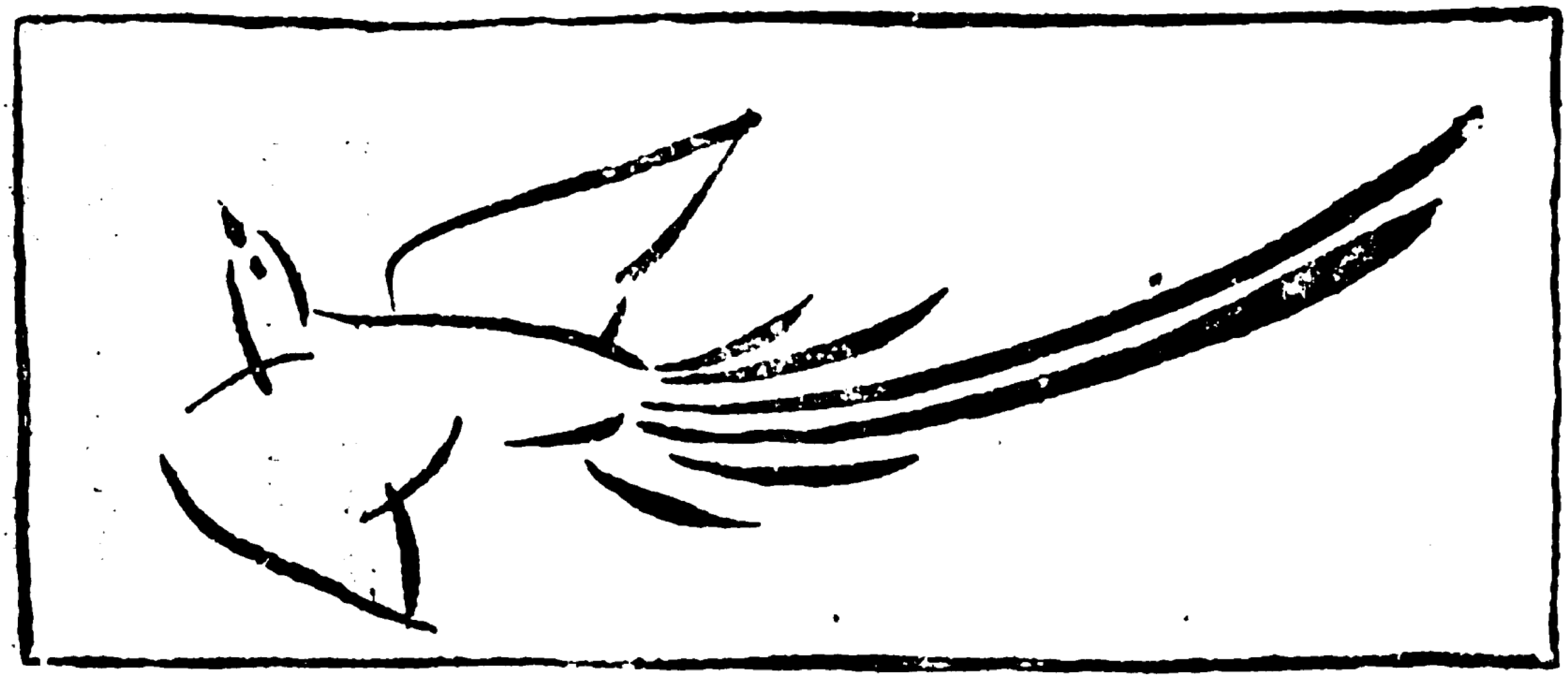
私は始めて米價騰貴の騷動を知つたのである。然し次の日新聞の記事は差止めになつた。後になつて話を聞くと騷動はいつも夕方涼くなつてから始まる。其の頃は毎夜月がよかつた。私は暴徒が夕方涼しくなつて月が出てから富豪の家を脅すと聞いた時何となく其處に或餘裕があるやうな氣がしてならなかつた。騷動は五六日つゞいて平定した。丁度雨が降つた。私は住古した牛込のはづれの家をばまだ去らずにゐたので、久しぶりの雨と共に庭には虫の音が一度に繁くなり植込に吹き入る風の響にいよ〳〵其の年の秋も深くなつた事を知つた。

やがて十一月も末近く私は既に家を失ひ、此から先何處に病軀をかくさうかと、目當もなく貸家をさがしに出掛けた。日比谷の公園外を通る時一隊の職工が淺黄の仕事着をつけ組合の旗を先に立てゝ隊伍整然と練り行くのを見た。その日は歐洲休戰紀念の祝日であつたのだ。病みて久しく世間を見なかつた私は、此の日突然東京の街頭に佇て佛蘭西で見馴れたやうな勞働服の行列を目にして、世の中はかくまで變つたのかと云ふやうな氣がした。目のさめたやうな氣がした。

米騷動の噂は珍らしからぬ政黨の使嗾によつたものゝやうな氣がしてならなかつたが、洋裝した職工の團體の靜に練り行く姿には動かしがたい時代の力と生活の悲哀が現はれてゐるやうに思はれた。私は既に一昔も前久振りに故郷の天地を見た頃考へるともなく考へたいろ〳〵な問題をば、こゝに再び思出すともなく思ひ出すやうになつた。目に見る現

實の事象は此の年月耽(としつき)りに耽つた江戸回顧の夢から遂に私を呼覺す時が來たのであらうか。もし然りとすれば私は自らその不幸なるを嘆じなければならぬ。

花火は頻に上つてゐる。私は刷毛を下に置いて煙草を一服しながら外を見た。夏の日は鑠りながら午(ひる)のまゝに明い。梅雨晴(つゆばれ)の靜な午後と秋の末の薄く曇つた夕方ほど物思ふによい時はあるまい……



美しい町　第三

畫家Eの私に語つた話

佐藤春夫

（E氏の話つゞき）

「え？、なに？、死んだ？、死んだ？」肩を搏つてはげしく、意地悪く揺りおこされた私は、さう叫びながら飛び起きた。——私は寝呆けて居たのであつた。さうして私の眠のなかででも未だ、あの就眠前からの私の過敏な妄想を持ちつゞけて居たらしいのである。實際、睡つきにくい、私の眠のなかには、その時さま〴〵な川崎が夢と現との境目へ時々出沒した。さうして私はやつと明るい部屋の朝の光を背にしながら眠ついたところであつたのである。

「何？　何の夢を見て居るのだい？……早く起き給へ？」

私の妄想のなかでは死んだ人である當の川崎が私を揺り起してゐるのであつた。

「早く起き給へ！　でないと君もそこのソフアと一緒に古道具屋へ賣つて仕舞ふよ。」

川崎のこのつまらない洒落と一緒に、そこには上等のお客に媚びる商人の笑ひ聲が起つて、見ると、私の前に立つてゐる川崎の後には、二人の男が立つてゐた。一

人は時折見かけた事のあるホテルの支配人で、もう一人は多分古道具屋であつたのであらう。私は苦笑しながら川崎の勸めるまゝに顏を洗つて、川崎と一緒に食堂の片隅で食事をした。もう十一時少しすぎであつたので、私たちはひるの食事をしたのである。さうしてそれが私と川崎との別れであつた。どうやら川崎は本當に外國へ行くらしいからである。川崎は全くいつものとほりであつた。顏色が少し惡いだけで例によつて快活な愛嬌のある笑ひ顏で、昨夜あんな風な光景を、つくり出した主人公とはどうしても思へない程であつた。私は、昨夜――といふよりもその朝、あんな風に狼狽した自分を思ひ出して腹立しくなつた位である。さうして「急ぎの用事で引き返して來たとガルソンが言つたが？」と彼がそれを私に尋ねた時には。私は無雜作に「いや、たゞ無闇と睡むくつてうちまで歸るのが大儀だつたからさ」と答へなければならなかつた。さうして私はふと考へた――この男が、今自分の目の前に居る男が、あの時若し死んで居たならば、あんなに惱しい樣子をしてゐた自分はきつとそれに就て多少なりとも何かの取調べを受けなければならなかつただらう、と。彼は私がそんなことを考へたことなどは一向氣がつかないらしく、寧ろいつもよりもはしやいで、約束どほり古道具屋の來たこと、すると古道具屋などにやる程なら一層さう言つてくれゝばホテルで買つたであらうにと、ホテルの支配人がくど／＼言ふから、その方の相談は彼等二人にいゝやうに任して來たこと、だがあのピアノだけはちよつと手放し度くないこと、それ故起き拔けに早速一曲彈いたこと、――さう言へば、私がさつき夢のなかで川崎がピアノを彈いて居る後姿を夢に見たやうな氣がしたのは、それは夢ではなかつたのであつたこと、こんな晴れ渡つた初秋の朝に、船のキヤビンはどんなに愉快であらうかといふこと、さうして實際、いかにも美しい空の色であること、その他。私たちはそんなことを無意味に語り合ひながらゆつくりと食事を濟した。私は川崎が私の家へ送つたと昨夜言つたあの手紙が氣にかゝりながらもそのことは、たうとう言ひ出さなかつた。といふのは、一つには私には見えがあつて、まだそんなことを氣にしてゐると思はれたくなかつたのと、もう一つにはそんな事を言ひ出してそんなに平靜でゐるらしい川崎を私の目の前で昨夜の氣持にさせたくはなかつたからである。正直に言へば、私には人よりも餘計に

センチメンタリズムがあつて、かうして別れたならば多分もう會へないかも知れない川崎の顔をぢつと見ながら、私は淡い悲しみを持つてゐた。睡眠不足のせいか何かで、卓上の新鮮な青林檎が、その色が、それを見ることが、私のこの別れといふ氣持ちを妙にそゝるのであつた。(青林檎は今でも私にその時の心持を呼び起させる。)ホテルの支配人や、古道具屋や、彼等に指圖されてあちこちと物を持ち運んで居る二人の男たちの居る騒がしい部屋から、私は彼と別れて來た。さうしてそれつきり會はないのである――今日まで。といふのは、夜の七時の列車で出發するつもりだと言つた彼は、その日一日を眠り暮した私が六時頃に彼を見送らうと彼のところへ行つた時には、もう疾つくに、午後の四時ごろに出發した後であつたからである。馴染のガルソンが取次ぎに出て來て、それらのことを私に話し、それからあの老建築技師も私と一足違ひに、私と同じ目的でこゝへ來て歸つたことや、老建築技師が正午ごろに電話で出發の時間を聞き合せた時にも川崎はやはり七時だと答へさせたのに、彼は急に都合を變へたことや、それ故私たちにくれぐれもよろしく言ふやうにと彼はガルソンに言傳てたとも言つた。私は自分自身の目で彼を見送らなかつたために、何だか、彼はまだこのホテルのなかに居るやうな氣がしてならなかつた。そればかりではない、私がいつものとほり夕方に家からこのホテルへ出て來る時には、我々の三年越しの計畫があんな風に一夜のうちに崩壊したものとはどうも未だ信じられなくて、やつぱりいつもの通りにあの仕事のつづきのためにホテルへ急いで居るやうな氣がした程であつた。けれどもすべてが華やかに灯をともされたホテルの窓のなかで、唯一つ、昨夜まで私たちが仕事をした部屋、川崎の部屋、二階の表側の角の部屋の窓だけが暗かつた。私はそれを見かへりながらわけもなく歩いた。私には美しい町のことばかりが思はれた。私はどこをどう歩いたか知らない。ただ夜の町を歩きまわつた。ちやうど全く望みのない戀をして居る少年のやうに。――實際、私には氣がついて見るとその「美しい町」が私の戀になつた居た。(この時、歩きながらさう思つたこの比喩は、どうやらたゞの比喩以上のもので、どこまでそれらを押し進めて行つても全く相似て居たやうな氣がする。)さうして私の足はいつの間にか、私を新大橋の方へ導いて行つて居るのであつた――戀をする者の思ひ惱んだ足が戀人

の家のあたりへその體を無意識に運んで來るやうに。かうして私が橋のところまで來てしまつたのに氣がついた時に、私の足は自然とゆつくりと低徊する歩調になつた。私はふと私の二三間前方に、行き來の人々とは全く無關心で、欄干に凭りかゝつたまゝ無心で物に見入つて居る一人の人を見た。それは確にあの老建築技師なのである。彼はいつものやうに古いモオニングを着て居る。彼が疑ひもなくその人であることを知つた時に、私は懐しくもと來た方へ歩を返した。その人の今見入つてゐる夢を覺ますまいと思つたからである。又、うつかり彼に見つけられて何か一言――どんなことをでも一言話しかけられたとしたならば私は危く涙が出はしないかといふ自分がいやだつたからである。私は昨夜のあの奇妙な一夜のうちに、神經衰弱にかゝつて居るのに氣がついた。

「美しい町」！「美しい町」！　私はそんな馬鹿なものを、一時も早く忘れてしまはうと思つて、その次の日から繪の具の箱をひつかついではどこへでも出かけた。さうしてどこへでも行きあたりばつたりに三脚を据えて見た。けれども駄目であつた。樹を描いて居ると。私はふと「美しい町」の庭園を思ひ出す。家の屋根が見えるところだと「美しい町」の屋根を思ふ。夜になつて研究所へ出かけて行くと、私の木炭はいつの間にやら女の裸體のデッサンをやめて居て、私の木炭紙の片隅には小さな家が並んで居る。私は自分ながら時々氣味が悪くなつて、何か物に憑かれて居るのではなかつたかとも考へた。さういふ日々のうちの或る一日であつたが。その夕方私は思ひがけなくもあの老建築技師の訪問をうけた。さうして私は彼から實にをかしいことを頼まれた。この老人の人並ではない性格は私にも前からわかつては居たのだけれども。この頼みをうけた時には、その私でさへも一時はをかしくてならなかつた程である。といふのは、この老人はあの「美しい町」の計畫は結局嘘であつたので、それ故彼自身ももうその爲めには何の用もなくなつたのだといふ事を、彼が毎日毎日そのことに就て吹聽してゐた彼の家人たちに向つて今更、彼自身の口からはありのまゝ

に言へないといふのであつた。それで彼はその後の十日ほどといふものは、いつも今までのとほり七時前に家を出かけては十一時近くまで町のなかを歩きまわつたり、見たくもない活動寫眞を見たりしては時間をつぶして家へ歸つて、やはり「美しい町」の設計をつづけて居るふりをして居るのではあるが、この退屈な無理な方法がいつまでもつづけられ得べきものでない以上は、一度は家の者にも本當のことを打ち明けなければならない。さうしてそれがこの老人自身には出來ないのである。それならば、彼の家人たちは彼のその仕事からの報酬を當てにして生活をして居るからかと言ふのに、決してさうでもなかつた。彼等には醫學者で醫學校の病理學の教授をしてゐる息子があつて、この孝行で寡慾な息子が彼の學校から與へられる金の殆んど全部を彼等に送つて居るので、彼等――この老建築技師とその年とつた妻とは、世間でよく謂ふ樂隱居なのであつた。老建築技師はそんなことを、例によつておどおどした口調で靜かに話し出した時に、私にはふと何かにつけて口やかましい年とつた一人の女がその不遇な夫を事ごとに嘲る状態を、そんな家庭を思ひ浮べた。で、その老建築技師の妻がそんな人ではないか、どうかどういふ理由で「美しい町」の出來ない所以を彼がその妻に打ち明け得ないのだかを、私はごく婉曲に聞いて見た。併し彼の答は私の想像とは全く反對で、彼の妻はどうかしてこの夫の思ふやうな家が出來ればいいが、さうして今度こそはその立派な家がどつさり並んで立てられるものだと、それが實現される日を彼と同じように待ち設けて居るからだといふことであつた――さういふわけで彼は彼の妻に全く顏向けがならないやうな氣がするといふのである。と、それにまた彼の話から親はれるこの老夫婦の家庭が私には老建築技師の子供のやうな内氣はをかしいものでもあり、同時に何となく有難いもののやうに思へた。さうして私は此老人の頼みをひき受けると一緒に彼が一層好きになつたのであつた。かういふわけで私たちは再び時々會うやうになり、彼の方からも訪ねて來るし、私の方からも訪ねて行つた。父と子とよりももつと年の違つた。私と彼とはかうしてその後永く親友同士になつた。私は彼等老夫婦の淡い愛情と靜かさとに滿ちた生活を見て、この騷がしい大都會の奥町――それは日本橋の或る小路であつたが――にそんな生活があつたことを見て懷しいことに思つた。私はT老人をこの

上もなく幸福な人だと思つた。たとひ世間的の生涯として彼は失敗の人であつたにしても、彼の身のまわりにはこのとほりの平和があり、猶もつといいことには、彼にはその上に常に夢想してその幸福を追ひまわすことの出來る題目「美しい町」までもあつたのである。唯、このT老人がいつもいつも老人相應のくどさで「美しい町」のことを言ひ出すには私も全く困らされた。――といふのはそれを言ひ出されると私までが悲しくなるからであつた。……

E氏の話は未だまだつゞいた。T老人の話になつてからもかなり長かつた――が、私はもうこれ以上書くのはよさう。何だかひどくつまらなくなつて來た一たい。他の人から聞いた話を、その時ちよつと面白いと思つて書き初めると、いつも大てい愚作に終るものであるが、作者はさういふ種類の愚作を又一つ書いてしまつた。――が、若しまた何かのかげんであとをつづけて見たいやうな氣持ちにでもなつたら、無用なことだが、續「美しい町」を書かないとも限るまいが、この二十前後の世間知らずの二少年と、六十五になつて未だ夢想することの出來る老人との話――さうして話の三主人公と同じやうな人たちのためのこのお伽噺を、こんなに愼しく終る前に、私は、次のことぐらゐは言はなければなるまい。――T老人が彼の兼ねての願望が協つて思ひどほりの家を一軒だけ立てたこと。その一軒の家とは、それはE氏の評判の畫室で、即ち我々があの晩夜更けまで、前述の話を聞いたあの落着いたアルコーブのある畫室であること。それから一九一六年のA展覧會で有名になつたE氏の「或る老人の肖像」といふのは、建築技師老人を描いたものであること。T老人はその孫娘とE氏とが二人で樂しく暮すやうにと遺言して昨年死んだこと。今年の春、祖父の遺言をうれしく實行したE氏の細君は來年になつたなら（自分の嫁入つた年のうちはいけないといふ迷信があるから）犬を――あの「美しい町」の規約に從つて犬を飼ふこと。それには私のレオが來年の春産むであらう子ちの最もいゝのを――實際、レオはいゝ子を産むのだから――貰つて貰はうと約束したこと。で、テオドル・ブレンタノの川崎愼蔵はどうしたか？彼は獨探ではなかつた？「美しい町」の紙で出來た模型は何處かの砲臺に似ては居なかつたか？K氏の畫室はどんなによく出來たか？そんないゝ畫室を立てる金がどこにあつたか？何故、その畫室の礎石にはTとEと川崎との三人の名と年月日とを刻んだか？正しく「美しき町」のうちの一軒であるE氏の家庭はどんな土地に在るか？――それはちよつと一口には言へないから、續「美しき町」が書きたい氣になつたらまた書いて見ないとも限らない。



村の反逆者

神近市子

一

姪の秋子の初節句が私の宅では祝はれてゐた……

「おんち、勇右衛門おんち……」

兄がよく通る聲でかう呼び立てた時、私は小さな障子の穴から子供の入ることの出來ない一の世界を覗つてゐた。

その小さな穴から見える向には、座敷二間を打ち抜いた廣間が展がり、五個の大ランプと無數の燭臺が、餓えた蛇の舌の樣な炎の先で黄色な光と黒い壁と薄藍に塗る周圍の障子を照らしてゐた。

ランプの火も蠟燭の光も通らないので床の間は蔭が多く薄暗かつた。けれどそこには一杯に緋毛氈が敷き擴げられ、濃い敷物の色から抜け出た樣に輝く顔の内裏雛が似寄つた顔を差し並べてゐた。そして内裏雛を中心にして程よく間をおいて左右には、赤や青や紫の樣々な着付をした押繪の人形が一杯に居流れて、そこでも互に語り合い悲しみ合ひ喜び合ひ爭ひ合ふ世界を造へてゐた。小さくきらびやかに、ほの暗く音のないその一廓の前には、又一ツの景色が疊の上に敷き擴げられてゐた。

隙間もなく並べられたお膳、黒い椀、赤い皿、青い皿、それらが雜然と取りひろげられ、その間に點々と立つてゐる筒形の酒の瓶はそこ／＼の人々の手に取り上げら

れたへまなく程近い盃を黄色の液體で滿してゐた。中央には大きな肴盛が据ゑられ、その上の樣々な鉢には鯛の刺身、白肉鯨、茹章魚、小鯵など南國の人々の好む肴類が綠や赤のけしきと共に山形に盛られ、側近く席を占めた腰の曲つた老人は注意深く空になつた皿を求めて來ては、又新しい肴を補ひ入れてゐた。

床の前に、幾の長い枝の先には金絲銀絲紅白の糸でかゞつた毬、縮緬や羽二重の小片で縫つた小鳥やくゝり猿などが、折れ曲る程結ひつけられた柳の下に、義姉の父に當る武伯父樣と村巡査の添田樣とが並んで座を占めてゐた。七子の羽織と千筋縞の秩父銘仙の綿入れの袖口から鼠色になつたメリヤスを手先近く迄覗かせた武伯父樣は、甘味さうに脊をたてゝ膳の上の物を呑み込んでゐた。稍小さな底意地惡く光る茶色の眼、蜜柑の肌の樣な毛穴がポツ〳〵と現はれてゐる鼻柱の高く肉の厚い大きな鼻、若々と色の鮮かな厚い唇が充分に横に通つてゐる口。肉のついた幅廣い顔、それには脂肪が張り切つて、テカ〳〵とした輝きを見せてゐた。それと並んで座つてゐる巡査は、酒の呑めない質なので醉ふ事も出來ず、瘠せて骨々した黄黑い身體が如何にも寒く貧しさうに見えてゐた。けれど高く通つた鼻と、その鼻の下を黑く隈どつてゐる口髭、白い太い紐を几帳面に結んだ衿の廣い羽織、キチンと膝をそろへて左の手を左腹の腰の邊に當がつてヂロ〳〵座を威壓して居る態度には、どこか巡査らしい威嚴が備はつて、この人が上座の一を占めてゐる事が少しも偶然の事の樣には感じられなかつた。

その二人を中心として人々は左右に分れて廣間の周圍に居並らんだ。薄い布がさける樣な笑ひ聲を出すひよろ長い酒屋の若主人、額半分が濃い硬い毛に蔽はれてゐる小學校の訓導、一寸もあらうかと思はるゝ程長い眉毛が房の樣に兩方の眼尻にかけて下つて居る荒物屋の隱居、次から次と村の重立つ人々は殆ど招かれてゐた。歌ふ、笑ふ、怒鳴る、叫ぶ。硬い毛、銅色の顔、毛むくぢやらな手足、病み犬の樣な聲、こわばつた着物から發散する糟糊のすつぱい匂、あつい酒、大きな盃、酌に頼れた年頃の若い娘達の白粉や簪のピラ〳〵、みんなが今日の晝は靜に地道に土を掘つたり、砂糖をかけたり、酒をはかつたり、裁縫をしたりしてゐた人々とは思はれない程、賑かな空氣の中に異つた自分達を現はしてゐ

た。

「勇右衛門おんぢ……誰かおんぢを呼べ……」

兄がも一度呼んだ時、翁はノッソリと大きな黒い烟草入れを握り乍ら始めてこの部屋に入つて來た。

「こつちに來いえ、おんぢ」

その時兄は座敷の眞中ににぢり出して來て、熊の様な小學校の先生の前に足座にくづして座つてゐた。廣い肩幅の上に、太面の顔が調和よく据はり、黒い波打つた女の様に柔い髮、コンモリと盛り上つた鼻、兄の醫者らしく白い額には若い情熱が滿ち〳〵てゐた。

「おんぢ、甚句をやろかい」

「ようがつしよ、ばつてん、大將。急がんちや好うがすせんな、息を切らさん様にお唱ひなつせ」

翁は先達らしくから注文すると、兄の前に据ゑてあつた盃を取つて、一杯グッと引つかけた。そして後方で何か流行歌を彈いてゐた、村藝者の方に

「甚句をやるぞに」

と言ひつけた。

「ゆこか戻らんせうオか、ホヱ山下霧節イ……」

二人は一様に少し前のめりに曲げた上半身をゆり乍ら　調子を取つて唱ひ始めた。醉ふてゐる兄は始の間は大元氣で高く張り上げた聲で唱つてゐたが、少し時間が經つと息を切らして終つて、ともすると歌の文句が後れて行く。

すると翁は充分に鼻を擴げ眼を瞑しさうに細めた顔を振り向けて、とろける様な笑を浮ばせ乍ら

「そら、シツカリおやりなつせ」

と云ふ様に、處々で文句を餘分に引つ張つては、兄が追ひ付いて來るのを待つてゐた。若々しい派手な目鼻立の兄と、ガツシリとした骨組の逞しい爺とが、少し甲高にならうとする位な聲と、低い質素な、然し極めて自由な抑揚を持つてゐる聲とをピツタリと融け合せて歌つて行く。その節廻しの簡單な文句の質朴な歌は、聞いてゐる者の心に眞直ぐに觸れて行く何物かを持つてゐた。人々はそれに聞き惚れて、カサと云ふ音さへも立てなかつた…………。

いろ／＼の話を綜合すれば、爺は私が生れる前から出入してゐたらしいから、もつと舊い記憶がある筈だと思ふけれど、私にはその夜の勇右衛門爺の記憶が一番舊い様である。

私の故郷は西九州の或る海岸つきで、他處の村に較べては決して貧しい村ではなかつたが、それでも村落生活にはよくある農民の極度の勞働の苦鬪、理由のない困迫、何千年と馴らしゝめられて來た性情と、それを裏切らうとする強い個性のはげしい爭鬪とその潰滅とを見乍ら育つたのであつた。代々醫者の家柄であつたので、これらの村の人々の生活を直接に分つ事はなかつたが、然しこの人々に接する事は一番多かつた。村では單純な習慣と傳説とが人々を二つの階級に分つてゐた。

銅色の顔の人と白い皮膚の人、地を掘り地を馴らして生産の仕事に直接從ふ人とその生産されたものと外の必要品とを交換する人々、村の言葉に從へば「よい衆達」「百姓づれ」とに分れてゐた。私共は云ふ迄もなく「よい衆」の階級に屬してゐて、銅色の人々の存在は私共にとつてはどうでもよい事の様に考へてゐた。

彼等は生れ乍らに貧しいから一生苦しまねばならぬもの、永久に「よい衆」の生活に入ることの出來ぬ烙印を押されたもの、よい衆は彼等を憐れむ事は出來るけれど愛する事は出來ぬもの、だとしてゐた。私がこゝに記憶を語らうとしてゐる勇右衛門爺はこの垣を踏み越えて私共の生活を分つ様に入つて來てゐたたつた一人で、私共はたしかに彼れを愛して

ゐた。着物こそは何時でも「百姓づれ」の筒袖で、喧嘩とおもふ時でも黒い毛繻子の襟のかゝつた紺無地木綿の筒袖袢天、白金巾の幅廣の三尺をしめてゐるに過ぎなかつたけれど、高い鼻、キツと好く締つた四股の非常によく發達した身體はドツシリした威嚴を見せて、逆睫毛で何時もショボ〳〵した赤い眼をしてゐる源や、鹿爪の様に硬い髭の間から上向いた鼻に百姓らしい特種の表情を見せてゐる一般の百姓の輩から遙かに遠いものに思はせた。

私の宅との關係は私が育つ頃四軒程あつた「お出入り」の百姓の一軒だと云ふ關係に過ぎなかつた。「お出入り」は勿論親類ではないのだが非常に親しい關係を持つてゐるもので、それらの家は私の宅の百姓手の要る仕事。幸不幸の出來事の折の雑用、野菜類の融通などの用を足してくれるので、宅からはその代りに金錢を融通するとか古着の類をやるとか藥を呑ませるとか云ふ様な用をつとめてゐた。爺の家はそのうちの一軒で、お代と云ふ女房と二人切りの暮しであつた。

二

「勇右衛門おんちやん、お前のうちにつれていておくれ」

私は、村はづれの觀音堂に腰かけて待つてゐると、爺は最前擔いで行つた大豆を鹽の小俵二俵と、一方の籠に入つてゐる線香。紙類、粗末な下駄の様なものとに取りかへてかついで來た。まだ左の手には石油の入つた小さな罐も下げてゐた。非常な不安と希望とに亂れてゐた私の幼い頭は、瞬間の歡喜と安心とを通り越すと、その後に食ひ切つても飽き足りない自分の家の無理解に對する腹立たしさを呼び起して來て、私は爺の帶にとりついて泣き出した様に覺えてゐる。

私はその日學校から歸つて來ると、兄からひどく打たれて

「何處へでも勝手に出て行つて乞食になれ」と云つて逐ひ出されたのであつた。

丁度青森聯隊の兵隊が八甲田山に雪中行軍に出かけて凍死した記事が新聞に出てゐる頃で。私の小學校では、「その

哀れに勇しい人々の靈を慰める爲めに」應分の醵金をする事になつてゐた。愛する天皇陛下の御爲めそして大切な國家の爲め、何故この哀れな兵隊達は戰爭があるのでもない山中で凍え死に死なねばならなかつたらう、雪の山中に行く事がどうして國家の爲めになるのであらうか、私は何かわからぬことだらけな氣持がしたけれど、たく山な人間がタツタ一ツしか持つてゐない命を済すには何かよく〳〵大切な事がなければならないと思つたのと、それに學校では先生達はじめ誰もそんな事を不思議にして口にする人がなかつたので、私は自分が何か聞き落した事でもあるのではないかと云ふ怖れもあり、旁々それを詳しく尋ねることは出來なかつた。只人間に取つて一番大切な義務を行ふ爲めに、愛する陛下と愛する國家とに命を捧げたその勇氣と熱誠とは、私共の手本であると云ふ校長の意見に私は一も二もなく贊成した。そして方角を失ふた一隊が、見る間に膝を埋め腰をかくす雪降りにあがきもがいた話の一くさりは、幾度校長に繰り返されてもその度に私を泣かすに充分であつた。

私は學校から歸ると直ぐに、この何の爲めかは知らないが「大方死ぬことが大變に大切であつた爲め」雪と戰つて死んだ比類のない強い勇士達の話を、母にも義姉にも女中達にも藥局の人達に迄も取り次いで歩いた。そして序に、こんなに苦んで戰爭の手本となる樣な偉い事をした人々は、出來る丈け手厚い死後の慰めを與へられねばならぬと云ふ意味の校長の意見に共鳴してゐることとも、もれなく云ひふらして歩いた。

翌けの日、姉はこの「勇しい人々を慰むる」ために僅か廿錢を出してくれた、けれどこれは私を滿足さするには遙かに足りないものであつた、私は熱心に追加のことを賴んだけれど、義姉は笑つてゐて私の要求に應じては呉れなかつた。それに失望した私は此上はもう盜むより外はないと決心した。天皇陛下の御爲め國の爲め忠義に死んだ人々の靈を慰める爲め盜む事は決して惡くない、と私は考へた。怒ると思ひ切つた折檻をする兄が頻に怖つたけれど、打たれたり蹴られたりする事は死ぬ事より怖くはない——私は少しの躊躇もなく藥局の合計から二圓ほど盜み出して持つて行つた。

之から打たれても蹴られても私は、謝らなかつた。平手で頬をいくつも續け樣に打たれた時は、意地を張りも失つて

泣き出した。そして最後に家を逐ひ出されて見ると、短い秋の日が墓地の丘の方に菲れて行かうとするのが頻にたよりなく詫しかつた。無論裸足になつてゐたであらう、學校歸りの儘まだ何も喰べてゐなかつたので、近所の門に洗つて水を切つてある掘り立ての芋をいくつも貰つて喰べて、明るい間はそれでも村の子供と遊び廻つてゐたが、一人二人と夕飯に呼ばれて「アバヨ!」と歸つて行くと、始めて「家なし者」の悲哀が身に染みて、私は急に泣き出したくなつた。お峰が風呂の川意をしてゐるのであらう、丘の麓に廣い野菜畠とまだ花のいくつか殘つてゐる蓮田を前景にして、シッカリと正面を切つた一構への屋根には暮れて行く秋の淋しさを表はすもの丶様に紫色の烟が立ち迷ふてゐた。明るいランプのともつた茶の間に母が何時もの様に皆のお膳を並へて、自分の隣りにある私の赤い椀にもお菜を粧つて私が歸つて來ぬのを不思議がつて探してゐる樣で、私は自宅の方を振り返り〲村外れの觀音堂迄村の人に怪しまれぬ樣忍んで來た。爺が大豆を擔いで店の方に下つて行つたのを晝間見かけたから、爺の家に連れて歸つてくれる樣に賴もうと思ふたのであつた。爺の家のある部落は私の部落から田原一つ渡つた山近くにあつた。

觀音堂から裸足で飛び出して來て、腰にしがみついて泣いてゐる私を勇右衛門爺は呆れはて丶見てゐた。けれど逐ひ出された譯をはなすとすぐに

「お御、ようわかりました、もうお泣くな、おんぢのうちイ連れてゐてあぐるせん、お峰に學校の道具を出させてくるせん一寸の間待つてお居り」

「ドッコイショ――」と元氣の好い掛聲で荷物を下ろすと、膝切りの仕事着の襟をずり合はせて鉢卷をとり、木劍の烟草入れを腰に躍らせ乍ら、大跨にズッシリ〲砂の上に足音を立て丶引き返して行くのを、私は慰められた安らかな氣持で眺めてゐた。

勇右衛門爺が裏庭から茶の間の椽先に出た時、宅では皆がそこで夕飯をたべてゐた。誰もが私が自分達の仲間から逐はれてゐるのに氣づかぬ樣であつた。爺は締りの好い口を一の字にキツと閉ぢて、晩酌を飲んでゐた兄の方に見向きもしなかつた。そして裏庭の敷居を越える時にぬき取つた烟草入れから烟管をとつて烟草をつめ乍ら

「お峰、お夏お御の學校道具を持つて來てくいろ」

喰い切つた樣にかう云ひ捨てると、マツチを摺つてスパ〳〵と不興氣に烟草を吸ひ始めた。そしてお峰がモヂ〳〵してゐると

「早くしろ！」

と火の樣に怒鳴つた。

義姉も藥局生達もその時始めて平常の爺でない事に氣がついた樣に、一齊に顏を上げて爺の方を見返つた。

「お袋樣――――」

母だけは何事もなかつた事の樣に矢張り靜に茶椀の中をつゝいてゐた。

「お夏お御は當分私が預りまつしよ、ナイ、八ツか九ツの子供を逐ひ出したりして、感の早やか子供しにはどう間違ひの出來んとも云はれますまい、さう云ふ人にや子供は預けておかれまつせんたい」

爺は怖い眼をして向ふむきになつて食事をしてゐる義姉の背後をグツと睨みつけた。母は何時も振り返りもしなかつた。

「婆爺ツ、おれがうちの子をどう仕込まうと勝手だぞ、よその家の子供を連れてゐて見ろ」

癇癪持の兄は、もう最前からの爺のそら〳〵しい批難に堪へられなくてヂり〳〵してゐた。

「連れて行きます、そしたらどうなさる、出入り差止められた位いは構ひまつせんぞ、人間の子一人あなたが好きに逐へられると思ふとると間違ひますぞ、高がた、八ツか九ツの子供を折檻して何の役に立つと思ひます、兄貴なら兄貴ら

しゆう可愛がつて云ふて聞かするが役目ぢやすぞ、兄貴に生れたが手柄ぢやこざすせんぞ」
爺は兩足を擴げて眞直に突つ立ち、右に烟草入れ左に烟管を握つてゐた。
「馬鹿ッ、失敬なッ」
と兄はから咾りたてたけれど、爺は自分の腕力をたのむ者の樣に平然と立つたまゝ烟管の火を掌にコロ〳〵轉してはスッ〳〵と烟管をならしてつめかへてゐたが、お峰が私の學校道具を出して來たのをひつたくる樣に取ると、又ヅシリ〳〵足音をひゞかして出て行つた。
私は此の事を果して自分が見たのか又は姉が後で云つて聞かしてくれたのが、こんなに判然した繪畫を私の前に擴げて見せてくれるのか、前後の記憶を少しも持つてゐないので判斷がつかない。
爺の家に行き着いたのは、もう日が暮れてからであつた、お代婆はまだ燈もつけずに納屋にさす夕暮の薄明りで晩飯の支度をしてゐた。爺は自分でバケツに水を汲んで來て私の足を洗つてくれると自分も上にあがつて來た。五分心の洋燈がボワツとつくと、黄ろくなつた壁、眞黑に光つてゐる戸棚、煤が一杯フラ〳〵と垂つてゐる自在鈎など、狹い光の領國の中に浮いて出た。
その部屋は區別りも何にもないだゞ廣い部屋で、後方の方によせて可成りな圍爐裏が切つてあり、そこから土間にかけては板敷になつてゐた。部屋は六疊位の座敷が一ツと、同じ位の暗い納戸がある樣であつた。土間は殆ど建坪の半分位あつて、俵類だの野良道具だのが亂雜に積み重ねてあつた。
爺に呼ばれて座敷に入ると爺は佛壇に燈明をあげ線香を立てゝゐた。矢張り仕事着の儘でその下から赤味を帶びた眞黑な色の足が二本ニヨキと前に出て、大きな骨くれだつた手の先に突つかける樣に珠數をかけて殊勝らしく頭を下げてゐるのが可笑しかつた。

「おんちやん、お前のごと強うしても死ぬのは怖しいか」

私はお代婆のらしい赤玉の四ツ入つた女持の珠數で先に拜んで了ふと、立つて佛壇に飾つてある兵隊の寫眞を見乍ら尋ねた。あんなに頑丈な人間が怖いと云へば、それは全く驚く可き事を私は發見するのに相違なかつた。

「お夏樣、おんちは死ぬ事が怖しゆうはちつともがつせんと、ばつて、あんまり腹の立つ事ばかりなもんで、婆が念佛申して見ろと云ひますせん、この頃から拜み始めましたたい」

けれどこれは又私には新しい質問を與へる事であつた。爺が腹立つる事が何故悪いか、腹立つ様な事が起つたら誰でも腹立てねばならぬではないか。

「大きうなるとお御もわかりますぞ、腹が立つても腹を立てる事出來ん事があつたり、一生泣き通しに泣いとつても追つ付かんほど悲しい口惜しい事があつたりしますぞ、おんぢもこの年迄いつでも〱腹立てたり喧嘩したり暴れ廻つたりして見ましたばつてん、もう止めうと思ふとります、お御も今日のごと、わが一旦かうと思ひつくとどうでもそれを仕遂さにやならん性分では、矢張りおんぢのごと業の深か生れつきぢやろ、業の深い者はナお御、地獄の底の底にも行けば、極樂の阿彌陀様の一番近か御座にも行かれますちゆうぞ、あなたの一生も苦勞は多かとぢやろ、ようシツカリと勉强して偉か女御におなりなつせナ、學問すればおんぢのごと目標なしにドタバタせんちや濟むかも知れまつせんてな」

「あい、大きうなるとな、兄んちやんに長崎の女學校にやつて貰ふて學者になると。そして月給をたく山にとつておんちやんにも樂をさせてやろ」

焚き立ての麥飯に好きな味噌漬で大變に夕飯が甘味しかつた事を覺えてゐる。御飯が濟むと村の風呂に入つて來て圍爐裏の側に寢ころんでお代婆に芋をふかして貰つた。湯上りには爺も盲目縞の襟の當つた袷を着て圍爐裏の横座に足

座をかき、烟草を吸ひ乍ら私の話に興に入つてゐた赫ら顔が木彫の面の様に想ひ浮ばれる。

三

私は明けの日お峰が迎へに來て歸つて行つた。お峰が持つて來た重箱には、素麺だの麩だのが一杯入れてあつた。

三日に一度、四日に一度、私は爺が何かの買物に私の部落に出かけて來なかつたことはなかつた様に思ふ。私の家は部落の入口近くにあつたので、爺は往き歸りには大抵寄つて行く。年とつてゐてもよく忠實に働く身體で、そんな序にも表まわりを掃いたり畠の手入れを手傳つたり、手當りにがせいに片付けてゐる。それが私の宅にどれ丈け便利してゐるか爲めになるかと云ふ樣な事より、どうもさうすれば自分の氣が濟むと云つた風な處が見えてゐた。大家内のだゝ廣い私の宅では、夕方など鰻をさくとか鯨の硬肉を切るとか、澤庵の石を起すとか、

「勇右衛門さんに頼みまつせうかい」

と云つてお峰が待つ樣な仕事も多つた。

こんな小さな奉仕のあとで、爺は上り框に腰をかけて「一本つけて貰ふ」のが常例になつてゐた。腰の手拭で今洗つた手を拭き／＼ユツタリとした足取で樂しむ樣に近づいて來た。今自分が切つた鯨とか又は雲丹とか鰑とかゞ盆の小皿にはつけてあつた。何にもない時には自分で小皿に味噌桶の味噌を出して來て、自分で器用に刻んだ生薑をふりかけて肴にした。けれど母がゐない時など若い女達はこの長い常例を故意にか不注意でか忘れ易かつた。すると裏口を入つて來て

「お御、お湯吞を一ツおかしなつせ」

私が湯吞を出してやると臺所の戸棚から德利を出してあの黄ろい色の液體をなみ／＼と注いで、チユーツとたまらな

さゝうな音をたてゝ飲む。私が足素を持ち出してそこらの棚に鰑の足など探して見ても見つからぬと

「がすせんな、そんならもう好うがすテ」

と、云ひ乍ら臺所口の柱に根を上にしてつるしてあつた赤い胡椒の大粒の實を取つ來て、指先で拭き〱端を撮み切つてガリ〱嚙むのだつた。

春先には田植後の燒米、山椒、大粒な色の好い豐後梅、夏になると十から生りつゞいてゐる上等に熟んだ胡瓜、瓜、青梨、秋祭近くなると栗、柿、まだ青い蜜柑、新芋、爺が擔いでゐる荷物の片隅に入れて、私にだけ持つて來て呉れるものでも可成りあつた。

どう云ふものか世間話は餘りせぬ人で、側で誰か村の出來事や人の噂をしても口を出す樣なことは滅多になかつたが、子供を對手にするか妖怪談の樣な話なら夢中になつて話すのだつた。若い時に見た大蛇、玄海灘の海坊主の頭、若い頃長崎で見た耶蘇の女の魔術の話のことなど、一番喜んでする話題だつた。

「耶蘇の女御は、身體に毛が生へとるつて、ほんとじやろかい」

などゝ來合せた百姓衆の女房が尋ねると

「アイヤ、さうぢやなか、當り前の人間とかはりはせん」

と云つた調子で、それらを中心にした話なら何時迄でも飽くと云ふ事がなく、爺が來ると殆ど側をはなれぬ私を嬉しがらせたものであつた。

他處では變人で通つてゐた丈けあつて、村の人とも「よい衆」の仲間とは低氣地の樣に口を利かなかつたが、私の家の者だけには誰にも親しんでゐた。けれど新しく來た兄嫁は何故か眼の敵にして、遠慮のない皮肉や批評をあびせかけた。

「こらへておくんなつせ、おんちは爺のかとく米まけて貰ひにあなたの家にいて、番頭どんと喧嘩した事があつたもんで、あなたの家に憎しみをかけて居りますとぞ、何もあなたを憎んで居るとぢやがすせんぞ」

母が何時か義姉をなだめてゐた。義姉は武伯父様の娘で、村の地主格の家で生れたのであつた。

四

夜の深い吐息の中に私はフツと眼をさました。誰かに何とか呼び起された様な氣がして眼を開けたのだけれど、さめて見れば耳に入る人の聲もなかつた。

屋外では二月の夜嵐が怖しく荒れて、程近い後ろの林では樹の枝がメリ／＼と云ふ音響を立て丶折れてゐるし、その合間には梟が沈んだ枯れた聲で鳴き立て丶ゐた。遠くの方では心細く遠吠する犬の聲、蓮田の向ふにある造酒屋の酒藏では不寢番の酒男が酒を掻き廻してゐるのがガサリゴソリと氣持の惡い音をたて丶ゐた。

女中達の寢てゐる納戸の方からバリ／＼と齒ぎしりの音が陰慘な空氣を攪げて行く。どこを向いても眞黒な暗、しめつける様な暗。私は寢返りを打つて枕を當て直した。その途端、母の枕がギーと少し動いて、低く呻く様な念佛が母の唇からもれてゐるのを知つた。

「なむあみだーぶ、なむあみだぶ、なむあみだぶ…………」

私の耳に聞いたのは三遍か四遍の念佛であつても、母は心のうちで無限に佛の御名を念じてゐる事を私はようく知つてゐる。私も四五遍口のうちで稱名した。

「おかゝ、最前からお起きとりましたとナ、私しや誰かゝら起されたごと思いますとばつてん」

「インエ、私も今起きたと…………私も誰か何とか云ふた様な氣がする…………」又一しきり話の間を嵐が通つて、遠吠の聲が不吉さうな聲を一段ふるい立てた。

「お頼み申上げます、お袋様おたのみ申上げます」

誰かゞ起してゐる！

私共はさつき聞いた聲はこれであつた事を直ぐに知つた。可愛さうに、幾度又誰かゞひどく悪いのであらう。夜になつて醫者の家を慌しく叩く人々は、どんな時でも自分の最も親しいものか、最も愛する者かに迫つてきてゐる危難に脅かされてゐる。どこの不幸者が、又その怖しい厭な闇をふられて母の名を呼んでゐるのだらう！

母が枕許の燐寸を探して提燈に火をつけてゐる間に、私は大急ぎで足探りに藥局の方に出た。間の襖をあけた時パツと硝子戸にさし入つた明るみで、私は月の光で屋外は煌々と照らされてゐる事を知つた。何時も母がする樣に私は窓深く直には戸をあけなかつた。診察所の鐵格子をはめた窓の硝子戸をあけると門口が見下ろせるから、窓の下に椅子を持つて行つてそこから顏をつき出した。

「どなたぢやすか」

「おやすみの處を叩きまして相濟みまつせん、木場の作太郎から參りました、作おんぢが昨晩大分酒をのんでやすみなした相ぢやすが、家内がヒョイと氣がつきますと、どうも變な樣子で、起して見ますばつてんまだ醒めつきまつせん、呼吸だけは通ふてをる樣でござります、恁うしてお氣の毒に思ひますばつてん先生におのぼりをお願ひしてくれろとて家内が氣狂のごと申上げますせん、どうぞ一ッ先生によろしゆう御願ひ申します」

戸の外には、一樣に草鞋をはいて身輕に出でたつた若い者が二人立つてゐた。今自分達が落ち込んでゐる悲哀と心勞とに心をはまれて了つて、自分達が話しかけてゐるのが子供である事に何等の危惧をも起さないで、二人一樣に丁寧に腰をかゞめたのが私の心を深く〴〵悲しませた。

私共が起きつく迄、さぞ長い間呼んだことであらう！

母がランプに火をつけて、それを持つて出て來るのを聞き乍ら、私は戸をあけた。

「おはいり……」

「おゆるし下さりまつせ」

若者達は又深々と腰を下げてから、入つて來た。サツと吹き込む夜風が身に沁み入る樣に感じられた。
母は若い人が又一度同じことを繰り返へすのを聞くと、だまつて奥にある兄の寢間に行つた。
「曉一さん木場の作太郎どんの處から相談に見えとりますとの……………」
母が幾度もかう呼んだ時、兄が夜具の下から、う、う、ぐみ聲で何か云つてゐた。母は又何か爭ふ樣に云つてゐたけれど、何時迄も兄の返じはない樣であつた。忘れ樣とする程長く母は立つてゐた。けれどとうとう歸つて來た。
「ひどいお氣の毒ぢやすばつてん、風邪氣味でどうも今夜は出歩き出來んと申しますとの、代診でよかつたら上げなすばつてん、さうひどい病氣では役にもたちますまいし、松田樣（隣村の醫者）に相談してはおくれまつせんろかいツて云はりますとの」、
母の聲は沈んで了つて、寒さからか慾りには泣いてゐるのではないかと思ふほど慄へてゐた。
「御尤もでござります、おんぢもたつしやな時にやいろいろ不義理ばかり申上げておりますせん、ばつて今夜は生き死にの境目でござりますせん、ひとつ御奮發を御願したいものでござりますとの………………どうかお袋樣、あなたから何とか御相談願はれますまいか……………」
質朴な若い衆は、もう涙聲になつてゐた。
「…………………」
母は長い間だまつてゐた。コトと云ふ物の音もなかつた…………。
「…………この寒さぢやあるし、何もかもおんぢの運の悪かとぢやろ……………來ておくれんちや誰を怨みようもなかナイ、三、そりぢや御暇しゆうかい……………大きに御騷がせ致しました」
若い者の聲には元氣はなかつた。
「ハイ、これはな、御苦勞ぢやした、折角よう世話しておあげな………………

母の聲も愁つてゐた。

後の戸締りをして來ると、母は長い溜息をついた。息をころしてこのいきさつを聞いてゐたらしく向ふの書生達の部屋でも急に話聲が聞えて來た。が、それも靜かになつて行くと、又夜の靜寂の間を母の念佛のみが響いて行く。

「なんまみだぶ、なんまみだぶ、なんまみだぶ…………」

…………山の中腹にある貧しい木場の部落の茅葺小屋に、蒼ざめた中年の男の顏と、獸に似た顏をした半狂亂の女の顏とが、齒を半ば喰ひしばつて恨めしさうに私の顏を見詰めてゐた。

「ナア、おかゝ、大きうなつたら私アお醫者になろ、そして藥代もつて來ん人でも行て見てやろ」

私は又直に眠に落ちてゐたのであらうか。

…………ドヤ〳〵と人が入つて來た足音に、又私の夢は破られた。

「寒うがしつろな、ハイ、度々御苦勞ぢやす」母が挨拶してゐるのは、最前の若い衆達らしい…………。

「大將はおやすみぢやすろな、作が死かゝつとるつて云ひますせん、どうでも一寄發して貰はずと思ひましてな」

これは勇右衞門爺の聲であつた。

「…………」

「おゆるしまつせ」

診察室を通つて兄の寢間に行く爺の影が障子にうつツて見へた。

「旦那樣……旦那樣……」

底力のある強い聲が直ぐに響いて來た。表口に殘つてゐる人々の間には、話し出す者は一人もなかつた。

私は兄の聲は少しも聞かなかつた。暫時の間、爺はクド〳〵と低い調子で何か云つてゐた。

「この寒さにあの山の頂上迄は行かれん」

初めて夜具の中から頭を出したらしく、兄の言葉がかうハッキリ聞えてきた。

「さうお云ふたつて、作一人の災難ぢや濟みますせんもん、家内も子供も路頭に迷はにやなりまッせん、この爺を助けると思ふて一ッ奮發して、助かるものなら助けておくれまつせ…………」

稍激した爺の言葉が途絶えると、暫時は誰も何とも云はなかつた。…………突然に、鼠の暴れ廻る音が凄じく天井裏から響いて來た。

「旦那樣、これほど云ふてもどうしても聞かれんとお云ひますな…………」

明らかに爺の聲は嚴を帶びてゐたと私は思ふ…………そして鼠が荒れる〳〵。

「…………ようござす、あなたの性根は昔のあなたの性根とは違うとりますぞ、金がたまりかくると、人間の血の氣がうすうなりますな、人助けするのが厭なら明日から醫者の看板を下ろして、嬶の腰卷でも洗ふてお暮しなつせ、ばつて、明日も藥盛らうと思ふておるなら、今夜木場迄行て來にや此爺が承知しまつせんぞ」

直ぐにドタンバタンと云ふ音が始つた、他からは誰も口出す者も手出す者もなかつた。

「畜生ッ、人を何と思ふとるかッ」

兄はヘッ、ヘッ、と息を切らして抵抗してゐるらしかつた。爺はもうそれからは一言も云はなかつた。…………

何物かゞグン〳〵引つぱられて行く様子であつたが、ドタンと音がして座敷口の戸の棧が下りた。

「畜生ッ…………」

と云ふ兄の呪咀は、もう屋外の冷たい沈んだ空氣を亂して響いた。戸の棧は又ピンと音がしてかけられた。

「何が次には起つて來るだらう」

少くともかう云ふ期待が、凡ての者の氣持を鉛の様に重くした。咳一ッする者はなかつた。…………スタ〳〵素

足に土を踏む音がする…………

門の方に廻つて來た兄は、母に着物を着せて貰ふと一口も口はきかないで出かけて行つた。母が表の戸を閉めて茶の間に入つて來ると、私は始めて勇右衛門爺が火鉢の側にションボリ座つてゐるのを見出した。

母はチラと爺の方を見ると、又深い溜息をついた。そして何とも云はずにランプを臺の上に置くと其のまゝ臺所の方に出て行つた。爺は兩手を前に組んで、火鉢の中をヂッと見詰めてゐた。

「おんちやん、布團敷いてやろかい」

私は憶病に聲をかけて見た。

爺はヂッと火鉢の中に据ゑてゐた眼を力なく上げると、吃驚した樣に大きく見開き、そして又二三度またゝきした。

「だまつておとなしゆうお休みなつせな、今夜は寒うがすせんか」

母は臺所の爐裏に火を造へてゐた。納屋からたきつけを持つて來て、ポキ〳〵と折り重ねてゐる樣子が眼に見える樣であつた。

「勇右衛門さん、火が出來たぞな、來ておあたり」

私もソッと起きて臺所に出て行つた。母と爺は圍爐裏を間に向き合つて座つてゐた。私は圍爐裏の正面の横座に搔卷にくるまつた儘座つた。

母の茶色の眼は、何時もの樣に靜かに悲しさうに大きく開いてゐた。パリ〳〵と燃え上る焚火にヂーッと見入つて、兩手丈けを無意識に火の前に擴げたり合せたりして暖めてゐた。爺は身體を半分は疊の上に伸して、右の手を疊の上につきその上に頭をのせてゐた。

藥鑵の湯がシユン／＼と沸いた音をたて始めた…………

「酒のとつておきがなかつたぞな、餅でも燒かうかい」

始めて母は重たい口をほどいた。

「淋しゆうござりますせん頂きまつせうかいな」

爺は、身體を起して坐り直し乍ら云つた。

「作太郎どんな、子供は幾人あつたぢやろかい」

「それがあなた、貧乏子澤山で五人居りますたい、一番上が今年十三になりますろ、徴兵加へますと未だ十年かゝりますもん、あの嫁がどうして育てられますせう、下の子供二人ばかり島の耶蘇にでも呉れて了ふて、頭と二番目を子守にでも出さにや…………働き手に死なれますとな…………」

「兄んちやんが見てあげても、作太郎は死ぬとぢやろかい…………」

慌しい私の質問には、誰も返辭してくれなかつた。母は默つて、燒けた餅を醬油に浸してゐた。

爺の悲しさうな眼がチラと私の方を見たけれど、慌てゝ瞬きして又向ふをむいて終つた。

「まだ若かつたろにな、惜しいもんたい」

「三十八になりましつろか、また／＼壽命と云ふ年ぢやござりまつせんたい、…………この頃の働き盛りの百姓の死にますことな、夥しいものでござりますな、かとく米はあがる、いろ／＼な税は出る、品物はぶうなる、百姓どもは食ふや食はすでがすもんな、折角たつしやな身體しとつても、食ふ物も食はずぢや木が立枯れすると同じ理屈で死にますたい、若い働き盛りの者の死にますたんび、私しや我身が死ぬごと感じますばい、一生命限り働いとつても、それ叔父が死ぬとその日から嫁も子供も路頭に迷ひますもんな、私はな、人間の乾物がゴロ／＼と道傍に轉んで居らんとが不思議と思ふとりますばい、たべ物が世間に餘るほどあつて、人間が食へずに死ぬ、妙な事がありますもん醫者が

居つて藥が呑めん、…………いやさう云ふ譯はがすせんもんな」

「あい、お釋迦樣もな、日が暮れて食をとらずに居るものを養へば、この俺を養ふたと同樣に阿彌陀樣に取り次ぐぞよ、つてお教へになつとるぞな、阿彌陀樣の御家來になつたと云ふても、誰が眼の前に餓えて居る者を皆養ひ上げ得るこ とぢやろ。…………それを思ふと、私や耻しうしてならんぞな」

方々の家では、最前から夜明けを知らする雞の聲が冴へ渡つてゐた。早起きの隣家ではもう起き出たと見えて、納屋の大戸がドロンと靜かな村の眠に區切りをつけて開かれた。後の丘の烏も巣を出たらしい、騷しい泣き聲がシーンとした朝の空氣を亂つてゐた。

五

その後は勇右衛門爺の顏は、これ迄の樣に始終見ることは出來なかつた。いつか珍らしく裏口から入つて來た時、兄は茶の間で茶を呑んでゐたが、知らん振をしてツイと立つて診察所に入つて終ふと、義姉も座敷に行つて了つた。私は部屋にゐて綴ぎ物をしてゐた母に大急ぎで爺の來てゐる事を知らせに行つた。母が入れ樣とする茶を飲まうともせず、爺は直ぐに歸つて行つた。

田植の濟んだ直ぐ後であつた。お代婆が珍らしく重箱を下げて、裏口から恭々しく入つて來た。大きな重箱の方には、齒ざわりの香しい餅の燒米の念入りに焦したものを一杯、小さな方には走りの白山楊を粒選りにして取つたものを入れて持參した。まだその外に水芋やら大根やら左の手に下げて來たものは、納屋の前でお米に手渡してゐた。

何にも欲のない人の好い一邊のこの老婆に、タッタ一ツの不思議な好みがあつた。それは澤山はいけぬ癖に酒の好きな事で、金さへ持つてゐれば夫婦で晩酌するほどの好きであつた。これで母は何時でも爺が來た時同樣に、この人にも

小さな肴に酒をつけて出すのであつた。

少し醉つて來た時、お代婆は平生の無口に似合はず何かクド／＼と母に話し立てゝゐた。そして最後にシク／＼と愚痴つぽく涙を拭いてゐた。母は何時もの様に何の感動も現はさぬ靜かな顔して聞いてゐたが、歸りがけに云ふてゐた。

「おんぢの心持はお前にや分らんせん、何にも云ひなすなよ、今度村に下つたら寄るごと云ふときなつせ、私が待つて居つたつてな」

母の夏物の古着やら元結やら到來物の佛壇の打敷やら、歸途の風呂敷に包んで貰ふて、お代婆は久し振りにはいた下駄に躓き／＼歸つて行つた。

いつの間にか夏が來てゐた。

濃い藍色の海が緑の色深い島蔭から現はれて、村の入江の中に通ひ入つた。白い飛沫をとばす大波小波が村を圍ふ堤防の黒い石垣を洗ふてゐた。大鳥の様に樂しげに帆を上げた船は夏の海路をよろこんで忙しく沖から入江、入江から入江にと辷り出で又辷り入つた。

百姓達は朝の間一しきり田の草をとると、一旦家に引き上げて腹を拵へ、又直ぐにドヤ／＼と群れ立つて海際に驅けつけるのであつた。そこには數百町歩の鹽田が、夏の日盛りの太陽の下に眞白な砂を乾し切つて、人々の力がその上に働き始めるのを喘ぎ乍ら待つてゐた。

私の家では藥價の取立が始つてゐた。

四五人の人達が、一様に小ザツパリとした尻切れの仕事着か、暑苦しさうな手織の單衣の裾をからげるかしてやつて來た。そして書生の出口が渡す請求書を受取つて、半期分の藥代の取り立てに村から村、部落から部落に出て行くのであつた。

ある日の夕方、助三さんばかりが一人後れて夜になつて歸つて來た。もう勇右衛門爺もあとの三人も疾くに戻つて來て、晩酌を濟して歸つて行つた後で、何時も一番おそくなる兄だけがまだ今晩酌を始めた許りの處であつた。

助三さんは矢張り「出入り」のうちの一人であつた。自前の百姓するに餘る程の田畠も持ち、若さでも學問でも誰れにもひけをとらぬチャキ〳〵の百姓であつた。以前自分の部落の總代を務めてからと云ふもの、交際の爲め「よい衆」の流儀に慣れて粹になつたと溢し乍ら、その粹に嬉しさうに浸つて、何時も自分丈けは平百姓同樣に扱はれる事を厭がつてゐた。私の宅の掛取が始まると、總代して居つた頃村役場などに行く時提げて來た折鞄をさげて、紬の着物、白の大きな帶には銀の鎖付の時計をからませ、山桐の重たい下駄を鳴らし乍らやつて來た。

此人が、今前に据ゑられた膳の肴にひもじかつた咽喉を鳴し乍ら、何か村政治の大切な報告でもしてゐる者の樣に、何時もの粘つた調子で兄に話し込んでゐた。

「…………と申します譯で、四軒に一軒は勇右衛門公が廻らずに私が取立にまゐりますとが不足らしゆう申しましてな、うちにも勇右衛門さんが來ておくれるならご相談の仕樣もあろに、あのお方は貧窮人には氣前よく負けておくれると云ふことを聞きました。あなたぢや話のつけ樣もなか、と斯うでござりますもん、イヤ、もう負けんが惡いと云ふ樣な權幕でムりましてな、この頃のごとかう人氣が惡うなりましてはこりや一人があゝ云ふ風に打ち切をつけて廻りましては、全體の取立がむつかしゆうはなりますみやあかい…………」

「そこぢやすて、ほんとは餘程氣はついとりますばつてん、おんぢはあの氣性ぢやすし、それにもう以前からあゝやつて打ち任せてあつたとぢやすし、急にどうかう云ふことは出來ずに居りましたたい…………今年は一つどうとかきまりをつけますかな、ようござす、明日にでもどうとかしまつせう…………」

助三さんは二三杯の猪口にもう醉つて狒々の樣な顏になつてゐた。爺は高慢な出過ぎ者の此人が大嫌いで、鼻が非常

に高い處から、天狗々々と蔭では呼んでゐた。

「勇右衞門爺の取立を斷るつてた？」

夜遊びに集つてゐた村の人達が表の方で一騷ぎして歸つてから、兄は珍らしく母と私共の涼み處になつてゐた庭向の座敷に來て寢ころんでゐた。

夜の風が白地の肌に氣持よく、蓮田の青い葉の香も時折思ひ出した樣に運んできた。夜遊びして歩く若い人達の聲が、夏の夜らしゆう更けるのを知らぬやうに聞えて來た。

「何も取立を斷ると云ふのぢやごさすせんたい、それでもおんぢのごとあれも困つて居るせん一回、これも難儀しとるせん二回、と勝手に負けてやつて來られては後が困りますせん、もうこれから打ち切をつけて來ることは出來んと云ひ渡さうと思いますたい、ばつてん、あのおんぢの氣性ぢやすし、それに近頃は私に恐しゆう楯ついとりますせん、迚も尋常に云ふことは聞きますまいし、矢張り斷ることになりさうぢやすたい…………」

平生の明るいはつきりした調子にも似ず、兄の返答は至つて澁り勝のものであつた。

「…………お前のさうせにやならんと思ふことなら、まさか道理に外れたこともあるまいばつてん、今迄長いこと打ち任せといたとぢやあるし、今急に不都合の出來ることもあるまいし、どうぢやろ、もいつときこのまゝ置かるゝまいかな…………あの爺が生きとる間は。小さな事ではあるし、あの儘氣隨にさせてやりたう思ふとの」兄はそれには何とも答へなかつた。けれど暫時たつてから

「うちもいろ〳〵な雜用はかさむ藥代は高くなるし、實際はようやつて行かれまいせんたい、から不景氣ぢや商賣替でもしまつせずばな…………」

母のまはりに寢ころんでゐてその顏を見てゐると、私は木彫の佛像の顏を見る樣な感がした。口の周にある大きな疣、

鼻尻から口もとにかけて現はれる强い大きな線、厚ぼつたい唇、全體に發達の惡い顎の筋肉は、表情することを大變困難なものにすると同時に、又此人を非常に訥辯なものにした。それだけにその少しの興奮は、他人の可成り强い感動に相當することを、私は幼い時から知つてゐた。それで私や姉達は、母の言葉に公然と逆ふことは全くなかつた。兄だけが少し違つてゐた…………。

母はそれつきり何にも云はなかつた。たゞ平生から餘り動かない茶色の大きな眼が、何時迄も疊の上に止つてゐた。

あけの朝、私は河蝦釣に出かけた。

朝、滿潮に乘つて入つて來る船の帆を數へて、裸の上を海水に洗はせ乍らの沙魚釣と、河岸に咲く彼岸花の上に座つて竹藪の中から河蝦を釣ることゝは、夏休み中母を一番厭がらせる私の「殺生遊び」であつた。

田の用水が落ちてから海に入る迄に通る水道には、時の流れに穿たれて可成り深い淵が出來てゐた。雜草の枯れたものやら竹の落葉やらに埋れたその淵では、水は黄色におどんで、その腐敗した水の精の樣に、幾種かの生物がそれに寄生してゐた。陸と云つては竹藪だけしかないその小川の河岸には、夏の田舍に騷しい蟬さへも滅多に飛んでは來なかつた。只だ近くの田に草取る人々がピチヤ〳〵とかすかな音をたてるのみで、殆ど微風もない夏の日に、ボンヤリと川面を眺めてゐると、藁屑か竹の枯枝に似た黄色い河蝦の足が、夢の樣に音もなく淵の深みから靜かな水面に浮いて出た、そして餌を水面近く迄巧に引くと、丁度電氣をかけられたバネ虫の樣に蚯蚓の後について來る、そして次の瞬間には活潑にはねる生物が、手網の中に擒はれてゐる。

その朝は私は鶴と龜と云ふ兄弟の隣りの子供と仲間してゐた。おとなしくて、私にはどんな無理でも通させる龜ひとりの方が、私の遊びを樂しくはさせたが、兄の鶴は蚯蚓の餌をつける仕事に、すぐれた腕前を持つてゐた。

私共は村を出て田原の方に出立してゐた。私はその間も一心に嫉妬の心を出し乍ら。

「お御、また釣ぢやすな」勇右衛門爺が私の前に笑ひ乍ら立つてゐた。
「あい、今日は澤山釣つて來て今夜お前が歸つた時の肴にしてやる、そして昨日持つて來るつて云つた水瓜はやア」
「ホイト！こりやお御しまいました、忘れましたばい、明日持つて來まつせうな、酸漿も赤うなつとりましたぞ」
爺は二三歩行き過ぎた。
「おんちやん……」
「ない……」
爺は又直ぐに立ち戻つて來た。
おばやんがまた泣くせん、もう兄んちやんと喧嘩はしなんな、ナ、可愛さうせんか」
爺が、「時々小利口な口を利くうちのお御」の顔をキヨトンとして見てゐるのも、そして後で笑ひ出したのも、私はちつとも構はなかつた。その時にはもう私の頭は、枯枝の樣な足を水に浮してゐる蝦のことで一杯になつてゐた。

その日は大分漁があつて、私は母にかくれてそれを二本ばかりの串にさし、お竈にソツと炙らせる事に成功した。蝦の皮をガリ／＼とむいて醬油をつけ、甘味しさうに肴にしてゐる爺の姿を、私は賑かな臺所の洋燈の下に幾度も幸福に想像して見た。
「お御、御馳走ぢやすな」つて云ひ乍ら、喰べることであらう…………。
けれど、どうしたのかその夜は爺は何時迄も戻らなかつた。何度表に出て見ても、それらしい影が歸つて來ることはなかつた。それを口に出して尋ねることが妙に憚られて、私はとう／＼誰にも譯は聞かなかつた。
赤く燒けた蝦の串は、何時迄も臺所の壁にさゝつてゐた。

六

その秋は、今年の山仕はのびるげな、と云ふ話が滲む樣に何時の間にか村全體に擴つてゐた。山仕は秋の末に村全體が村有の山を戸數に割り當てゝ切るので、それが村の一年の仕事の仕舞仕事と見られ、そのあとは皆が安心して正月を待つのであるのに、今年はまだその肝甚な山の分配が濟まずにゐた。が、それはこんな紛擾が起つてゐたからであつた。村外れにある新平民の群は、全く村の組合から放たれてゐる丈けでなく、嫌厭と輕蔑との的となつてゐるのであつたが、尚一の恩典に浴してゐた、それは山仕の時が來れば無條件で新村の近くの小さな山を切らせられる事で、その爲めにこの一廓の貧民達も、不足勝ち乍らともかくも薪にありついてゐたのであつた。けれど今年はそれに苦情が出て今以つて付片かないでゐるのであつた。

それはこの新村に切らせる事になつてゐる山の隣りに、武伯父樣の持山が一劃あつたのに起つてゐた。新村の人々は山仕の時節が來ると、遠慮なく此村一番の金持の持山を犯す事を手柄の樣にしてゐた、三年に一度切り拂はれる持山の雜木林の貧しさに較べて、個人の持山は下生の雜木迄どこか豐かな處があつた。新村の人々は二た月もおけば燃し頃になる雜木の間に、直徑四五寸もあらうと云ふ椎や樫の立木を切り添へてはソツと持ち歸つた。

苦情は持山を荒らされてゐる武伯父樣から出た。つまりはその山を新村に切らせるからかう云ふ不都合も出て來るので、今後は一切その山を新村に自由にさせる事を差止めたいと云ふのであつた。それを差止められては新村の一廓は全く燃料を得るたつきをなくするので差止めにするのは可愛さうだと内々云ふ人はあつても、差止められるのは、そしてそれを自分達の問題として眞實に痛切に感ずるのは新村自身であつて、それを憐む方の村の人々には不公平と無慈悲に對しての憤瞞も要するに力弱い「大した事ではない」種類のそれに過ぎなかつた。それで公然と武伯父樣に對して抗議を出し得る程の者もなく、平生虐げられ蔑まれてゐる新村自身は、只目前にせまつてゐる困難を何うして一時だけも免れ

樣かと云ふ事のみに心を奪はれて、自分達が不足を補はふとする念に支配されて自然に仕用かした明らかな事實を只管に否定し、村の同情と憐れみとを乞ふて今迄通りの恩惠を求むるより外はなかつた。

もうその頃は毎日々々晴れた好い天氣の日が續いた。はじや楓の早い紅葉は風に散つたけれど、山にはまだ所々に赤い葉が見え、それに冷たく澄み切つた秋の陽が鮮かに落ちてゐた。その頃の西九州では風も餘り吹かず、水の張り切つた稻田には鮒のはねる濁りなどが目に立つ位の長閑さと靜さとが滿ちてゐた。

百姓達は今麥を造つた後で一寸の隙を持つてゐた。霜が降り始める頃に蒔く時の用意の下肥の下敷も濟むと、女達はセッセと新圃の綿を紡いだり、足袋の底を綴つたりした。男達はまだ香の眞新しい新藁を打つて、山仕の繩や草鞋の類を造へるに餘念なかつた。

「山仕にや、持つて來いの天氣とのにやア」

彼等は途中で行き逢ふとかうした事を云ひかはした。

「物持の一本か二本の立木を切られたつて、村全體の仕事の邪魔せんちやよかろににやア、この天氣やさう長うは續かんぞ、早う黑白をつけて貰はにや困ることだぞ」

けれどお互ひばかりの時に一番勇敢な慨慨家は次の分間には又一番卑劣な人であつた。即ち物持ちの武們父様の姿を見ると、凡てが尤もな、さうなくてはならぬ事の樣に幾度も〳〵繰り返した。

「新村の奴どもア、增長しとりますせん、かう云ふ時に少し骨節折つて置いてやらんと、どもなりまつせんたい」

骨節折られた哀れな新村の總代二人は、丈の短い裄の硬い袢天を着て、セカ〳〵と村の有力者の家を歩き廻つてゐた。

その日は矢張りさう云ふ晴れた日の宵であつた。空には星が揺き寄せられ樣と云ふ程に現はれ、その間を微かに天の

川が流れてゐるのさへ目立つほど澄んだ夜であつた。明朝は霜でも降りはせぬかと思ふ程の冷え方で、村の家々ではもうチロ〳〵と焚火の影が眞新しい襖ぎはぎのあとのある障子に寫つてゐた。

　村の公會所とも云ふ可き店屋では山仕の村寄りがあつてる宵で、今夜の寄で新村の問題が片付けば山の分配は直ぐ明日にも始まるので、さうすれば今年の仕舞仕事もすみ、正月迄は暢氣に遊べる事を、もう書生部屋に夜遊びに來てゐる若者たちは噂し合つてゐた。

　兄は往診からまだ歸らず、義姉は奥で子供を寢かしつけてゐるので、茶の間はひつそりとなつて終つた。私は女中達が納屋の流し元で、後片付をしたり明朝の用意をしたりし乍ら押付けた樣な聲で笑つたりふざけたりしてゐるのを聞き乍ら、臺所の圍爐裏の側でお峰に頼まれた毛糸のお賽錢袋をあんでゐた。

「なんまみだぶ、なんまみだぶ、なんまみだぶ………………」

　佛間からは母の低い單調な念佛の聲が聞えて來た。

金色の後光を後ろに一杯負ふた佛像、その右と左に法然と親鸞の御尊像が分寀され、その一段下には父や伯母や私の一家が創められてから葬られた人々の戒名が並べられてあつた。上段には佛飯と米の粉で造へて彩色した盛菓子、生花燈明などが整然と一糸も亂されず、そのさゝやかな佛壇の前に法悦の中にゐる母の容子は、朝夕それを見慣れてゐる私には容易に想像できた。

　兩手は前に合せて、顔の前に立て、茶筅の質素な頭を稍左に傾け、大きな茶色の眼は未來の約束を夢みる樣に金色の尊像の上にそゝがれ、唇は全く無意識な樣に念佛を呟いてゐる………

「アーッ！」

　私の靜かな想が破られると共に、私は突つ立ち上つた。

「畜生ども、殺すなら殺して見ろ」

忽ちに魔の様な呪の言葉が靜かに平和であつた村の空氣を亂して行つた。それは木も草もその怖しい響きの前に一搖ゆれたかと思ふ鋭さを持つてゐた。耳を澄して聞くと、直ぐ續いて發音の不明瞭な多くの聲が、罵る様にいがむ様に一のもの丶上に向けられてゐる事が私には直覺された。

「喧嘩ぢやろ……」

書生部屋の人達が窓からのぞいてゐる間に、私は藁草履を突つかけて馳け出した。

店屋から出て來たらしい十二三人の醉どれの塊が、可成り大きな用水の流れの上にかけられた石橋を中心として揉み合つてゐた。罵り狂ふ者は中央の地の上に座つて、憤りに虐げられた様な荒い呼吸に私を脅した。

「生意氣かぞツ……」

「書生ツ、あんまり出しやばるな、なんだ、新村も大道様の眼から見れば、物持ち様とどこが違うとりますせう、眼が三つあるでなし鼻が二つあるでなし、百姓づれとよい衆の違はんごと、百姓づれと新村がどこが違ひまつしよつてや、おいどんはな、貴様に新村と同じ並みにして貰はんちやよかし、又よい衆の仲間に入りたかつてさう云ふ不届きなこたア思ふちやおらんぞ、この罰當りが…………」

「この唐變木が、そりせんな皆が變人つて云ふて對手にせんとだぞ……」

二三人の者が口を揃へて罵つてゐた。

「この阿呆どもが、お前達アな、武太郎どんの御機嫌とつて臨山のあげ錢でも安うして貰はうと思うとるとぢやろ、ばつてな立木の一本か二本指しゆして新村の山を取り返せと云ふ人にな、あげ錢が負けらるゝと思うとるな、あの衆はな、わが達や絹着物着て足袋はいてをる時、新村が單衣きて裸足で居つても、冷たらなかせんさうしとるつてほきや云はん人達ぞ、お前達もな今こそたつしやでかうして村寄りの口も利かるゝごとしとるばつてん、何かで貧乏して見ろ、丁度同じ様な目に逢ふぞ、村山はわけて貰へず、道路に落ちとる石炭も拾へんと云ふことになつて見ろ、お前達の婦

はどうして飯はたくや、ナ、己れや間違ふた事は云はんぞ……………」

私はとび上るほど驚いた。それは男右衛門爺の聲であつた。

「こん畜生、まだ同じことば吐しとる、たゝき殺すぞ、おいどんも貧乏になると云ふたナ、こん畜生見とれ」

いきなり下駄の足で蹴つた者があつた。

「村の者がよかろときめた事に、奴が一人でとかうがあるもんか、汝ア新村から錢でも貰ふたとぢやろ、それでからう云はにや云ひ譯のたんゝとぢやろ、獄道が、明日は又村寄りして村外し（村の人々との交際を一切たつこと）にしてやるぞ」又二三人が寄つて行つて、なぐる、蹴る…………

もう私はこらへられなかつた。側にあつた石を三ツ四ツ手にとつたけれど、それをどう仕様と云ふ見込であつたのではなかつた。

「おんぢ、おんぢ、もう喧嘩はやめない」

私は地團太踏んで呼び立てた。

突然爺は立ち上つた。そして眼の前に立つてゐた人に拳を固めて打ちかゝつて行つた。

「おんぢ、もう止めない……」

源らしい影の細い小さな男が庇ふ様に後ろから止めた時にはもうおそかつた。

「打つたぞツ」

「打つたにやア」

「畜生ツ……」

黒い人々の影が折り重つて波の様にゆれた。私は拵つてゐた石を力任せにその黒い影の群になげつけた。そして一散に馳け戻つた。聲限りに母を呼び作ら。

間もなく私の家中はいくつものランプで輝き渡つた。そしてその光の中で靜かに重大な事が行はれてゐた。

「こりや大變にやつたものだナ」

爺が村の人々に擔ぎ込まれてから、兄は傷口をあらたむると驚きの聲をあげた。傷は右の眼尻から口許にかけて縱に何物かに搔き切られた樣になつてゐた。殊に中央の頰に當つた部分では、肉がグザ〱に搔き散らされ、石榴(ざくろ)の實が彈けた樣な口から白いものゝ一部分が現はれてゐた。

「眞逆樣に落ちてあの杭に打つてある大きな洋釘の頭に上から引つかゝつて行たせん、たまるものな、ばつてあの岩の上に頭をたゝきつけんとが、見付けものと思はずばな」

誰かゞさう云ふた。

「災難にや、醉どれ同志で誰がつき落したッて云はりやするみやアし、怪我の仕損たい、」

その間にも兄の手は一寸の間め休みもなく働いてゐた。兄の額が硬く銳く、口を閉ぢ眉を据ゑてゐると反對に、兩手は忙しくそして正確に働いてゐた。粘(ねば)りついてゐた黑い血塊も新しく滲み出て來る血液も、藥液の中にドロ〱ととけて流れて行つた。

兄の手が加はる度に爺(ぢい)の身體は苦痛の爲に力强く動くのであつた。

私は凡てこれらの事を外科室の戶棚と戶棚の間に出來てゐる暗い闇の中から兄の眼を喰んで眺めてゐた。半分は爺の爲に泣き慄(ふる)へ乍ら…………

よく晴れた、冬の小鳥の囀の騷しい翌日が來た。

けれども爺の眠りはなか〱さめなかつた。頰一面に繃帶をかけ僅かに眼と鼻と口とを現はしてゐる爺は、只時折意

識に歸るのみで、その眼も口も閉ぢてスーくと深い眠を貪つてゐた。

そしてそれは三日も四日も續いた。母とお代婆と源とは、殆ど爺を寢かせてある離れの部屋を出なかつた。

「肺炎ぢやろかい」

母は小さな聲である時兄に尋ねてゐた。

「私も肺炎にでもなるろと思ひよりましたばつてん、熱の上り下りが少うしてから續くし、こりや事によると破風症にでもとりつかれたとぢやがすせんろかい、さうするとこりや困つた事になりますぞ」

「破風症にや」

母の驚きに亂された顏を見ると、私は破風症がどんな事を意味するのかを直ぐに見てとつた。爺は死ぬとぢやろ、大方爺は死ぬとぢやろ！

私は悲しくなつてパタくと離れに駈けて行つた。そして母が座つてゐた枕許の座蒲團に座つて、眠つてゐる爺の乾き切つた唇を筆でぬらしてやつてゐた。

「お御、よう世話してくれますな…………」

爺が何時の間にか張れ塞つた眼を細く開けて私を眺めてゐた。

「あいナ、今お母の代りをしとると。學校でな、裁縫を習ふごとなつたせん、おんちの肌着ば造へよると、ネルでな、暖かごと。出來るとお母の黑襟を貰つてやるつて云はしたばい、お前の起き上る時分には出來上らう」

爺は強いて笑はうとした樣であつたが、傷口に響くと見えて直ぐに又顏を顰めた。

これからもう覺めてゐる爺に逢ふ機會は、私にはなかつた。あゝ、それから後のあの怖しい呻を發！こゝ迄丹念に記憶を辿つて來た私は、これからどう書いて行つたら好いのだらう。

殆ど夜も晝も怖しい、夢の中にたゞよふてゐるものゝ樣に、爺は呻きそして藻掻いた。不明瞭な、地獄の苦しみを吐

き出してゐる樣な不氣味な聲が、家中にひゞき渡つた。

母はおろ〳〵として泣くお代婆を叱り乍ら、自分もよく涙を拭いてゐた。その苦痛の聲に引きつけられる樣に、家にさへ居れば私は殆ど絶え間なく病室をのぞきに行つた。

私はその間母と離れて夜は納戸の女中達の間にねてゐた。ある朝覺めて見ると、覺めると必ず耳に響く苦の爺の呻き聲が聞へず、家の中は妙にザワ〳〵してゐた。慌てゝ起きて出ると、見知らぬ爺の部落の老人達が火鉢の側に居流れてゐた。

「お夏さん、あなたはおんぢとあんなに仲よしぢやしたもん、早う行て水取つておやりまつせ」

子供に乳を呑ませてゐた義姉が涙聲でかう云ひ了るのを待たないで、私は離れにとんで行つた。

私の姿を見ると母は何とも云はないで手招きした。そして自分の側に座らせて鳥の羽根に水を含ませて、爺の唇に當てさせた。

爺はほんとに死んでゐた。靜かに、喧嘩したり呻いたりした事が殆ど餘計な事であつたかの樣に靜かに死んでゐた。

私は何故かホツとした大きな息をついた。

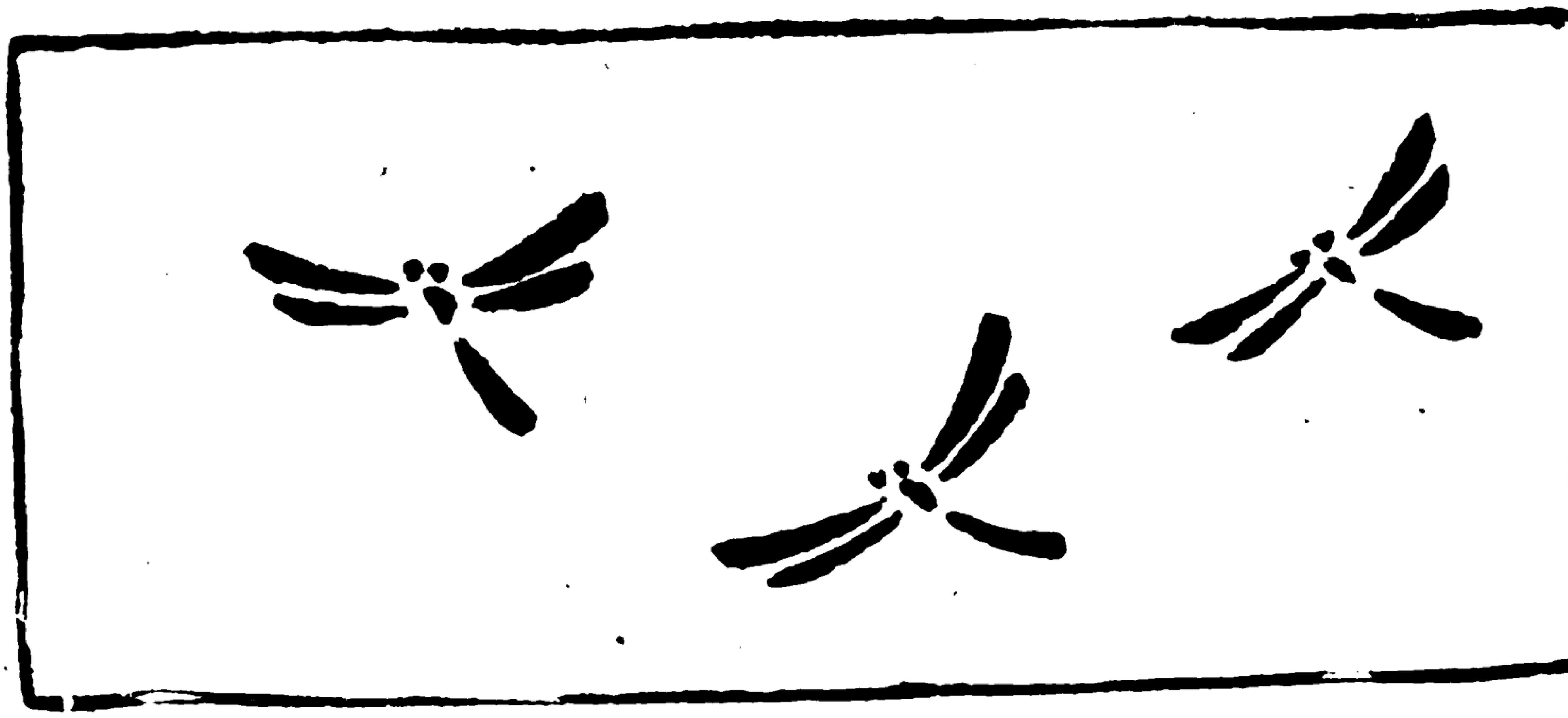
葬式の時には、村の人達と一切吉凶の往復をした事のない新村の年老が四五人葬列のあとについてゐた。信心深い彼等が、時折の命日に花や線香を爺の墓に上げてゐると云ふ噂も、私は格別に不思議な氣持もせずに聞いてゐた。

年が經つと、殆ど爺の事など思ふ樣な時はなくなつた。只だ何か幼い頃の話などの序に思ひ出す樣な事があつても、私は長い間、只だ若い感情がそれを誇張して、深い交渉あることに造へて見せるのであらうとしか思はなかつた。そして非常によく接觸してゐたので、暖い情の深い男であつた事を知つてゐる丈けに、あの焦々とした落ち付のなかつた一生に樣々な疑惑が起る事がよくあつたけれど、尙、立派な一人前であり乍ら、騷々しい不仕合せな生れつきの變人であつ

た」と云ふ稱に對する通評に反抗して見た事はなかつた。いや、反抗せねばならぬ樣な氣持は頻にし乍ら、あの男に終始働いてゐた中心生活を、幼い時に漠然と見てゐた一人の人間の種々雜多な生活から切り離して見ることは、非常な男氣と尙充分の洞察を要する仕事であつた。

この蒙昧な境を出て我達の間に介在してゐた不思議な愛と同情の源を見、多くの疑惑を解いてこの名もない貧しい百姓の生活をこんな光で見る事に成功したのは私にとつてはヤツとこゝ一二年の事である。陽より明らかな多くの事實を目の前に示されながら、何時もはつきりそれを見る事の出來ない自分の生活を考へると、私は何時もどうする事も出來ない羞恥と懊惱の深みに落ちて了ふ。

追記―これは舊稿です、改造社の御要求で出して頂くことにしましたが、〆切に差迫つて充分には手を入れることも出來ませんでした、私に好意を持つてゐて下さる人達には濟ない次第です。作者



Y牧師の半生

沖野岩三郎

これは私が親友Y氏と十一年目に會つて樂しく語つて訣れた後で、私の變態心理に映じた彼の前半生を描いてみたのです。『これは全然事實か』と問ふ人があつたら、私は『さうです。』と答へます。みんな噓かと云ふ人があつても矢た『さうです』と答へます。

山田の家は一膳飯屋であつた。彼の家(うち)は和歌山市から官幣大社の日前宮へ詣る途中の町外れにあつた。父の彌平は涙脆い義俠的な感情家で、難澁して居る者に泣縋られると、どんな事でも否と言ふ事の出來ない質である爲に、儲けても儲けても懷の暖まる機(をり)の無い男であつた。母のお千代は父と全(まる)きり正反對で、極めて快活な樂天家であつた。

山田がマダ十一二の頃であつた。小學校から歸つて來て母に貰つた山椒棒といふ菓子を嚙つて居ると、一軒間を置いた隣りのお菊といふ妻(かみ)さんが入つて來て、『旦那(ダンナ)、えらう濟まんけろ、ちよいと此の手紙を讀んれ頂戴(イタ)』。と言つて一通の手紙を彌平の前へ差出した。

『よし、何所から來たのかい。』と言ひ乍ら夫れを取上げて差出人の名前を見た

彌平は『あの忠太からぢやなア。』と云つて周章てゝ封を切つた。そして手紙を以て申上候……と斷切れの善い口調で讀んで居たが、五行十行と讀むうちに非常に興奮したやうな調子で、一句一句に點頭き乍ら、はては顫へ聲になつて來た。

『はア、さうかのし、さうかのし。』と頻りに合點々々をしながら聞いてゐたお菊の眼にも段々と涙が滲んで來た。

……父上よ、母上よ、私は此の寒空に褞袢一枚にて打ふるへ居り候。朝早く星を戴いて出で夕に遲く月を踏んで歸りながら、まだ此有樣とは何といふ腑甲斐なき事かと、今更ながら御兩親に對して耻かしく存じ候。せめても人並の服裝を調へ近所隣の人々に、あの忠太の裝を見よと笑はれぬやうにして、一日も早く懷かしき父上母上の膝元へ歸りたしと、夫ればかりを……

此所まで讀んで來た時、彌平は大粒の涙をハラ〳〵と手紙の上に落し乍ら聲を立てんばかりに泣いて了つた。お菊も疊の上に獅嚙みつくやうに泣いた。

此時お千代は濡手を前垂で拭きながら臺所から上つて來て、火鉢の前に坐つて長煙管で煙草を吹かして居たが、彌平とお菊とのひどく泣いて居る樣を左も可笑しいといふやうな調子で、『彌平さん、善工加減にしなはれ、放蕩息子てものは。ソナイ云ふて親を欺すに決つとるもんや。あんたにも似合はん……』と言つた時、お菊は怨めしさうな顔でお千代を見上げ乍ら、

『ほたら、お千代はん、あんたは此の手紙に書いた事は皆んな嘘やて思ふんかのし。』と顫へ聲で言つた。

『貧乏してる事も、褞袢一枚で難儀してる事も、夫りやア本當かも知れへん。そやけろ、せめて人並の裝をして一日も早く父母の所へ歸りたいといふのは、夫りや嘘の皮に決つてらのし。そんな手に浮かり乗るのが親馬鹿ていふもんやはのし。』

お千代の言葉には何等の躊躇が無かつた。分厘の疑を有たぬ言葉で判然と斷言したので彌平も手紙を前に措きながらジロ〳〵とお千代の顔を眺めて居た。默つて俯向いてゐたお菊も、

『夫りやアお千代はんの言ふ通りかも知れまへん、彼奴のやうな極道者は……どうせ親馬鹿子馬鹿やさか……』

お菊は手紙を其儘にして置いてすご／＼と歸つてしまつた。夫以來ちつとも顔を見せなかつたお菊が、此の事のあつた一月ばかり後に、ひよつこりと入つて來て、

『まア、お千代はん、えらい、あんたには感心したはのいよ。わたい、忠太の奴に、十圓送つてやつたんやはのし。ほやけろ共のお金を受取つたとも言うて來んのれ、わたい腹が立つて腹が立つて仕樣ないはか、うんと怒つてやつたら、こないな葉書が來たはのし。』と云ひ乍ら縦に二つに折つた葉書を帶の間から出して來た。

『獅郎、讀んで見イ。』とお千代は山田の方へ顎で指圖をした。

『どれ、』と山田は夫れを受取つて讀んだ。お千代もお菊も默つて聞いてゐた。葉書には、（前略御免、御送り下され候金子十圓確に落手仕り候、早速夫れにて袷と羽織を買求め候、就ては此上帶と襦袢とを買求めたく、且つ歸る旅費も入用に候間金子十五圓だけ此の葉書着次第大至急御送り下され度御依賴申上候）とあつた。

『夫れ見なはれ、お菊はん。何ぼ送つたつて歸つて來るもんかのし。』と言つてお千代はニコリと笑つた。

山田は此の一件から子供心ながら母のお千代を非常に偉い女だと思ひ出したのであつた。

山田は中學を出て直ぐ上京した。そして駿河臺の明治法律學校に入學したが、學資は毎月十三圓と制限されて居た。彼は寄宿舍へ入つて七圓の食費を支拂つたあとで、月謝と小使とを其の殘額で支辨して行く事が餘程の困難であつたけれども朝から晩まで母が一生懸命に働いて多勢のお客を相手に僅かづゝ貯へたお金を送つて吳れるのだと思ふと、法學生に有がちな放埒も思ふまゝにする事も出來なかつた。しかし、彼は其頃始めて出來た神保町の十錢均一の西洋料理屋へ度々友達に誘はれたり、吉原や新宿へも伴れて行かれた事もあつた。さうした結果友達の或者は『ゲシユクカジ○二十スグオクレ』と云ふ電報を國許へ打つて金を取寄せたり、書籍を買ふのだと言つて取寄せた四十圓五十圓の金を

湯水のやうに放蕩費に使つてしまふ友達をも見た。しかし彼にはこんな事が出來なかつた。彼は煙草を喫ひたくつてもピンヘット一つ買ふ事の出來無い時、竊と清國留學生の寄宿して居る窓の下へ行つて、其所に彼等が投棄てゝある卷煙草の喫ひかすを拾つて來て、自分自身を憫殺しながら夫れを喫つた事もあつた。たつた一揃ひだけの着物を殘して縞袢も袴下も皆な質屋へ持つて行つた事もあつた。しかし如何に困つても國許へ僞電を打つたり、書籍を買ふのだと言つて金を取寄せたりする事は出來なかつた。

餘程困つた時、父親に讀めさうも無い難かしい書物の名前を書並べて無心を言つて見ようと思うた事もあつた。少しく文句を丁寧に書いてやれば、涙脆い父親は二十圓と打出せば二十五圓も三十圓も送つてやれと云ふだらうし、如何に賢い母のお千代でも、旨々欺し得るとは思つたが、彼は幼少の時讀んだ忠太の手紙の事を憶ひ出すと同時に、『親馬鹿』と云つた母の言葉がブリ〳〵と聞えて來るのであつた。そして彼は其時から『偉い女だ』と思つて居る母を今更『親馬鹿』にするに忍びなかつたのであつた。或時彼はどうしても十圓の金が無ければ凌げないといふ場合に、此月は少し病氣したので十圓ばかり多く送つて與れといふ手紙を書いて夫れをポストに入れに行つたが、ポストの傍まで行つた時、急にへんな手に浮かり乘るのが親馬鹿といふもんやはのし。』と云つた母の言葉を想ひ出して、お茶の水の交番の側で其の手紙をずた〳〵に引破つた事もあつた。

彼は斯うして涙脆い父親の愛と、賢い母の勤勉の御蔭とで可成りの成績で法律學校を卒業して明法學士の稱號を得た。しかし在學三年の月日は隨分彼に取つては長かつた。彼は倩々と自分が金持の家に產れなかつた不幸を嘆いた。自分に十分參考書を買ふ餘裕があつたなら首席を占める事も出來よう、自分にせめて月々七八圓の遊興費があつたなら、もつと學校内でも幅を利かせ得るだらうといふやうな齒痒さをも感じた。金縁眼鏡をかけた男や、立派な洋服を着て居る友達の前へ出る時、彼の心はいつも慴えて居た。で、其の翼々とした小心を自ら煽動てる爲に、彼は突如として奇想天外な駄洒落を言つて相手の度膽を引抜くと同時に自己の臆病を誤魔化してゐたのであつた。

彼は子供の時代から、學校友達や遊び朋輩に、彼が一膳飯屋の子であるといふ點から、浴せかけられた侮辱の言葉は、どれだけ强く彼れの胸に悲しい影響を與へたか知れなかつた。元氣善く鬼ごつこをして居る時でも、必死に競技をして居る時でも、口角沫を飛ばして演說をして居る時でも、『しつかりやれ！飯屋の獅郎はん！』と言はれると、最う彼は全で脊骨を引拔かれたかのやうに、ぐんにやりとなつて了ふのであつた。

彼が眞面目になればなる程、彼に對する侮辱が其度を高めた。そこで彼は何事にも出來るだけ巫山戲てかゝつた。小學でも中學でも先づ教師に渾名を付けるのは彼であつた。菱切餠、南蠻きび、つくね芋、舶來乞食、これらの名前は彼の發案によつて校長にも首席教員にも遠慮なく冠せられた。井口といふ先生の鼻の横に大きなホクロがあるので『パナさん』と命名したのが大喝采を博して彼は遂に生徒中の寵兒となつた事もあつた。彼は斯うして自分の命名した渾名が盛んに校中で唱へられる時、自分が幼い頃から『飯屋！飯屋の子！』と云はれて輕蔑せられた復讐を社會の一部に向つてなし遂げたやうに感じるのであつた。

けれども彼の性質は矢張り父の性質を受けて感情的で涙脆かつた。そして母の遺傳で聰明な所があつた。彼は感情にまかせて思ひ切り皮肉な事を言つた後で、直ぐ言ひ知れない不安と淋しさとに襲はれる事が度々あつた。で、そんな時には直ぐ人の居ない所へ行つて靜と考へ込むのが常であつた。

彼は法律學校を卒業して、辯護士の試驗準備をする爲に上野の圖書館へ通ひ初めた。彼は其所で種んな書物を探り讀んだ。さうして居るうちに不圖した事から彼は法律書よりも宗教書が自分の心にピッタリと適ふやうな感じがし初めたのであつた。

最う麥藁帽子がチョイ〳〵と往來に動き初めた頃、山田は上野の圖書館から谷中を通つて高等學校の前へ出たのは午

後の六時過であつた。少し空腹にはなつたが、古本屋でも素見して見ようと思つて大道を向側の通りへ横ぎつて行つた時、其所に小い基督教會があつて、表の掲示板に説教題と牧師の名前が書かれてあるのに氣がついた。

山田はこれまで何十回となく此所を通つたのであつたが、此所に斯んな教會のある事には、ちつとも氣付かなかつた。彼は掲示板の前に立つて『救極の意義』といふ説教題を凝乎と眺めてゐるうちに急に其説教を聽いて見たくなつて。そして其の説教者が民友社から出版して當時の讀書界を騷がした『歸郷』の著者箱崎淑吉である事を知つた時、彼の足は知らず／＼に教會の中へ、引込まれるやうに入つて了つたのであつた。

入つて見ると、何とかの記念傳道だと言つて、讃美歌の合唱があつたり、獨唱があつたりした後に牧師の箱崎が教壇の上に出て來た。身體の小い瘠せぎすな男ではあるが、眼に一種異樣の光があつた。今まで馬鹿にし切つて居た耶蘇教の説教を初めて聽く山田の心は、聞いて居るうちに、いつしか其男の變な眼光に引つけられてしまつて、熱心に其の一言一句をも聽洩さまいと、とう／＼終りまで神妙に聞いてゐたが、彼には夫れが總て新しい世界の言葉であつた。『神が宇宙を司配する。人間は罪を犯した。其の罪を贖ふ救拯者がある、そして自分は罪人だ！』山田が箱崎の説教から得た結論は斯うであつた。彼は此時まで自分の内的罪惡に就いて考へた事は一度も無かつた。で、神田の下宿に歸つて其晩は朝まで寢ないでいろ／＼と考へて見た。そして種んな疑問と疑惑とを懷きながら翌朝朝飯が濟むと直ぐ神保町に行つて新約聖書を一册買つて來て、馬太傳の第一章の何の事だやら解らない人の名前から根氣よくこつ／＼と讀み初めたのであつた。

斯んな事から山田は熱心に基督教會に通ふやうになり、圖書館へ行つても益々法律書よりも先づ宗教書を多く讀むやうになつた。

目出度く卒業したのであるから一度郷里へ歸つて來いといふ父の手紙を受取つた彼は、其年の七月に和歌山市へ歸つ

た。

和歌山驛へ下車して見ると、紺の筒袖を着た彌平が、むつちりした顏に抑へ切れない喜びを湛えながらプラットホームに立つて居た。

『おう、獅郎！　俺は畑屋敷まで一寸用があつて來た序に迎へに來たんぢや……』と言つた時、山田には直ぐ、今まで上京する時も歸郷した時も、行つて來い。』『おう歸つたか。』といふ簡單な言葉だけで送り迎ひをした父が、可愛い一人ツ子が明法學士といふ肩書を得たといふ嬉しさを包むに包み切れないで、停車場まで迎へに來は來たが、感情的で小心な彌平は、態々迎へに來たといふ事を愧ぢて、用事の序に迎へたのだといふ心根が能く察しられた。

『卒業したツてなア、先ア善かつた。』と云つた時彌平はホロ〳〵と涙を零した。

『はい、まア、どうやら斯うやら……』と言つたが、山田の心には賢い母の顏が眼の前に散らついた。そして其の鐵漿(かね)をつけた黑い口から『卒業した所で、これから先が大事や。辯護士にでも成つて見にやア、安心出來んはノン。』といふ母の聲が聞えるやうに思つた。

『斯んな時に、母は父親を親馬鹿と云つて笑ふんだなア。』と心の中に思ひながら構內を出て俥に乘つた。

人の善さそうな親の後姿を眺めながら、山田は俥の上で倩々(つく〴〵)と將來の事を考へてみた。そして『自分は到底法律家には適しない性格だ。』と思つた時、俄かに悲しくなつて、止所(とめど)なく涙が溢れ出て來るので麥藁帽子を脫いで、夫れで顏を隱しながら涙を拭いた。

軈て俥は宅の表へ着いた。『歸つたぞ！』といふ彌平の聲に、『おう、あんた迎へに行ておくれたんかのし。』と云ひながら、ニコニコ笑ひながら出て來たお千代は、直ぐ向側の瀨戶屋へ駈込んだ。そして其所の妹娘の富子を伴れて一緒に入つて來たが富子は恥かしさうにモヂ〳〵して上り框(かまち)の所に立つてゐた。

『富子さん、奧の坐敷をのイ、あそこを開けてあるさかい、あの押入にある浴衣を出してやつておくれ。』と言つた富子

を追やるやうに裏坐敷へやつたお千代は、『獅郎！ 裏坐敷へ行つて着換えてお出で、汽車の中で其の着物も隨分汚れたやろ。』と言つた。

富子は山田の直ぐ向側の瀬戸物屋の娘で、山田よりは一つ年下であつた。早く父親に死別れ、戸主であつた兄にも死別れ、人並優れて溫順しい母親と二人で幼い甥を守立てながら十五六の頃から可成りの商賣を若い娘の手一つで切廻して居たのであつた。

中學校から歸つて來た山田は、洋服のまゝで富子の家へ行つて、忙しさうに立働いて居る富子の爲に帳合をしてやつたり、品物の荷造を手傳つてやつたりするうちに、日若い二人の間には花やかな戀心が閃き初めて、毎朝毎晩互ひに顏を見合はさねば氣が濟まぬやうになつたのであつた。

日前宮に馬駈のある日であつた。山田は學校から歸ると直ぐ例ものやうに富子の家へ行つてみた。

『今日は半ドンかのし、えらい早かつたのし。』と言ひ乍ら障子を開けて出て來た富子は、まん圓い顏にこつてりと白粉をつけて、派手な友禪の帶を結んで居た。

『よう、おめかしだなア。日前宮へ行くのかい。』

『今、お母はんが行たんやよつて、わたいも戸を閉めといて行こと思てんのやが……』

『馬駈を見たて仕樣無いちやないか。』

『内に居たかて矢ツ張り仕樣無いがのし。』

『仕樣あるさ、二人で話さうぢやないか。』

『ほたら、あたい、もう日前宮へ行かんと置かう、二階で遊びませうか。』

『おう二階へ行かう、うんと菓子でも買うて來て呉れ。』

『言來て丶山田はトン〳〵と二階へ駈上つて、異常に騷ぐ胸を抑へ乍ら床柱に凭れて待つて居ると、軈て下から富子が上つて來た。

山田は上り口の障子の蔭に窃と足音を忍ばせて這ひ寄つた。富子は緣側の所から『獅郎はん、どないしなはつたの？』と言つて障子をすうツと開けて入らうとした時、山田は思ひ切り大きな聲でワアーツ！と叫んで飛出して來た。

キヤーツ!! と大聲を舉げて室の中へ轉び込んだ富子は『まア獅郎はん！』と言ひ乍ら長い袂を振上げて山田の肩を輕く打つた。

『吃驚したかい。』と言つて山田は富子の顏を覗き乍ら呵々と笑つた。

『吃驚するもせんもありやへんワ。あんな大きな聲をして、わたい、臍がへりがしたはのし。』

『まア何でも宜い、座り給へ、さア話さうぢやないか。』

山田が富子の肩へ手を掛けた時、店先で『今日は、今日は。』と云ふ聲がした。

『糸川はんよ、獅郎はん、あんた濟まんけど、ちよいと押入に隱れて丶下、え、さうしてくだ....』富子は押入の襖を引開けて山田を其所へ無理ヤリに押込んだ。

『はアい、唯今....』と言ひながら富子が降りて行かうとする時、『なんだ、二階に居たのかい。』と云ひ乍ら糸川はずん〳〵と上つて來た。

『富子さん一人かい？』糸川は少し胡亂なといふやうにきよろ〳〵と四邊を見廻した。

『はア一人よ。わたい、これから日前宮へ參らうかと思うて....』

『日前宮へ？ 僕も一緒に行かうか。』

『でも....惡いはのし、夫りやア....』

『山田君とだつたら宜いのだらう？』

『まア、糸川はん。どうしてそないな事を云ふんです。聞かへんで、そないな事云うたら。』

『でも、山田君とだつたら一緒に行きたいだらう？』と言ふ聲は眞劍であつた。押入の中で山田は息を殺して二人の會話を聞いて居た。

『わたい、山田はんと何にも關係ありやへんワ。』

『本當に無い？　屹度？』

『本當よ。噓を言ふもんかのし。』

『そんなら宜い。富子さん、山田ていふ男は駄目ですよ。第一家は貧乏だし、學校かて中學校以上へは、どうあつても行けないに決つてる。僕はあんたが山田君の所へ嫁入るやうな事があつたら、あんたの爲に悲しむね。僕は富子さんのやうな人を、一膳飯屋の妻さんにさせたくない。富子さん、あんたは商賈が好きでせう。僕は中學を卒業したら直ぐ高等商業へ行く……そして三年ばかり洋行して來て、大きな貿易商をやる積りです。ね、富子さん、山田て云ふやうな、あんなヤクザな男を近づけてはいきませんよ。』

山田は蒲團の端を吾知らず必死に握り詰めて、富子がどんな返事をするか、夫れを熱心に聞かうとしたが、富子は聞取れないやうな小い聲でヒソ〳〵と話して居たが、

『のイ、さうして下。解つたやろ、サ、下へ行きませう。』と云つて糸川と二人で緣側に出たらしかつた。山田は最う押入の戸を蹴外して外へ飛出さうかと思つたが。ちつと耐へてガタ〳〵と身を慄はして居た。

入口の障子がゴロ〳〵と鳴つたと思ふと、優しい足音、續いて衣摺の音が聞えて來た。

『獅郎はん。出ておいなアえ、どうしたの？え、獅郎はん……』

富子は靜に襖に近寄つて來て、すうッと襖を引開けた。山田は積重ねた蒲團に身を凭せたまゝ顏を俯向けて默つてゐた。

『獅郎はん、出ておいなアえ。え、獅郎はんたら、どうしなはつたの？』富子は最う泣聲であつた。
『え、獅郎はんたら……』富子は襖に片手を掛けながら右の手で山田の袖を引張つた。けれども山田は顎を胸に押つけたまゝマダ默つて居た。
『獅郎はん、怒つたのやのし、糸川はんの言うた事に腹が立つたのかのし、え、獅郎はん、どうしてそないに……』
富子はとう〳〵疊へ喰ひつくやうにして泣いて了つた。山田も何となく悲しくなつてホロ〳〵と泣いてゐた。
『獅郎はん、出ておいなアえ。』富子は化粧した顔に涙をさめ〴〵と流し乍ら、夫れを拭はうともしないで兩手で山田の腕を摑んで外へ引張つた。
『僕の家は貧乏だ。僕は中學以上にも行けない。無論洋行なんか出來やアしない。僕は悲しい……飯屋の子ぢや……』
山田は斯う言つて歯を喰しばり乍ら床柱に凭れて立つてゐた。
『そんな事……あんたはそんな事を……そんな事言はんと、勉强して出世してお見んなはれ、え、獅郎はん、わたい、どうあつても、あんたを出世させにや置かんはのし。わたいが身を粉にしてでも……え、獅郎はん……』
二人の手は堅く握られた。四つの袖と袖とは觸れ合つた。
『叔母ちやん、今、歸つたよ……』。治郎が段梯子を上つて來たのに吃驚した二人は俄かに坐樣を直した。
此事があつて間もなく、お千代は或日の夕方裏坐敷へ來て『獅郎、お前は富子さんを嫁に貰ふか、欲しいなら、今から許嫁をしといてやるが……』と苦も無く平氣で言つた。しかし山田は直ぐ返事をするだけの勇氣が無かつた。
『どうなら、欲しいのか、あんな娘を貰つときやア、夫りやア間違ひ無しぢや、恥かしい事も何にも無い、欲しけりや欲しいと言やア夫れで宜えんぢやよ。』お千代は山田が微かに點頭いたのを見て、『うん、よし〳〵夫れぢやア直ぐ、話をつけといてやる。』
お千代が表の方へ行つた時、山田は急に愧かしくなつて、其儘夕飯も食べずに母と裏の田圃路を傳つて、十町ばかり

離れた太田といふ友達の所に行つて十二時頃まで遊んでこつそりと歸つて寢た。夫れは山田が十八の秋の半頃であつた。

結婚式は擧げなかつたが、最う夫婦同樣の關係になつて居た二人は、御互ひに卒業した。』『卒業して歸つて來れた。』と思ふと、俄かに重い責任を負はされたように感じたのであつた。

『あなた、卒業なさつても、マダ辯護士になる試驗があるんでせう？』

『うん、夫れが大變ぢや、二千人の中で二十人位しか採らないんだからネ。』

『マア、二千人で二十人、ほたら、百人に一人や無いかのし。』

『さうさ、餘程偉い人間か、全きり馬鹿な男でなきやア……』

『全きり馬鹿な？　馬鹿が辯護士になれますもんかいナ？』

『新聞も讀まず、雜誌も讀まず、社會の事をちつとも知らないで、坊さんがお經を讀むやうに法律書を暗誦する男の事を言つたのサ。』

『ほたら、あんたも法律の本を諳誦したらどうです？　乾度及第出來ませう？』

髮を新蝶々に結うて、扱褄をして坐つてゐる富子の姿をぢつと見詰めて居た山田は最前俥の上で父の後姿を見た時と同じやうな悲しさが込み上げて來た。

山田は窓の障子を明けて田圃の方を見て居たが、左手の小い杜の中に新しい立派な二階造りの建つてゐるのを見付けて、

『あの二階建は誰の家かい、大變立派な家が建つたもんぢやナ。』とハンケチで涙を拭きながら何の意味も無く問うた。

『あれは糸川のお家よ。』と云ひ乍ら富子は傍に寄つて來て、『糸川はんは高等商業へ行きなはるて、噓やつたんやはの

し、中學校も卒業せんと……』

『うん、糸川君の家か、立派なものぢやなア。糸川君は今、何をしてる？』

『お金があるもの、何もせんと遊んでるんでせう。』

『もう結婚したか、彼の男は？』山田の聲は強かつた。富子は冷たく笑ひながら、

『しましたとも、先々月に、秋月村のお金持の娘はんが、えらい騒ぎで來たはのし。』

『さうか。』と云つた時山田は強い／＼力ある者に足頸をぐつと摑まれて、倒にして振つて振りまくられたやうな感じがした。

次の日曜日に山田は豫てから噂に聞いてゐた溫厚の聞えある水本牧師の説教を聽くべく町の教會へ出掛けて行つた。所が其日水本牧師は病氣だと云ふので、濱野といふ小柄な若い男が代つて説教して居た。説教題は『愛の力』といふのであつた。

山田はベンチの後の方に腰を掛けて溫順しく其の説教を聽いてゐたが、段々聽いて居るうちに『此の男も何かの聞えを有つてるなア。』と感じた。で、説教の後で名刺を出して話して見ると案外氣輕な男で、早速これから一緒に行つて御飯でも食べながら緩くり話さうと言つて與れた。

濱野に伴れられて其宅へ行つて見ると、其所は小い圖書館と靑年會とを兼ねた建物で十五六人の靑年達が、ワア／＼と騒いで居た。食事の後で濱野は山田を一々靑年達に紹介した。段々話して見るとまだ中學に通つて居る加藤和夫だとか、縣廳の役人をしてゐる松山音次郎だとか、新聞記者の兒玉周次郎だとかいふ靑年達の非常な進歩した思想を懷いて居るのに驚かされた。

山田は逃れの町を見出したやうに、毎日濱野の家へ行つて面白い話をしながら靑年達と語り續けた。偶ま家に居ると

近所隣の男がやつて來て、明法學士といふ肩書に對して、屋敷を買つた登記の手續だとか、收入印紙は千圓の價格に對してどれだけ要るのかとか、差押處分はどうしてするのかとか、種んな質問責に會ふのが煩さくて堪らなかつた。で、暇さへあれば濱野の家へ行つて自由な話をして遊び暮して居たが、其中に教會員の人達とも知合になり、とう／＼洗禮を受けて其の教會員になつたのであつた。

　山田は斯うして濱野の家の圖書館へ通つて居るうちに内村鑑三の思想とトルストイの非戰論が深く彼れの頭へ喰ひ込んで來た。そして木下尚江一派の基督教社會主義の思想にも餘程感化されて、『火の柱』の主人公を自分の理想とするやうにもなつた。しかし彌平は彼が受驗準備の爲に必要な參考書を買ふべき百圓の金を生れ故郷の田舍へ行つて調達して來てくれた。

『サア、獅郎！　お前が欲しいと言うた本をこれで買へ。これで足らにやア、まア二十や三十は何所からでも借りて來てやるさか……』

　彌平は大きな紙容から手を斬るやうな新しい五圓紙幣二十枚を採出して、夫れを山田の前へ窃と措いた。お千代も傍へ來て、『東京へ註文せいでも此町で調ふぢやらう？』と問うた。

　山田は其時兩親の優しい愛が沁々嬉しかつた。斯うまでして自分を勵まして呉れるのかと思へば、教會の青年達と自由な事を言つて、ワア／＼と遊び暮した事を今更のやうに後悔するのであつた。

『有難う、では早速こちらの本屋で調ふだけ調へて、足りない分は東京から取寄せさせます。』と其の百圓を一寸押戴いて、『夫れでは彼の慈尊院の離れを借りて彼所で勉強しませう？』

『よし／＼、俺は今日行つて、あすこの比企尼に相談して借りて來てやる。』彌平は優しい眼で山田を繁々と見た。

『さア、そんなら確り勉強するんぢや。富子にも當分家へ歸つて貰はう。のう獅郎……』

『はア、歸つて居ても宜いでせう。おつ母さんさへ構はなければ、僕はあの慈尊院へ宿り込みでウンと勉强します。』

『夫れは結構ぢや。明日からでも行くやうにするかい。』彌平は傍から口を出した。

『ぢやア明日から行きます。』元氣よく言つた山田は早速本町の津田書店へ行つて、民法や商法と、いろ〳〵の參考書を六十圓ばかり買つて『明日これを廣瀨の慈尊院まで屆けて下さい。』と言置いて歸つた。

山田は慈尊院の一室で必死に法律を研究した。學校に居た頃、嫌々ながら聞いた講義とは違つて、自分と興味を持つて研究する段になると面白い程其の原理がハツキリと頭へ入つて來た。しかし彼はどんなに骨折つても三年間といふ長い時間をぶツ通しに書物を讀む勢力(エナージイ)が無かつた。

『どうですか、山田君……』と云つて小緣の先に植つてゐる南天の蔭から、ぬツと圓い顏を突出して來た傳道者の濱野は、『まア御勉强なさい、君のやうな思想で辯護士だの判事だのに成る事は御厭ひでせうが、兎に角人間は一つの專門を有つてゐなきやア。何でも宜いから一つ免狀を取つて置くんですなア。』と言つて勵ました事もあつた。

『おうい、山田君、君は法律をやるんか、夫りやア本氣かい、人間の手で作つた法律を研究したつて何になるんだい。廢(よ)せ〳〵下らない學問は……』人間に人間を審く力が有つて溜るもんか、我々は法律を無くするやうに此の社會を改良して行かねばならん、先づ我々は此の腐敗した現代を改造しなきやア……』

兒玉はいつも斯う言つて山田の法律研究に反對した。彼は熱心なトルストイアンであつて、自分の兒が法學博士で有る事をいつも冷笑して居るのであつた。

彌平は柿だの蜜柑だのを買つて來て、緣側からコロ〳〵と坐敷の中へ轉がして『あんまり勉强するなよ、お前は子供の頃から胃が弱かつた、ちと散歩もしたり、なア、身體が大事ぢやさかい……』と言つて庭先から坐敷を覗き込んで、床の室に並べてある書物の金の背文字を嬉しさうに見入るのであつた。

山田は慈尊院の庭に降積る雪も見た。梅の散るのも櫻の咲くのも見た。そして『先ア、これなら十月の試驗に應じら

れるだらう。』といふ見込のついた頃、日露戰爭は開かれた。戰捷々々の號外は每日市中を騷がした。しかし彼のグルウプは濱野を始め皆な極端な非戰論者であつた。水本牧師の牧して居る敎會の夜の講壇は濱野が占領して猛烈な非戰主義が唱へ出された。加藤、松山、兒玉等の靑年達は火のやうになつて其の主義主張を絶叫した。山田もいつの間にか熱狂的な非戰論者になつて了つた。

旅順が今日落ちるか明日落ちるかといふ事が、國民全體の懸案になつて居る頃、濱野は敎會を辭して上京した。そして芝の白金學院神學部へ入學したのであつた。

濱野が居なくなつた敎會は主戰論者の水本牧師の爲に總てが廓淸せられ、危險な言論を弄するものは悉く斥して遠けられた。

靑年黨は欝滂の氣を晴らすべく加藤和夫の主筆で『眞紅』と云ふ文學雜誌を發行した。山田は其の卷頭に、死骨といふ雅號で『山上の垂訓』と題する一文を揭げた。

死骨多くの猿共を見て山に登り坐しければ猿共眼を圓くして其下に來れり。死骨眼を剝き彼等に敎へ曰ひけるは、貧しき者は幸なり、監獄は卽ち其人の者なればなり。彼等飢ゑ苦み盗みすべければなり。哀む者は幸なり、不幸なる者と貴族の膳より落ちしパン屑を投げ與へらるべければなり。饑渴く如く血を慕ふ者は幸なり其人は劍によつて起ち劍に因つて極樂往生すべければなり。平和を求むる者は幸なり、其人は蠻の子の如く石の下に匿れ潜まざれば身を置く所なきまで血を好む義人共に苦しめらるべければなり。されど喜び樂め、僞善者共より國賊不義不忠の名を冠らせられん。僞善者に譏らるゝ事は天使に賞せらるゝ事なり。

三頁に亙つて書いた斯んな皮肉な文字は忽ちに敎會内の物議となつた。丁度其時、中學校の修學旅行があつて、四年級の生徒を引率して敎師達が旅館で酒に醉つて寢込んでしまつたのを見澄して多勢が遊廓へ繰込んだといふ事が新聞に

報道された。そして十數名が無期停學になつたといふ事を聞いた時、山田は旭倶樂部といふ集會所を借りて、其所で加藤、松山、兒玉等と大演說會を開いた。加藤も兒玉も松山も非戰的の演說をしたが、山田の演題は『春畫展覽會』といふのであつた。聽衆は此の奇拔な演題を見ただけで、最う危險極る演說を豫想した。しかし彼の論旨は頗る冷靜で理論的なものであつた。今日の學校に於る修身倫理の講義は鑛物學の講義よりも冷い無趣味なものである。こんな冷い理屈ばかり注込んで置いて、青春の血汐の湧返る青年が偶々遊廓に走つたと云つて直ちに夫れを停學處分にするのは殘酷である。今假りに學校の講堂で春畫展覽會を開かうとする馬鹿な男があると假定しても、最早今日の人間は誰一人夫れを心から喜んで見に行く者は無からう。よし見に行く馬鹿者があつても、自ら良心に省みて自發的に嚴肅な心持を起し、そんな馬鹿な發起人を責め乜るであらう……といふのが本旨であつた。

しかし翌日の新聞紙に此の演說會の記事が隨分誇張して報道せられた爲に、問題が段々大きくなつて、遂には開會中の縣會の問題となつて、某議員が中學當事者の說明を求むるといふ騷ぎになつた。

敎會では早速、兒玉と山田とを除名處分した。松山は縣廳の方を辭職して仙臺の神學校へ入る事になり、兒玉も上京して渚野の入學して居る白金學院の神學部へ入る事に決つた。

『お前が耶蘇教になつたとは、俺ア夢にも知らなんだ。俺等とは違つて法律學校まで卒業したお前の事ぢやさかい、耶蘇になつて善え惡い位の事は能うく承知ぢやらうさか、俺は何とも言はんが、お前を國賊ぢやとか不忠ぢやとか新聞に書きまくられた事だけは、俺は殘念ぢや。口惜しい……』

彌平は火鉢の前に胡坐(あぐら)をかき乍ら肩を怒らしてポロ〳〵と涙を流して居た。

『なんの、泥棒ぢやと言はれうが、何と言はれうと構はんぢやないか。多勢の前に立つて演說をするやうになつたんぢやさかい、自分の額の蠅は自分で追ふぢやらうよ。獅郎の思ふやうにさせてやりなはれ。まさか親の手を後へ廻すやう

な事を仕出來しやせまいて、明法學士ぢやぜ、獅郎は……』と云つてお千代はハ、、、ハと男のやうな聲で笑つた。

默つてゐた山田は優しい父の感情を嬉しくも思つたが、今更のやうに賢明な母の心根に感心して了つた。

『萬事私に任して置いて下さい、決してお父さんに御迷惑はかけません。』

『うん、其の決心があれば善えが……』

『大丈夫です。しかしお父さん……私は今日限り法律の研究はやめます……斷然やめます……』

『え？　法律を廢める！　あの法律を？』

『はい、法律を廢めて……もつと大事な大きな仕事をします……』

斯う云つた時山田は起上つて最う上り框に腰を掛けて右の足を前の方に伸して、脱棄てゝあつた下駄を足の指で挾んで引寄せてゐた。

『お前、これから何所へ行く？』と彌平が氣遣しさうに問うた時、山田は強いて作り笑をしながら、

『慈眷院へ行つて靜に考へます、決して御心配しないやうに、なあに新聞に書かれた位……何ですか、そんな事ぐ……』

山田はサツサと表へ出た。振返つて、ちよいと家の中を見た時、富子は悲しさうな顔をしてボンヤリと裏口の障子の所に立つてゐる。

山田は慈眷院へ行く途中、鍛冶橋の橋詰まで來た時、偶と右手に『鳥直』と書いた掛行燈のあるのが目に留つた。此家は彼が中學時代に度々牛肉やかしはを食ひに來た小い料理屋であつた。其所には顔の長い身體の大きな妻さんが居て能く『獅郎やん、獅郎やん、』と云つて大事にして異れた事を想ひ出すと同時に引ずられやうに彼の足は其の戸口まで行つた。

『おう、どうだい？』山田はもう悉皆昔の山田になつてしまつて、戸口の所から白い齒を見せて笑ひながら帳場の方を覗い

た。

『あらひてハイヨ、まア、獅郎やんやないの？ まアー久しぶりやのいよ、ちやーんと立派な大人になつたのし。』

『あんたも隨分お婆アさんになつたのイ。』

『夫りやア、もう私かて五十やもの……』

『ヤア、失敬！ 又た來るよ。』山田は俄かに引返さうとしたが、妻さんが何とか言つて上り端に起つて居た十七八の娘に目で指圖をしたと思ふと、彼の袂は其の娘に素逸く引捉へられた、そしてとう／＼二階へ引張り上げられた時、彼はもう因果を据えて『おうい、酒々！ 久しぶりで一杯やらう。』と捨鉢のやうに叫んだ。

旣う十ケ月餘り一滴も口にしなかつた酒を飲んだ時、山田は舌が爛れるやうに思つた。眼を瞑つて小い猪口に四五杯クーツ、グーツと引掛けた時、腸の底まで酒が浸み込むやうに感じた。と、彼は突然起上つて、『僕は歸る！ もう斯うしやア居られない。勘定して吳れ！』と叫んだ。

『まア、獅郎やん、どうしたんです。今坐つたばかりやのに、はア、解つた何所かに善えのが出けたんやのい。』

『うん、さうだ／＼、僕はこれから其所へ行くんだ。夫りやこれで勘定……』

山田は財布から一圓紙幣を二枚取出した、

『宜しいワのし、まだお肴も何も出さんのやよつて、ほたら、又たお出なアェ。』

女將は其の紙幣を差出した手を撥ね除けるやうにした。山田は後から恐ろしい者に追かけられるやうな薄氣味惡い氣持で慈尊院に歸つたが、衡門を潜つて坐敷へ入らうとすると小い聲で誰かゞ讃美歌を歌つて居るのが聞えた。不思議に思ひ乍ら山茶花の蔭から首を伸して見ると二三度遊びに來た事のある津本といふ教會員の娘の定子が緣側に腰を掛けながら讃美歌を小聲で歌つて居るのであつた。

『おうい！』山田は大きな聲で呼びかけた。定子は飛上る程吃驚したらしく、耳朶を眞紅にして此方向いた。

『何時來ました？　もう疾く？』
『いゝえ、今來ましたの、私ネ今病院から歸つて來たのよ。』
『病院から？　どつか惡いの？』
『えゝ、一月も前から惡いのよ。私、今お父さんもおツ母さんも大阪へ行つて、唯た一人なの、夫れに病氣なんですから困つちまふワ。』
『此秋から東京の學校へ行くつて言つたぢや無いの？』
『えゝ行く筈でしたが、駄目ですワ私、』
定子は急に俯向いて了つた。山田は坐敷に上りながら『こちらへお入り……』
『いゝえ、私、もう歸りますの、山田さん、私、本當に今日はガツカリ！　しちやつたのよ。もう〳〵悲しくつて〳〵……』
『どうしたんだい？　そんなに悄氣込んでしまつて……』
『私、肺病なの……本當なのよ、今日妻木さんに診察して貰つたら、注射をしなけりやならないのだつて……』
定子はホロ〳〵と涙を膝に落した。山田は無意識に定子の側へ走り寄つて其の右の手を握つて引張つた。引張られて定子は餘儀なささうに山田の爲すが儘にしてゐた。
『あ、あなたはお酒を召し上つたの？』
『おう、久しぶりで禁を破つた。僕は罪を犯した。僕は本當に弱い男だ。』山田は血走つた眼で定子を見詰めながらジリ〳〵と其の手を引寄せた。
『いけませんの、私、肺病だつて診斷されたんですもの、妻木先生が正直に言つて下すつたんですもの、傳染しちや大變よ、ネ、山田さん……』定子は身を反して顏を外方に向けようとした。
『肺病？　定子さんの肺病なら僕は喜んで傳染る！　ネ、定子さん……』

『夫れはいけません、ネ、山田さん、あなたは大事のお身體です……』
『いゝや、僕はあなたの肺病を傳染したい、あなたと一緒に血を吐いて死んでもいゝ。』
山田の左の手が定子の肩へ掛つた時、定子はキツとなつて、
『山田さん！　夫れは本統？　本統に私の肺病を傳染つても宜い？　私と一緒に血を吐いて死んでも宜い？　あなた、夫れはお酒に醉つての戯談でせう？』
『酒の上の戯談？　僕が、クリスチヤンの僕が面白半分に酒を飲むものですか、定子さん、僕は……僕はもう堪へられん事が……』
山田は自分の言葉に自ら昂奮して了つた。
『本統？　ネ、山田さん！』と定子が息を凝ませながら云つた時、山田の兩の腕は白い細い首の所へ稲妻のやうに飛んで行つた。
隣の本堂からは庵主の智榮尼がチーン、チーン、と鉦を敲きながら讀經する聲が靜かに聞えて來た。定子は机の上に身を投げかけてシク／＼と泣いてゐた。

涼しい秋風に吹かれながら淋しい三年坂を越えて湊の通り町まで定子を見送つてやつた山田は、扇の芝からフイと和歌山城内の暗い松原へ入つた。そして高い石垣の上の平地に据えてあるベンチに腰を掛けて、夢中に喘いで居た。彼は既う今にも息が塞がつて死にさうに思つた。苦しい、苦しいと小聲で言つてベンチに凭れて青空の星を見詰めてゐると急に肩の所が重苦しく感じて來た。どうしたんだらう？　と思つて首を一寸竦めて見たが、今度は肩の肉と骨との間に大きな石の塊でも入れられたやうに冷たい痛さを感じた。で、頻りに肩を三つ四つ動かして起上らうとしたが、肩の中にある石ころが、グウー、グウーと轉くり返るやうに思はれて痛いといふより寧ろ鐵火で灼かれるやうな感じがした。

暫くすると肩の痛みが除れて、氣持よく輕くなつたと思ふと、何所をどう通つて行つたものか、今度は頭の中で其の二つの石が、カチーン！と搗ち合つたように思つた。『痛！』と思はず頭を抑へると、胃の腑がキリキリと針で突刺すやうに痛み出して、ガアーッと生温いものをしたゝか吐出した。『しまつた！』と思つたが、引切り無く胃の腑はありとあらゆるものを絞り出した。

頭の痛みも胃の腑の痛みも、直ぐ忘れたやうに止つたが、何となく全身がダルくて、足の裏から頭の尖まで熱湯を浴せられたやうに熱く感じて來た。で、夢中になつて胸を露出しにしてベンチに横はつて居たが、いつの間にかスヤ〳〵と寢入つてしまつた。

ヒヤリと冷いものが額に觸つたと思つて驚いて跳び起きた山田は、自分が公園のベンチに寢て居たといふ事に氣付いた時、直ぐ昨晩の苦みは咳血でなかつたか知ら……と思つて、周章てゝ周圍を見舞はした。しかし夫れは咯血でも吐血でも無かつた。

彼は襟を掻合せながら起上つたが、ヒヨロ〳〵して歩けなかつた。帶に捲付けてゐた時計を出して見ると、もう四時半であつた。定子を家に送り屆けたのは十一時過だつたと思ふ……五時間も此所に寢たのか知ら……と呟き乍ら大手門の方へトボ〳〵と歩いて行つたが、何だか定子の事が氣懸りでならないので、三年坂を後戻りして通り町まで出て行つたが、まだ五時を四五分過ぎたばかりの昧爽に女一人の家を驚かすのも如何なものと思ひ直して、サツサと慈善院の方へ急ぎ足で歩いた。そして途中で牛乳を二合買つて、夫れをグーッと飲み乾して慈善院へ歸つて、雨戸も繰らないで蒲團を引被つて寢つしまつた。何度も何度も恐ろしい夢に脅かされた。

『おい、山田君、まだ寢て居るのか。』

雨戸を敲いた兒玉の聲に驚かされて、撥ね起きた山田は、ひつしよりかいた寢汗を拭きながら、『おうい、兒玉君か……』と言つた。

『何所か惡いのかい。』ゴロ〳〵と雨戸を引開けて入つて來た兒玉は素肌に單衣を一枚着て兩の手で肩の所に大きな玄骨をこしらへ乍ら、芝居に見る俠客の乾兒のやうな装で、敷居の所に悄然と立つてゐた。

『雨戸を開けて呉れ給へ、昨晩少し熱が出てネ……』山田は蒲團の上に坐つた。兒玉は武骨な手つきで雨戸を一枚一枚戸袋の所に推して行つた。

丁度雨戸を開けて了つた所へ、松山がコツ〳〵と衡門の所から入つて來た。

『おうい、どうしたんだ、山田君。』松山は優しい顔でニコ〳〵笑ひながら言つた。

『昨晩から發熱したんだツて……』兒玉は障子を開けながら言つた。

『昨晩ツて？ 僕は今晩の十時に出立する事になつたのだから、昨晩此家へ三度も來たんだよ。九時頃と十一時頃と、一時前とに……所が居やしないぢやないか。田中町の家へ行つても歸らないと言ふし、何處に居たんだい一體……』

松山は靴を脫ぎながら斯う言つて上つて來た。山田はドキン！ と頭を鐵槌で打たれたやうに感じて、凝然と二人の顔を見詰めて居たが、優しい松山の顔にも別に自分を憫れむやうな色も見えず、武骨な兒玉の風采にも、憐れな意志の弱い自分を叱らうとするやうな氣配すら見えなかつた。けれども山田は唯もう判官の前に引据えられた重罪犯人のやうに、蒲團の上に端然と坐つたまゝ、『松山君！ 兒玉君！ 僕は惡かつた。僕の爲に祈つて呉れ！』

山田は呆然として居る二人を無理に引据えて、『鳥直』の一件から定子を自宅まで送屆けたまでの成行を一つも包み隱さず告白してしまつた。そして蒼ざめた顔を俯向けて、二人の宣告を待つて居た。

『しかし山田君、』と松山は言葉を柔げて、『君は津本の娘が咯血した事はまだ知らないんだネ。』

『喀血？　あの定子さんが？……』山田の顔は死相を呈した程に物凄かつた。

『僕は最前、あの家の前を通つて一寸立寄つたが、定子さんは昨晩の三時頃に喀血したのだッて、丁度電報を受取つて大阪から駈付けたおつ母さんに遭つて來たよ。』

『ふん、さうか。』と兒玉も太息を吐いた。山田はぶる／＼と身を顫はせながら、

『君達、僕の……僕の決心を聞いて呉れ。僕は今日限り斷然法律研究を廢す、僕の性質には法律研究が適しない。僕は矢張り宗教家だ。僕は昨日一日の僅かな……マア僅かなと言はして呉れ……其罪を冒した時に、僕の魂はどれだけ悶えたか知れない、僕は今君達の前に救はれた。僕は昨日親爺の前で法律を廢すと言つたのは、一種の反抗から言つたのであつた。しかし僕は今本當に決心した。僕は最う冷たい法理論に活きてゐる事は出來ない。僕は僕のやうな意志の弱い、しかもデリケートな人間の友達になつて彼等を慰めてやらう。否、一緒に泣いてやらう。そして僕は僕自身を宗教の嚴しい戒律で責め付けて此の弱い意志を鍛錬して見よう。君達二人は僕の終生の友となつて僕の今日の此の決心の結末を好く覧らして呉れ給へ。』

山田は感極つてポト／＼涙を膝の上に落した。最前から默つて聞いて居た兒玉は、握拳でトン！　と膝頭を叩いて、

『よし！　決心し給へ、そして僕達と一緒に上京しよう。御互は今まで隨分キワドイ途を踏んで來た。さア、今日から新しい世界へ、前進！　前進！』と言葉は元氣であつたが、大きな眼からハラ／＼と涙が落ちた。

『では見て居て呉れ給へ、僕は決心した證を立てるから……』

山田は床に積重ねてあつた四五十冊の法律書を庭の眞中に皆な提げ出して行つた。そして机の上にあつたマッチを帶の間に留めたと思ふと縁側の戸袋の所にあつた石油鑵を一寸右の手で振つて見た。

『さア、僕はこれを焼拂ふ！』斯う言つた時流石山田の顔は眞蒼くなつてゐた。山田は沈着いた態度で積重ねた洋綴の書物に石油を打つかけて、帶の間からマッチを取出したが、其手はひどく慄えて居た。

パーッ！と火の手が燃え上つた時、松山も兒玉も俯向いて熱心に祈り初めた。山田は愛兒の火葬を見るやうな心持で、凝然と灰になつて行く書物を見守つて居たが、何を思つたか高く石油罐を差上げて一滴も殘さず石油を其の上に注ぎかけて、そして其の罐を庭石の上に力任せに投げつけた。ガラン／＼ガラン！と音を立てゝ罐が五六尺ばかり向ふの方へ轉げて行つた時、

『あーツ！　スツキリした！　さあ讃美歌を歌はう。』と云つて縁側へ駈け上つて來た。

北のはてなる、こほりのやま——

てる日にやくる、まさごのはら——

歌の半ばに兒玉が偶と顏を上げてみた時、衡門の所に彌平が口を一文字に結んで、ちつと此方を見詰めて居るのに氣がついた。

松山と兒玉とは彌平を宥めて漸と得心させ、善は急げと云ふので、其晩の夜汽車で三人は濱野の所へ電報を打つて置いて和歌山驛から汽車に乘つた。

發車の五六分前にお千代がアタフタと駈付けて來て汽車の窓の外から、

『獅郎、一寸……』と言つて顎で招いた。

『本代に借りた百圓の金は心配する事は無い、どうかしてわたいら二人で働いて返しとくさかい……そやけど、これから後、金は一文も送らんぞよ。其のつもりで東京で勉强して耶蘇でも何でも善えから、偉い人になつてお呉れよ……夫れからナ……あの富子ぢやて、お前、あの子を見捨てるやうな事はしまいぢやらうナ。まさか。』

『大丈夫！　僕は東京へ行つて、どうしてでも見込がつき次第呼寄せます。』

『さうか、夫れで、もうわたいも安心や。夫れぢやア達者で勉强しやんせ。』

遍に涙ぐみ乍ら紙に包んだ紙幣を山田に握らせて、『夫れぢやア松山さん、兒玉さん、宜しく願ひます……』

『御安心なさい、東京へ行けば濱野君も居るし、神樣は乾度宜いやうに途を開いて下さいます……』兒玉は窓から首を突出して言つた。

車掌の鼠色に汚れた手袋が上つたと思ふと汽車は靜かに動き出した。『左樣なら!』とお千代は一口ハッキリと言つてサッサと後をも振向かずに構外へ出た。

山田は和歌山から大阪までも、ぐつすり寢込んだが、梅田から東京までも殆どウト／＼と眠りつゞけであつた。新橋驛には濱野夫婦が迎へに來て異れてゐた。三人は兎に角濱野の家へ落着いて、種々相談の結果、松山は其まゝ[illegible]へ出立し、山田と兒玉とは濱野に伴れられて白金學院の神學部へ行つて院長に面會を求めた。

山川は濱野の紹介で院長の木深博士に面會してみると、五十前後の能く肥えた、丈の低い立派な紳士であつた。明瞭で莊重な言語で、種々と經歷や入學志願の動機を尋ねた。山田も兒玉も包まず隱さず、すつかり打明けて話すと、ニコ／＼と笑つて居た院長は、『宜しい、明日試驗を致しまして、及第なされば學校の方から、何とか貸費の方法も講じますしかし二ケ月間だけは御自辨にして戴かねばなりません。』とキッパリ言つた。山田は吻と太息を吐いて安心した。

濱野は其頃神田の錦町に六疊三室の家を借りて親類の學生達を監督して居た。山田は兒玉と二人で濱野の宅へ宿る事にしたが、夕方の六時頃から、濱野夫婦に誘はれて連雀町の福音館へ說敎を聽きに行つた。會場には最う二十人ばかりの信者が集つて、各自必死に祈つてゐた、『主よ、おゝ主よ。』といふ聲が口々から唱へられて居た。山田は不思議な世界へ引張つて來られたやうな感じでキョロ／＼と四邊を見廻してゐた。軈てワアーッ! とけたゝましい聲がしたと思つて振返つて見ると、四角な大きな行燈や、十字架を畫いた高張を押立てゝ百人近い群集が繰込んで來た。そして〈十字架に、かゝりたる、主エスをあふぎ見よ……〉といふ軍歌を室內も破れよとばかり吹鳴り乍ら太鼓を打つ、喇叭を吹

く、鉦太鼓く、タンバリンを鳴らす、横笛を吹く、夫れは〳〵大變な騷ぎであつた。小柄なマン圓く肥えた四十恰好な男が出て來て、合圖をすると、群集はピタリと鳴を靜めた。そして皆な頭を垂れてコトリとも言はずに靜まり返つて居たが、(おゝ天の父様……)と壇上の人が熱誠の籠つた聲で祈り出した時其の祈りの一語一語が山田の心の臓にギク〳〵と喰込んで來るやうに感じた。殊に祈禱だけで山田の心は十分に魅せられ切つて居たが、牧師の說教は又た猛烈であつた。山田は自分の過去の罪惡を一つ一つ掘起されて、自分の眼の前に堆高く積重ねられるやうに感じた。說教の果てた後で教壇の前に薄縁莚(うすべりござ)が敷かれて、『どなたでも、卽座に、今宵、唯今、全く罪の根から潔められたいお方は、此の恵の座においでなさい。さア唯今お出でなさい!』と權威のあるやうに、しかも懇篤に言つた。山田は思はずバタ〳〵と其所に駈け出して行つて涙を流し乍ら祈つた。(おー兄弟、救はれなさい、今、全く潔められなさい!)と靜かに牧師は耳元で囁いてくれた。

山田は生來始めての法悅を得て歸つた。兒玉と二人で寢床に入る時も泣きながら祈つた。そして二時頃にフト眼を覺して見ると、兒玉は蒲團の上に端然と坐つて熱心に祈つてゐた。山田も思はず撥ね起きた。

翌日芝の白金學院へ試驗を受けに行つたが、問題は意外容易であつて、卽座に入學を許可して與れた。そして山田も兒玉も神學部の寄宿舎へ入る事になつた。

夕方濱野の家から手荷物を提げて電車に乘つて東中堂で下車した時、山田の心は本當に歡喜に充ちてゐた。

『さア、これから一心に勉強しよう! ネ、兒玉君!』

山田は坂を上り乍ら振返つて兒玉の顏を見た。兒玉はトランクを重さうに提げながら、

『やらう! 紀州男兒の意氣を示さう!』と言つてムツチリと笑つた。二人が二本榎の所へ出た時は、白金學院の講堂の尖塔が夕日を浴びて美しく空に聳えて居た。

『御互ひも、未來の牧師だなア。今日から……』山田は希望と幸福とが自分逹を迎へて呉れるのを喜ぶやうに言つた。

二人は正門の所へ來て、新しく出來上つた立派な講堂の色硝子を眺めて居たが、『おい、山田君、氣に入つたなア、此の垣は……』と兒玉は右の足で低い枳殼の垣を一寸蹴つた。

『うん、僕も昨日から此の垣が氣に入つてるんだ。有るか無きかの垣が、門衛が有るぢやなし。自由の空氣に充ちてるよ、島村苳村を出し大場孤島を出した學校だからなア……』

山田は嬉しさうに笑つた。兒玉はトランクを左の手に持替へながら、『京都の同志社へ行くとクロンウエルや、アブラハム・リンコルンの香がすると云つた男があつた。しかし此の白金學院は、ウオーヅウオースや、トーマス・カアライルと云ふ匂ひがするネ。』と言つた。山田は其の言葉を非常に面白く感じながら寄宿舍へ入つた。隣りの部屋には吉田といふ京都の美術學校を出た畫家で神學生になつてゐる男が居た。

山田はいろ／＼の空想を描きながら寢床に入つたが、其夜はどうしても、まんじりと眠られなかつた。

二月の間山田は熱心に勉强した。そしていよ／＼ダッチ・リホームドミションの給費生として月々十二圓宛の給費を受くる事になつた。世の中は日露戰爭の戰捷々々で鼎のやうに沸いてゐたが、磯野も兒玉も山田も、旗を捲き枚を含んで默々として神學や聖書の研究に熱中してゐた。

兒玉には最う二つになる女の兒があつた。で、兒玉は大崎村で小い家を借りて其所へ妻子を引取る事にした。山田も二本榎で二階の六疊一室を三圓で借りて、早速富子に上京するやうに手紙を出した。しかし富子は容易に上京しようと言つて來なかつた。

『君が假令神學校を卒業したつて、妻君が未信者ぢやア傳道も何も出來アしないぢやないか、何としてでも早く呼寄せ給へ、上京したら僕は直ぐ聖書學館へお世話をするから。』

濱野は頻りと斯う勸めた。で、山田は三日にあげず富子宛に手紙を出したり、『福音新報』や『ときの聲』を送つたり『聖書の研究』を送つたりした。

すると十一月の末に、誰か宜い伴があり次第上京すると言つて來たが、其の手紙が着いた三日目に丁度幸ひ山田と中學時代の親しい友人で其頃中野の鐵道隊に勤めて居る河野といふ工兵中尉が歸省して居て上京するから一緒に伴れて行つて貰ふと言ふ手紙が來た。

山田は河野と最う五年來會はなかつた。非戰論者の彼は自分の妻を軍人に同伴して來て貰ふ事を快くは思はなかつた。しかし元來が優しい河野の事であるから一度會つて話して見たいとも思つて、電報の來るのを待つてゐた。

十二月二日の朝十時に富子が新橋へ着くと云ふ電報を受取つたので、早速濱野の所へ其の由を知らせた。そして自炊道具や炭や米を買込んで、其日を待つてゐた。

富子の家は代々堅い眞宗信者で、子供のうちから毎朝、佛前で、『モロ〱ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來我ラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘト頼ミ申テ候、頼ム一念ノ時往生一定……』と改悔の文を唱へさせられたもので、山田が基督教になつたといふ事は、チラと聞くには聞いたが、確とした事を知らないうちに、何だか〱だか自分には毫しも解らないゴタ〱があつて、百圓近くの書籍を燒拂つて又た上京してしまつたので、一體此の先がどうなるのかと心配して居る所へ東京から頻りに來い〱と言つて來た。もう山田の家から今は月々一圓の金も送らないといふ事を知つて居る富子には、上京しての後の事が氣になつてならなかつた。假令上京した所で、學資は何所からどうして儲けるのだらうか、自分が行つた爲に足手纏ひになつて山田が非常に迷惑するで無からうかなど〻考へて居たが、心配せずに來よと親切に言つて呉れる手紙を三回五回と見て居るうちに、いつしか山田の傍へ行つて一緒に暮して見たくなつて、いよ〱上京する決心をしたのであつた。

『生馬の眼を抜く所ぢやさかい、能う氣をつけにやア‥‥何と云うても若い者同士やさかい‥‥』と母親も心配さう言つて呉れた。

富子は自分の郵便貯金＝夫れは山田が明治法律學校に居る頃五圓三圓宛時々手紙と一緒に送つた殘り＝百六十何圓をもつて河野中尉に同伴して貰つて上京する事になつた。

流石に行末を不安に思つたが、お千代も涙ながらに大橋の際まで見送つて呉れた。

『では、仲善くしてのイ、獅郎はヤクザな子ぢやさかい、出來るだけ我慢して‥‥』と云ひつゝ五圓紙幣を一枚帯の間から出して、『これは彼の子が書物を買ふ足しにでも‥‥』

『夫れでは御機嫌よう。』富子も涙を流し乍ら二人の母に別れて俥で停車場へ着いて見ると、其所には眉目秀麗な河野中尉が富子を待つてゐた。

中尉は切符を買ふ事から汽車の乘降の事まで萬事の世話をして呉れた。旅慣れない富子は唯々として河野の爲すがまゝに『有難うございます、有難うムいます、』の一點張であつた。大阪を出た汽車が琵琶湖の滸を通り過した頃、富子は退屈を紛らす爲に、信玄袋から『聖書の研究』を一冊取出して夫れをボツリ〳〵と拾ひ讀に讀んでみた。

『何ですか夫れは？』と中尉は向側の腰掛から首を伸して、其の表　をチラと見たが『基督教ですナ。』と不思議さうな顔をした。

『さうです、山田は今基督教になつて居るんです。』と富子が言つた時、中尉はポンと膝を打いて、

『山田君は矢張り偉い、あの男はどうも中學時代から飛離れた男だと思つたが、とう〳〵旨くやつたナ。』と言つた。富子は吃驚して中尉の顔をヂロ〳〵と見た。

『うん、山田君は亞米利加へ行くつもりだナ。』と言つた中尉はニコ〳〵と笑ひながら、『キリスト教か‥‥夫れも宜いナ‥‥』

富子はグッと胸を締められたやうに感じた。早く來い〳〵と呼寄せて、直ぐ亞米利加へ連れて行かれるのでは無からうかとも思つた。遂々亞米利加へ行つて二度と日本へ歸らない決心で、せめて一二週間でも一緒に暮さうといふ悲しい親切ではなからうかとも思つた。

中尉は硝子窓に頭を凭せて、微かな鼾聲をかきながら眠つてしまつたが、富子は汽車が名古屋を過ぎても熱田を過ぎても眠られなかつた。『さうぢや、乾度さうに違ひない、ほやよつて法律の本を皆な石油をかけて燒いてしまうたんや。』富子の結論は斯うであつた。

『翌朝十時に汽車は新橋へ着いた。中尉は出迎へに來て居た山田を見て、『君も妙な方面へ行つてしまつたネ、切支丹宗へ入つたといふぢやないか、磔刑（はりつけ）だぞ。』と云つてハヽヽヽと笑つた。富子は切支丹といふ言葉を聞いた時思はずヒヤリ！と冷い刃を頬べたに當てられたやうに感じた。

山田の外に濱野夫婦も迎へに來て居た。兒玉も鷲のやうに光る眼を輝かして立つてゐた。富子の眼に映じた新橋驛は案外見すぼらしい建物で、乘降客も思つたよりは少なかつた。仕付糸の拔立てのお召の袷と縮緬の羽織は、群集の誰に較べても見劣りはしないと思つた。しかし和歌山の町で髮結に結はした銀杏返しは、右を見ても左を見ても何所にも自分と同じものを發見し得ない事に氣がついた時、急に愧かしくなつて來た。

『荷物はあとで配達して貰ふ事にして、此儘行かう……』

山田は富子の顏の前へ首を突出すやうにして言つた。木綿の紋付の羽織を着て、垢のついた紀州ネルの襦袢を着た山田の風采は、キチンと身に適うた軍服に身を固めた中尉に比して富子の眼には餘程見劣りのするものであつた。

東京と言へば眩（くるめ）くやうな立派な所だと想像して居た富子は直ぐ電車に乘せられて汚ない町を左の方へ走つた。軈て電車を降りると、淋しい山路のやうな所へ伴れて行かれた。

『此所は何ていふ所ですか。』と内證で濱野の妻君に聞いて見ると『庚申堂です』と答へた。夫れは能く繪草紙で見る強盜追剝の出る所で、女が猿轡を箝められて居る場所のやうにも思はれた。どんな家へ連れて行かれるのかと思つて、しほ〳〵と蹤いて行つて見ると乾物屋の二階で、茶色になつた疊の上に坐蒲團一枚も火鉢一つも無い有樣。富子はべたりと疊の上に身を投げるやうに坐つたが、つく〴〵と『東京へ來るのぢやなかつた。』と思つた。

其年の冬は非常な寒さであつた。表へ出れば路は凍てゝ泥土のやうになつて居、何を何所で買つて居るのか皆目解らず、此方の言ふ言葉は先方へ通ぜず、先方の言ふ事は聞取れず、隨分苦しい思ひをしながら、三月四月暮して居るうちに、種んな事情にも慣れて來、濱野や兒玉の妻君達と往來して居る間に、基督教といふものゝ空氣が少しく會得出來るやうになつて來た時、山田はひどい痔疾を患つて手術しなければならない場合になつた。

非常な出血をして二三日寢て居た山田は、何を思つたか、『おい富ちやん！』と優しい聲で蒲團の中から喚んだ。

『何です？』と富子が枕元へ行くと、山田は顏を蒲團の中の方に引込め乍ら、『手術をしなきやア、此儘にして居たら俺は死ぬよ。』と言つた。

『手術？　どんな手術をなさるの？』

『痲睡藥を嗅ぐんだ。そして此の惡い所を切取つて貰ふんぢや。さうしなけりや、生命が危いし、さうすりや危いし、困つたものぢや。』

『まア、どうしたら肯えんでせう？』と富子は泣聲であつた。

『今に濱野君が學校の歸りに寄つて呉れるだらう。相談すりやア何とかなるだらう、しかし差づめ入院料だて、お前少しの金はあるだらうナ。俺は、どんな事があつても國元へは金の無心を言はない決心だが。』

『えゝ、二十や三十ならありますはのし。』

『さうか、あゝ痛い〳〵……』と山田は身體をくの字に屈めて呻吟いた。

富子が途方に暮れて居る所へ濱野が入つて來た。そして相談の結果、取敢えず日本橋の安野病院へ入つて手術を受ける事になつて、其の翌日俥に乘つて入院した。濱野と富子とが付添つて行つた。

手術の結果は案外好かつた。四週間の入院で退院出來る事になつたので、濱野はミションに談判して四十五圓を借りて來て與れた。富子の貯金も皆な出して來た。しかしまだ十八圓の不足であつた。で、濱野に頼んで其の十八圓を一週間内に返却する約束で濱野の家に同居して居る醫生の金を借りて貰つて兎に角病院の支拂ひを濟した。

一週間の期日は來た。しかし調金の見込は無論無かつた。明日は其の十八圓を調達して濱野に渡さねば義理を缺くと思つた山田は、豫て見定めてあつた西町の古着屋へ行つて、『少しばかり賣りたいものがあるから來て見て與れないか』と言つた。すると其所の六十前後の婆アさんが直ぐ山田に隨いて來た。

丁度富子が使ひに行つて居ないのを幸に、富子の行李の蓋を除つて其中にあつた、縮緬の羽織と長襦袢と、お召の綿入とを三枚摑み出して、『おい、これを十八圓に買ふかネ。』とポンと婆アさんの前に夫れを投げ出した。

婆アさんは一寸見て、『買ひませう。』と言つて、早速五圓一圓取交ぜて十八圓を疊の上に並べて着物を引抱えて歸つてしまつた。

山田は『安く言ひ過ぎた！』と心の中で思つたが、『なアに、質屋へ行けば十圓も貸さないだらう？』と負惜みな事を呟いて居た。

トン〳〵〳〵と段梯子を登つて來る富子の足音がした。山田はハッ！と其所へ跪いて謝罪したいやうな心持になつたが態と沈着いた風を裝つて、『おい、お前の着物を賣つたぞ、羽織と長襦袢と綿入とを……』

『え？　あの長襦袢を……何ぼに？』

『十八圓、三枚で十八圓に賣飛ばしたよ。』

『先ア、あんた、あの長襦袢は、あたいが四十六圓で母アさんに買うて貰うて、まだ袖の差し初めもせんのやが……』

富子は俯向いて了つた。山田は賣る前に一度相談してやれば善かつた……と思つたが、最う取返しがつかなかつた。

『惡かつた、俺が惡かつた、宥して呉れ、大失敗だつた……』

『いゝえ、あんたの身體がよくなつたんやさか、わたいの着物の二枚や三枚、どうなつても構はんのやけど……』

夫れから富子は一日二日沈み勝であつたが、別に愚痴ッぽい事も言はずに默つてゐた。しかし、山田の身體は手術後めつきり善くなり、どんな寒さにでも悉しも弱らなくなつたので、富子も安く賣飛ばされた着物の事などは段々と打忘れて喜んだ。さうして居るうちに、春も過ぎ夏が來た。暑中休みには神學生全體が實地傳道に出るので山田も千葉の海岸へ行く事になり、給費の上に旅費や手當を貰つて富子と二人は樂しい一夏を過した。

いつの間にか富子の心には基督教の敎へが浸み込んで、もう熱烈な信仰になつて居た。御和讃が讃美歌に變り、唱名唱佛が祈禱に代つた富子の信仰は萬事感謝に充ち滿ちた眞宗的の信仰であつた。傳道地で祈禱會を開く度に、敎會員は皆な富子の祈りに泣かされてしまつた。富子が初めて公衆の前で髮を立てゝ祈つた時、會員の誰よりも先づ第一番に泣かされたのは山田であつた。山田は溫順しい優しい凹みのある富子の心が、いつもヤンチヤ氣味のある自分の心をフウワリと包みくるんで居てくれるやうに思はるゝ程幸福を感じた。二人の愛情は段々眞正な愛の領域に進みつゝある事を知つた。

夏期傳道を經へて九月の半頃に東京へ歸つた時、富子の乳房はもう眞黑くなつてゐた。

翌年四月の二日に富子は女の子を産んだ。富子の母親は遙々紀州から上京して三月ばかり滯在して何くれとなく世話

をして呉れた。子供の名をメグミと命けて百日目の寫眞を郷里へ送つた時、母のお千代から、……百圓の本代も、もう片をつけてしまうたから安心するがよい。初孫の顔を見たいが、夫れは瀬戸屋のばあさんに代理をして來てもらう。二人は達者で仲よくして子供を育てゝくれ。いつも言ふ通り親馬鹿にならないやう氣を付けてくれ、メグミが二十にもなつた頃、私らも五百や六百の金はにぎつて居るつもりです。富子へよろしくつたへて下さい。さよなら。

と云ふ手紙に十圓の小爲替を添えてあつた。山田は其の小爲替を一寸押戴いて黒い印肉の滲んだ金拾圓といふ木版の字を凝然と見詰めて居たが、心の底から嬉し涙がジワ〳〵と湧き出して來た。

富子と相談の結果、其の十圓で銀座の警醒社からロバアトソン說教集を買つて來て、非常に緊張した心持で夫れを讀んだ。無神論者のトランクにも必ず此の說教集があると言はれる程深刻な其の說教を讀んで感心する度に『此れは母の說教だ。』と思はざるを得なかつた。

祈禱と感謝とで築き上げられた幸福な神學生時代の生活を終へて、濱野は紀州の熊野へ、兒玉は和歌山の田舍へ、山田は九州の唐津へ夫々赴任したのは明治四十年の夏であつた。松山は東北學院を出て仙臺の町で僅か六圓の月給で小い教會を牧し乍ら農民傳道に從事するとの通知があつた。山田等と引違へに加藤和夫は白金學院の神學部へ入學した。

九州へ行く途中、四年振りで和歌山へ歸つた時、もう富子の髮も蝶々でなく、袷の襟に黒い襦子が無かつた。少し舌の廻らない東京辯で、

『メグミちやん、これがあんたのお婆アちやん、これがお祖父ちやん……』と自分の手をメグミの小い右の手に持添えて指さした時、お千代の眼からはハラ〳〵と涙が零れた。彌平は突如り大きな兩手を擴げてメグミを抱かうとしたがメグミが恐い者に襲はれた時のやうに富子の膝へ縋りついたので『はゝゝゝは、知らんのぢやさかイのう。』と言つて高笑をした。山田は萬事に冷靜で賢い母親が涙を浮べてゐるのに、何事にも涙脆い父の彌平が高笑ひをした此の豫想に反

した光景を見た時、長い間朝疾くから起きて夜遲くまで、內庭に立ち通して働いて居る母親の髮の所に白髮の五六本光つて居るのに氣がついた。

『あんたは、これ、江戸ッ兒ぢやのイ。』とお千代は涙に濡れた眼でメグミの圓い顔を繁々と覗き込んだ。其所へ瀬戸屋の家內中が入つて來て、俄かにワァ〳〵と賑かに騷ぎ出したので、山田は初めて『自分もとう〳〵學校を卒業して一人前になつたナア。』と思つた。

次の日嘗て自分を除名した教會へ行つて見ると、濱野や自分達の騷いで居た頃の青年は既う一人も見えなくなつて、堅實な中年以上の人達が三四十人集つて地味な集會をして居た。水本牧師は『あア、山田さん……』と言つて疎らな顎髯を動かし乍ら靜かに山田の手を握つた。山田は其前に身を跼伏して過去の輕擧妄動をすつかり懺悔したいやうにも思つた。

山田が九州の唐津へ赴任した當座はマダ頻りにスポルジョンの說敎集を讀んだり、ロバアトソンのものを耽讀して、基督の再臨を說いたりしてゐた。しかし其頃日本の文壇には自然主義文學の風潮が渦巻き初めて、津々浦々に到るまで其の思潮は狂風の如くに吹荒んで、總ての青年男女を其の渦中に捲込まねば置かなかつた。山田もいつしか『女の一生』だの『死の勝利』だのいふ類の英譯を讀み初めた。熊野に居る濱野は頻りにクロポトキンを讀めと勸めて來た。一敎會員の若い人達にも隨分急進主義な人があつた。山田と同鄕の女を妻にして居る島本綠水といふ男などは極端なソーシヤリストであつた。

翌年の夏、富子が男の子を產んだ頃は、もう山田の頭と宣敎師の頭とには餘程の懸隔が出來て居た。で、白金學院で三年間一生懸命に習つた神學といふものも七八分通りまでは彼の頭の中で反古籠の中へ投げ込んで居たのであつた。

山田が唐津から四國の小松島へ轉任した時、其所にはオイチ二の藥を賣るソーシャリストが居て毎日のやうに遊びに來た。熊野に居る濱野からも、東京の加藤からも度々猛烈な手紙が來て彼れの魂をいつも脅かした。其頃もう加藤の信仰は正統派から脱け出して頗る自由なものになつて居るらしく、濱野からの手紙の文句にも、いつも強いソーシャリデムの氣分が漲うてゐた。山田は何となく自分一人が加藤や濱野に取殘されて遙か後の方に魔誤ついて居るやうに思はれてならなかつた。

彼は頻りと種んな小說や論文を手當り次第に讀んだ。彼は聖書を讀んで其の教理を考へる事よりも、信者を訪問して月並な挨拶を交換する事よりも、教會へ一人でも多くの人達を集める工夫をする事よりも、もつと〱大きな事業＝夫れは自分一人で果さなければならないやうな大きな事業＝が肩にかゝつてゐるやうに感じて來た。しかし夫れはどんな事であるかは自覺出來なかつた。

彼は毎日焦々して暮した。彼には最う米國人の宣教師を三日にあげず訪問して、輕薄な口調で英語を操り乍ら宣教師のお氣に入りさうな態度をしたり、心にも無い上手口を叩く程の圖々しさが無くなつてゐた。で、とう〱ローヤーといふ再臨論者の博士と大激論をした結果四國の土地をも去る事になつた。

山田が漸い〱四國から福島の雪國へ引越して來たのは、明治四十三年の四月、まだ川俣地方の山の頂に白いものゝ殘つて居る時であつた。

彼は宣教師のナッス博士に逢つて、自分の懷いてゐる宗教上の意見をすつかり吐いた。そして何うしても今後の宗教は社會問題の研究に手をつけねばならないといふ事を高調して說いた。

博士は好意を以て彼の說を受入れて山田の建議に對して出來るだけの事をして吳れたので、山田は非常な愉快と元氣とを以て川俣町で死ぬまで戰つて見ようといふやうな決心をして傳道に着手したのであつた。

僅か七八名の信者ではあつたが、彼等は時代思想に對して理解のある若い牧師と、篤實で快活な其妻君とを教會に迎

へた事を非常に喜んで、何くれと牧師を助けて萬事の世話をやいた。

山田は久し振で手足を伸す事の出來たやうにノビ〳〵して涼しい北の國の夏を樂しく送つた。さうするうちに秋の半頃に宣教師から戸丸といふ產婆看護婦の免狀をもつてゐる熱心な傳道婦を送つて來た。

戸丸は最う廿歲近い子供のある四十女であつたが堅實な思想と確信をもつて居て、赴任すると直ぐ婦人休養所といふのを儲けて、町の羽二重工場に働いてゐる女工達の病氣に罹つたものは皆な引取つて世話をしてやると云ふ仕事を始めた。で、戸丸傳道婦の爲めに山田の傳道は町の主立つた工場々々に及ぼす事が出來、說敎の時も二十人三十人と來會者があるやうになつた。

冬が來た、始めて經驗する奧州の冬籠りは山田に取つて隨分苦痛であつた。『母アちやん、チベたい、チベたい。』と三歲になる佐賀といふ男の兒がヒドい凍瘡(しもやけ)のした手を吹き乍ら泣いてゐるのを見ると可哀想にも思つた。最う臨月に近い富子が肩で息をしながら眞蒼い顏をして氷を破り乍ら井戸端で水を汲んで居るのを見た時などは、『おうい、お前は炬燵に入つて居ろ！』と叱るやうに言つて自分と水を汲んでは見たが、夫れも唯一回二回きりで、性來そんな事に根氣の缺けた彼は、氣の毒だ氣の毒だとは思ひ乍ら、ツイ富子(ひと)を冷い寒い流し元で立働かせたのであつた。

クリスマスが濟んで間も無く、佐賀は胃腸を害して甚い下痢をした。今頃赤痢でもあるまいと思つて醫者を呼んだが、醫者は頻りに頭を傾げて、どうも變だ變だと云ふうちに、四十度近い發熱で、『母アちやん、父うちやん……いたーい〳〵。』と叫び續けて苦しんだ。夫婦は一日二晩。まどろみもしないで介抱してゐたが、三日目の朝方になつて、もう佐賀はいたい〳〵と叫ぶ事も出來ないまでに疲れ切つてゐた。醫者が來て『どうも疫痢らしい。』と言つた時、夫れが全然誤診であらうが何であらうが、最う幼い者の生命が此世から消えて行くのだといふ事を直覺せざるを得なかつた。

醫者の歸つた後で、山田は佐賀の額に手を當てながら、『おい佐賀！　清い美しい生涯だつたナお前は……エス樣は乾

度お前を喜んで迎へて呉れるぞ。』と言つて俯向いてしまつた。涙脆い氣の弱い山田の其の言葉は、幼兒に對する告別の辭であると同時に夫れが妻に對する宣告であつた。

戸丸も駈付けて來た。教會員の三四人も見舞ひに來た。醫者も駈付けた。しかし最う佐賀は唯眼を見張つてゐるだけで、何にも見えないらしく、スウ〳〵と微かな息を洩してゐた。

『どうも御氣の毒ですが、もう何とも、見込はありません。』と醫者が言つた時、山田は口を眞一文字に結んで、ぢつと子供の顏を見詰めてゐたが、こんな幼い兒にでも最後の一線を超えようとして容易に越え切れない生の執着があるのかと思ふと、いぢらしくも恐ろしくもなつた。

佐賀は蒲團を撥ねるやうにして右の手を擧げた。そして何だか言ひたいやうに唇を少しく動かした。鈴のやうな可愛い眼をパツチリと開けて父よりも母よりも、もつと〳〵大きい愛の對象を見付けたかのやうに滿足らしい顏付をしたと思ふと、ゴロ〳〵と小い響が喉の所で聞えた。そして直ぐ頭を左右に少しく振つたが、其の刹那子供の顏には物凄い恐怖の色が閃いた。眉間と唇の兩側とに、死の手が利刀の切尖で描いたのかと思はれるやうな縱の線がすうーツと現はれたかと思ふ間に、もう顏の總てから生命の名殘が消えて了つて、蒼白な平和な死の假面が其所に横はつて居た。

山田は生來始めて死線を超え行く人を目のあたり見た。悲しいと云ふよりも寧ろ恐ろしかつた。富子も戸丸も涙乍らに祈つた。山田も祈つた、しかし死んだ佐賀の靈魂が、……今の今まで生と死との境で苦み悶え戰つて居た其の一人の幼い兒の靈魂が、最う自分の行く事の出來ない清い高い天國へ飛び去つたらうとは、どうしても思はれなかつた。

『個性的靈魂の存在？』といふ大きな問題がグツと彼れの頭を締めつけた。彼は唯呆然として其の悼ましい屍體を教會員達の爲すがまゝに任せて見て居るより外に術を知らなかつた。

ぴしよ〳〵と雪解の路を踏んで墓場から歸つた彼は机の前に坐つて種んな事を考へてゐるうちに、今まで何度も何度も他人の葬式に行つて、賢ら(さかし)に頻に説教した事のある自分を憫まずには居られなかつた。葬儀といふ恐しい事件を利用し

て教會員を殖さうために傳道説教をする牧師達を憎くも思つた。

『さうだ、解らない、解らない事を解つたやうに傳ふるのは罪だ、俺は解らない事は解らないまゝに傳へよう、夫れが俺の將來だ。我々のやうな小ツぽけな男に直ぐ知られて解るやうな下らない神樣を信ずる奴があるか。よし！俺はこれから暗黒の中で叫ばう、唯俺の居る事を叫ばう、單に俺の思ふ事を叫ばう。さうだ、俺は俺一人を救ふ事も出來ないんだから、俺は俺一人で叫んで居る外はない。其の聲を聞付けて近寄つて來る者があれば、夫れは唯ツた三人でも四人でも宜い。夫れは俺の眞の友だ、盲目の手引をする盲目でも宜い。どうせ一人で落つこちるより三人四人で一緒に落つこちる方が幾分か氣丈夫だらう。』

山田は書棚に並べてあつた聖書の註解やコンコーダンスを皆な押入の中に投げ込んだ。小説や哲學書も石油箱の中に容れて了つた。そして唯ツた一冊の舊新約聖書を最初の一頁から一句一句考へつゝ讀んだ。頭の中から飛出したがつて仕樣のない傳統的解釋を追退け追除け乍らずん／＼と讀んで行く——と云ふよりも寧ろ考へて行つた時に、彼の頭にはグングンと大きな力が入つて來た。自分で掘り出したものは夫れが瓦であらうが石ころであらうが燦爛たる光輝が閃いてゐるやうに感じられた。

翌年の春、長男の佐賀が死んだ日から五十二日目に當る日富子は女の子を産んだ、しかしマダ名も命けない六日目に死んで了つた。其の翌年の夏産んだ幹夫といふ男の兒は四十七日目で幼兒メレーナといふ恐ろしい病氣に罹つて五日苦苦しんで死んで了つた。鼻から口から肛門から眞紅な血が流れ出し、見る／＼蒼白になつて辨劣へて行くいぢらしい姿を見た時、『神樣、神樣、』と云つて明暮祈つてばかり居る富子を不便に思はざるを得なかつた。『俺が死に得ないやうに、此子も生きてゐる事が出來ないんだ。』彼は斯う思つて窓の所から凝然と山手の方を見てゐると、いつの間にかぼうーツと氣が遠くなつて來た。

『痛！』と言つたと思ふと、兩方の肩がグーッと重くなつて、肩先の骨と肉との間で、ガサ〳〵と圭立つた拳大の石が、グレ〳〵と二度三度引くり返つたやうに感じた。

『來て呉れ！』と叫んで其所へ打つ倒れたが、同時に頭の中で其の石ころがグワラ〳〵！と搗ち合つたと思ふと、今度は胃の腑が裏返されたかと思ふ程腹の中が熱かつた。そして止めどなく生温いものを吐いたが、其後は何にも知らないで火の中に投げ込まれたやうな感じて夢と現との境を彷徨うてゐた。

偶と正氣に立返つて頭を上げて見ると、もう幹夫の額には白い布片が掛けられて居た。信者達が自分の枕もとに坐つて居、醫者も脈を握つてゐて呉れた。

『幹夫は死んだか！』唸るやうに言つた山田は態と沈着を裝うて眼を閉ぢたが、七年前に定子を其の宅まで見送つて歸つた夜、和歌山城内のベンチの上で、これと同じ苦みをした事を想ひ出した。同時に白いシイツの上に眞紅な血を吐いた定子の姿がアリ〳〵と見えた。其後全快して賣薬家に嫁付いて三人の子まで産んで居ると聞いた定子の事が斯んな場合にでも矢張り戀しくも思はれた。

『俺が斯うして死ぬ時、末期の水を飲まして呉れる筈の人は定子では無かつたのだらうか。』と思ふやうな氣もした。しかし彼には夫れが悪い事だとも不倫な事だとも思はれなかつた。

『水を一杯下さい、氷の塊があれば……』

と言つた時、彼は自分の枕もとに定子が坐つてゐるやうに思つて、そうッと右の手を伸して探つてみると、其所には富子が坐つてゐて『何ですか、あなた……』と言つた。山田は驚いて眼を見張ると、蒼白く血の氣の無い富子の顔が自分の上に覆さつて來さうになつてゐたので、思はず眼を閉ぢた。そして何の意味もなく『あ、主よ！　主よ！』と心の中で叫んだ。

秋の暮にナッス博士が來た。非常に達者で正確な日本語で、一場の演說をした。そして歸る時に、『山田さん、あなたは蒲柳の質ですから能く身體にお氣をつけなさい。基督の御事業は眼前に効果を見る事の出來るものぢやありませんから、此町で死ぬ心算で緩々と傳道して下さい。奥さんもお弱いやうですから、御養生なさるが第一です……』と言つて輕く握手をした。山田には米國人の口から、『蒲柳の質』といふ漢語を聞いた奇異の念も手傳つたのではあらうが、其の優しい言葉が腦裏にピツタリと引ツついて、夫れがどうしても忘れられない程嬉しい言葉となつた。

隣の町に農民傳道をして居る松山が、時々七里の山坂を越えて自轉車で尋ねて來て呉れる外、熊野浦から濱野が時々奇拔な手紙を呉れたり、年百年中殆ど一日も休まずに說教するといふ猛烈なエバンヂリストになつた兒玉から紀州言葉で書いて簡單な滑稽を言つてよこす外、別に世間の誰と交通するといふでも無く、牧師の會合があつても其場へ出て行かうといふ氣も起らず、熱心な戸丸を助手に、隣り村に出張したり、工場を訪問したり、平凡な田舍牧師となつてコツ〱と傳道して居るうちに東京で產れたメグミが、もう小學校を卒業するやうになつた。三人の子供が亡くなつた後に又た二人の子供が出來た。六人目に產んだ末の男の子がマル〱と肥え太つて、一尺二尺を蹈つて這ふやうになつた時、富子は偶と眼が霞んで仕樣無いと言ひ出した。

『鳥目だらう?』と言つて鰹の膽を食つたり、鰻の膽を食つたり、肝油を飮んだりしたが一向何の功果も無かつた。

歐洲戰亂の結果町内の人氣は非常なものであつた。あらゆる織場からには空前絕後の勢で羽二重が織出された。僅かに其の一尺四方のハンケチを買ふ事にすら躊躇する貧民のやうな生活をして居る山田は、何千といふ職工の手で織に織出されてゐる羽二重が戰場で大砲彈を包む爲に使ふのだと聞いた時、嘗て非常識な程絕叫した事のある非戰論やトルストイズムを今一度唱へて見たいやうな氣もした。しかし最う彼には其樣な客氣も元氣もなかつた。彼は自分といふものを凡人だか聖人だか、老人だか子供だか、自分自身を判定する事すら出來なかつた。

人氣は非常にいゝが、物價はドン〳〵と暴騰する、赴任して來た頃十四圓で買つてゐた米が五十圓以上になり、二十四五錢で買へた足袋が八十錢にもなつた。しかし月給は依然として三十五圓である。親子五人が一人前七圓宛では最うどうする事も出來なくなつた。彼これするうちに、傳道婦の戸丸は家事の都合で東京へ出てしまつた。彼れは戸丸に去られて了ふ事は教會の爲にも個人の爲にも、非常な打撃である事を知つてゐたが、僅か二十五圓の俸給で、こんな不便な土地に彼女をいつ〳〵までも引止めて置く事を氣の毒に思つたから涙を飮んで、其の辭表をナツス博士に取次いだ。

戸丸が居なくなつた後で俄かに教會は淋しくなつた。山田自身も『これが戀の一種では無からうか。』と思ふ程戸丸の去つた後で非常な寂寞を感じた。しかし自分よりも六つ七つ年上の戸丸の姿を想ひ出す時、獨りでに噴飯さずには居られない程其の空想が滑稽であるのに氣付くのであつた。

戸丸が居ても居なくなつても、何等の變化なく、祈つて感謝してセツセと自分のする事だけをし遂げて行く富子の姿を見て居ると、何だか忍耐といふ事を教へられるやうでもあり、又たイヤな氣持になる事もあつた。

『あんたも路傍説教をしなさつたら如何です。あんまり此頃教會が振はんぢやありませんか。』

富子が子供に乳を飮ませながら眞面目に斯う言つた時、食臺に頬杖を突いて居た山田は、

『馬鹿なツ！　路傍説教位で人間の魂が救はれると思ふか、お前と俺とは最う二百年違ふんだよ、お前は今の時勢から百年遲れてゐるし、俺は百年進んでるんだから……』と捨鉢のやうに言つて凝然と富子を見てゐると、其の襟を引拔いた胸の所から右の方へかけて、一々數へられるやうに肋骨の曝れ出て居るのが見えた。

『おい、何とお前は瘠せたもんだなア。』と山田は何の羞恥もなく右の手を其の脇腹の所へもつて行つた。富子は少しく身體を捻つて、『本當にネ、乳も餘程少なくなつたやうですワ。』と言つて愼ましく襟を掻合せて、『坊や、お乳が足りないのネ。』と其の顏を靜と見詰めた。

『營養不良だ！』彼はドキン！と胸を燬られたやうに感じながら、『おい、今日は一度醫者へ行つて眼をよく見て貰つて來い……あんまり瘦せてるから……』

『私も、さう思つてゐましたの、どうしてもこれは普通の眼病ぢやないと思ひますワ。』

『うん、直ぐ行つて見て貰へ……』山田は坊やを後から抱いて高く差上げた。坊やはキヤツ、キヤツと笑つた。

『では、行つて來ますワ。』富子は長い間山田からの命令を待焦れて居たかのやうに、イソ〳〵として着物を衣更へた。

山田も何だか自分の身體で無い爲に今まで不親切に放つちやらかしてあつたやうにも思はれて氣の毒に感じながら、『藥も貰つてお出で！』と言つた。

富子は坊やを山田に頼んで遽いてアタフタと出て行つたが、一時間程經つて、グンニヤリと悄然て歸つて來た。

『どうだつた？』と坊やを渡しながら聞くと、『そこひだつて、もう手後れたから早く手術をしなけりや見えなくなるかも知れないさうです。』

財政に賢い富子の頭には手術料や入院料の事が一杯になつてゐるらしかつた。

『それは大變だ、僕はこれから直ぐ行つて詳しく聞いて來る！』

山田は早速醫者の所へ駈付けて聞いて見ると、俗に云ふソコヒであつて、球外視神經炎といふ恐ろしい病だから直ぐ明日からでも福島の病院へ行つて手術をして貰はねば或は失明するかも知れないと云はれた時山田は身體中を太い鞭で毆つて毆り付けられたやうに感じた。

……いつも言ふ通り親馬鹿にならないやう氣をつけてくれ、メグミが二十にもなつた頃、私らも五百や六百の金はにぎつてゐるつもりです……といふ手紙に十圓の小爲替を封入して送つて來た母の事を追憶しながら、久し振で郷里へ細々と富子の病氣の事を言つてやつた。

彌平もお千代も餘程心配したと見え、早速金六十圓を送つて來たのらしかつた。しかし醫者の言ふ通り三十日入院してゐれば、どうしても百圓の金が無ければならなかつた。けれども山田は殘額四十圓を此上兩親に送れと言つてやる事は、どうしても出來ない事であつた。

土曜の午後山田はメグミに留守をさせて置いて、六十圓の金を懐にして福島病院に富子を見舞つた。手術の結果は非常に宜いとは言つたが、まだ兩眼共に繃帶して、盲目のやうに看護婦に手を引かれながら恐ろしさうにトボ〳〵と廊下を歩いてゐた。其の少し屈めた腰。物を探るやうに細かく用心深く動かす足の指先、不恰好に前の方へ差出した手、ぢいつと夫れらを眺めて居た山田の心は、情けないと云はうか悲しいと云はうか、形容する事の出來ない感情がヂワリ〳〵と自分を壓へつけに來るやうに感じた。

そこ〳〵に用事を濟して、六十圓の金を富子に持たせて置いて、歸つて來る途中、汽車の中で『あゝした淺ましい姿になり果てた盲目と殘る半生を一緒に送らねばならないやうな運命が降りかゝつて來たなら、どうしよう？』と云ふやうな事を頻りに考へた。彼は斯ういふ場合にでも、絶對に神に信賴して單純に祈つて居る富子の信仰が羨ましくもなつた。

手術の結果は非常に良好で、二十日には退院するから迎へに來て呉れといふ手紙が來たので、山田は早速病院へ駈けつけた。山田が病室へ入つて行つた時、もう繃帶を外して元のまゝの顔でベッドの上に坐つてゐる富子を見た時飛付いて行つて、いきなり其の額にキスしてやりたい程に嬉しかつた。

『よかつたねエ、盲目にならないで本當によかつた！』と非常に昂奮した態度で言つた時、富子は『本當にエス樣の恵みよ。』と言つて眼を閉ぢて默禱した。

『さうだ、俺はお前の病氣の善くなつた事を、お前の爲に喜んだのではなかつた。俺は俺自身の爲に喜んだのであつた。何といふ俺はエゴイストだらう！』山田は心の中で斯う叫んだ。

どう考へて見ても山田は六十過ぎた兩親に對して毎日毎日勞働して貯めた金を、假令妻の病氣の爲とは云へ其中から百圓も送らするに忍びなかつた。で、種々考へた結果、彼れは父親の妹の產んだ從弟で高等師範を出てトン／＼拍子に昇進して今は郷里の縣廳で高等官何等といふ位地に居る男の事を想ひ出して、早速事情を言つてやると、直ぐ四十圓の金を送つて呉れたのであつた。

山田は其金で直ぐ病院の仕拂ひを濟して、富子を伴れて歸つたが、十日廿日と經つうちに彼は平生無沙汰勝にしてゐた從弟＝偶々郷里へ歸つても多分訪問しないだらうと思ふ程疎遠な從弟＝に對して突如として金の借用を申込んだといふ事を非常に愧かしく思ひ出した。のみならず折角今まで自分の築き上げて來た世界、誰にも指一本觸れさせなかつた自分の世界が其の大半をぐうツと掠はれて行つたやうに思はれてならなかつた。

丁度其頃から加藤は東都の文壇へ乘出して評論に小說に盛んに活躍し初めた。山田と同級であつた濱野も東京の或教會へ轉任して來て、不圖した事から文壇に顏を出すやうになり毎月あちこちの雜誌に小說を掲載し初めた。で、彼も久しく手だに觸れなかつたロバルトソンの說教集の翻譯に着手したが、營養不良は富子ばかりで無いと見え。二時間三時間も續けて筆を執ると直ぐに例の角立つた石ころが兩の肩でグレ／＼と轉がつて、頭の中で搗ち合つて、胃袋から生温い液體となつて出るのであつた。そして其處に咳血して白いシイツの上に苦悶してゐる定子の姿と、吐血して死んだ可愛い砕夫の姿とが幻に散らつくのであつた。で、とう／＼其の翻譯を中止しなければならなかつた。

教會の隣りに小い古物屋があつた。五十餘りの正直さうな主人は、時々應擧だとか探幽だとかいふ昔の大家や、親山だとか頼瑋だとかいふ現代の大家のものを持つて來て、狩野派がどうだとか四條派が斯うだとか浮世繪がどうしたとか種々と說明した。性來さう云ふ事に少しも興味を有たなかつた山田も、段々と其男と交際してゐるうちに、掛物の前に

行くと直ぐ其の落款を覗いて見る程度までの興味が出て來た。さうするうちに彼は詩人ヨネ野本の浮世繪論を愛讀するやうになつた。そして其の論文によつて淸長の畫風や其の特長を知る事が出來た。

或日彼は隣の古物屋へ行つて何心なく緣側の所を覗くと其所に一枚浮世繪が無雜作に板敷の上に擴げられてあるのに氣がついた。汚ない物にでも觸るやうに、其の繪を指先で撮んで見ると、夫れは有名な淸長の富士見の美人畫であつた。

『これは？』と山田は驚いたやうに問うた。

『淸長の板畫ですナ。隨分古いもんです。』

『眞物だらうか。これは……』

『夫れは本ものですよ、其位古いものに贋物はありませんでせう？』

『これはどれ位に賣るんかネ。』

『先生の事ですから五十錢にお負けして置きませうか。』

『五十錢？』實際山田は其の廉價に驚いた。平生から何でも知つて居るらしく言ふ主人も、淸長の眞價は一切御存知ないだナと思ひながら、直ぐ其れを五十錢で買つて歸つた。彼は夫れを持つて歸つて。ピンで壁に貼りつけて每日其處に二三度宛は坐つて凝視した。細い柔かい線、楚々とした其の美人のものごし、どう見ても夫れは立派な美術品であつた。で、早速、斯う〳〵いふものが手に入つたが一度鑑定して呉れまいかといふ手紙を書いてヨネ野本の所へ送つた。しかし十日經つても二十日經つても何の音沙汰が無いので、濱野の所へ其の繪を送つて野本と直々談判をして呉れと頼んだ。しかし濱野からも一月經つても二月經つても何の返事も呉れなかつた。彼はヨネ野本をも怨めしく思ひ、濱野の不親切を腹立たしく思つた。

何とか返事が來るだらう、多分百圓以上に賣れて呉れるだらう、百圓に賣れたなら、六十圓を母に送り返し四十圓を從弟に送らう、萬一五十圓にしか賣れなかつたなら、從弟に四十圓返濟して十圓でトルストイウオークの古本を買はう

など〻も考へてゐた。所が三月餘も經つて濱野から一通の封狀を受取つた。封皮には親展、急、とあつた。山田は踊る胸を抱えながら暫く破封を躊躇して居たが、思ひ切つて封を切つた。捲いた半切を引抜いた時、其中に爲替劵が入つてゐないかと思つて、ちよいと小口を丸めながら中を注意して見たが別に爲替劵らしいものは見當らなかつた。

……野本君の所まで態々行つて話してみると、連雀町の好古堂へ行けといふ。夫れから僕は此の炎天に傘もさ〻ず汗をタラ〳〵流し乍ら又た神田へ引返して來た。

連雀町と云へば御互ひが再臨論を吹込まれた福音館のあつた所だネ。僕はあの邊を隨分何度も〳〵うろついた末、やつと好古堂の看板を見付けた。さア占めた百五十圓は懐に入るぞと思つて勢よく『御免！』と言つた。番頭か主人か知らないが三十五六の男が頗る丁寧に頭を下げた。幸先（さいさき）よしと僕はカバンの中から例の美人畫を取出して、『野本君の紹介で參りましたが、これを一寸御覧下さいませんでせうか。』と言つて恭々しく夫れを差出した。

番頭（多分番頭だらう、餘まり鑑定眼の無い男だから）は、ハア〳〵と頭を下げ乍ら夫れを受取つて、クル〳〵と開いて見て、直ぐ夫れを元の通りに捲いて『有難う。』と言つて返したのだよ。『これは賣つても宜いのですが……』と僕は高飛車に出たネ。すると番頭曰くサ。何處へ御賣りになりますか。』『僕曰く、『御店へ賣つても差支へありません。』

僕は多分二百圓と言ふだらうと思つたネ。所が番頭は頭を掉つて『手前共では唯今其の版畫は御取扱ひ致しません、夫れは下谷の練塀町に專門に取扱ふ所がありますから、どうぞ其のお店の方へ……』と言つた。炎天だよ、君、其の炎天に僕は萬世橋を渡つてアチコチと尋ねた結果。やつと其の店を尋ねあてた。所が君驚くぢやないか、其所には淸長の板畫で、君の秘藏品と同じものが五六十枚もあるんだもの。僕は其の一枚の定價を幾らかと訊くと驚く勿れ金貳錢だらうぢやないか。けれども勇氣を出して君のあの高貴な品を賣らうかと云ひ出したが。もう一枚無ければ一錢に買へないと云ふぢやないか。金五十毛の名畫の所有主たる貴下の幸福を遙に祝し奉る！　さよなら！

山田はふる〳〵と顫へる手に手紙の兩端を握つて見詰めてゐたが、何だか急に腹立たしいやうな悲しいやうな氣分に

なつて、ボシャ〳〵と掌の中に其の手紙を固めて、傍にあつた屑籠の中にボン！と投げ込んだ。そして、ウーン……と唸るやうにして仰向に疊の上に臥轉んで天井を睨んでゐたが、又た思ひ返して屑籠の中からたつた今丸めて投げ込んだ其の手紙を取出して、二度も三度も繰返し讀んだ。

山田は自分が牧師であり乍ら、僅か五十錢の古物を買つて夫れを百倍二百倍に賣らうと企てた卑しい投機心を耻ぢた。辭を卑くして野本の所へ依頼狀を出した事から、濱野の所へ書留郵便で、其の五厘の版畫を送つた事などを考へ出すと、身體中がイーイと引締つて來るやうに感じた。しかし彼は夫れが別に恥かしい事でないといふ事を自分と自分に證明する爲に、『なアに、濱野の野郎だツて、卑しい投機心から懸賞小說を書いて、夫れがマグレ當りに當選したお蔭で文壇の片隅へ輕蔑せられ乍らへバリ付いて居るんだ。今の世の中は實力ぢやア無い、チャンスだ！ 俺にだつて濱野位の小說は書ける。』と心の中で叫んだのであつた。

其の翌日は掛田村の講義所へ說敎に行く日であつた。聖書や讃美歌を取揃えて、出かけようとしたが、まだ一時間ばかり輕便鐵道の發車に時間があるので、机の上に橫はつて居た△△新聞の廣告欄を何の氣なしに見たが『懸賞』といふ大きな初號活字が逸早く彼の眼に止つた。

讀んで見ると、眼藥直治水の本舖が募集した語呂合せで、發題は『直ぐきく目藥直治水』といふので、其の模範として示した手本は、『籠つるべ、廓の醉ざめ』といふ芝居の發題を『まごつくで。三度乘換え』とあつた。山田は『ウン、旨イなア』と獨り笑つて居たが、直ぐ抽出の中から一枚の葉書を取出して、

『すぐきく、めくすり、ちよくぢすゐ』

『はごつく、めらう、ちよつと來い。』

と二行に並べて書いて、『羽子つく女郎一寸來いは善かつた、屹度一等だぞ！』と小聲で言ひ乍ら、富子に見付けられな

いやうに周章てゝ夫れをポケットに入れた。そして『一等金十圓』と書いた所を見て其の新聞をパッ！と二尺ばかり向ふへ投げた。

『おうい、掛田へ行くぞ！』と吹鳴つて置いて停車場の方へ走つた、そして曲り角の所でポストへ其の葉書を入れる時、も一度夫れを讀んでみた。しかし其の懸賞の結果は何週間經つても何ケ月經つても發表しなかつた。

苦心して譯了したロバアトソン說教集を拵へて山田が上京したのは、彼が奥州の田舍へ引込んで以來滿十一年目の秋であつた。丁度牧師の大會があつたので久し振りで昔の同窓にも遭つた。十一年間見なかつた間に濱野の頭は滅切り禿げ上つて小鬢には白髮さへ交つてゐた。『眞紅』時代に初々しかつた加藤は最う山羊髯を伸して二人の子の親になつて居た。

取敢えず濱野の所へ落着いたが、夫婦とも小躍りして歡迎して吳れた。

『厄介になるよ、しかし消長一件は言ひッこなしだぞ！』と言ひ乍ら食盤の前に坐つて妻君の出して吳れたコーヒを一口飲んだ時は、十五年の昔に立歸つたやうに嬉しかつた。

濱野は其晩、奥の一室で徹夜して原稿を書いてゐた。翌日は晝頃まで寢るかと思へば八時前に起きて、

『おい山田君、今日は淺草見物をしようぢやないか。』と言つて妻君の方を顧眄いて、『お前も一緒に行かうよ。』

『十一年間見ない淺草は變つたらうナ。』

『大變な違ひだよ』行つて見よう。』

三人は巣鴨驛から上野まで行つて、其所から乘合自動車に乘つて淺草公園へ入つた。三人は直ぐ日本館へ入つた。丁度其日は何とかスキーと、何とかパロフと云ふ外國人のダンスや獨吟のある日で、三人は右側のベンチへ腰をかけてゐたが、丈の高い肉付のいゝ若い女が、足を擧げ手を振つて踊るのを見た時、『時代は變つたもんだナ、君、こんなものが

見られる世の中になつたんだから。』と濱野に囁いた。しかしピヤノやヴアイオリンの獨奏には少からず頭をウンザりさゝれた。で、卅分も經たないうちに『濱野君、出よう、出よう。』と眉を顰めながら言つた。
『田舎者は人に醉ふからなア。』と言ひ乍ら濱野は妻君を顎で招き乍ら外へ出た。實際山田は既う人間の香に醉うてゐたのであつた。
『此所へ入らう、此所へ……』濱野は金龍館を指した。
もう歸らう、これで十分だ！』と山田は二三回拒んでみたが濱野は聞かぬ風で三枚の入場券を買つて了つた。
三人は中へ入つて行つた、丁度『妻のために』といふ喜劇の始まる所であつた。四十分ばかりの一幕物を見たが、最後の緞帳が下りた時山田は吻として、『さア出よう、出よう。』と云つて無理に二人を引張つて外へ出て、空を仰いで大きな欠伸を一つした。
夫れから三人はパウリスタで晝飯を食べて歸つたが、濱野は又た机に凭れて頻りにカサ〳〵と萬年筆を動かし初めた。夕飯が濟むと直ぐ、『山田君一寸失敬する、是非明日の朝までにしなけりやならん仕事があるから……』と云つてセツセと仕事をし初めた。夜の十二時前に山田は便所へ行かうと思つて奥の書齋の傍を通ると、濱野は矢張り何か必死に書いてゐた。
『おい、亂作するなよ亂作多作を……、そんなに亂作をすると壽命が短いぞ、肉體にも文壇にも……』
と言つて障子の隙から一寸中を覗きながら『一體君は一日に何時間働くんだい。』と問うた。
濱野は萬年筆を靜かに原稿紙の上に措いて『さうだなア、僕は此頃毎日ではないが多くて十八時間、少くて十五時間は働くよ。』
『十八時間？　夫れは君、駄目だぞ、そんなに働いては……』
『鳥の死なんとするや何とかで、文士の亡びんとするや其文拙しだよ、もう僕も精々今年一杯の生命だから、亂作も多

作もない……さア寢ようか夫れでは。』

濱野は大きな欠伸を一つしてコソ〳〵寢室へ入つた。

北の翌日は來合して居た松山と一緒に誘はれて又た濱野夫婦と四人で帝劇を觀に行つた。しかし入場した時、もう山田は日の目を見た土龍のやうにグラ〳〵と眼の眩ふやうな觀じがした。

一番目の石田三成を二幕見た時、もう頭がギン〳〵と痛んで來た。インタヴアルの時間を廊下で魔誤つく間さへ苦かつた。しかし彼の眼には梅幸の淀君が非常に美しく見えた。勘彌の小性も綺麗であつた。中幕の幽靈の出た時、彼は『悲劇々々！』濱野君僕は失敬するよ……』と云つて外へ飛出してベランダで大口を開けて濁つた外氣を貪り吸うた。

翌日加藤の所に行つて見ると、ムツチリした、苛責まれたやうな顏で、頻りに考へ〳〵原稿を書いて居た。夫れは濱野がゾンザイに書なぐるのとは違つて、下唇をウンと嚙みしめ乍ら、右の肱を少し張つて、一行一行に力を入れて考へ〳〵筆を動かしてゐるので、額から汗がポタ〳〵落ちさうに思はれる程眞劍なものであつた。

『おい、遊ばうや加藤君、ちつと遊べよ。』と縁側の所から外を眺めながら言ふと、『おう、待つて呉れ給へ、今日中に、こいつを一つ書かんと困るんぢやから……』と言つて頻りに考へてゐた。

『又た來るよ、加藤君、マア二三日滯在するから……』と言つて、山田が東中野の停車場へ來たのは午前の十一時頃であつた。

『僕の頭は斷片的だ、詩人だ！　僕には到底十何時間も書續けねばならんやうな勞働――そんな頭の勞働は出來ない。矢張り僕は田舍で氣儘に讀書しつゝ深く自己を考へるんだ。僕は斷片的の詩人だ、あれだけのロバルトソンを翻譯し得た事は僕の空前絕後の大事業かも知れない。矢張り僕は富子といふ聖女の傍へ歸らう。なアに從弟に送る四十圓も、其うち何とか出來るだらう。』

山田は斯んな事を考へてゐるうちに、新宿で乘り替える事を忘れて、とう〳〵萬世橋まで來てしまつた。はゝア、マゴツクで三度乘換かッ！』と舌打しながら濱野の家へ行つてみると、富子から二通の手紙が來てゐた。急いで披いて見ると、

昨日ナツス博士より御手紙別紙の通り參り候間至急御歸り下され度、歸る時メグミの爲に五十錢ばかりの土産御買ひ求め下され度切に願ひ上げ候、私の眼病中一生懸命に炊事致せし褒美をやり度く存じ候

云々とあつた。ナツス博士の手紙には、本月中に大學傳道を開始する事と、俸給も來月から六十五圓宛支給しようといふ事とを書いてあつた。

『あゝ有難い〳〵、僕は矢張り富子と一緒に祈り乍ら靜かに神の道を傳へるんだ。僕の使命は聖書を考へつゝ訥辯の雄辯を振つて說教する事だ！　なア濱野君！』

山田は獨語のやうに、又た相談するやうに言つた。そして心の中に從弟に對する債務も四五ケ月中には果されさうに思つた、

『では、彼の飜譯は兎に角僕が預つて置かう。何れ世に出る日もあるだらう、マア身體に氣をつけて……』

濱野は斯う言つて汽車の窓の所へ右の手を差出した。山田は確く其手を握つて、『君こそ、あまり過激な勞働をしないで……』

『又た來給へ。』『有難う……しかし僕は又た十一二年奧州に引込んでゐるよ！こんな頭の痛い俗な世界へは暫く出て來ないから……』

會話の終らないうちに汽車は動き出した。山田は腰掛にドッカと腰を卸した時。吻と一息吐いた。そして、『今自分が歸つて行く淋しい町は可愛い三人の子供を埋めた土地だ！』と思つた時。

『子供は冷たかつたのです！　ブランドさん……』とアグネスの言つたブランドの一節を想ひ出して、急に悲しくなつた。そして血を吐いて死んだ幹夫の事を想ひ出すと同時に肩の所がジイーッ！と痛み出して來た。

『サア大變だ！』と山田は信玄袋に獅嚙みついて俯向いた。隣りに居た四十恰好の洋服姿の男が『どうしました？どうしました』と言つて脊をこすつて呉れた。

――一九一九年十月十七日駒澤新町にて――

新年號豫告

本誌の第二年、大正九年一月號は、別欄豫告の通り、文藝欄のみでも、三百頁に近い一大附錄となる筈である。而して思想と研究に於ては

國家・社會の精神的改造

に關して、社會問題、政治問題の根本に關して、哲學的に、倫理的に、科學的に研究を進めて見たいと思ふ。又其他の時事問題、思想問題に就ては、別紙豫告の如く新進氣鋭の先達に乞ふて、執筆して頂くことにした。

廣告

電話番號變更 新橋一八五七番 改造社

轉居 東京市芝區櫻川久保町七 山本實彦

毎月一日發行一回

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	二錢
半ケ年	二圓九十錢	不要
壹ケ年	五圓八十錢	不要

外國行郵稅は一部十[illegible]錢増大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候

▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし
但し郵券代用一割增の事

▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北陸館　上田屋　至誠堂

大正八年十一月二十六日印刷納本
大正八年十二月一日發行

本號に限り金六十錢

編輯兼發行兼印刷者 東京府中目黒七八六 横關利藤太

印刷所 東京市京橋區南紺屋町廿七番 秀英舍

發行所 東京芝區櫻川久保町七 改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

自由・文化叢書

早大教授 杉森孝次郎原著
熊崎武良温譯

道徳的帝國の原理

◆四六判總クロース背金總模樣函入全紙アートを用ゐ典雅無比◆定價金貳圓五拾錢郵稅拾貳錢

日本人の著した最初の世界的著述？それは本書である。これまでとても外國で好評を博した書物はある。しかし其等の書物の一切は要するに日本に對する好奇心を滿足せしむる程度を超えなかつた我哲學界の偉器杉森氏のこの著述に至つて初めてその「內容に於て」世界的名著となつたのである。英國に於て版を重ね、今や佛譯成らんとして、まさに世界學界に喧傳せられつゝある此の名著が、篤學研究の人、熊崎氏に依り自國語に移されてこゝに上梓した。現下の改造的諸問題の根本に橫はる「人格及國家」に對する驚異すべき獨創的解釋が卽ち偉大なる本著述の內容である。

◆◆◆◆

革新的時運は竟にこの叢書を生めり目覺めたる人の爲に哲學、文藝、科學、政治及社會の各分野に於ける最新の世界的名著は相次いで刊行せらるべし

◆◆◆◆


ロープシン著
靑野季吉譯

蒼ざめたる馬

◆四六判總クロース背金總模樣、箱入、用紙優良、裝幀頗美麗◆定價金[illegible]圓五拾錢送料金拾貳錢◆

「ロシア人及其生活を現したる點に於て實に近代ロシア文學中第一位の書である」とメレジコフスキーが激賞した名作である。作者はケレンスキー內閣の內相であつたサヴヱチニコフの變名である此の作は題材を作者の自叙傳的な暗殺事件に取つてゐる。最新傾向の代表的小說である。

發行所 東京市麴町區三番町廿八 冬夏社
振替東京四四四六番
電話番町三六二二番



專賣特許
完全燃焼
巴風呂
内釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図
東京市神田区
鍛冶町廿番地
巴商會
電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番

（改造第一卷第九號）（大正八年十一月二十六日印刷納本、大正八年十二月一日發行）

東京秀英舍印刷